

UNDEAD———不死人

カチカチチーズ

火は陰り、王たちに玉座なし

2128年、そんな未来且つフィクションに転生し過ごしていたチーズの男は嘗ての記憶を頼りに異世界でのエンジョイを目指し様々な準備を行い――

……灰の方、まだ私の声が、聞こえていらっしやいますか？

目次

始まり／獣狩り	1
情報／一步	33
火防女／誘導	59
冒険者／暗躍	89
印象／対応	107
人間性／苛立ち	125
出立	145
熔鉄／依頼	161
遭遇	179
二代目	199
本音	217

変化

不可視の刀

休息

前兆

死の螺旋

雷撃

後日談

合間の一幕

合間の一幕Ⅱ

会談

祈る者／吐き捨てる者

奮起

苛立ち

狂喜

蹂躪／雷の大槍

灼熱の柱

外交／因果

幾年越しの感謝

始まり

番外編…顔の無い月光

前触れ

騎士感／既視感

処分

暗躍…改訂版

迫る火の粉

蠢く思惑…改訂版

襲撃…改訂版

互いの仕事…改訂版

矜持

蟲使い…改訂版

二つの魔…改訂版

降下

漆黒／蒼

炎の壁

始まり／獣狩り

Twitterの方でアンケートを取りまして、今回正式にUNDEAD——不
死人を連載する事になりました。

ひとまずは竜王ではなくこちらを投稿してきます。皆様どうかよろしく願
います

火は陰り、王たちに玉座なし

嘗て不死院にて牢に繋がれた不死人は数奇な運命により不死院を抜け鐘を鳴ら
し、蛇が告げた言葉に従いその身に秘めた使命を成すため神話の都へ向かい、火継
ぎの旅へと殉じた。

死者の王を討った、鱗無き白竜を討った、公王らを討った、王のソウルを集めそして不死人は王を倒し世界の礎となった。

されども不死人の魂は眠る事はなく、目覚めた先で新たな使命を成すために遙か北の地にあるという国へと至り、彼の地にて嘗て討ち倒した深淵の主が落し仔を滅ぼした。

そして、三度目の旅路にて再び不死人は火継ぎの旅へと歩みを始めた。

名も無き灰として、嘗ての己と同じ薪の王であった者らを玉座へ戻すべく旅をした、貧相ながらも王らしい小男、ファランの狼血を流す不死の騎士団、深みの聖職者にして神喰らい、偉大なる巨人の王、双王子。

彼らを玉座へ戻し不死人は再び最初の火の炉へと至る。

そして、彼は——

私はそこにいる。

何もする気が無く、私はそこにいる。

所々岩が生え、幾つもの剣や杖が墓標の様に刺さった地、その中心にあるただの篝火を私はただ、ただ見つめ続ける。

弱々しい火。しかし、見る者に温もりを与えるそれは私の荒んだ心を癒してくれる。

もはや、全てが終わる。

今までの歩み、その終止符。

私は嘗てを想起する。今まで様々な者らと出会った。多くの困難に出会った。

それらを私は時に一人で、時に仲間と共に乗り越えてきた………しかし、それはもはや過去のもの。この手にあるのは燃え尽きた後に残る灰だけ、もはや取り戻す事など出来はしない。

だから、だろうか。

私は弱々しい、されども篝火として十分なそれに手を伸ばして――

『――ネームレスさん、ヘロヘロさんが来たので一度円卓に来てくれませんか？』

………、………、………はあ。

気が削がれた。

私は篝火へと伸ばしていた手を戻し、その場から立ち上がってその指にはめられていた指輪の力を行使する。

転移の力は問題なく発揮され、私はその場から姿を消した。

一瞬の暗転を挟み、私は先程の場所とは打って変わった豪華絢爛な円卓が置かれ

た部屋へ足を踏み入れた。

視線を動かせば円卓には二人の人物が席に着いていて………人物という括りではないのか？

「あ、ネームレスさん」

「お久しぶりです、ネームレスさん」

どうも、へろへろさん。

円卓の間にやってきた私に気がついたのかこちらへ顔を向けるのは二人の異形。豪華な黒いローブに身を包んだ骸骨と黒い不定形なスライム。

私が所属する異形種ギルド・アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターことモンガさんとギルドメンバーの一人であるへろへろさんだ。

私はへろへろさんに軽く会釈をして、私の席へと腰掛ける。ふむ、それにしてもへろへろさんは疲れているようだ………声音に元気がないな。

「いやー、まさかなザリックがまだあったなんて……これもモモンガさんやネームレスさんが頑張ってくれてたおかげですね」

「……ええ、ネームレスさんにはお世話になりましたよ」

そんなことは無い。私は趣味に走ってその副産物をナザリックの運営資金に当てただけでほとんどモモンガさんのおかげですよ。

私はそう二人に告げてコンソールを開き作り始める。どうやら、まだまだユグドラシルのサービス終了まで時間があるようだ。

さて、ロールが途切れてしまったからな。そろそろ自己紹介といこう。

私の名はネームレス、プレイヤーネームなのは許して欲しい。君たちとて私のリアルネームなんてどうでもいいだろう？

まず、私は転生者だ。ダークソウル・リマスタードが発売され、有休を二日ほどとり寝る間も惜しんで墓王ニトまで進め、さてボス戦と意気込みながらおつまみのチーズを摘んでいたら唐突に喉が辛くなり——間違いないくチーズが詰まった

——苦しんだと思ったら赤ん坊になっていた。

何を言っているのか分からないだろうが、私も分からない。さて、赤ん坊になっ

た私はすぐにそれが転生だと理解し、同時にダークソウル・リマスタードが出来なくなつた事に絶望した。ついでに言えば転生先の世界を見てさらに絶望した。

外にはマスクを付けなければ出歩けない、義務教育の撤廃、富裕層と貧困層、アークロージーなどなど……そんな恐ろしい世界に転生した事は私の心を打ちのめしたが運の良い事に私は富裕層の中でもそこそこの家に生まれ良い暮らしが出来た。そんな世界で育ち前世の性格や口調が変わっていき、企業で上役となつた頃にとあるゲームが発売された。

その名を『ユグドラシル』。DMMORPGの一つなんだが、それを聞いて私は理解した。

「ここ、オーバーロードの世界かよ」

それを理解した私はすぐさまユグドラシルを購入し、異形種を選んだ。フロムにより鍛えられた技術——間違いなく衰えてる——を以て異形種狩りプレイヤーやPKを狩るなど楽しい楽しい暗月警察暮らしをしているとある日、正義降臨ことワールド・チャンピオンの一人であるたち・みーさんと出会いなんやかんやあってアインズ・ウール・ゴウンへと入ることが出来た。ちなみに調べたらフロム

は過去に存在していなかった……。

オーバーロード×ダークソウルな二次創作によくあるコラボはない、という事を知ってしまった私はなら私がやるしかないじゃないか！と富裕層で企業の上役という立場を利用し廃課金を行いこのナザリックのNPCにかぼたんを創ったり、装備の見た目をダークソウルにしたり、来る異世界転移の為に様々な用意をしてきた。まあ、そんなこんなで現在ユグドラシルはサービス終了日を迎えた。

「……………あ、モモンガさん、すいません。いま、寝かけてました」

「大丈夫……………じゃないですね。どうぞ、ログアウトしても大丈夫ですよ？ ゆっくり寝てください」

「……………はい、ではお言葉に甘えて……………ユグドラシル2とかがあったらまた……………」
『へろへろさんがログアウトしました』

と、どうやらへろへろさんがログアウトしたようだ。私はコンソールを切りモモンガさんへと視線を向ける。見た限りでは原作の様な反応は見受けられない……………原

作ではモモンガさんは一人ユグドラシルを続けて運営資金を稼いでいたが……なるほど、趣味に走っていたとはいえ私がいた事で決して一人ではなかったからか。ふむ……

モモンガさん。

「っ、はい。なんですかネームレスさん？」

……ユグドラシル楽しかったですね。

「……そうですね。みんなと楽しく騒ぎましたね」

そうだ。実はモモンガさんに隠してた事があるんです。

「……？なんですか？」

実はですね。個人でとったウロボロスを五回ほど内緒で使ってみました。

「は？」

私の告白にモモンガさんは疑問符を浮かべ、しばし固まっている内に私は席を立つ。

そして、次の瞬間のために私は避ることができない訳では無いが耳を押さえておく。

「はぁアアアアアア！！？？ あんた、何してんですかぁ!!？」

私の課金だ。問題あるまい。

「いや、確かにそうでしょうけど。一言くらい言ってくれませんか!? ギルメン！
報連相！」

絶叫する骸骨。失笑。

私はそんな彼を諫める様に言葉をかける。

大丈夫。大丈夫。スキル名変えたりアイテム実装させただけだから。

「いや、何が大丈夫なんですか!?! というか、いったいどんなアイテムを作ったんですか……」

ウロボロス一つ素材に使う無限インフィニティ・ハヴァザックの背負い袋の超上位互換。通常のアイテムボックス二枠潰す代わりに無限の背負い袋の四倍入れられて且つ、入ってるアイテムの所

持可能上限が無い。

「はい？ちなみにどういう理由で作ったんですか？」
趣味と素材集め。

正確に言えば、異世界転移した際に必要になるであろうアイテムを溜め込むために作ったんだがな。スクロールやらなんやらを大量に突っ込んである。

まあ、ダークソウルの為のデータクリスタルやら素材を入れるのにとっても役立ったのは事実だな。

「な、なるほど……だから、あんなに副産物っていいながら稼いで来てたんですね」
そういうこと。……と、そろそろか

ふと、私はコンソールを開き時刻を確認する。別にわざわざコンソールを開かなくとも設定で視界の端に時刻が出るように出来るのだが、私はもっぱらそういう設定はせずにコンソールをいちいち開いて確認している。

さて、時刻を見ればもう残り三十分を過ぎている。そんな私にモモンガさんは疑問符を浮かべているので私はきちんと教えておく。

「あ、ほんとだ。もう三十分ぐらいか……やっぱりネームレスさんは第六階層で終わりを迎えるんですか？」

ええ。私にとっては彼処がマイルームみたいなものですから

「わかりました。それじゃあ、私は玉座の間に行くんで」

はい。あ、ギルド武器持っていていいですよ？何せ、作ってから使っていないんですし……最後ぐらい……ねえ？

「そうですね。持っていくことにしますよ」

そんなふうにして私は指輪、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使い円卓の間に来る前までいた第六階層の片隅にある私にとってのマイルームこと最初の火の炉へと転移した。

砂とも土とも言える地面を踏みしめ、辺りに生える黒く焼けた岩、突き刺さる槍や剣に杖……さながら墓標の様に見えるそれら、そしてBGMは存在せず地面を踏み足音しか聴こえぬ静寂のエリア。

その中心にある篝火へと私は近づく。

そんな私に反応したのか篝火の傍らにて跪き祈っていた火防女が立ち上がり私を見る。

ダークソウルなプレイをする為にやはり、かぼたんは必要だろうと他の人に手伝ってもらいながら作った私のNPC…火防女ことレティシア。名前の由来だが、ダークソウル3の火防女の容姿で見た目がジャンヌっぽいと思ったからだ。異論は認める。

フリーバーテキストにはダークソウルな設定を色々書いた。名も無き灰と共に火を消し闇の世界ENDの後に消えたがしかし、蘇った名も無き灰——つまり、私によってこの最初の火の炉を模した場に蘇ったという旨を。

まあ、分かる通り、私自身のフリーバーテキストにもダークソウル的な設定を書いた。無印から3まで経験してる的な……………。

じき、世界は終わる。

アイテムボックスを確認すればきちんと必要なスクロールやらアイテム、様々な防具や武器、指輪類、サービス終了日故に馬鹿みたいに安売りしていたワールドアイテムが一つ。

再び火は消える。

まあ、これで異世界転移出来なかったら………仕方ないな。その時はリアルでペロロンチーノさんやぶくぶく茶釜さん、たち・みーさん辺りを誘って何かしようか。

しかし、どれだけ小さくとも、暗闇の中に火は現れる

ふむ……できれば他にもダークソウルNPCを作りたかったな……確か傭兵NPCを自作できる課金アイテムがあった筈だ……カタリナのジークバルトを作っても良かったな。

………転移後はどうするかな。フレージャーテキストがアルベドの様に影響しているのであれば私も火防女もそのフレージャーテキストの影響を受けるのだろうか？ともすれば私は自らのフレージャーテキストに記した通り、様々な旅を経た不死人となるわけで……もしかすれば経験したことが無い不死人の記憶が流れ込むという可能性もありえる。

二次創作の読み過ぎだ、と言われれば終わる話だが……しかし、この現実自体が私にとっては夢幻の体験と何一つ変わらない。さて、どうなるか。

時刻を見れば既に五分を切ったようだ。

いや、待て。モモンガさんはやはりアルベドのフレージャーテキストの最後の一文。『ちなみにピッチである。』を『モモンガを愛している。』に変えているのだろうか？変えていたら……下手すれば私は転移先でアルベドに敵対視される可能性が？いやいや、私は最後までモモンガさんと一緒にナザリックにいたわけだからそれは

ないだろう……ないと信じたい。

とりあえずモモンガさんが魔王ルートを歩まないように注意していくか。

『——ネームレスさん』

『……モモンガさん、もう終わりですよ』

『はい、そうですね。……その、いままでありがとうございます』

『いえ、こちらこそ。アインズ・ウール・ゴウンだから今日まで私はやってきたんです。何時辞めてもおかしくなかったのに……』

本音だ。

異世界転移を知っていたが、それでも私はこのユグドラシルをサービス終了までやれたかどうかは分からない。もしかしたら辞めていたかもしれない。

それを考えると彼に感謝の念を向けるのは当たり前な事だ。

『……………終わりですね』

『ええ……』

『その、へろへろさんが言っていましたけど……』

『はい。ユグドラシル2があったら……』

『その時はまた』

——五十二、五十三

『それじゃあ、締めますか』

『ええ』

——五十四、五十五

『『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！……！』』

——五十八、五十九

—
零

「灰の方、まだ私の声が、聞こえていらっしやいますか——？」

「——カハツ」

「これで、希望をもって、死ぬるよ……」「私は汚れ、声を出すべきではありません」「それでは奇跡の話をしましょうか」「不死の勇者よ。わしはここで待っておるぞ」「俺の太陽が……沈んでいく……」「あんたには期待してるんだ。しっかり働いてくれよ」「哀れだよ。炎に向かう蛾のようだ」「……死ぬんじゃねえぜ。あんたの亡者なんて見たくもねえ……」「棄てられた都とて、勇者に導きくらは必要だろう？」「よく参りました、試練を越えた、不死の英雄よ」

「よろしい、ならば、汝はこれより暗月の剣となる」

「王たるものよ、玉座へ……その先は、貴方にしか見えないのです」「だが、だからこそ……霧の中の答えを求めるのか」「いつの日か、その旅に終わりが訪れんことを……」「火を求める者王たらんとする者よ……力を手にするがよいそして、汝の望むがままに……」

「兄上は私の、ロスリックの剣だから、どうか立ってください……それが、私たちの呪いです」「さあ、最後の乾杯だ 貴公の勇氣と使命、そして古い友ヨームに」

「ノーカウントだろ？ノーカウn」「……さあ、これより貴方は暗月の剣」「あるいは、私たちが最後となるか……『最後の王』とは、小人にすぎた栄誉というものだな」

「はじまりの火が、消えていきます。すぐに暗闇が訪れるでしょう……そして、いつかきつと暗闇に、小さな火たちが現れます。王たちの継いだ残り火が……」

「灰の方、まだ私の声が、聞こえていらっしやいますか？」

瞬間、私の頭蓋は軋む、割れる、碎ける、前世も今世も味わった事が無いほどの激痛に襲われ——しかし、何時か味わったであろう痛みに比べれば大したものではなかった。

痛みより立ち直った私は気がつけば最初の火の炉ではなくまったく知らない何処かの草原に胡座をかいていた。

そんな事態に対して私は冷静に対応する。

間違ひなく異世界へと転移出来たのだろうか……しかし、ここはナザリックでは無い。ではナザリックの外に広がっていたという丘になる予定の草原か？となればこの周辺にナザリックがあるはず……私はアイテムボックスから一定範囲内のエネミー及びプレイヤー、NPCを探知する事が可能な指輪を取り出しリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンと取り替えて指にはめる。

……………ああ。なるほど。

指輪をはめたことで理解する。私がいる場所はナザリックが転移した草原では無い、何故ならばおおよそ20レベル前後のエネミーの反応が無数にあるからだ。

そして、私の視認できる距離に街……いや、都であろう場所が見える。そこへ迫っていく大量のエネミー……オーバードロードを知っているならば何となく察せられる。

つまるところ獣狩^{Bloodborne}りというわけか。同じフロムだが私と作品違うぞ。

さて、どうするか。仮にも異形種である私としては人間が彼らに食われるのは別に何か感じる訳ではない……ないが……

何、新たな世界。その初陣と考えれば良きものだ。

すぐさま私は早着替えのローブを纏い、セットしておいた装備へと姿を変える。外見としてはファーナムの騎士装備だろう、特にこの両肩の毛皮部分が拘りでのこの為にいったいどれほどの神獣クラスを狩った事か……んん、指にはリング・オブ・サステナンスとリング・オブ・フリーダム、反応感知の指輪に人化の指輪をはめる……ついでに回数制限がある召喚系指輪をはめておこう。

さて、足が必要だ。ダークソウルといえはこういう時はシフに乗って駆けるのがロマンなのだろうがしかし、残念ながら私の持つ指輪では狼系のモンスターは呼べない。

まあ、レベルを考えれば何度か跳べば着くだろう。

適当に屈伸し、私は大地を蹴りつけた。

竜王国の王都へと侵攻したおよそ五千ものビーストマン。

それに対抗するべく竜王国の兵士らは決死の覚悟で迎え撃つこととなった。

「!!」

「!!!!!!」

しかし、ビーストマンは一体一体が人間の成人男性十数倍もの力を持つ怪物。如何に兵士と言えどもビーストマン五千は並大抵の数ではどうにもならなかった。

そもそもビーストマンにとって人間とは餌でしかなく、殺す事を目的とする人間に対してビーストマンは人間を食えればいいのだ。仮に兵士の剣がビーストマンの腕を切り落としたとしてもその間にビーストマンが兵士の首へ噛み付けばそれで人間は終わり。

ビーストマン一体に対して兵士はいつたい何人食われるのか、そんな事が分からない彼らではない。だが、それでも彼ら兵士は家族の為に戦うしかない、たとえ死ぬとしても。

ああ、だからこそ。

唾液を撒き散らしながらけたたましく吼えるビーストマンらが兵士へと躍りかかる瞬間、ただ稲光が迸った。

「は？」

視界を焼く雷光に思わず兵士は目を瞑り、それを開けた瞬間視界に飛び込んできたのは目の前のビーストマンが数十個の黒炭へと変貌したというもの。

いったい何が。それを見た兵士もビーストマンもただそれだけが思考に満ちて

雷の槍
龍雷よ

戦場へと響く流麗なその言葉に兵士はその視線を向け、ビーストマンは沈黙を捧げた。

都合六度迸った雷光はビーストマンを尽く蹂躪していく。

ビーストマンだった黒炭が高野に溢れ、兵士は先程までビーストマンがいた場所に見知らぬ誰かがいるのを視認した。

それは一人の騎士だ。

色鮮やかな水色のキュレット、肩を覆う毛皮が目につく流麗な装備。農民上がりで美術品などを見る目などないような兵士ですら、その装備が国宝級を遥かに凌ぐ素晴らしいものである事を理解した。

左手には直剣が握られ、右手には稲妻の名残が残っており、兵士はその騎士がこの光景を作り出したのだ、と納得し同時に声を上げそうになった。それを止めたのはひとえに騎士の視線——と言っても兜を被っている為兜のスリットが向いている方向だが——が未だ生き残っているビーストマンの群れに向けられているのを知ったからだ。

確かに雷光は多くのビーストマンを殺した。数にすればおおよそ七百を超えた辺り。つまり、全体の一割少しでしかない、ビーストマンはまだまだいるのだ。

無茶だ、そう呟く者もいる。

もしかしたら、と呟く者もいる。

そんな兵士らの視線を背に受け、騎士はその右手で既に握っていた直剣と同じものを引き抜き双剣のスタイルをとって、一步、一步、ビーストマンの群れへと歩んでいく。

そんな決して速くはない歩みにビーストマンは動けず少しづつ後退していく、がやはり獣なのかそんな緊張を、萎縮する自身を奮い立たせようと雄叫びと言うよりも悲鳴を上げながら騎士へと飛びかかる者が出た。

ああ、やはり。振るわれる刃はいとも容易く飛びかかったビーストマンを解体し切り捨てた。

騎士は切り捨てられたビーストマンの死体には一切目もくれず、ただ、ただ進む。

もはやビーストマンにとって騎士は怪物だ。餌と似たような姿をしただけの怪物。むしろ、自分たちを塵殺にする為だけに餌と同じ姿をしているのではないかと錯覚させるほどに、だから、ビーストマンは逃げた。

一切の恥を捨ててその場から逃げ出した。

あの怪物から逃れられるのなら、プライドなんて捨ててやると言わんばかりのそれに兵士らは唾然とし、しかし騎士は見逃さない。

大地を蹴り、騎士は跳ね飛ぶ。宙へと身を投げた騎士は大気を蹴りつけ逃げるビーストマンの真ん中へと着地しそのまますぐにビーストマンへとその刃を振るった。

逃さないと言わんばかりのそれにビーストマンは恐れ、硬直しいったい何が起きたかビーストマンは逃げる事を止め、全員が騎士へと殺到した。

しかし、四千いくらかのビーストマンがたった一人に殺到するなど同胞を踏み潰しかねない行為であり結果、同士討ちで半分近くのビーストマンが死んでいった。飛びかかったものは股下から切り上げられ、隙を突かんとしたものは短剣により

首を切り落とされ、背後から来たものには脚で蹴り殺しすぐさま体勢を立て直し他のものどもへと対応していく。

まさに尋常ならざる英雄が如き所業。

自分たちが何人も束にならねば殺せぬ獣を次々と塵殺していく様を見て兵士らは次々と叫んでいく。それは食われ殺された同胞たちへ捧げるもの、食われ殺されるだけだった自分たちに降りてきた希望への歓声、そして彼らが守る者らへ伝える勝利の雄叫び。

それらを背に受けて塵殺した騎士はその兜の下でぎこちなく笑みを浮かべた……が、それが分かるのはきつと騎士本人だけなのだろう。

NPCが動くなんて……本当に異世界転移でもしてしまったんだらうか？……

いや、待て、そうだネームレスさん。

ネームレスさんはどうなったんだ!?あの人は確かあの時、第六階層にいたはず……もしかしたら一緒に来てるかもしれない……でも、だとしたらどうして連絡をくれないのか……

意を決して伝言を使い——

『《伝言》ネームレスさん、いまどこにいますか!?!』

『——《伝言》現在暗月警察中なので後日おかけください』ブツツ

「……………はア!?!」

え、あ、はア!?あの人が何してんの!?!とかどこにいるの!?!

暗月警察ってあの人流のPKKの事だった筈だが………とか伝言が通じたって事はそういうことなのか?少なくともネームレスさんはこの世界にいる………と。

とりあえず言われた通り後日連絡しよう。

そして会えたら文句でも言おう。

情報／一步

「灰の方、私とグウィンドリン様どちらがお好きですか？」

こふっ……無理い……

【YOU DIED】

果たして何体のビーストマンを切り殺しただろうか。

はて、ろくに数えていないから分からんな。ひとまずはヘイトスキルを使用する事でこの戦場にいるビーストマンのタゲを集中させたわけだが……ふむ、こうも上手くいくとは思ってもいなかったな。

曲がりなりにもこの世界は現実だ。ならば、たった一人に殺到すれば背後の味方

に踏み潰されるのは簡単に予想出来る。だが、そんな事はタゲ取りされたこのビーストマンどもには分かりはしない。なにせ本能で生きてるのだから。

まあ、本能でなくともどうせ逃げられんからな。

両の手に握ったゴットヒルトの双剣を振るいながら私は着実にビーストマンを葬っていく。戦ってわかるが、この世界の人間の實力は低いとしか言えない……いや、ユグドラシルやダークソウルを基準にしてはいけないな。

そもそもダークソウルに至ってはフロムの死にゲーだ。死んで覚えるものだった……こちらではおいそれと死ねんだろう………。

と、どうやらあらかた切ったようだな。ひとまず剣を鞘に納め私はこちらを見ている兵士らのもとへと歩き始める。

「あ……あ、あああああ！……！！」

「おおおおおおお！！！！」

「！——！！！」

私へと向けられる歓声。それを聴きながら私はふと自分の鎧に視線を向ける。

普段の火継ぎの鎧一式からファーナムの騎士鎧一式に着替えたはいいがもう少し別のでもよかった気がするな。少しビーストマンの血が目立つ……お偉いさん……童王国なら童王の血を半分だけ引いているという女王か、その人と会う前に鎧を変えておいた方がいいだろうな。

はてさて、どうなるのやら……。

……そう言えば、モモンガさんから伝言来てたな……切ってしまったが大丈夫だったろうか？

「こ、こちらです……！」

そんな緊張しつつも澁刺とした若者の言葉に私は浅く頷き、示された部屋へと入室する。

ビーストマンの襲撃に対して暗月警察らしく人々を食らったビーストマンへの復讐代行——きつとグウィンドリン様には苦言を賜るだろうが——を行つた私は竜王国の者らに歓迎されこうして王都のかなり質の良い宿屋へと案内された。流石に夜中の襲撃だった為、女王との謁見は明日ということらしい。

「そ、それでは……正午前にお迎えにあがります……!!」

ああ、その時は頼む。

「は、はい!」

緊張しつつも澁刺としていた彼に私は声をかけてから案内された部屋を見渡す。王都の中でも上位に入るほど質の良い宿屋、それは決して虚偽ではなく確かに部屋に飾られている調度品や日用品、さらには清掃などきちんと良く行き届いている

ようだ。

しかし、ナザリックを見慣れている身としてはつい、ナザリックと比べてしま
う。そのせいで少し物足りない気がするがそこはナザリックだから仕方ないと割り
切る。

内装に凝ったギルメンが何人もいたのだ、現実離れた美しいホームと比べるの
は可哀想としか言いようがない。

一応不眠不食不性の三大欲求全滅しているアンデッド種であるため、明日の正午
前まで起きて色々とアイテムボックスを漁っているか……。

………む？……ああ、そういえば。

しかし、感じる睡眠欲求に一瞬私は首を傾げる。がすぐに自分が人化の指輪をは
めている事を思い出し、ひとまず腰を落ち着けようとソファーへ腰掛ける。

人化の指輪を取ればアンデッド種に戻り、三大欲求は失せるわけだが……それは
亡者と変わらんようなものだ………理性があれども人間らしいものがないのは駄

目だ……モモンガさんに会った時は指輪を分けてやろう。彼もオーバーロードになって、人間らしいものがなくなっているだろうしな。

……と、まずは鎧を脱ぐか。ある程度落としたとはいえ血濡れの部分も決して少なくない、今はまだ大丈夫だが何時このソファアなどが汚れるか分からんからな。とりあえず私はアイテムボックスからローブを取り出し纏って、この鎧を着込んだ時のように予めセットしておいた装いへと早着替えを行う。

着替えたのは特にダークソウルでもない私服のような衣服。今までは鎧の下にあるのはアンデッド種のそれだったが人化の指輪によりきちんとした生氣溢れる人間のそれになっている。

さて、どうするか。始まりとしては童王国だが………モモンガさんと連絡を取り合って行き先を考えるか。

机の片隅に置かれている地図を広げて、私はこれからの行き先を考え始める。

北西へと進めばカツエ平野に出るのか………ならばそのままエ・ランテルへと入

りナザリックへ帰還する……ふむ、しかしな。

これはとても個人的な話だが私としては帝国に行きたい。原作を考えればモモンガさんは王国で冒険者をするだろう、その際に私は帝国に………む。

『——《伝言》ネームレスさん、通じてますか？』

『《伝言》もしもし……モモンガさん』

何か糸のような繋がりが頭に繋がったかのような感覚。私はつい少し前に来たものと同じ、つまりは伝言である事を理解し、すぐさま応答してみれば、やはりと言わなければならない。うべきかモモンガさんからの連絡であった。

『さつきはすいませんね。ちょっと戦ってたもので』

『………えっと、ネームレスさんも異世界にいるんですよね？』

『ええ。最初の火の炉で終わったと思えばユグドラシルじゃないどこかに来てしまったことは事実ですよ』

私の言葉に伝言越しのモモンガさんから何やら安心したような雰囲気伝わってくるがどうやったならそんなのが出来るのだろうか……不思議だ。

『あ、慎重派なモモンガさん。モモンガさんの事ですからこの世界の生物の強さに警戒してるようですが、ユグドラシル基準で兵士がほしい十レベルと少しいくか
いかないか……時折強くて二十前後ですよ』

『え？弱くないですか？……と何か何故にレベルがわかるんですか……ああ、いやネームレスさんはそういう探知系の指輪持ってましたね』

『ええ。ちなみに何をしてたかと言いますと……草原にいて困惑中に一応指輪付けてたんでそしたら範囲内に色々いましてね……レベル的に問題ないだろうなあ……
と違って近づけば人間の街……いや、王都か。それを襲う五千ぐらいのピーストマ
ンの群れがいて、明らかに人間が不利と思えば暗月警察的に助太刀という名の無
双してました』

『エンジョイしすぎか、おい』

もちろん、そんな理由じゃない。しかし、モモンガさんに原作知識なんぞ教えるつもりはないので嘘を多分に含んだ話を作った。

ユグドラシルでの私の行動からモモンガさんは普通に納得するような話だ。

『……王都って言いましたよね？それで窮地を救った？もしかしてお偉いさんと謁見とかするんですか？』

『ええ。とりあえずもう遅いので次の日、正午前に迎えが来る予定です』

『……なるほど。あ、一応聞きたいんですけど……』

モモンガさんからの質問に答え、手元にある地図の情報を伝えるなど互いに情報のすり合わせを二、三時間ほど私たちは行った。

『——と、いうことなので……あー、すいません。いま人化の指輪付けてるん

で結構眠気が……』

『え、あ、そうなんですか？それはすいません……って人化の指輪きちんと使えるんですか』

『ええ。生気溢れる身体になってます……あ、モモンガさん、合流したら余りの指輪を渡しますよ』

『ほんとですか？よかった……なんか、眠気とかが無いと本当に自分が人間じゃなくなっちゃって打ちのめされてるようで……』

『………はい、それじゃ。次はこっちから伝言使いますんで』

『はい、わかりました。おやすみなさい』

ふう。モモンガさんとの情報整理も上手い具合に出来たな。さて、合流後の目的はその時に考えるとしてひとまずは明日の謁見か。

竜の血を引いている女王……プリシラを想起させるな………あの腐れ聖職者、しこたま殴り殺したい……いや、とりあえずなんかいい感じの瓶に本体詰め込んで

シェイクしてやるか……。

ああ、あの腐れ聖職者を思い出した途端に苛立ってきたな……落ち着こう。
深夜テンションで作ったグウインドリン様（二分の一）像が確か入ってたはず、出して跪こう。

嗚呼、グウインドリン様……

アイテムボックスから取り出したグウインドリン様像に人間性が溢れそうになりつつも抑え、跪く。

もうね、なんというかアレなんだよ。グウインドリン様は女神として育てられた男神だけどき……男でも良くね？ いや、普通に女神でもまっったく問題ないんだがな!!

暗月の使徒として、御身に復讐の証を……

……む、ビーストマンの耳は……むむむ、グウィンドリン様に獣の耳を捧げるのはどうか……、ひとまずクレマンティーヌの耳は捧げよう。

立ち上がり、寝室へと足を向ける。

ひとまずは今日はもう寝よう。

「おお、貴公！ どうやら亡者ではないらしいな。俺はアストラのソラール。見てのとおり、太陽の神の信徒だ」

「不死となり、大王グウィンの生まれたこの地に俺自身の太陽を探しに来た！」

「む、貴公は太陽よりも月が好きなのか？ そうかそうか、月も太陽とは切っても切れないものだ。否定などするものか」

「おお、貴公。貴公とは奇妙な縁があるな……む、貴公、そういえば名はなんとい
う……何？名がわからない……そうか……よし、ならば俺が貴公にピッタリの名
を考えよう！」

「確か貴公は月が好きだ、と言っていたな……うむ……セレネというのはどうだ
ろうか。異邦では月を示すそうだが……」

おいおい、女みたいな名前だな。なんだ、貴公は私を女々しいと言いたいのか？
「ウワツハツハハハ!! すまんすまん、だが決して俺は貴公を女々しいとは思って
いないぞ？ 貴公は立派な騎士だ、そんな男を女々しいなどとは口が裂けても言え
んよ」

「さて、俺はもう少ししばらくここで太陽を眺めていくよ」

「どうだろう？ 俺と同じ太陽の戦士にならないか？……悪い悪い、冗談だ。俺は
知っているとも。貴公は決して信仰を鞍替えるような安い男でない事を」

「俺は太陽の、貴公は暗月の、互いに強き信仰を胸に、前へと歩んでいく……うむ
うむ、しかしそう考えれば考えるほど共に太陽の信徒として戦ってほしいと思っ

しまうな。ウワツハツハハ!!」

「……なぜだ……なぜだ」

「……なぜ、これほどに探しても見つからないんだ……」

「……ついに、ついに、手に入れたぞ、手に入れたんだ……俺の、俺の太陽……俺が太陽だ……」

「太陽万歳！」

「やった……やったぞ……どうだつ、俺は……やったんだ」

っ……………!!

「……ああ、駄目だ」

「……俺の、俺の太陽が、沈む……。……暗い、まっくらだ……」

『火は陰り、王たちに玉座なし……。……貴公、俺の声が、聞こえているか……。……?』

………ッ！！？……ハアハア

夢……なのか？

ひとまず休息をとるために用意された部屋のベッドで眠りについた……だが、寝ている間に私は……何かを見た。

………前世も今世も私にはそんな記憶は無い。そんな体験はない。だが、だがしかし………

この身体が、ソウルがそれを憶えている………のか。

現実と化すフレーバーテキスト。重要視していた………と思っていたが思いのほか

私はそれを軽く考えていたようだ。そもそも昨晩、私がこの世界に来た際にも似たような現象……と言ってもアレは勢いよく記録が流れ込んできただけでまるで本を読むようなものだった。

だが、さっきのは違う。アレは明確な記憶だ。意識すればするほど、アレがただの夢と振り払う事が出来なくなっていく……はつきりと私が経験したものだ、と断言できてしまう。

精神の異形化も恐ろしいものだが、これもまた恐ろしいものだ。

………時間は………そろそろ着替えた方がいいか。

アイテムボックスからローブを引っ張り出し、纏う。早着替えする装いは………アレでいいか。

選んだのはファーマムとは違うシンプルな騎士鎧。青いサーコートに首周りを覆う赤い布が特徴なそれを着て私は妙に満足感を憶え、アイテムボックスから適当な特に効果があるわけでもない嗜好飲料を取り出しグラスに注ぐ。

口に含んでみれば口の中に満ちていく甘い柑橘系の味、確かギルメンと一時期こ
ういった特に効果があるわけでもないアイテムを作るのにはまっていたな。確か名
前は……………みかん太郎だったな。よそで言うのはやめよう。

——トントントントント

どうやら、迎えが来たようだ。

飲み終わったグラスと飲料の入った瓶をアイテムボックスにしまい私は部屋のド
アを開け、迎えに来た兵士に笑みを浮かべた。

「戦場に突如として現れた謎の騎士……のう」

「はい、戦場の兵士らは口々にその勇猛さと武勇を讃えていましたよ」

竜王国・王城の玉座の間にて女王ドラウデイロンは昨晚のビーストマンによる王都襲撃の際に現れビーストマンを蹂躪したという騎士の話をしていた。

兵士長からの報告書によれば国宝と言ってもいい様な武具に身を包み、一撃で数百ものビーストマンを消し炭に変える稲妻を放つ謎の騎士。

「名は名乗らなかったようだが、まあもうすぐ来るらしいしその時に聞けばよからう」

「そうですね。出来ればそのままこの国に仕えてくれるとありがたいのですが」

「まあ、難しいじゃろうな」

宰相と謎の騎士について話していると伝令がやって来て、じき来ることを伝える。

それに対し宰相は頷き、ドラウディロンはやや緊張する。

それを見た伝令は幼い女王が自国の危機を救ってくれた騎士と会える事に緊張しているのだろう、と微笑ましく思った。がしかし実際のところはその騎士が一体どういう目的でやって来たのか、など一国を治める王として思考を巡らせているためなのだ。

「——陛下」

「うむ、来たようだの」

伝令は下がり、玉座の間への扉が開く。

そして、入ってくるのは一人の騎士。

シンプルな騎士鎧だが、その青いサーコートや赤い布、鎧に使われているであろう金属、その腰に下げている直剣といいどれもが国宝級のそれを凌ぐものだ、とド

ラウディロンはその身に流れる竜の血が訴えているのを感じ取り、同時にその騎士から感じる力に竜の血が警鐘を鳴らしているのを理解した。

「——お、お主が」

声が震える。

目の前のそれが騎士という形をした全く違う埒外の何かなのだ、と理解してしまったが故に。

もしも、ここにるのが騎士ではなくその友人ならば問題はなかった。しかし、目の前にいる騎士は如何に人化しようともその身体は、そのソウルは……古の竜すら屠る怪物なのだ。

そんな戦慄しているドラウディロンを無視して、宰相は跪いた騎士へと視線を向ける。

戦士ではない宰相だが、目の前の騎士が英雄に類する傑物なのだ、と感じ取り礼を示し竜王国に籍を置いてもらわねば、と思考を巡らす。

此度、お招き頂き感謝します。女王陛下

「う、うむ……わ、私はドラウディロン。ドラウディロン・オーリウクルス、この竜王国の女王じゃ……き、騎士殿は」

騎士の言葉にドラウディロンは意識を戻し、冷や汗を垂らしながら目の前の怪物と言葉を交わす。そんな事はないのだが、一瞬でも目を離せばその瞬間に腰に下げている直剣が自らの首を断つのではと想像し緊張の中対応する。

そんなドラウディロンの心境などいざ知らず、騎士は誇る様に照れ臭い様に自らの名を告げる。

セレネ。アストラのセレネと申します……女王陛下。

さて、行くか。

竜王国の王都を背に、騎士は女王より貰い受けた駿馬の上で地図を広げていた。既に伝言で目的地を決め、今はそこへ向かうための道のりを思考していた。

本来ならばその指にはめている召喚系の指輪を行使し騎乗用のモンスターを召喚、それにより早々に目的地へと向かうつもりだったが女王より報酬として得たものを考えれば多少ゆったりとしても良いだろうと考えた。

まずはカツツエ平野だな。……人化の指輪は外せないな……私が原因でとんでも

ないアンデッド種が発生されては困る。

マッチポンプはモモンガさんの十八番だしな。そう、苦笑し地図を折りたたみ懐へしまつて手綱を動かす。

この駿馬も何れはアンデッド化……ソウルイーター辺りにでもしよう、と不穏な考えをしつつ騎士は竜王国を後にした。

鐘の音が聴こえる

身体が軋む。まるで何年も、何十年も、何百年も、いや何千年も身体を動かして

いなかったのように身体が軋み悲鳴をあげている。

視界が暗い。どうやら、何処か狭い場所にいるようだ……そして穴はない。……棺桶だろうか、石造の棺桶なのだろう。

ふむ、どうするべきか。

ひとまずはここを出よう。軋む身体を動かし腕を前方、いやこの場合上なのだろう。立っているのではなく横たわっているのだから。

掌を壁に押し付けそのまま力を加える。すればどうした事だろうか、壁は……いや蓋は容易く動き、そのまま横へとズレて落ちた。

ぬうう。

眩しい。溢れんばかりの光が視界に差し込んでくる。いったいこれはなんなのか、いや、これは……もしや……。

すぐさま軋む身体を無理矢理動かし、棺桶から立ち上がる。空を見ればそこには清々しい程の青空が広がり、そして眩いばかりの雄々しく全てを照らさんばかりの

太陽が輝いていた。

火防女／誘導

「俺も早く異世界で冒険したい！」

骨は待ってろ。もうすぐ出れるから

「灰の方は何時帰ってくるのですか？」

「ネームレスさん、はよ」

生えでる岩々、墓標のように突き刺さる剣や杖の武器の数々、静寂が支配するその空間で一人の女が祈りを捧げ続けていた。

ナザリック地下大墳墓・第六階層『最初の火の炉』

至高の四十二人、その一人であるネームレスにとって第二のマイルームと言えるその領域にはただ一人だけそこにいる事を許されたNPCがいる。

領域守護者という肩書きはあれども、守護者としての行動は一切無く、ただ祈事だけを望まれたNPC。

名をレティシア。ネームレスに創られた火防女としてのNPC。ユグドラシル時代においてはネームレスのジェスチャーに反応したジェスチャーをするかこの領域の中心にある篝火に祈りを捧げるだけのNPCでしかなかったが、ナザリックが異世界へと転移した現在、彼女はほかのNPCとは違うものになっていた。

「……灰の方」

ネームレスが彼女に記したフレーバーテキスト。それは彼女がネームレスと同じく嘗ては違う世界違う時代で生き死した存在だったが彼女のソウルをこの世界に現れたネームレスが嘗ての彼女そっくりの身体に注いだ事で蘇ったという旨。

本来ならばただのフレーバーテキストだったがフレーバーテキストが現実化した以上、彼女はそうなのだ。

嘗てネームレスが火の無い灰であった時に彼とともに火を消した火防女、それが

蘇った者。そういう経緯が現実化した為か、彼女はナザリックのNPCでありながら他のNPCのようにナザリックに忠誠を誓っているわけではない。

彼女は第一にネームレスを、その次に至高の四十一人に対して敬意を払っている。故に彼らがナザリックを去るといふのなら止めはしない、それが彼らの選択ならば止めるというのは間違っていると判断しているからだ。

だから、彼女は種族もあってナザリックの他のNPCから浮いている。さて、そんな彼女がいる領域に一つの人影が訪れた。

「確か、レティシアだったか？」

「……モモンガ様」

魔王然とした黒いローブに身を包んだ白骨の異形、ネームレスと同じくアンデッド種に属するスケルトン系の最上位種が一つ『死の支配者』たる至高の四十二人が一人にしてナザリックの最高支配者・モモンガ。

慈悲深い声音の彼に彼女は一礼する。

「……ふむ、ネームレスさんがいないがどうだ？」

「はい、灰の方がおりませんがしかし何も変わりません。ただ、いつもより祈る時間が長いだけです」

「そうか……」

顔の半分近くを仮面のようなもので隠している彼女の表情は読めず、悲しんでいるのか怒っているのかどうなのかわからない為モモンガがどう話すべきかを迷っている内に、今度は彼女が口を開いた。

「モモンガ様。灰の方は……また旅へ出られたのですね。何時終わるともしれない旅を」

「……………いや、あの人は戻ってくる。既に伝言メッセージによって話した」

「本当ですか……………あ、いえ、申し訳ございません」

不安気で儂げな彼女の言葉に一瞬、モモンガは言葉が詰まりそうになったがすぐにかぶりを振ってつい十数時間ほど前の伝言のやり取りを口にする。

それは彼女に対して致命的なまでのものであったか、儂げな雰囲気の彼女らしからぬ喜びに満ちた声音を出させた。

そして、すぐにそんな自分を恥ずかしみ頬を薄く赤らめた彼女にモモンガは軽く心の中で笑みを浮かべつつナザリックの外を自由気ままに旅しているであろう友人に対して罵倒を投げつける。

「……そういう事でだ、ネームレスさんが帰ってくるまで少し待たせる」

「………いえ、大丈夫です。戻ってくる、そう分かっているのなら……それだけで、私は」

「そうか……（帰ったら絶対イチャつくんだろなあ……しかもリア充みたいじゃないなくて熟年の夫婦みたいに……）」

こういう相手が欲しかったなあ……。そう心の中に押しとどめ、モモンガはこの

領域を後にした。

時と場は移り変わり、カツツエ平野。

竜王国より北西に位置する年中霧が満ちる平野であるが、この地はいわく付きのものだ。それはアンデッドが多発するという事。アンデッドが出るだけならば危険な場所程度で収まるがしかし、アンデッドが集まるとより上位のアンデッドが発生しやすくなるという概念がある為に王国・帝国共にアンデッド退治を重要視している土地だ。

そういった背景からこのカツツエ平野は両国の冒険者及びワーカーにとって稼ぎ

場であるという認識が大きい。

そんな土地にて今日もまた一つのワーカーチームがアンデッドを相手に仕事をしていた。

「クソッ！野郎まだついてきやがるっ!!」

「そんな文句言ってる暇があんならもつと速く走らせなさいよ！」

「うっせえ!?!これ以上は無理だ！馬が潰れるぞ!!」

「……私が飛行フライを使えば……」

「駄目です。アルシエ……それは貴女が囿になるという事と同義です………大丈夫、頑張れば何とかあります」

霧に包まれたカツエ平野。そこを疾駆するのは三つの影、正確に言えば前方を進む二つの影を後方の大きな影が追いかけているという所だろう。

まず前方の二つの影。それは二頭の馬に二人ずつ乗った人間、装備を見るに恐ら

くこのカツツェ平野でアンデッド退治をするためにやってきた冒険者またはワーカーなのだろう。そして、そんな彼らを追いかけている影の正体は——

「……なんで、こういう時に限ってスケリトル・ドラゴンが出てくんだよッ！」

無数の人骨によって形作られた竜の如きアンデッド、名をスケリトル・ドラゴン。第六位階以下の魔法に対する絶対的耐性、つまるところこの世界においては一切の魔法が効かないアンデッドである。

ミスリル級冒険者チームならば充分討伐できるであろうそれに相対して逃げる彼らはそのレベルではないのか？ そう考えられるが決して彼らは実力不足という訳ではない。

万全ならば充分にスケリトル・ドラゴンを討伐出来る。がしかし、彼らはい先程までアンデッド退治を行っており、それに応じて消耗してしまっていた。

それ故の逃走だが、片や一頭の馬に二人ずつ乗って逃走、片や疲労など存在しない大型のアンデッド。これがただの獣に追われているならばいずれ疲れ諦めるだろ

うが、難しいだろう。

さらに言えばここはカツツエ平野。アンデッドの多発地域である。

——ザシユツ

『ヒヒイインツ!?!』

「うわあ!?!」「キヤツ!?!」

唐突に二頭の内の一頭、大柄な男と華奢な少女が乗っていた馬がつんのめりそのまま二人は地面に投げ出された。

流石に修羅場を潜り抜けてきただけはあるのか、双方共に受身はしつかりととつた事で落馬による負傷は無いようだ。

そんな二人が乗っていた馬をもう一頭に乗っている彼らのリーダーであるヘツケランは見て、すぐさま落馬の理由を悟る。

「スケルトン・アーチャー骸骨弓兵かっ！クソツタレ!!」

見れば馬の右前脚に深々と刺さる矢が一本。ヘッケランはすぐさまそれがこのカツツエ平野に発生するアンデッドの一種、骸骨弓兵だと理解し手綱をさばいて彼らの方へ馬を動かそうとしたが

「ヘッケラン！私の事はいいです！」

「な!？」

大柄な男、ロバーデイクの叫びにヘッケランと彼と同じ馬に乗るイミーナ、そして彼と共に投げ出された少女アルシエは目を見開く。

「アルシエ、貴女は飛行でヘッケランたちと共に逃げてください。ここは私が殿をつとめます」

「そんな……」

それは自分を犠牲にして生き延びろ、という言葉だ。これがまったく違うチームの人間ならば躊躇なく逃げただろう、しかし今まで共に戦ってきた仲間を置いて逃げ出せるほど彼女は、いや彼らは薄情者になれなかった。

「ロバー!!」

「ヘッケラン!? 何故……!!」

ロバーデイクの名を叫びながらロバーデイクのもとへ戻ってきたヘッケランといミーナ。そんな二人にロバーデイクは困惑と責めるような声をだす。

しかし、そんなロバーデイクにヘッケランはぎこちない、だが気持ちの良い笑みを向ける。

「仲間を囚に生き延びた、なんて恥ずかしくて帰れたもんじゃねえよ」

「そういうこと。……アルシェ、あなたは」

「みんなが戦うなら、私も……スケリトル・ドラゴンには効かなくても補助は出来

る」

「……………！」

全員が武器を構えスケリトル・ドラゴンを見据える。ヘッケランへと走るスケリトル・ドラゴンはようやく殺せる、と言わんばかりに唸り声を上げている。

決して万全ではない。希望的に見て何とか全員帰還、普通に考えれば半数は死ぬ、絶望的に見れば全滅。そんな状況にも関わらずヘッケランとロバーデイクは笑っていた。

全員で、生きて帰るのだ、と。

ああ、だからだろうか。

その意気や、よし

瞬間、カツツエ平野の濃霧を吹き飛ばさんばかりの雷光が迸りスケリトル・ドラゴンが爆散した。

「は？」

そんなありえない光景に覚悟を決めていた彼らの顔は嘩然としたものとなり、スケリトル・ドラゴンが存在していた場所から姿を現す何某はそんな四人にとて軽く言葉をかけた。

良い仲間だ。仲間を見捨てず力を合わせる、見事だよ貴公ら。

シンプルな騎士鎧に青のサーコート、首元に巻かれた赤いスカーフ、そして一際目が向くのはその身の丈以上の大きさを誇る大鎧。

そんないきなり現れた騎士、それにすぐヘッケランは硬直より戻り騎士の胸元に輝くものを見つけた。

「アダマンタイト——？」

ヘッケランが見つけたのは騎士の胸元に垂れ下がっている一つのプレート。それは冒険者のランクを示すもので騎士が所持しているのはアダマンタイト……すなわち冒険者の中でも最上位のもの。

すぐさまヘッケランは自分の記憶からこの騎士が何者なのか考えるが、大鎧を持ったアダマンタイト冒険者など何人もいる訳ではなく王国のアダマンタイト冒険者チーム『蒼の薔薇』に所属する戦士ガガーランを思い浮かべたが噂に聞くような体躯には見えない。

では、いったいどこのアダマンタイト冒険者か。そう、警戒して——

獲物を横取りする形になったが大丈夫だったろうか？

「……ああ、いや、助かった」

何故だろうか。ヘッケランもイミーナもロバーデイクもアルシェも、全員が目の前の騎士へ対する警戒心を失った。

理由はわからないが、全員それでいいか、などと普段ならありえない事を考え騎士へと近づいていく。

「……あんたはいつたい」

「どこのアダマンタイト冒険者よ……」

む？ ああ……私は竜王国の冒険者だよ。と言ってもあくまで身分保障の為に冒険者になっただけで国は大して関係ないか……と、私が誰かか。

竜王国。騎士の言葉にヘッケランはすぐに竜王国のアダマンタイト冒険者であるセラブレイトを想像するが恐らく別人だ、と考えつまりは新しいアダマンタイト冒険者と納得した。

竜王国は年中ビーストマンにより襲撃を受けている。もし、そこで大手柄を挙げたのならアダマンタイト冒険者になれてもおおかしくはないし偽っているわけでもないのだろう。

何せ一撃でスケリトル・ドラゴンを破壊しているのだ。ミスリルやオリハルコンではいささか不可能な事だ。

私はアストラのセレネ。先も言ったが竜王国の冒険者だが……まあ、身分保障の為になった結果アダマンタイトを得たに過ぎない。さて、君たちは？

「お、俺たちはフォーサイト……帝国のワーカーをやってる。……俺はリーダーのヘッケラン」

「イミーナよ」

「ロバーデイクと言います」

「アルシエ」

ヘッケラン、フォーサイトの面々の自己紹介を聞いて何度かセレネは頷きその手

に持っていた大鎚から手を離す。すると、まるで靄のように大鎚はその場から消えた。

それにフォーサイトの面々は目を見開くが何でもないように振る舞うセレネにそういうものなのか、と何故か納得してしまふ。

「あー、セレネさん？」

好きに呼んでくれて構わないとも

「……んじゃセレネの旦那。あんた、童王国の冒険者つったけどこんな所になんの用で来たんだ？ 依頼？」

「ちよつと、ヘツケラン」

構わないさ。ふむ、何故ここにいるか、か。まず、依頼ではない。単純に拠点の移動だよ。とある事情でね、童王国は私を縛れない……だから、こうして他国へ拠点に移せる。

「なんと………拠点を移すとなると王国か帝国のどちらかですね」

セレネの言葉にロバーデイクは頷き、セレネが向かうであろう国を二つあげる。

ああ、ひとまずはエ・ランテルに向かおうと思っ
ていてね。貴公らは？

「あー、俺らはこのまんま帝国に戻りますわ。結構消耗してますし……」

ふむ、では霧を抜けるまで共に行こうか

そんなセレネの提案に一切の不安を持たずに賛同するフォーサイト、恐らくはそのスケリトル・ドラゴンを一撃で粉碎させる實力から自分たちのようなワーカーを騙す必要なんてないだろう、と判断しての事なのだろうがしかしあまりにも素直な事だ。

そんな四人にセレネは頬付き兜の下で笑みを浮かべこのカツツエ平野を四人もの旅仲間と共に——射られた馬にはポーションを使用し無事に足として作用した

——進んでいった。

はてさて。よもや、あのフォーサイトと縁が出来るとは……………関わらなければナザリックに誘い込まれて無残に死ぬ、そんな未来を許容したのだが……………人化しているからか、友愛が湧いてしまうな。

まあ、帝国での活動の際に寄る辺が出来たのは丁度いいな……………それにしてもピーストマン殲滅の報酬にアダマントイト冒険者としての地位と自由に動く権利をもぎ取って正解だった。

竜王国のアダマントイト冒険者……………なんだったか、ペロ助みたいな性癖持ちの人があの場において助かった。彼と兵士らの言葉がなければせいぜいミスリル、良くてオリハルコンだったからな。

にしてもこの指輪、確かレベル二十以下ならNPC、プレイヤー、エネミー関係なく攻撃対象に選ばれないとか何とも微妙とも言えない性能の指輪だったが……………この世界では本当に結構重要だな、おい。

彼らはまったく警戒していなかったし……攻撃対象に選ばれない、がどうやら装備者に対して友好的にさせるとは………せいぜい警戒はすれども攻撃しようとは思わない程度だと思ったんだがなあ。

捨てずに持っておいて正解だったか。

「……？セレネさん、どうかした？」

なに、こうして少しの間だがこの辛気臭い場所を一人で通らずにすんで、よかったですってね。

「はは！確かに、こんなところ一人で突っ切りたくはないわな」

そんな風に笑うヘッケランに私は兜の下で笑っておき、彼らを見据える。

帝国での活動の際に利用するのは確定だ。しかし、彼らをナザリックで処分するかというのはいささか遠慮したい。彼らは良いチームだ、無論アインズ・ウール・ゴウンに敵うことはないがそれでもとてもよくまとまっていると思う。

そうだな、原作どおりに事が進めば充分対応出来るがしかし………そんなのは

私がいてもいなくても変わらない。ならば、崩すのもありか。

と、どうやら霧が途切れたようだ。

「おや、無事抜けられたようですね」

「てことは、ここでお別れね」

ええ。では、皆さん短い間でしたがお世話になりました。

「おいおい、セレネの旦那。世話になったのは俺らの方だって、助けてくれてありがとな」

「帝国に来た時は、案内する」

ええ、その時はお願いしますよ。フォーサイトの皆さん。

彼らの声を背に、私はエ・ランテルへ向けて馬を進める。

さて、そろそろモモンガさんから伝言がくる頃合だが………

『《伝言》——あ、ネームレスさん、聴こえますか？』

『聴こえているよ、モモンガさん』

噂をすれば何とやら、だな。

『実はですね……………』

『ふむ……………』

カルネ村と接触したのか……………で、今はその村の村長と情報交換中、と。ということはもちろんすぐガゼフ・ストロノーフとそれを付け狙うニグン率いる陽光聖典……………か。

で、カルネ村で名乗った際に使ったのは自分の名で組織としての名前でアインズ・ウール・ゴウンを出した……………アレか。この世界には私がいるのが分かっているから自分の一存でアインズとは名乗れないとかそういうのなのか。

そう、モモンガさんの言葉をかなり好意的に解釈し、私は彼らにどう動いてもらうかを考える。

『……まあ、少なくとも意味もなく兵士が村を襲うってことはないでしょう……
竜王国で得た情報的に帝国の鮮血帝？は賢王らしいので多分帝国じゃなくて偽装
兵？』

『偽装兵ですか？……となると何が狙い……あ、ネームレスさん、またどこ
かの団体が来たようです』

『ん？それじゃあ、伝言を切っても——』

『いえ、このままでいきましよう』

『……はい、わかりました』

どうやらガゼフ・ストロノーフとその仲間たちがやってきたようだな。はてさて。
竜王国を見た身では、彼ら陽光聖典には生きて欲しいが……ううむ。どうす
るか……そもそも私が竜王国で得た情報ナザリックに送った以上、彼らをわざわざ
ざ捕らえる必要がなくて……ついでに生かす必要もなくて……ううむ。

いや、待てよ？わざわざ法国と敵対する理由なんてないわけで……

『……………さーん、おーい、ネームレスさーん』

『!? あ、ああ、すまないモモンガさん。考え事をしていてね、それでどうしたんですか?』

『えっとですね。カルネ村に来た団体なんですけど、どうやら王国戦士長? の一団らしくて』

『ガゼフ・ストロノーフですね。竜王国でも英雄級の戦士と噂されてました……………恐らくは彼を始末する為の偽装兵なのでは?』

『なるほど……………ですがあの偽装兵の実力を考えても……………そうか、四部隊ですね?』

流石モモンガさんと言うべきだろう。この人は自己評価が基本的に低いが今の御時世の平均を考えるとこの人普通に上の方なんだよな。

そりゃあ、アインズ・ウール・ゴウンには公務員なたち・みーさんややまいこさん、教授がいるから仕方ないけどこの人、小卒だろ?

なのに結構有能なんだよなあ……ネーミングセンスは悲しいぐらいに終わってるが。

『王国は結構腐ってるらしいので恐らく法国ですね。人間が生き残る為に人間はまとまらないといけない、けど王国が腐ってるからもう駄目だ。よし帝国に取り込ませよう……とかそういう話でしょう』

『……なるほど。にしても法国ですか……確か、ネームレスさんはプレイヤーが作った国と考えてるんですよ？』

『ええ。竜王国で調べた限り六大神、それと戦って相打ちになった八欲王は間違いなくプレイヤーでしょうね。で、法国のプレイヤーはいないと考えて大丈夫ですが……世界級がある可能性は頭に入れてください』

『プレイヤーの遺産ってことですね？……わかりました』

『それと、もし法国だった場合……生かして捕縛でお願いします』

『……？プレイヤーがいないのなら報復を警戒しなくてもいいんじゃないですか？』

まあ、そういう反応だろうね。

『今はいなくても今後、私たちみたいに来るかもしれないでしょう？それで下手に殺してしまったら……………』

『なるほど…………人間種のトップギルドが来た場合、間違いなく敵対されますからね…………大義名分を少なくする、と言うことですか？』

『ええ…………まあ、微々たるものなのかもしれませんが』

『わかりました。出来る限り気絶に留めますね』

『はい、お願いしますモモンガさん』

……………切れたか。さて、何とか陽光聖典を生かせそうだが……………ア……………巫女
姫は死ぬわ。

うーん、うーん…………仕方がない。この際、漆黑聖典を釣るための犠牲と考えよう……………すまなんだ。シャルティアに対しての世界級の使用、これは回避させる

ついでにあの漆黒聖典の隊長が持っているであろう二十の一である槍は何とかして処理する必要がある。

もし仮に世界級を持っていないNPCが相対して使われれば………それだけは避けねばならない。

嗚呼、まったくエゴいなあ……

私はそう呟いて苦笑った。



燃えるッ!?

貴公ッ!、ヌウッ俺にもか!?

……貴公ら一回下がれッ!!

まさか、石像が火を吐くとは思わなんだ……

まったく。いや、それよりも二体は流石に狡くはないか?

そういうこっちは三人だろう

だな

その男に初めてあった時はただ利用出来る奴が来た、としか思わなかった。

まあ、話してみるとなかなか面白い奴ではあったな………だからだろう、奴の召喚に応え共に戦った。

と、飛んだァ!? 掴んだァ!?

ぬううおおおおお!!?? 食べられるうウ!!??

おい、貴公らあああ!!???

………ああ。うむ、まあ、絆されていったのが理解出来た。

故にこれ以上は駄目だ、私の使命の為にも彼らと共にいることは出来ない……その判断して私は奴のもとから離れた。その際に用済みの女を殺してな……。

ほう、貴公か………多少は賢いと思ったが、そうでもなかったようだな。

哀れだよ。炎に向かう蛾のようだ。

そう思うだろう? なあ、あんた達。

ああ、クソッ………せいぜい、足掻け………貴公………

「……………なんだここは」

冒険者／暗躍

実はバジリスクにより呪われながら頑張って貪食を倒しました。

え？ ロートレク？ ソラール？ …… 解呪がね …… おかしいなこんなに死ぬもんだったかな ……

俺は沖田オルタを引くぞ！ ソラァアル！！

いつもと変わらない風景。

いつもと変わらない喧騒。

なんらいつもと変わらないある日、それはやってきた。

リ・エステイーズ王国にある都市エ・ランテル、その都市にある冒険者組合の扉が開かれた。

組合の中で仲間たちと談笑を交わしていた冒険者が、掲示板を見て依頼を吟味していた冒険者が、冒険者らに仕事を斡旋する受付嬢が、何となくその入ってきた人物に目を向け、固まった。

シンプルな騎士鎧に青いサーコート、首元に巻かれた赤いスカーフ、とうてい冒険者では用意出来ないような国宝級の鎧に身を包んだ騎士。そんな彼を見た冒険者はどこかの貴族の息子かその護衛が着飾ってるんだろうと考えたが、その鎧についている歴戦の傷や騎士の佇まい、そして何よりその胸にかけているプレートを見てその考えは誤りだと理解した。

アダマンタイト。

騎士のかけ下げているプレートはそれを示すものだった。エ・ランテルは王国の中でも大きい方の都市で、それに見合った情報が流れ込んでくる。故に冒険者たちはその騎士を見て自分たちの知るアダマンタイト冒険者を思い浮かべたがすぐにその誰とも違うと考えた。

受付嬢は一瞬、偽装か？と考えたがアダマンタイトは希少金属でそうそう偽装など出来はしないし調べれば簡単に分かってしまう。偽装するにしても白金級かオ

リハルコン級のだろう。

さて、件の騎士は組合に入って脇目も振らずにまっすぐと受付嬢のもとへ向かっていく。そんな姿に受付にいた冒険者たちは次々と道を開けていき、受付嬢と騎士は対面した。

「え、えっと、ど、どのような御用でしょうか……」

竜王国より拠点をこちらへ移す為に来た。

「はい、わかりました……え？」

竜王国？ 竜王国のアダマンタイト？ 拠点を移す？ 騎士——セレネの言葉にそれを聞いていた周囲の冒険者は仲間内で顔を見合わせる。

竜王国について詳しいものは竜王国のアダマンタイトと聞いてすぐにセレネについて思い出そうとするがしかし、セレネが冒険者となりアダマンタイトとなったのはつい数日前の事、いまだその情報は王国まで届いてはない。

「り、竜王国の冒険者ですか……えっと、その……」

アダマンタイトの偽装を疑っているのだろうか？ わかっているとも。

セレネはそう言うと、かけ下がっているプレートを外し更には腰に下げている筒状のものを取り外し受付嬢へと手渡した。

プレートはともかく手渡された筒状のものに受付嬢は首を傾げるがすぐに恐らく蓋の部分とも思われる場所に記されている竜王国の紋章に目を見開きセレネへと目を向ける。

竜王国が王より貰い受けた証文だ、組合長に渡してくれ。

「は、はい！！??？」

もはや、そんなものまで渡されては目の前の冒険者が偽装しているなど思えるわけもなくすぐさま受付嬢は組合長を呼びにその場を後にした。

焦っているのか慌てたように走り、途中躓き転びそうになった受付嬢の背を見ながらセレネはただ首を竦めるだけ。

そんな彼を見て、周囲の冒険者たちは彼がいったいどんな偉業をなしてアダマンタイトになったのかを口々に話し合い始めた。

「竜王国ってこたアやっぱり、ビーストマン相手に色々尽力したってことか？」

「ううむ、確かに竜王国でアダマンタイトになるとしたらそれが一番確実であるな」
「だな。それに、ビーストマンの相手は熟練の冒険者でも苦戦するらしい……………」
「もしも本当にビーストマン相手にかんりの功績をあげたのなら……………」

「相当な実力、英雄級の冒険者ってことですね……………」

「あの鎧……………相当なモンだな、だが貴族か王族とかそういうのじゃねえ……………あ
りゃあ本物の英雄だ」

「ああ、身のこなしといい一切の隙がねえ……………」

そんな大きいような小さいような話し声を右から左へ流しつつ、セレネはこれからの事を考えていた。

セレネは転生者だ。故に何となくではあるがこの世界のこれからの流れが大まかではあるが分かっている。暫くはこのエ・ランテルが中心となって物事は起きてくる。

と言ってもそれらはギルドマスターことモモンガ、が変装した冒険者モモンがこの都市に来てからの話。前回からの情報交換を考えてもまだまだモモンはこの都市に出来ないだろう。

故にセレネがやる事はモモンがこの都市に来るまでに信頼を勝ち取る事だ。

モモンガがこの都市で動きやすくする為の、その為のアダマンタイト——

(とりあえずナザリックに合流するまでは冒険者として励むとするか、モモンガさんには悪いが冒険者を存分に楽しませてもらおう)

——のはずだ。

と、そこでようやく先程組合長のもとへ向かった受付嬢が戻ってきた。

「はあ、はあ……んん。はい、プレートは本物、竜王国の証文も紛れもなく本物でした。では、組合の登録の為、書類に必要事項を御記入ください」

心得た。

受付嬢が出した書類を受け取り、腰に下げたポーチから何やら高価そうな羽根ペンを取り出しインクに付けず書き始める。

それに受付嬢は疑問符を浮かべたがすぐにその疑問は解消された。インクに付けていないのにその羽根ペンは次々と文字を記していくのだ。

恐らくはそういうマジックアイテムなのだろう、流石はアダマタイトと納得した受付嬢だが実際はそれだけではなくこの羽根ペンには文字を書く際に設定した言語を自動的に書くという機能を持ったユグドラシルではネタアイテムの一つである。

(まさか、これが役に立つとは思わなんだ)

若干のコレクター癖があるセレネが処分せず残しておいたその意外な活躍にセレネは感心しつつ必要事項を書き終わらせ受付嬢へと書類を渡す。

「はい、ありがとうございます。名前は……セレネ様ですね。我々エ・ランテル冒険者組合は貴方様を歓迎します」

はい、ではこれからどうぞよろしく。

そんなふうになんか軽く兜の下で笑い、一瞬だけ掲示板へと顔を向けたがすぐに出入口である扉の方を向きそのまま歩いていく。

その姿を見た冒険者らはいままでアダマンタイトがいなかったこのエ・ランテルでは自分の実力に見合う依頼がまだない、と判断して今日は登録だけして帰るのか、と想像し……扉へ消えるその背を見送った後すぐにセレネについて興奮するようには話し始めた。

ふう……登録は終わったな。後はどこで寝泊まりするか……。

冒険者組合を後にし、様々な道を進んで人気のない路地裏に辿り着いたセレネは壁に寄りかかりながらその頭を包む兜を外す。

そうすることで外気に晒されるのは目付きが鋭く肌の白い灰色の髪的美男顔。驚くべきは兜の下に眼鏡をかけていたことだろうか、セレネは眼鏡の位置を直すように人差し指の関節で眼鏡のブリッジを押し上げ、兜を被り直そうとして動きを止めた。

壁に寄りかかりながら、セレネはその鋭い視線を路地裏のより奥、周囲の建物の

せいで光が入らず影が満ちる空間へと向ける。

シャドウ・デーモン
影の悪魔……いや、違うな。蟲か？

その空間より僅かに微かに感じた違和感にセレネが心中を吐露すれば、一際影が濃い部分が蠢きそこから現れたのはネームレスも見たことがある人間大の異形。忍者服のようなものを着た黒い蜘蛛のようなそれを見て、セレネは一つ頷く。

エイトエッジ・アサシン
八肢刀の暗殺蟲か……ナザリックの隠密でいいのだな？

「ハッ、モモンガ様の御命令を受け、ネームレス様の下に馳せ参りました」

ふむ……つまるところ、モモンガさんは貴公を私の好きなように扱ってもいい、という事で送り付けたと認識していいのだな？

「はい、御身の手足として働く様に命ぜられました」

なるほど。そう呟いたセレネは虚空——アイテムボックスを開きそこからと

あるアイテムを取り出す。

暗い青色の布にとある紋様が刺繍されたもの。それを八枝刀の暗殺蟲へと与える。

「こ、これは……!!」

見間違える、という事はないだろうが……私の指揮下にいるという証だ。そうだな、腕に巻いておくといい

「は、ハハアツ!!」

感涙し五体投地

——常人と違い腕が四本多く、この場合は九体投地だが——

——する八枝刀の暗殺蟲にセレネは肩を竦め、次にスクロールを取り出し空中へ放る。

《メッセージ伝言》

放られたスクロールは空中で焼け消え込められた魔法が発動する。

『《メッセージ伝言》……デミウルゴス』

『——!?ネ、ネームレス様っ!?』

伝言が発動し、繋がったのはナザリックにて一二を争う知恵者。ナザリック第七階層が守護者デミウルゴス。

『謝辞やら何やらは不要。私からの指示を実行して欲しい』

『わ、わかりました………いったいどのような御命令でございましょうかネームレス様』

『影の悪魔を数体………そうだな、十体ほど私の指揮下に送って欲しい』

『影の悪魔を十体ですか?………わかりました、私如きでは窺いしれぬお考えがあるのですねネームレス様』

『うむ………さて、ナザリックだがこちらでの信用を確固たるものにしてから向かう。』

しばし待て』

『はい、わかりました。ネームレス様』

『では、切る——』

デミウルゴスとの伝言を切り、セレネは兜を被り直し待機している八肢刀の暗殺蟲へと目を向ける。

では、私は冒険者としての活動に従事する。貴公は……そうだな、この都市にて強者を探せ……あらかじめ言うがレベル30以上がこの世界では英雄クラスだ……それを考慮せよ

「御意」

そう返事し、すぐにその場から姿を消した八肢刀の暗殺蟲を見送り、セレネもその場を後にした。

場所は移り変わり王都の某所にてそれは起きた。

「いあ——」

「エドストレーム!!!??」

三日月刀^{シミター}の六刀流という奇異な剣士である女、エドストレーム。王国を裏から支配していると言っても過言ではないとある組織に属している女はその身体を無様に輪切りにされて放り捨てられた。

その同胞らが眼を剥く中、彼らの長はただただ冷静に下手人を見つめる。

「……ふん、何故わざわざこんなのを浮かばせるんだ。盾を浮かばせた方がよっぽどマシだろう」

それは真鍮の鎧をまとった誰かだった。

エドストレームが持つ三日月刀と似たような形状の武器を両手に持った戦士、声音からその戦士が男なのだと理解出来る。

彼ら、『六腕』の長であるゼロは目の前の戦士が自分では到底敵わない存在だと本能で見抜いた。そして、同時にその気になればこちらが迎撃準備が完了する前に輪切りにされたエドストレームのようになると理解していた。

ダメだ。勝てない。命乞いが通じるのか？

そんなふうな思考を回しながら、ゼロは目の前の戦士を見て——戦士はゼロを見た。

「なあ、一人死んだな」

「俺の武器とコレのそれは似ているだろうか？」

何を言っているのか理解出来なかった。その言葉にいったいどんな意味があるのか分からなかった。

「一つ席が空いたな」

「俺には情報が必要だ。俺にはやる事があるのかもしれない。なら、差し当って必要なものがある」

「金だ。情報だ——なあ、わかるだろうか？」

その言葉にゼロは今度こそ理解し、戦士へとその手を差し出した。

全ては生きる為に。この目の前の人の形をした化け物から自らの命を守る為に。

ゼロはその話に乗った。

「お前は……いったい……」

「俺か？俺の名は——」

不死人の癖にタコ殴りで死なないとかチートだろ。ユグドラシルスキル持ってるから仕方ないね。

印象／対応

ま、まさかの週間六位……日間一位……お、恐ろしや……。

まさかそこまで人気が出るとは思いませんでした……そして、誤字脱字報告、ほんとうにありがとうございます。

ところでオーンスタインってこんなに難しかったかなあ……(連続十回死亡)

新たな王国のアダマント級冒険者、『白晶』のセレネ。

唐突に竜王国より現れた異邦の冒険者はビーストマン五千を前に単身で殲滅、その偉業をもってアダマント級冒険者となる事を許された。

そんな彼はつい数日前にエ・ランテルの冒険者に登録してから多くの依頼をこなしてみせた。王国においては信用は未だないが竜王国の女王直筆直印の証文により

組合はアダマンタイトとして充分の実力があると判断し、組合からの依頼を任せただけが始まりだった。

オリハルコン級冒険者チームが苦戦するモンスターを瞬殺、アダマンタイト級冒険者ガガーランですら石化の魔眼を防ぐ為の魔眼殺しを装備し支援を受けてようやくなんとか勝てるレベルのギガント・バジリスクの瞬殺、などといった並の冒険者……いや、実力のある冒険者でも決して簡単ではないそれを軽々とただ一人で打ち倒して見せた。

そして、恐らくこれこそが『白晶』のセレネの最も有名な逸話でありその二つ名が付けられたきっかけとも言わなければならない。

エ・ランテルより南東に進んだ所にある嘗ては砦だった廃墟に現れた巨大な火竜の討伐。

チームを組まず単身で依頼をこなしているセレネに対して嫉妬心と僅かばかりの好奇心を抱いた愚かなミスリル級冒険者チームが補助を申し出ての依頼だった。

冒険者組合としてはアダマンタイトから二段は劣るミスリル級冒険者チームを同行させるのは渋い顔をしたがセレネの鶴の一声により彼らは同行を許され、そして

セレネの偉業を伝えるための道具と化した。

「まず、廃墟に現れたつつう火竜だが……ありゃあ御伽噺の中の怪物としか言いようがなかった。バハルス帝国の元オリハルコン級のワーカーが倒したつつう緑竜以上の怪物だ……アレ一匹で人類が滅ぶって言われても信じちまうほどに、だ」

「やっぱりアレだよな。あの白い大剣……同じアダマントナイト級冒険者チームの蒼の薔薇のラキユースが持つてるっていう魔剣に負けずとも劣らない英雄の剣……！」

「正しく聖剣……憧れちまうよ……あんなんよお」

白い刀身の大剣に盾、そして結晶の様な輝きを放つ未知の魔法。

それらを駆使したセレネは人類の危機とも言える火竜を討ち滅ぼしてみせた。

もはや嫉妬することすら恥ずかしくなったミスリル級冒険者チームは自らセレネを讃えるべくエ・ランテルに意気揚々と帰還した。それはまるで英雄譚に心踊らせ

る童のようであった、とエ・ランテルの人々は笑った。

『——マッチポンプ、お疲れ様です。ネームレスさん』

『おつあります。信用を得るために利用できる者は利用するのが一番でしたからね』

まあ、そんな偉業はセレネによるマッチポンプであるのだが、そんな事は身内以外誰も知らない。

セレネはエ・ランテルで拠点にしているそれなりの宿屋、その部屋で兜を脱ぎ側頭部に指を当て伝言を使用している。無論、相手は友人のモモンガである。

『確かヘルカイトでしたっけ？あの火竜』

『ええ、課金ガチャの微妙枠で、第六位階相当の召喚魔法が付与された指輪で呼び出せるモンスターですけど、実際のカタログスペックだと第七位階相当な火竜ですよ』

『確かぶくぶく茶釜さんがレベル90台のドラゴンを当てちゃった時の課金ガチャに入ってた奴ですよね』

『ペロ助とのガチャ勝負で当てたもので、なかなか使う時がなかったんですけど意外な活躍しました……』

そう笑ってセレネが思い出すのはギルメンの一人であるエロゲマニアにして爆撃の翼王な友人との勝負。

結果的にいえば勝負に負けた為にそれを思い出して苦い顔をするが、それはこの場にはないモモンガには分からないことでモモンガは変わらず話していく。

『いいなあ、早く俺も冒険者になりたいです』

『ふふ、モモンガさんが思ってるほどロマンある仕事じゃあないですよ。ところで影の悪魔に持たせた人化の指輪、どうでした？』

『あ、とても気に入ってますよ！いままで食べれなかったナザリックの美味しい料理を食べれましたし、ゆったりと寝れました。……ただ、アルベドの目が怖い』

『アルベドが？……あー、確か設定がちなみにビッチであるとかなんとかでしたね』

『そうなんですよ……タブラさん、ギャップ萌えだから……変えた方がいいかなあ？って思ったんですけど、やっぱり人の書いたのを変えるってのは気が引けて……』
『なるほど……』

モモンガさん、設定変えなかったんだな……と呟きつつ、アイテムボックスから取り出した剣の刀身を布で拭き始める。

『それでいつ頃ナザリックに……？』

『ううむ……一応組合の方に暫く留守にするって伝えてからだから……明日ナザリックに行きます、滞在時間はだいたい三日間ぐらいですかねえ……』

『信用というか社会的地位の結果足枷になってますね……』

『すまなんだ……こうなるとは……このネームレスの目をもってしても……』

『……と、とりあえず、迎え役として転移門が使えるシモベを送りますね』

『よろです。それじゃあ——』

暫くモモンガとの談話を楽しみ、伝言を切ったセレネは立ち上がる。

さて……ひとまず組合に行かねばな。

そう言って部屋を後にする前に一度、足を止め……

私が留守にしている間は、例の少年と死霊術師を監視しておけ。

ネームレス。

異形種狩りが流行っていた際に現れたPKKを主体としてプレイしていた異形種プレイヤー。

当時、たち・みーさんに異形種狩りから助けられた俺がたち・みーさんたちのように異形種狩りに反発するプレイヤーが他にもいるのか、と感嘆していたある日の事、たち・みーさんがまるで犬か猫でも拾ってきたかのように件の異形種プレイヤー・ネームレスさんを連れて帰ってきたのだ。

聞けば複数の高レベル異形種狩りプレイヤーにタコ殴りにされていたネームレスさんを見かけ、『正義降臨』として乱入し共に全員打ち倒したらしい。それでたち・みーさんが若干無理矢理連れて帰ってきたわけで……流石のウルベルトさんも反応に困っていた。

それでなんというか、流れ？でネームレスさんはアインズ・ウール・ゴウン入

りし俺たちは仲間として活動する事となった。

聞けばネームレスさんがユグドラシルを始めたのはこのゲームなら自分の中の理想が叶えられると思ったかららしく、様々な設定を見せてくれた。

どれもこれもこう、心操られる設定ばかりで一時期それを使った装備を作ろうと考えたが残念ながらネームレスさんが謝りながら止めてきたので、きつと恥ずかしくなったのだろう。

そして、ギルドを作り、ギルドホームたるナザリックを手に入れ内装やNPC作成の際にネームレスさんは第六階層の一角と二人分のNPC作成権をもぎ取り『最初の火の炉』と二人のNPCを作った。

うち一人はプレイアデスの末妹と同じく人間種NPCレティシアを作ったのだが、もう一人は教えてくれなかった。

最初は結局作らなかつたのか？と思ったが聞けばはぐらかされるばかりで作りはしたんだろうな、と考えつつ何時しか宝物殿にいる自分のNPCを思い出して聞くのを止めた。黒歴史を掘り返されるのは辛いよなあ。

さて、ユグドラシルが過疎化していく中、意外にもネームレスさんは最後まで

残っていた……というよりはあの人の趣味である武器や防具といった装備作成に熱を上げていた。

過疎化した事で素材集めも横槍が少なくなり、嘗てはかなり高かった素材などがそこそこの値段で売られていたり、上位プレイヤーであるネームレスさんにはソロプレイでも充分だったのだろう。まあ、その際の副産物としてかなりの量のナザリックの維持費を入れてくれたため文句は何一つない。

それに何よりあの人は結構付き合いいいのだ。基本的に趣味に走るがこちらが金策に誘うとこちらを優先してくれる。頭が上がらない……。

だから、異世界に来てしまったかもしれないと知った時はとても焦った。まあ、すぐに精神が強制的に落ち着かせられたんだが………ともかく、伝言を使ってみればあら不思議。

異世界だろうがエンジョイしてるんだよなあ……あの人。しかもいきなりレベル20台のビーストマン五千に蹂躪されそうな国を一つ救うとか何してんですか、アンタ。

いやまあ、現地の色々な情報を沢山手に入れたのはとてもありがたいことなんですけどね……？

にしても本当にネームレスさんがいてくれてよかった。

まだ会えてはいないけれど、毎日毎日の情報交換はとても有意義でとても精神的にも助かっている。守護者たちの前では支配者ロールしないといけないからなあ………。

後は、ネームレスさんが影の悪魔に持たせてくれた人化の指輪……あれのおかげでリアルじゃ絶対食べられないような美味しい料理を楽しめたし、この世界に来て初めてゆったりと寝る事が出来た。

本当にネームレスさん様々としか言えないな……早く、ネームレスさんと会いたいな……それで一緒に冒険を……ああ、眠くなってきたな。

自室の扉の前にいるメイドに暫く寝る旨を伝え、部屋から退出させアルベドを通さないように暫く誰も部屋に入れないように指示を出して俺は豪華でデカイベッドに入り目を閉じた。

「竜王国に現れた謎の騎士、か」

「聞けばおよそ五千ものビーストマン相手に放った魔法は数百体のビーストマンを消し炭にし、逃げるビーストマン共へ身を投じながら一切の傷を負わずに殲滅したという」

「並の実力ではあるまい。英雄級……いや、恐らく番外席次とはいかずとも漆黒聖典の隊長クラスの實力はあるだろう……」

「流石にそれは高く見積もりすぎだろう……」

「いや、前回からもう百年近く経つ……そうということなのやもしれん」

どこか、豪華な装飾の施されたまるで教会の聖堂かのような場所で六人もの老人らが話し合っていた。

彼らは嘗てこの世界に現れたプレイヤーらによって創られた宗教国家、スレイン法国の最高神官。そして、そんな彼らがこうして集まり話し合っているのは数日前に突如として竜王国に現れ竜王国の王都を攻め滅ぼそうとしたビーストマンの軍勢をただ一人で殲滅した騎士について。

曰く、名をアストラのセレネ。

彼の騎士はビーストマン殲滅の報酬として、アダマンタイト冒険者としての地位と竜王国に縛られない自由、そして僅かばかりの金銭を――

身に纏う国宝級の武具すら霞む程の装備に身を包んだ騎士が求めるものとは到底思えないそれらを報酬とした、という不自然さが彼ら最高神官らにとある予想を作らせた。

「我ら人類を守護する御方なのやもしれぬ……」

「うむ……そうなれば接触を図らねばならないが……」

「聞けば王国へと向かったらしいが……」

「よりによって王国か……」

百年毎の『ぷれいやー』の降臨。

彼らは竜王国に現れた騎士……ネームレスをプレイヤーであると考え接触する為の策を考え始めるが同時について先日の陽光聖典の任務にて起きた事態を思い出す。

「王国と言えば、陽光聖典を監視していた土の巫女姫及び神官らの被害は甚大だ……」

破滅の竜王の復活と何か関係があるのやもしれん……」

「……もしや、彼の騎士は破滅の竜王の復活に対する……?」

「……!!なるほど、可能性はありえる。となれば接触を悩む必要は皆無であろう……」

「ならば、漆黒聖典を動かし破滅の竜王の調査の際に一部を向かわせよう……」

地理と冒険者として活動する事を考えればエ・ランテルへと向かった可能性が高い」

「人選は……? 破滅の竜王の調査もあるのだ。一人でも抜けると厳しいものがあ

るぞ……?」

ネームレスとの接触到に破滅の童王の調査、どちらも重要事項である為に会議が長引く中、一人の最高神官が呟いた言葉に他の五人は固まった。

「ならば、番外席次を向かわせよう」

「何を言っている……流石にそれは早計過ぎる」

「そもそも奴を送ったら防衛はどうするのだ」

「……もし、仮に破滅の童王が蘇り更には破滅の童王に対して神の至宝が効かなかった場合、そのまま番外席次を戦わせる」

「だから、何故そうなる!?! わざわざ番外席次を出す必要はないだろう!」

声を荒らげる他の五人たちなど暖簾の腕押しと言わんばかりに一人の最高神官はかなり強い口調でつける。

「もしも本当に彼の騎士が神であった場合、どうするのだ？ 神への謁見なのだ、下手に下位の者を向かわせれば侮られていると取られかねん。ならば、番外席次を送るべきだ」

「そ、それは……」

「だ、だがしかし……」

「むむ……上位の者となれば確かに限られる。カイレ様や漆黒聖典の隊長は破滅の竜王の調査からは決して外せん……それを考えれば他の者ではやはり……」

「か、かといって……番外席次一人でも不敬になりかねんぞ」

「なれば、クインティアの片割れはどうだ？」

もはや、四対二にまで賛否が分かれた中、最初の一人の案に賛成した者らで次々と話が煮詰まり始める。

そんな状況を見て反対していた二人も賛成に傾いていた。

「第五席次を？ それは何故………ッ、もしや」

「うむ、風花聖典の者によればあの裏切り者はエ・ランテルへと向かったそうだ」

「つまりは裏切り者、妹の処分をついでに任せると？」

「確かに……もしも彼の騎士が本当に人類の守護者であれば………快楽殺人鬼を許されぬであろうな」

「……ふむ、第五席次ならば申し分あるまい」

「では、エ・ランテルへと向かわせ彼の騎士と接触するのは番外席次と第五席次、問題ないな？」

そうして会議は締め括られ、次々と最高神官らは退出していく。

この世界に本来存在しなかった筈のネームレス。彼がいることでこの世界はいったいどのようにならっていくのか。

それはきっと、まだ誰も知らないだろう。

今回は序盤の頼れる武器（チーズ的に）飛竜の剣を落としてくれるヘルカイトを少しと月光の大剣装備したセレネ、そしてそんな彼の印象と対応のお話でした。

正直モモンガ視点と法国は少し悩みながら書きました。

……感想にセレネとモモンでプリ○ユア的なのを言われてぶっちゃんけビビりました。

ちなみに作者は漆黒聖典の中でクアイエッセと番外席次が好きです

人間性／苛立ち

感想の方で主人公の台詞が地の文（一人称視点）と混ざる、と言われたので試験的に主人公の台詞に「」をつけました。どうでしょうか？

以蔵はまさかの限定、吐血しそう

正直に言おう。

私は原作を知っていたからナザリックのNPCらの反応やら態度やらをなんとなくは知っていた為にある程度心持ちはしていた。

前世を見てもメイドとか護衛とか、そういう経験なんて一つたりともなかったがある程度対応は考えていた。考えていたんだけどなあ……。

冒険でやや汚れた鎧を着ていたら……

『ネームレス様、装備が汚れています……よろしければ拭かせて頂きますが……』

『え、いや、別に……』

『どうか、至高の御方の装備を拭かせて頂けますよう……』

『あ、はい。よろしく』

マイルームでゆっくりしようかな？と思えば……

『どうぞ、ネームレス様』

『え、あ、うん』

『お待ちを。室内の安全確認を』

『え、あ、はい』

マイルームに持ってきてくれた飲み物、それを飲もうと自分でコップに入れれば……

『ッ!? な、何か、粗相をしてみましたでしょうか!?!』

『え?』

『申し訳ございません！どうか、どうか、御許してください！！??』

『えええ……』

うん、いや、想像していたものの何倍もヤバイよ。こう、あまりにアレでナザリック帰還の一日目で胃に穴が空きそうな程に緊張してます。まあ、ナザリックにいる間は人化の指輪を外してるから穴が空く胃は腐って……いや、ゾンビ系の種族だがメインがメインだから別に内臓腐ってるわけじゃないのか？

一応ものは食べられるのだから。いや、そもそも今は着けてるから空くわ。で、とりあえず正面を見よう。

「いやあ、ネームレスさんも俺と同じ緊張を味わってくれて嬉しいですよ」
「いい笑顔をするな、いい笑顔を」

現在、私は予定通りナザリックに帰還し、感動した守護者たちから祝いの言葉を受け、専属メイドやら護衛やらの些か過保護な扱いを受け、胃に穴が空きそうな程

緊張し、そして今こうして私のマイルームでモモンガさんと二人きりで食事をとっていた。

やはり、人化の指輪を送っておいたのが良かったのかとても人間性溢れる良い表情で食事をしている。良い表情だがいい笑顔だ、殴りたいこの笑顔。

「それでどうです？リアルじゃ到底味わえない食事は」

「ほんと、感謝しかないです。いや、マジで、異世界に来て最高ですよ」

「モモンガさんを考えるとユグドラシルのサービス終了したら、ヘロヘロさんとは言わなくともかなり壊れますね……それを鑑みればやっぱり異世界転移は最高の偶然ですね」

「まあ、その代わりプレッシャーがデカいですけどね」

台詞が被った私とモモンガさんは互いの顔を見て、思いつきり笑いあった。人化の指輪により種族特有のスキルは機能しない為、互いにアンデッド種の精神沈静化は発動せず途中で気分が平坦になる事は無い。

人化の指輪が送られるまで、どんな感情も強制的に沈静化させられていたモモンガさんからすればそれは人間性を留める良いものとなる。

私は彼を魔王になどさせない。

私はモモンガさんをアインズ・ウール・ゴウンにはさせない。

その為なら私は——

「ネームレスさん？」

「……え、あ、すみません。少し考え事をしてまして」

「考え事ですか？……あ、もしかして冒険者のですか？」

「まあ、そんなところですね」

適当に誤魔化しつつ、モモンガさんの話を聞く。転移してからの事、カルネ村での出来事、ガゼフ・ストロノーフの事、陽光聖典の事、様々な出来事を聞き私はただ、ただ笑みを浮かべる。

さながら、それは子供が親に学校でどんな事があったのかを楽しげに話すのを微

笑ましく見ている親のような気持ちだ。

「それで、ネームレスさんはどんな事がありました？伝言でそれなりに教えてもらいましたけど、そこまで詳しくは教えてもらえませんでしたから」

「うーん、私としては冒険者になにやら憧れを向けてるモモンガさんのそれを失望させるような事は言いたくないんですがねえ……まあ、いいですよ」

まあ、モモンガさんが冒険者になった時のことを考えて話すのが一番か……。

「そうですね……まず、冒険者としての最初の仕事はですね——」

「……………なるほど、つまり冒険者は俺が思ってるような冒険をするものではなく、モンスターに対する傭兵または何でも屋みたいなものなんですね……」

「残念ながら」

私の話にあからさまに残念がっている態度を出すモモンガさんに私は苦笑をしつつ、件の陽光聖典の話にシフトする。

「さて、モモンガさん。件の法国の特殊部隊ですが」

「ああ、彼らですか。とりあえず法国とあまり敵対しない事を考えると捕虜の扱いも慎重にしないといけないので第六階層の一角にマーレのスキルで牢を作らせてその中に」

天使を呼んでも弱くて牢は破れないんで大丈夫ですよ。そう、笑うモモンガさんに私は頷きつつ、陽光聖典をどうするかを考える。

未だ、法国と縁はない。そんな状態で陽光聖典を法国に送り返しては少しまずい

だろう……となれば、どう法国と繋がりを持つか……。

「一先ずは法国と何らかの繋がりを持つまではいまのままの扱いでいいでしょう」
「法国と繋がりですか……となるとあまり、守護者たちやそれ以外のシモベに人間を襲わせないように言わなきゃならないですね」

「うーん、その辺は野盗やらカルト集団とかの社会的に駆除されるべき悪人に対してのみ許可すればいいのでは？それと、ナザリックの不利益になる」とか言っておけばあまりやらなくなるんじゃないですか？」

「なるほど……後は極力そういった悪人以外に対しては退却する事を命令すれば大丈夫ですかね？」

「多分、そうすれば、いいんじゃないですか？」

まあ、そんな漠然とした対策しか出来ないんだよなあ。彼らが何かやらかす前に私が接触出来ればいいんだが……いや、待てよ？

そうだよ。確か陽光聖典と相對した時に対情報魔法に対する攻勢防御発動したん

だよな……となれば、土の巫女姫は死んでしまったわけで……原作通りなら漆黒聖典が破滅の竜王の調査に来るわけだから……シャルティアに先んじて接触がもしかしたら出来るのでは？

そうすれば、シャルティアが操られるという展開が無くなるわけで………よし、そうしよう。

「と、そうだ。モモンガさん」

「なんですか？ ネームレスさん」

「冒険者やるって言ってましたけど、お一人ですか？ 私は状況が状況だったから一人ですけど………」

護衛役は沢山潜んでいるけどね。

原作ではプレアデスのナーベラルが護衛役として相方を務めていたが……。

「ええ、実はアルベドにせめて護衛役を、と言われてまして……」

「なるほど……しかし、護衛役をナザリックからですか。全体的にカルマ値は悪ですからねえ……揉め事が起きそうで、何とも言えないですよ」

「善よりのユリやセバスがいいかなあ、と思ったんですが……セバスは王国に商人チームとして行きますし……ユリはデュラハンなのでなにかのひょうしに首が外れたら……アウトなんで……」

「ううむ………宝物殿」

「ゴフッ」

あ、吐血した。……え。

まさか、いまの一言が胃に穴でも空けたのか？ やばいな、黒歴史。

……え？ 黒歴史？ わっかんないなあ………ああでも会わなきゃならないか……レティシアはともかく彼女はなあ。

レティシアはフレーザーバーテキスト的にも、性格的にも問題は無いが彼女は………仕方ない、会わねば始まらない。

「アクターなんだから、命令さえすればボロも出さないでしょう」

「た、多分、そうなんでしょうけども……」

「モモンガさん。今回会わなかったら次、顔出すのはいつたい何時になるんです？
絶対先延ばしにするでしょ、あなた」

「うぐ……」

実際、原作でもシャルティアのアレがなければ顔を出しにいかずに何やかんやで先延ばしにするであろう、というのはなんとなく分かる。

まあ、黒歴史を見たくないのはわかる……その黒歴史が動いてるならなおさらだ。

「まあ、いずれ会わなきゃならないんですから。会いに行きましょう？」

「で、でもですね……」

「でも何もねえよ、行け骸骨」

「焼死体」

互いに微笑みながら互いの頬を掴み、私はモモンガさんにへタレと呟く。それが突き刺さるのか呻くモモンガさん、掴んでいた頬をはなし席を立つ。

「……片付けですか？」

「ええ、互いに人間性を保つ為にはきちんとした生活をせねばならないですし。多少の徹夜はしょうがないとして」

「う……善処します」

食べ終わった皿をこの……あの、……そのなんだアレだ。食事とかを乗っけて運ぶ手押し車？に重ねていく。……そうだ、ワゴンだ。……ワゴンであってるのか？前世でもあまり口に出したり紙に書いたりしないような名前だから分からん。そんな私を見て、モモンガさんも立ち上がり自分が使ったグラスやらをワゴンに乗せようとしたが私はそれを止める。

「モモンガさん、下手にやるとアレなんでどうぞそのまま宝物殿に」

「え、まさかの確定事項」

「ハリーハリーハリー！」

「えええ………」

渋々といった顔で私の部屋を後にするモモンガさんを見て、私は軽く肩を竦めてワゴンに汚くならないように皿やグラスを置いていく。

メイドに任せれば良い話だがあまり誰かにこういったことを任せるのは得意でないため、一人でやる。

まあ、また失望されたと勘違いしてしまうメイドが出るかもしれないがこれは性分、なかなか変えられるものではない。ノックされた扉の方へ入室の許可を出し私は席に再びつく。

「失礼します、ネームレス様」

「ああ。それじゃあ下げてください」

「承知致しました」

ワゴンを引き、そのまま部屋を出ていくメイドを無視して私は寢室へと入っていく。

「はてさて、彼女に会わねば話は進まない。気が引けるが……………ううむ」

これがただのNPCだったなら特に何も言わない。彼女もまたレティシアや私のようにダークソウルのなフレージャーテキストが盛り込まれている。そして、苦手意識がある……………いや、苦手意識というよりも罪悪感というか申し訳なさというかついでに言えばレティシアと違い彼女は私が殺したわけで……………。

「ついでに言えば、ぶっちゃけユグドラシル時代からあんまり会ってなかったから彼女を創ったのを忘れていた……………というなんとも最低な理由がある……………からなあ」

どうしよう………モモンガさんにああ言った手前、私が彼女に会わないというのは……うむ。

仕方ない……ナザリックを出る前に会いに行くか……。はあ、不安だ。

「ふん、何が不死王だ。そこらの亡者よりちと頭が回って魔術が使えるだけじゃないか」

「ぎい………」

王都・八本指が一部門、警備部門の根城として使われているとある家屋にて真鍮の鎧を纏った騎士が何か人間大のものに腰掛けていた。

よく見れば小刻みに動き、呻いているそれは人間……いや、アンデッド……俗に言う死者の大魔法使いの一体でアンデッドでありながら人間の組織である八本指のメンバーに名を連ねている『不死王』の異名を持つ者だった。

そんな彼に腰掛けているのはつい最近、警備部門の中でも屈指の実力を誇る六人の猛者『六腕』の内の一人を瞬殺し空いた席に座った男。

カリムのロートレク。

親しき者は嘗てロートレクと呼び、共に笑いあった異界の騎士である。

そんな彼はショートルをその手で弄びながらその足を『不死王』デイバーノックの片手の甲に置き、踏み躪る。

「この世界の奴らもどいつもこいつも弱い奴らばかり……にも関わらずさも自分が強いとばかりに振る舞う……子供か何かなのか？ん？」

ロートレクの言葉にあるのは苛立ちだ。

理由は定かではないが嘗てとある男……友人と呼べる——ロートレクは恥ずかしいのか頑なに呼ばなかったが——騎士に殺され、ソウルが尽きて亡者として彷徨う事もなく意識が消失した筈なのだ。

だが、気がつけばこの見知らぬ世界にて目覚めていた。聞けば嘗ての様な不死人はいないが亡者もどきのアンデッドやモンスターがいる、それはそれで面白いと意気込んでみれば、

「この始末」

どれもこれも弱いのだ。

無論、磨けばアノール・ロンドの番兵共を倒せるようになるだろう人間もいた。だがしかし、大半が目に残るほどに素質が無く、そして諦観しているのだ。決して上を目指そうという者がいないというわけではないが目指している場所がロートレクからすれば低いのだ。

故にロートレクからは彼らは諦観しているようにしか見えない。

「雑魚がいきがるな、雑魚は雑魚らしく部屋の隅で震えてろ」

「ふざけ……るナ……」

「どうした？何か言い返したいなら言ってみたらどうだ」

せせら笑うロートレクにダイバーノックは齒がゆい思いをし、どうにか動こうと
して――

「もう、我慢、ならん……死ねッ」

空気を切り裂きながらロートレクに不可視の刃が放たれた。

振るったのは黒い全身鎧を身にまとった戦士。彼もまた六腕の一人で『空間斬』
の異名を持つ男、名を――

「ぎいああ!?!」

「な……!!」

しかし、憐れな事に男が放った一撃はものの見事にダイバーノックを切り裂き、ロートレクは既にそこにはいなかった。

仲間を切り裂いた事に男は動揺した為か、消えたロートレクを探すのに一瞬のラグが挟まり、そして

「まったく、憐れでしようがない」

「こふっ」

男の鎧を貫通して腹から生え出たショーテルの刀身、兜から吹き出る血液、急速に熱が失われていく手足、背後から聞こえる声。

「ま、雑魚が一匹二匹消えた所で何も変わりはないか」

鎧ごと肉を引き裂きショーテルを抜いたロートレクはそのまま仲間に切られ動けないデイバーノックの頭を踏みつけ、部屋を出ていった。

後に残るのは血濡れの部屋と遺体だけであった。

感想で言われてしまいましたが主人公のヒロインはかぼたん以外はろくすっぽ考えてないです。増えるかもしれんし増えないかもしれない……

出立

今回は少し短いです。

というのも本来もう少し長いはずが途中で「あ、これだいが長くなる……途中で切らなきゃ次投稿すんの遅くなるわ」となり申して。途中で切って投稿しました。

こう言うっては悪いがやはり、ナザリックにいるよりもこうして外にいる方がとても楽だ。

そんな事を考えながらネームレスことセレネは竜王国より貰った駿馬フロム——
——ネームセンス皆無のモモンガによりダークホースと名付けられそうになったが

リバーブローによって何とか回避した——に跨り冒険者としての拠点であるエ・ランテルへと向かっていた。

本来ならば三日ほどナザリックに滞在している予定だったが、新たなアダマントナイト冒険者という肩書きのためにそこまでエ・ランテルを離れる事が出来ずナザリックには一日と半分しか居られなかったのだ。

そういった事なら仕方ない、とモモンガ共々納得したセレネはこうして渋々ナザリックを出たのだが……………

いや、まったく。緊張しないですむのは助かるな。

なお、兜の下の顔はわりかし笑顔である。

そう呟いて思い浮かべるのはナザリックでの出来事。ほぼ間違いなくプレッシャーと期待と緊張で胃に致命的な穴が空くであろう玉座の間での守護者謁見である。

遡る事数時間前………

ナザリック地下大墳墓・第十階層玉座の間には様々な人物が集まっていた。

長い銀色の髪を片方にまとめ、肌は白蠟じみた白さ、瞳は真紅という人間離れした容姿に漆黒のボールガウンドレスを身にまとった可憐な少女。シャルティア

カマキリとアリを融合させたかのような直立歩行したライトブルーの体色を持つ常人以上の巨躯の蟲、四本の腕と口に該当する場所には虫特有の下顎を持つ異形。コキユートス

金髪を肩口で切りそろえ緑と青のオッドアイに浅黒い肌、ベストと長ズボンを着たボーイッシュな少女^{アウラ}、そしてそんな少女に良く似たおかつぱ頭とベストにスカートを履いた少年^{マイル}。

黒髪のオールバック、肌はやや日焼けしたような色で丸メガネをかけストライプ入りの赤い三つ揃えのスーツを着用したビジネスマンか弁護士を思わせる青年^{デミウルゴス}……しかし、腰部からは銀のプレートで包まれたような尾が生えていた。

純白のドレスを纏った女神の如き容姿を持つ黒翼を生やした美女^{アルベド}。

そんな人ならざるものらが跪き、そんな彼らを見下ろすように数段高い位置に佇むのは二柱の魔人。

片や玉座に座す、漆黒の魔王然としたローブに身を包み胸元からは紅い宝玉が覗く死の支配者^{オーバード}。

片や玉座の傍らに立つ、焼け爛れ歪んでいてもなお圧倒的な威を放つ騎士鎧、後頭部に異形の王冠が形作られた兜を纏う死を亡くした者^{アンデッド}。

彼らこそがナザリック地下大墳墓における至高の四十二人が二人。

「各々が忙しい中、よくぞ集まってくれたお前達……さて、此度呼んだのは他でもない。我が友であるネームレスさんが帰還した事を伝える為だ……無論、既に知っていた者もいるようだが」

すまないな、貴公ら。ナザリックがこの世界に転移した際に私はナザリックより離れた土地にて一人佇んでいた……ナザリックが転移してはや数日、帰還が遅いと言われても仕方がないな。

「ふ、友よ。そのような事を言うものはこのナザリックにはおらんよ」

そうか……それはよかった。さて、貴公ら……すまないが伝える事がある……私とモモンガさんが共に話し合い……このナザリックの新たな方針を決定した。困惑するだろうがどうか聞いてほしい。

力で世界を支配するのは容易かろう。智謀を奮って支配するのも容易いやもしれない。しかし、私もモモンガさんもそれは良しとはしない……：……：我が望むのは世界を支配するのではなく異形も人間も亜人も共に過ごせる国……：……：甘い夢想ではあろう……：しかし、我らはそんな夢幻を追いかけ掴む『プレイヤー』故に……：……：どうか貴公らの力を貸してほしい。

そんな演説に跪く彼らはただ、ただ御意と一言高らかに叫び自分たちの支配者にしてその全てを捧げるべきいと尊き至高の御方の理想に応えるべくその忠誠をより強く誓った。

そんな彼らに満足したのか二柱とも、軽く頷き解散の旨を伝えその場を後にした。

流石に玉座の間でのあれこれは疲れたな。あの時は人化の指輪を外していたからよかった……。

あ、でもその時のが今更に……うっ……。そう、眩きながら腹に手を当てる主を慰めるように嘶くフロム。

そんなフロムの背を撫でながらセレネは守護者らに告げた言葉が例え無理難題のそれだとしても間違いなく守護者らはそれを成そうと奮闘するのだろうと考えていた。

セレネとモモンガからすればその夢想事は別に重要ではない、二人が望んだのはモモンガが呟いた言葉からデミウルゴスがそのまま受け取りその後曲解してナザリック内に浸透した『世界征服』という野望を止めること。

異形種と人間、亜人が共に暮らせる国に關しては魔導国があったからいけるだろうという考えがあつてこそ、なければなかつたでまた別の考えを探したが……：

世界征服なんぞしたら、それこそモモンガさんが魔王化する………いや、それより先にこっちが人間性を失いそうだな。

兜の下で苦笑いをしながらセレネは次に第六階層での、最初の火の炉での出来事を思い浮かべる。

本来ならば真っ先に行かねばならない女性のもとにあらう事かセレネは一番最後、ナザリック出立の前に寄ったのだ。

如何にNPCとはいえ、彼女……レティシアはそのフレーザーテキストによりダークソウル3の記憶が存在しており、レティシアにとってセレネとはNPCにとっての創造主や至高の御方とはまた違う大切な存在なのだ。

彼女自身がどれほど時間がかかってきても帰ってきてくれさえすればいいと思っていても一人の女性としてレティシアはそんな自分の気を知らないセレネに対して、NPCとしては酷い対応をもって訴えた。

『ええ、本当にお久し振りです、灰の方。ですが顔を出すのが些か遅いのでは？聞けば灰の方はナザリックを出立すると聞きました……そして、今がその直前だと……遅すぎはしませんか？』

え、あ……その。

『嘗ては真っ先に私のもとに来てくださいましたのに……いいですか？如何に火防女と言えども私もまた一人の乙女……恋い慕う殿方に後回しにされるといふのはとても辛い……です』

……そうか、それはすまなかつた。レティシア、私の配慮が足りなかつたらしい……次からは真っ先に貴公のもとへ行こう。

『はい……ありがとうございます、灰の方……ですが、それはそれとして貴方には言いたいことがいくつか』

あ、はい。

そんなレティシアに次会えば間違いなく自主的に正座しかねない出来事にブルリと身を震わせる。兜の下では出会い頭に張られた頬がひくつき、その記憶に蓋をする。

と、とりあえずエ・ランテルに戻って依頼をこなそう……信用を高めればモモンガさんが冒険者業をする際に口利き出来るかもしれない……。

乾いた声でそう呟く彼の背は到底ナザリックの支配者の一人でもアダマンタイト級冒険者でも薪の王でもなく一人の苦勞性にしか見えなかった。

「ねえ、まだつかないの？」

「……これでもかなり急いでいるんですが、まあ鷲馬ヒボケリフでするので遅くても後一日かかりませんよ」

王国及び法国国境付近上空にて一頭の鷲馬ヒボケリフがやや急ぎながら飛行している。それだけならば珍しいで終わるがその背には二つほど人影がありなにやら話していた。一人は鷲馬の手綱を握っている白と茶色のコートに腕輪の様な装飾を付けている金髪の青年、もう一人は青年の後ろでやや危なげに腰掛けている髪が真ん中で白と黒に分かれ更には瞳も髪とは逆だが白黒とオッドアイになっている十代前半程の見た目の少女。

少女からは退屈そうな雰囲気が醸し出され、そんな雰囲気を背中に感じる青年はやや頬が引きつっている。

「そう……」

「……………はあ」

青年の言葉に興味を無くしたように辺りの景色を見ている少女に聴こえないように青年はため息をつく。

実際、少女の質問した回数はこれで両の手の指では数えるのに足りなくなった。そう何度も聞かれれば流石に辟易するというものだが、青年はそれについて文句は言えない……それは少女が青年よりも実年齢としては歳上且つ実力が上だからだろうか。

そもそも何故自分がこんな事を……と思う青年。今回のこれは青年と少女が所属する法国のまとめ役ともいえる最高神官らから下されたふれいやーまたは神人の可能性がある、アダマントイト級冒険者との会合。

青年としてはもしかすれば神に出会えるやもしれないと乗り気ではあったが、この同行者がただけなかった。これで神ではなく神人だったら青年にとって疲労しが残らないだろう。

そんな青年の気心など知ったものか、と少女は法国より持ってきたルビクキュー

と呼ばれる玩具を弄りながらただ、ただ辺りの景色を見ている。

それを見ることは出来ないが、できればそのまま到着まで黙っていてくれ……と
思う青年だがそんな思いは儂く散ってしまった。少女が何ともなしに口をまた開いたのだ。

「ねえ、そのエ・ランテルの騎士は私より強いと思う？」

「え？………神人だったら貴女ほどじゃあないと思いますよ？ただ、もしも本当に神なら……その時は貴女よりも強いかもしれません」

「ふーん、なら私より強い事でも祈っておくわ」

そんな少女らしからぬ言葉にふと気になった青年は、その疑問をそのまま少女にぶつけてみる。

「つ、強さですか？……いえ、確かに人類の守護者になってもらいたい以上、強者であるのはこちらとしても都合がいいですが……」

「私はね、敗北を知りたいの」

敗北を知りたい。青年の疑問に返された答えはそれだった。

それは生まれつきの強者故の傲慢な望み。敗北というものを知らないから出てくるもの。

彼女は敗北の辛さを知らない、敗北の恐怖を知らない、敗北の痛みを知らない、敗北の惨めさを知らない、何より彼女は敗北の清々しさを知らないのだ。

だがまあ、そんな彼女の言葉に青年は引きつった表情をするがしかし前を向いてる青年のそれを少女が見れるわけではない為、それに気付かず話を続ける。

「私ね、私より強い男の子供を産みたいの。私より強いなら美しくても醜くても、外道畜生でも清廉潔白でも、高潔でも下卑でも、頭が良くても悪くても、何なら人間じゃなくても……うん、亜人でもたとえ異形種でもいいわ。私は私より強い男の子供を産みたいのよ」

「だって、私と私より強い男の間に産まれた子供ならきつと凄く強いわ。もしかし

たら竜王よりも強い子供が産まれるかもしれないじゃない？」

「……………」

青年の心の中で、聞かなければよかった、ただその言葉だけが満ちていた。

彼女は神人、しかも最強の人間なのだ、そんな彼女より強い者との間に産まれる子供は確かに強いだろう。そして、未来の人類の守護者として君臨するのだから………しかし、強ければ器量や性格、種族はなんでもいいというのは流石に問題だ。

もしかすれば人類にとつてとんでもない怪物が産まれる危険性もあるのだから。青年、クアイエッセは疑問をぶつけた数秒前の自分と彼女に同行する様に命じた隊長と最高神官らを軽く呪った。

なお、法国の裏切り者でクアイエッセの妹の抹殺命令もあるのだがそんなものは

最初から些事ではしもなく、少女からとんでもない望みを聞いてしまった今のクアイエッセからすれば割とどうでもよかったです。

強かなかぼたんことレティシア。

沖田オルタは以蔵3になりました。つらたん

熔鉄／依頼

Twitterや活動報告で言っていましたが一週間ほど諸事情で投稿出来ずい
ませんでした。問題はなくこれからもきちんと投稿したいと思います。

にしてもオーバーロード二期のキービジュアル……子山羊召喚しちゃうのかァ……

「はぁ……………」

ナザリック地下大墳墓が支配者、モモンガの心は何とも言えない複雑怪奇な曇り
空であった。

ナザリックの外へ出て、冒険者としての先駆者であるネームレスのように冒険者
をやりながら情報集め、もとい息抜きを目論んでいたモモンガはアルベドやデミウ

ルゴスらを何とか説得し——デミウルゴスに関してはネームレスが説得したよ
うだ——こうしてナザリックの外で冒険者稼業をする事が出来るわけなのだ
が………そんな希望が通って嬉しいモモンガの心を悩ますものはなんなのか、そ
れは目の前の人物だろう。

「どうしたモモン」

「ん、あ、……うん、何でもない」

それは全身鎧の何某である。

灰色の熔鉄が如き重厚な鎧を軽々と身にまとい、その頭を収めた兜はまるで竜の
顔の形で鼻頭に当たる部分の両側面からはまるで牙か角か、はたまた東洋の龍の髭
のように鋭利な刃じみたものが伸び後頭部には赤くたなびく兜飾りが伸びている。
そんな並大抵の人間では装備出来ぬ重厚な鎧をまとう重戦士らしくその背に背
負っているのは恐らく得物であろう鋭利な片刃の大斧と大盾である。

モモンガと共にいるということはナザリックのNPCなのだが彼の様な姿のNP

Cはナザリックには存在しない……では、果たして何者か？

その答えはモモンガの創造したNPC。宝物殿というナザリックの他施設とは違う空間に存在する領域の守護を任されたが故に一部の至高の御方以外名前しか知らぬNPCである。

しかしモモンガのNPC……パンドラズ・アクターとはこのような姿では決していない。リアルにおいて欧州アークロジード勃発したという事件の際にとある軍が着ていたらしい黄色の軍服をまとうゆで卵に埴輪の様な顔をしたドッペルゲンガー。

そんな彼が何故こんな姿をしているのか、それはモモンガが彼に与えた能力にある。彼、パンドラズ・アクターはモモンガを含む至高の四十二人全てを本来の八割程度の実力でだが再現する事が出来た。そんな彼をモモンガのお供に推薦したネームレスが自分の姿をとらせつつ、るし☆ふぁーやタブラ・スマラグディナにウルベルト・アレイン・オードルと共に隠れて作成したドレスルームに保管していた型落ちの装備を引っ張り出して装備させた結果がこれだ。

ネームレス曰く、『熔鉄の竜狩り』シリーズ……その聖遺物級に型落ちした装備。型落ちしているとはいえ、性能は高く雷系のダメージを五割カットするなどといっ

た性能がある。

「……それにしてもネームレスさんはほんと色々作ったなあ」

「ネームレス様はモモンガ様のアイテムフェチのように装備フェチのきらいがありますからねえ……んんッ失礼」

冒険者となるべくエ・ランテルを指す二人組の旅人、凄腕の魔法詠唱者モモンとその相棒である重戦士アクトという設定でナザリックの外へと出たモモンガ。

モモンガは当初、ネームレスのように支配者ではなくただのモモンガとして冒険をし息抜きをしようとしていたがNPCたちの嘆願により一人では出れず結果、こうして自分のNPCであるパンドラズ・アクターと共に冒険者として活動することに決まった。

モモンガとしては自分の黒歴史とも言えるパンドラズ・アクターが目の前で動いているのがかなり精神に来ており、ネームレスにパンドラズ・アクターと会わせたい際には恥ずかしさのあまり宝物殿で超位魔法を暴発させようとしたほど。

さて、そういった事だけがモモンガの心を複雑怪奇な曇天にしているわけではない。口を開けば芝居がかったウザい言葉、動けばいちいち大袈裟なウザい動きしか出てこないあのモモンガ印の黒歴史がネームレスから何か耳打ちされ装備を身にまとった途端、先程までのそれがなりを潜めてまるで長年の相棒の様に振る舞い始めたのだ。

「……（いや、ほんと、ネームレスさんいったい何を言ったんだ？）」

ネームレスがエ・ランテルへ向かう前にそれとなくネームレスに聞いても適当にはぐらかされた。ただ、少なくともモモンガ自身に何も悪い事はないと保証されている為、モモンガは釈然としないが深くは聞かないようにしているがやはり気になるものは気になるのだろう。

そんな心境がモモンガの心を複雑怪奇にしていた。

「（旅をする以上、主従関係では少し怪しまれる……ならば長年の相棒として振舞

え、アクターならその程度軽々と出来るだろう？——ふふ、流石ですなネームレス様。普段ナザリックの支配者として緊張しているモモンガ様の御心を配慮し氣を楽にさせるための演技……このパンドラズ・アクター感服致しましたアツ!!」

なお、パンドラズ・アクターの内心ではウザい口調は健在である。

さて、そんな二人は現在先にエ・ランテルへと着いたネームレスに一日遅れでエ・ランテル入りを果たし、冒険者として登録すべく組合へ向けて歩いていった。

ネームレスの命令でエ・ランテルの詳細な調査を行った八岐刀の暗殺蟲から街に入る前に調査の際に作成した地図を確認したパンドラズ・アクターを案内にしている為、そうそう迷うことはなく寄り道せずに二人は組合へ向かう。

時同じくして冒険者組合。

その二階にある応接室にてアダマタイト級冒険者セレネは冒険者組合の組合長

プルトン・アインザックと対面していた。

「すまなかった。休暇をあまり与えられず」

いえ、アダマタイト級冒険者である以上理解はしています……それで私を呼んだ理由は？

話はまずアインザックの謝罪から始まった。それは度重なる依頼を終えたセレネが羽を伸ばすために申請した一週間程の休暇をアダマタイト級冒険者という冒険者組合としても都市としても重要な立場である為に二日程しか許可しなかったこと。

本来、希少なアダマタイト級冒険者はその重要性などからかなりのわがままを組合に通す事が出来るのだがあまり主張せず二日という妥協でもないそれを受け入れたセレネにアインザックは申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

しかしいつまでもそれを引っ張るわけにもいかず、アインザックはセレネの催促に先程までの申し訳なさそうな雰囲気を組合長としての威厳あるものへ変える。

「ああ、君を呼んだのはアダマンタイト級冒険者への依頼だ」

ふむ……

「このエ・ランテル近郊にとある盗賊団が現れてね……調査のもと銀級や金級の冒険者に盗賊団討伐の依頼を出したんだが」

失敗した、と。

セレネの言葉にアインザックは頷き、机の下から羊皮紙を取り出しセレネへと手渡す。

それを受け取ったセレネは書面の記載事項に目を通す。

そこに記載されているのは命からがら逃げ延びた銀級冒険者の報告。

……規模はそこそこですが、罠と用心棒ですか。

「ああ、逃げ延びた冒険者曰くその用心棒はブレイン・アングラウスだったらしい」

本当かどうかは定かではないがね。そう付け足すアインザックにセレネは兜の下で眉を顰める。それは流れから自分がこの盗賊団及び用心棒の対処をするということが分かっていているから。

それで、私ですか

「……そうなる。もし本当にその用心棒がブレイン・アングラウスだった場合……ミスリル級では厳しい依頼になる、それを考えるとアダマントタイト級の君に任せたい」

……了解した。では、詳細事項を頼む

「ああ、少し待っていてくれ。地図を取ってくる」

そう言って応接室を退出するアインザック、それを見送りセレネは少し気を抜く。

……盗賊団か。

となればシャルティアの洗脳は起きずにすむかな？ そう心の中で呟き、念の為に漆黒聖典に対する行動を考え始める。

セレネ自身は世界級ワールドを保有している為、漆黒聖典と共にいるであろう老婆カイルの世界級による支配を防げるだろう、しかし警戒すべきは漆黒聖典の隊長……第一席次。身に纏う装備に対して些か貧相な槍、どのような形状であったかは既にセレネは思い出せない……しかし、そんな明らかに不自然な槍についての議論は覚えていた。

ロンギヌス……アレには本当に切っても切り離せない縁があるな

使用すれば使用者のデータが消し飛ぶというハイリスクがあるものの対象のデータを消し飛ばすというハイリターンが存在する消費タイプの世界級。二十の内の一であるそれはネームレスにとって決して浅からぬ縁があった。

彼の前任者が様々な経緯があったものの最終的にそれで消されたのだから。

自業自得相応の末路……少なくとも世界級があるし運営はいないからそういう事

にはならないだろうが………警戒しなくてはなあ

異世界且つ自分という存在によるバタフライ・エフェクトをより一層警戒し咄いて気持ち切り替える。

その数秒後、応接室の扉が再び開き何枚かの大きめの羊皮紙を持ったアインザックが入ってきた。

「すまない、待たせた」

いえ、気にせず

「そうか、それはありがたい。……さて、件の盗賊団の根城だが……」

机上に広げられたエ・ランテル近郊の地図と、斥候などの冒険者が集めた情報から判明した盗賊団の根城の位置などの説明をアインザックは始めていき、セレネもまた懐からメモを取り出し情報を書き込み始めた。

ようやく終わったか……………

応接室に入ってから果たしてどのくらい経っただろうか。如何にリング・オブ・サステナンスを付けているとしても精神的に疲れはするのか、応接室から出てきたセレネは右手を左肩に当てながら首を動かしている。

そんなセレネの姿を目にした何人かの冒険者は苦笑し、その中の何人かがセレネへと近づいていく。

「よお、なかなか長かったじゃねえか」

イグヴァルジか……………そりゃあ色々情報とかの確認作業があったからな

話しかけてきたのはセレネの偉業の一つ竜退治の際に同行したミスリル級冒険者チームクラルグラのリーダーを務めるイグヴァルジという男。当初はセレネに色々

と難癖を付けていた男だが竜退治以来、以前の態度は形を潜めこうしてセレネに気安くなっていた。

下手に上下関係を表に押し出した振る舞いをされるのは嫌なセレネとしては、気安い同僚の様なイグヴァルジを歓迎していた。

「ってえと、アレか。ブレイン・アングラウスが用心棒してるとかい盗賊団か」
そうなるな。かの戦士長と互角の男が用心棒の可能性があるならアダマントタイトの私に仕事が回ってくるのは必然だろう

「ぶっちゃけた話、戦士長よりアンタの方が強いだろうな。蒼の薔薇ですら竜を撃退したっていうのを聞く程度だ」

そんな竜を一人で討伐したアンタが周辺諸国最強かもな。

そんな風に呵呵大笑するイグヴァルジをよそにふとセレネは二階吹き抜けから一階の様子を見た。そこから見えるのはいつも通りの冒険者組合の光景——とはまた違ったものがあった。

.....

受付嬢の対面に立つセレネの視界には、見慣れぬ姿の二人組が映っている。片方は黒い軍服の上から魔法詠唱者の様なローブをまとった男、もう片方は灰色の全身鎧で身を包み、その背には大斧と大盾が背負われている。どうやら受付嬢と何か言い合っているようだ。

そんな二人組を見ている事にイグヴァルジは気がついたのか複雑そうな表情をして口を開く。

「あー、ありゃ数時間前に冒険者に登録した新人だな………うん、アレだ。アンタに会わなかったら絶対分からなかったがぁ俺らより強いわ」

そんなイグヴァルジの言葉にクラルグラの面々は驚きと共に仕方ないという反応を見せる。

一瞬セレネは首を傾げたがすぐにその理由を悟る。イグヴァルジはセレネがやって来るまでこのエ・ランテルにおいて最高位のミスリル級冒険者を務めていた為に傲慢であった。しかし、セレネの竜退治を目撃してから鼻を折られ嘗てなら実力を過小評価していたが今のイグヴァルジは冷静に二人組の実力を察する事が出来た。自分たちミスリル級冒険者よりも強い、と。

規則である以上、私のような例外を除けば基本的に最初は銅カッパーから始まるからな………仕方ない

「見る限り、ランク以上の依頼をやりたいようだが……規則だからな……」

イグヴァルジと彼ら二人組について話していると二人組は諦めたのか浅くだが頭を下げて……何やら四人組の冒険者が声をかけてきた。

それを見てセレネは兜の下でほくそ笑んでその場を後にした。

『——と、まあ、そんな経緯で漆黒の剣という冒険者チームと一緒にインフィーレアさんの依頼を受けることになりました』

『インフィーレアというところの街の有名な薬師ですね。確かどのようなマジックアイテムも使えるとかいう何とも面白いタレントだとか………あまりおおっぴらに言うもんじゃないですけどね、そういうの』

『ですね……』

冒険者組合を後にした私は一人、エ・ランテルの幾つかある門の内、目的地に一番近い門の前で馬の用意が終わるまでモモンガさんと伝言を使い、互いに情報を交換していた。

原作のようにナーベラルとモモンガさんではなくパンドラズ・アクターとモモンガさんで組ませたが……その変化がどう影響するのかが少し不安だ。少なくともパンドラズ・アクターならナーベラルの様に情報漏洩はしないだろう。

……ん？モモンガさんがフレーバーテキスト変えてないならその場合どうなるんだ？

モモンガさんの伴侶Ⅱアルベドというのは、モモンガさんがフレーバーテキストを変えたから生じたものなのか……果たして……………。

「セレネさん、用意が終わりました」

ん、ああ、わかった。すぐ行こう

『用意が終わったそうなので、そろそろ』

『あ、はい。わかりました、それじゃあ次は依頼終わってからかけますね』

『ええ、それでお願ひします。それじゃ』

伝言を切り、馬の用意をしてくれた衛兵に軽く会釈し私はすぐに向かおうと足を

向けて――

あ――？

指輪の知覚範囲内に現れたソレにただ、身体の深奥、ソウルが熱を孕んだ気がした。

モモンガの為にパンドラズアクターやデミウルゴスの説得を頑張ったネームレス。

ついでにエルダーリッチにならずにすんだイグヴァルジ

遭遇

ここ最近、夜寝る前に尋常じゃないほど鼻から血が出てくるチーズです。ほんと暑くなってきましたね読者の皆さんも熱中症にならないように気をつけてください。

今年こそ黒王を当てるんだ……

そういえば、オーバーロードのアプリ事前登録始まりましたね。我々ほどの立場なんだろうか……私としてはナインズ時代に抜けたというプレイヤーがなんやかんやで戻ってきてモモンガさんと転移したのでは？と考えています

ソウルが熱を孕む。

久しく感じていなかった感覚だ。

知覚範囲内に現れたソレに付き添うように小さな気配が二つ……両方ともレベルは三十前後。この世界で考えれば充分強者と言えるだろうがしかし……

ああ……

ソレのレベルは段違いだ。正確なレベルは分からないがソレのレベルは九十代、この世界で見てきた誰よりもレベルが高い強者。

プレイヤー？そうではない。ソレは現地人だ。

少しずつ欠損が出ている原作の記憶を漁れば否応にもソレの正体に心当たりが生まれる。いったいどこの馬鹿だ、アレを差し向けたのは。最高神官の中にそんな馬鹿がいるのか？

それほど私を警戒しているのか、どうかは分からないが……しかし

番外席次・絶死絶命……そのソウルでどんな武器が造れるのだろうか——

普通りの笑みを浮かべながら………普通り？……いや、気のせいか。ともかく私はそのまま用意された馬——残念ながらフロムではなく組合の方で用意された馬だ——へと向かった。

少なくともまだソレは知覚範囲内に入ったばかりで射程範囲外だ。無視するというのも後ろから襲われかねない……射程範囲内に入ったら少しちよっかいをかけてみるか。

エ・ランテルよりカルネ村への道を進む集団が一つ。

馬に引かれた荷車に乗り馬の手綱を握る少年と荷車の周りを立って歩く多種多様な装いの六人。

軽薄そうな赤っぽい装束に身を包む野伏^{レンジャー}、好青年という印象を抱かせる茶っけの軽鎧を着込む戦士、中性的な茶色のローブを纏い身の丈ほどの杖を持つ魔法詠唱者^{マジックキャスター}、大柄で温厚そうなメイスを持った森司祭^{ドルイド}の四人組に加え、灰色の全身鎧を身につけたアクトに漆黒の軍服の上にローブを羽織ったモモンの二人。

何故先の四人組……銀級冒険者チーム・漆黒の剣の彼らと共に仕事をしているのか、それはモモンとアクトが冒険者組合にいた時に遡る。

冒険者登録を済ませ宿屋で一悶着あった後、モモンとアクトは再び冒険者組合にて依頼が張り出された掲示板の前にいた。

本来ならばこの世界の文字を読む事の出来ないモモンとアクトだが、事前にネームレスより貰っていた解読用の眼鏡——装備すると幻覚で眼鏡は周りから見えない様に調整されている——をかけている為に掲示板に張り出された依頼内容

を解読することが出来ていた。

「……葉草採取、畑荒らしのゴ布林……銅級では大したものを受けられないか」

事前に聞いていたように夢のない冒険者の仕事に改めて肩を落とすモモン、分かっていたとはいえ一縷の望みがあっただけに落胆は大きく適当にゴ布林退治でもするか、と考えている中、モモンの背後に立ち掲示板を見ていたアクトは唐突に掲示板へと手を伸ばす。

「アクト……?」

アクトが手を伸ばしたのは銅級の依頼ではなく、あろう事かミスリル級の依頼。それにモモンは目を見開き、そんなモモンを置いてさっさとアクトは依頼用紙を片手に受付の方へとずんずん進んでいってしまった。

「え、あ、ちょ」

背後からモモンの声が聞こえるがアクトは気にせず、受付嬢の前で止まりカウンターにミスリル級の依頼を出す。銅級冒険者のそんな行動に受付嬢はややその表情を引き攣らせる。

「あ、あの……これはミスリル級以上の依頼で……銅級冒険者である貴方方では受けることは——」

「知っている」

「え？」

「銅級の仕事などちまちまやってられんよ。我々は実力に相応しいより高ランクの仕事をごなしたい」

不遜。そうとしか言えないアクトの言葉は受付嬢とアクトの話に耳を傾けていた冒険者たちの不興を買った。しかし、そんな彼ら等何処吹く風と言わんばかりにア

クトは態度を変えずに受付嬢に意見する。

「彼、モモンは第四階の魔法詠唱者だ。そして、私も彼に相応しい戦士だと自負をしている……まあ、流石に例の白晶ほどではないが竜退治ドラゴンスレイも成したことがある……どうだ？」

第四階……!? い、いやはったりだろ……。竜退治!? 少なくともアレは見掛け倒してわけじゃねえってのは分かるが……。流石に盛りすぎだろ……。

そんな冒険者たちのざわつきを背後に顔を顰めてアクトのもとへ向かってくるモモン。

「アクト、お前な……規則なんだから私たちの実力関係なく銅級の仕事で我慢しろ」
「む、身の丈に合わない仕事をするのは実力を腐らせかねないぞ」
「だとしても規則だろう」

モモンは先程アクトが口にした事を否定も肯定もせず、規則なのだから諦めろとアクトを諫める。

なお、表面上仲間を諫める落ち着いた魔法詠唱者なモモンだが内心ではいきなり予想外の事をしだしたパンドラズ・アクターに驚愕するモモンガである。

『ちょ、パンドラズ・アクター!? お前なにしてくんのお!?!』

『モモンツガ様! この不肖の息子パンドラズ・アクターにお任せ下さいッ!!』

『ええ……』

ナザリックにおいて、知恵者であるデミウルゴスやアルベドと肩を並べるパンドラズ・アクターの考えている事などモモンガに分かるはずもなく諦めたのか内心で肩を落とす。

そんなモモンなどいざしらず、アクトは受付嬢に圧をかける。

「それで、これを受けたい。我々なら充分こなせる」

「いえ、規則ですのぞ」

「——そうか、我儘を言つてすまなかつた。では銅級で受けられる最も難しいものを頼む」

まるで掌を返すようにきつぱり諦めたアクトにモモンは微妙な視線を向ける。

こいつは何を考えているのだろうか……自分で作つたパンドラズ・アクターの事がいまいち分からないモモンガである。ちなみにだが、もしこの状況をネームレスが見ればきつと苦笑するだろう。流石親子やる事が同じだ、と。

ともかく、受付嬢との戦いが終わりモモンも安心して——

「なら、我々の仕事を手伝いませんか？」

「ほう」

「おうふ……」

モモンはアクトの手綱をしっかり掴んどかねば、とこれからの事を考えて胃と心に誓った。

「こふっ……」

「モモンさん？……どうかしましたか？」

「いえ、少しうちの馬鹿がやらかした事を思い出しまして……」

「あー……」

荷車の後衛を歩くモモンを心配する様に声をかけるのは漆黒の剣の魔法詠唱者ニニャ。

モモンの言葉に彼ら漆黒の剣も声をかける前までの冒険者組合での出来事を思い出したようで、同情するような視線を向ける。

そんな視線が痛いのかモモンはその視線から逃げるように顔をニニャとは真反対

の方へ向ける。それにニニャは苦笑いし、話を変えていく。

「そういえば、モモンさんは第四階の魔法詠唱者とアクトさんが言っていました……本当なんですか？」

「……ええ、といっても大したものじゃあないですよ。上には上がいますから」

「上には上って……そ、それでも第四階は凄いですよ！だ、第三階ですらそんなにいないのに」

第四位階という決して常人が至れぬ位階にいる者とは思えぬモモンの言葉にニニャは目を丸くし、声を少し荒らげる。

それはタレントにより第二位階に至ったニニャにとってその謙遜は今までの自分の努力は大したものではない、と聞こえてしまったから……しかし、そんな事はモモンは知らないし何よりニニャ本人がそう感じてると自分でも気づいていない。

さて、そんな魔法詠唱者二人に口を挟まず話し合っているのは荷車の前衛にいる

四人。

戦士で漆黒の剣のリーダーを務めるペテルに野伏のルクルットと森司祭のダイ
ン、そしてアクトである。

「アクトさん、竜退治をしたって言ってましたけど本当ですか？」

「ああ、といっても白晶が討伐したという砦に巢食ってた火竜程ではないが」

「具体的にどんな奴だったんだ？」

「青い飛龍だな、雷の息吹を使っていた」

ライトニング・ワイバーン
「雷の飛龍ですね……確か難度は90は固かったはず………」

ペテルがアクトの話した特徴からモンスターの名と難度を導き出し、その難度に
ルクルットもダインも驚愕を顔にしていた。普通なら嘘だろうと考えるものだが、
アクトを見ればさも当然かのような威風堂々とした態度。それがモモンとアクトの実
力が本物なのだ、とペテルらに納得させた。

「これじゃあ、抜かれるのもあつという間だな」

「うむ、まったくそうである」

ルクルットとダインはまったく妬んでいる様子もなく軽く笑い、それにペテルも笑って返した。

「——む？」

その時、アクトは意識をどこかへ向けた。何かを感じたのだ、ペテルもルクルットもダインもモモンもニヤも雇い主も誰も気づかなかった何かを。

そして、パンドラズ・アクターは何ともなしにもう一人の支配者の名を心中で零した。

それに気がついた時には既に遅かった。

唐突なまでに急速に近づいてくるそれにセレネは盾を構え――

ずうッ!!

それは盾を避けてセレネの左肩を裂いた。

まくられたか……

追撃を防ぐ為に馬から飛び退き、それとの距離を大きく開かせ、その間にそれを

注視する。

それは白黒の何とも奇抜な風体の少女、髪も瞳も白黒と分かれているのだ。そんな少女は嗜虐的な笑みを浮かべながら自分の武器である戦鎌の刀身に付いた血を指で拭い舐めた。

十代前半ほどの見た目にそぐわぬ妖艶さを思わせるソレをセレネは吐き捨て、改めて武器を構える。

……影シャドウデーモンの悪魔、応えず行動しろ。至急、ナザリックに戻りレティシアに言伝を……こちらから伝言があるまで待機。レティシアに伝えたらお前はレティシアに伝言が来た際にここに転移ゲート門を開け……レティシアがそのスクロールを持っている。………行け

「——」

音もなくセレネの影から別の影が蠢きバレないようにナザリックの方向へと消えていった。

少女はそんな事は些事とただセレネを見る。

「ねえ、貴方よね。竜王国の英雄って」

——強いのか？

そんな視線の訴えにセレネは兜の下で笑みを浮かべてしまふ、何時もなら面倒そうなお顔を浮かべるのに今だけは喜悦に塗れた笑みを。

だからだろう。

火が漏れた。

骨が燃える。

肉が焼ける。

ソウルが熱を孕む。

意識が燃えるように切り替わっていく。

背負う月光の大剣をしまい、代わりに腰に下げているアストラの直剣を引き抜く。紋章の盾の代わりにスキルのクールタイムを短縮する草紋の盾を取り出す。

神人のソウル——果たして何が造れるのか

きっとその兜の下の顔はモモンガが見ればネームレスとは思わないだろう。

そして、ネームレス本人もそれを自分とは感じないだろう。

何故ならここに居るのは……………。

だが、まあそんな事は少女もセレネも何らどうでもよくどちらが先にかは誰もわからないが互いに相手へと駆けていく。

スキル《^{ヘイト・チャージ}被虐強化》《ボディ・オブ・ウォール》《アキレス・ハイ》——

接触する前にセレネがスキルを発動させていく。ヘイト値が上昇すればするほどスキルのクールタイムを短縮させるもの、移動速度を四分の一にする代わりに防御

力を三倍に上げるもの、移動速度を通常の三倍にするもの。

一瞬鈍重になったがすぐ元の速さと変わらない状態になり、さらにスキルを行使していく。

《《シールドアタック》》

「っう——」

地面を踏み抜き少女の眼前へと進んだセレネが盾を少女へ叩きつけるが少女の身体と盾の間に戦鎌が滑り込み防がれる。

密着した状態、剣を触れるほどの間合いは無いためにそのまま盾で押し潰そうとするセレネに対して少女は口を開く。

「《流水加速》」

武技の発動により、少女は正しく流れる水のようにセレネの盾から逃れ距離をと

り不敵に笑う。

左肩に浅いが傷を負っているセレネ、いまだ無傷の少女。まだ、どちらも準備運動の域を出てはいない。

活動報告及びTwitterにて現在ネームレスの現地ヒロインアンケートを行っております。

詳細は活動報告にてどうぞ。皆様の御参加お待ちしております。

ドラウディロン………2

聖棍棒○………1

ラキユース………1

スキルや武技、オリジナル考えないとたいへんだあ

二代目

何故だろう意外と早く投稿できた

ヒロインアンケート現在

イビルアイ、ラキュース……4

ドラウディロン……8

聖棍棒……5

ネイア、アルシエ、レイナース……1

人気だなドラウディロン……

はて、自分は今どうして戦っているのだろう。

番外席次の一撃を剣で防ぎながらそんな事を考えていた。普通なら番外席次のレ

ベルは九十代そこら、カンストプレイヤーで前衛を務めている私の実力ならば十分に番外席次を抑え込めたはずだ。

にも関わらずこうして私は番外席次と戦っている。ついでにいえば一瞬、意識が飛んだ気もする。

まあ、そこは覚えが無いというわけでもないが……

「私との戦い中に余所見かしら!!」

余裕なもんで、ねっ！

「うっ」

振るわれる戦鎌を剣の腹で受け止め、番外席次の腹に蹴りを打ち込む。いい所に入ったのか番外席次は口から胃液を吐いて呻く。

流星に中身が出る事はなかったようだ……まあ、如何に戦っている敵とはいえ女の子に吐かせるのは男としてどうなのか、と思うから少し加減したのだが。

まあ、そんな隙を見逃すほど甘くないのも事実なので更にそこから戦鎌の柄に

シールドアタックを打ち込みよろけさせる。

「つう……小細工ばかり」

レベルが格下なら十分その小細工も有効なんでね。

——まあ、格下って言ってもあくまでレベルの話で……ステータス上だと人化の指輪によって種族レベル由来のスキルが使えないから実質九十代……番外席次と大して変わらないんだが……。

さて、ヘイト値稼いでスキルのクールタイムを短縮するのはいいが、わりとギリ貧……どうするか。

まあ、なんとでもなるか——雷の連鎖する大龍雷

「ッ!!」

付けていた指輪の一つに意識を向け、まるで槍を投擲するかのようにして指輪に

込められていた魔法を放つ。

第七位階魔法・連鎖チェイン・ドラゴン・ライトニングする龍雷……レベル九十代には対して効かんだろうがあ

いにくこの指輪に込められているそれは我らが悪魔閣下ウルベルトに込めてもらったものだ。充分九十代にも効くものだ……いや、ほんとチートじゃないか？悪魔閣下。

まあ、その代わり使用回数が限られているんだが、な！

「ラァ!!」

両手で振り抜かれた戦鎌の刀身に剣を滑らせつつ、身体を動かし戦鎌の間合いを潰してその右肩を切り裂く。

だが、浅かったのだろう。呻きもせずですぐさま鎌から片手を離し間合いを詰めた私の腹に拳を叩き込んできた。鎧をつけていたおかげでそこまでダメージは入らなかったが普通に腹が痛む。

イザリスの楔デーモン並に痛いんだが……。

ひとまず距離をとる。

「ふふ、ふふふ、いいじゃない。あいつなんかより貴方の方が強いわ」

そりやどうも。まあ、そのあいつって誰かは知らないからなんとも言えないがねにしても、PVPに比べれば圧倒的に暇な戦いだ。ゲームであるようなバフがけプレイヤースキルで戦うんじゃないかとなく、剣道とか武道の試合に近いな……いや、武道にあんな流水加速みたいなものは無いが……ないよな？ 仕方ない、人化の指輪を外してゴリ押しするか……。

同レベルのクエストプレイヤーやクエストNPC相手ならともかくレベル的に格下相手にわざわざ律儀にPVPする必要も無いな。

そもそも現状装備してるのがオール聖遺物級レリックなものもアレだしな

番外席次の装備が何級なのかは知らないが、私の装備はクエストプレイヤーの装備としては些か心もとない。いや、アストラの上級騎士シリーズは伝説級レジェンドもあるん

だが……それは装備する予定はない。ぶっちゃけ趣味の範疇だからな

本気でやるならオール神器級ゴッズの薪の王にあの指輪を装備すればいいが………
うなると蹂躪になるからな。

さて、どうするか——

「鎌鼬」

チツ、《ミサイルパリイ》

恐らく武技であろう遠距離攻撃をスキルで弾き、ショートカット機能を使いく
つかの指輪を別の指輪と取り替える。

魔封じの指輪は限りがあるんでね、少し趣向を変えてみようか

サモン・アップ・リング、二重の指輪、リング・オブ・サモン・ソーンビ動死体召喚の指輪。新たに付けた三つの

指輪の能力を行使する。

最後に使ったのはナザリック大侵攻で壁役を大量召喚した時か？ともかく指輪の力が発動され、眼前に広がる光景を私は少し下がりながら見る。

アンデッド系種族レベルに応じて召喚できる動死体系のモンスターが増え、選んだモンスターを一日に最大八体まで召喚できる動死体召喚の指輪により召喚される八体もの死の騎士^{デス・ナイト}。

指輪系アイテムの能力を二重発動出来る二重の指輪により動死体召喚の指輪^{リング・オブ・サモン・ゾンビ}の力が二重発動して更に八体もの死の騎士^{デス・ナイト}が召喚される。そして、最後にサモン・アツプ・リングの力で召喚された死の騎士らのステータスが上昇する。

ぶっちゃけレベル九十代相手に最後のそれは大した意味は無いがそこは様式美と
いうことで割り切ろう。

「っ、アンデッド……!!」

さて、十六体の肉壁だ———どれだけ持つかね？

死の騎士が。

死の騎士の壁の後ろで私は早着替えの外套を準備する。選ぶのは薪の王とは言わずともそれなりに性能高い伝説級を。

となるとファーンムか黒騎士だが……………

スレイン法国最強の戦士こと番外席次・絶死絶命は今回の任務に大した期待はしていなかった。自分の付き添いである第五席次・一人師団に対して期待するような事を呟いていたが実際の所退屈を紛らわす程度にしか今回の任務を考えていなかった。

だから彼女は任務の目標である竜王国の英雄が神人かプレイヤーなどどうでもよ

く、とりあえず第一席次、漆黒聖典の隊長にやらせた様に馬の尿で顔でも洗わせようと思っていた。

そして、エ・ランテルまでもう一時間と言うべき場所で感知した自分と同じぐらいの実力者を持ち前の直感で嗅ぎつけ驚馬ヒボケリフから飛び降り襲撃してから始まったこの戦い。

互いに決定打の入らない戦い。隊長程度なら簡単にのせる一撃も、連撃も、簡単になされるか弾かれる。番外席次は苛立って来ていると自覚して——そんな自分の表情は笑みを浮かべているのに気づかない。

「ああ、もう、邪魔ッ!!」

セレネが召喚した十六体もの死の騎士。一度だけ必ず体力が一残るといふ壁役として高い性能を誇る死の騎士に番外席次はイライラしていた。

決して強いというわけではない。彼女や隊長を除く漆黒聖典の面子の誰よりも強いがそれでも彼女からすれば充分蹂躪できる程度の存在だ。しかし、彼女が苛立つ

のは先程述べた特性を持つ死の騎士は決して複数体で来ず一体一体足止めに来てい
る事だ。

彼女なら一撃で死の騎士の体力を削れるだろう、しかし必ず一耐えるという特性
上二撃入れねば倒せないのだ。

「同時で来るならともかく、一体一体とか……」

段々と作業染みてきたそれ。

死の騎士のもう一つの特性であるヘイト集中もあり、死の騎士の後方にいるセル
ネへは攻撃が出来ない。

およそ十体は滅ぼし——ふと、番外席次は思い至った。

「あっちが複数体来るのを待つんじゃない、私が全員同時に殺せばいいじゃない」

事実彼女の扱う武技の中には広範囲へのモノが存在する。決して馬鹿ではない彼

女がそれを思い出すのは当たり前で………。

満面の笑みで彼女は武技を行使する。

「《真能力向上》《無双絶撃》《疾風迅雷》《能力超向上》《戦気梱封》」

身体強化系の武技を次々と発動させていき、一番近くの死の騎士に飛び込んでその頭を蹴り碎きより高く飛んでその戦鎌を振りかぶる。

それは番外席次が持つ最強の武技。

神人故に放つ事が出来るこの世界の人間の誰も到達出来ない極地の一撃。

プラチナム・ドラゴン・ロード
白金の竜王が番外席次を自分に痛手を負わせられると危険視している所以。

その武技の名を——

「《絶死絶命》————！！！」

戦鎌は振るわれ、放たれるのは夜よりも暗い漆黒の嵐。

範囲内のあらゆる命に絶対な死を与え絶命させる最強の武技。

それを放った彼女は上手く地面に着地し漆黒の嵐が荒ぶる光景を目にしながら笑みを浮かべる。これを使わせたのは彼女の記憶の中で実の母親ただ一人。まさかの二人目に笑みを浮かべつつ心の中ではセレネが強いから出した訳では無い事に失望の色が漂っていた。

「番外席次……!!」

そんな彼女に背後から声が届く。

「……何？」

「何って………いったい何をしているんですか!？」

漸く追いついたのか、声の方へ振り向けばそこにいるのは鷲馬と付き添いである第五席次ことクワイエッセ。

彼はこの目の前の光景を見て、恐怖しながらも彼女に憤怒の声をかける。それはこんな場でこんな一撃を放った事、人類の守護者になるかもしれない戦士を殺した事、そして白金の竜王を呼びかねない事態を起こした事。

しかし、番外席次はクワイエッセの言葉などどうでもいいと無視してそのまま驚馬とクワイエッセへと歩き始め

世界が斬られた。

生命を蹂躪する黒い風は吹き払われ光が現れた。

それは最初は小さな小さな光だった。

騎士たちは唸り声を上げる、盾を足を大地に着いて音を上げる。

光否、火は大きく熾る。

火の粉が舞い、灰が散る。

火の象徴とは不死なれば……

クワイエッセは目を見開き、その火に神を視た。

番外席次は恐怖した。不敬であろうが彼女は六大神ですら戦えば自分が勝つだろうと傲慢にも思っていたにも関わらず自分の最強のそれを吹き払う存在がいる事を。

死の騎士らは歓喜した。自らの王の威に触れる事を。

それは焼け爛れ歪んだ騎士鎧を身にまといその頭には異形の王冠を戴き、その身から火を絶やさずその手に握れているのは玉座無き彼らの前にずっとあつた篝火に刺さる螺旋の大剣である。

彼の名はギルド『アインズ・ウール・ゴウン』がギルドメンバーの一人、火セ継レぎの王、火ネの無ムいレ灰。

ユグドラシルの火二代目ムスブルヘイムを継いだ騎士である。

ゆったりと歩んでくる。

火継ぎの大剣を肩に乗せながらゆったりと番外席次に近づいてくる。

ゆったりとした歩み、しかしそれは番外席次の脳裏に最大級の警鐘を鳴らさせる死神の歩みだ。

だからだろう

「アアアあああ!!」

汗ばむ手で戦鎌の柄を握りしめ、恐怖を紛らわす様に叫びながら突貫する番外席次。

そんな番外席次を兜のスリットから覗く火の如き光は見守り、その手を振るった。

「あえ」

焼け炭に変わる左腕、肩口から断ち切られ吹き飛んだそれに番外席次は一瞬目を

奪われるがすぐに彼を睨み残った右腕だけで戦鎌を振るう。

「あ」

だが、まあ、そんなものは格好の獲物ではない。

迫る戦鎌を左腕で弾く、するとそのまま番外席次は腕を広げてしまい守るものは何もなくなつただ自分の腹部へと迫る炎を纏つた螺旋の大剣を見届けた。

腹部を貫く大剣はそこから番外席次の身体を焼いていく。尋常ならざる熱が番外席次を襲うがしかし、番外席次はこの時その熱以外の熱を感じていた。

下腹部が熱を帯びて疼くのだ。目の前の強者を求めて疼き始め、その熱に酔いしれて――

私の勝ちだ

その言葉を最後に番外席次はその内側から生まれた炎に焼かれた。

オリアイテム

・魔封じの指輪……第八位階までの魔法を一つ込められる。込めた魔法詠唱者によって威力は変動、一日に三回までしか使えない。

・サモン・アップ・リング……召喚モンスターのステータス上昇

・二重の指輪……指輪系アイテムの効果を二重発動できる。実はあの星の指輪も……

・動死体召喚の指輪……アンデッド系種族取得者しか使えない。アンデッド系種族の合計レベルによって召喚できるモンスターの選択数が増える。ネームレスはデス・ナイトを選んでは。デス・ナイトだと一日八体までしか召喚出来ない

オリジナル武技

・真能力向上……能力超向上の上位互換

- ・無双絶撃……剛腕豪撃の上位互換
- ・疾風迅雷……流水加速の上位互換

ネームレス「あ、やば、神器級装備しなきゃ」

ヒロインアンケートはまだまだやっておりますのでどうぞ御参加ください

本音

火曜のうちに投稿するつもりだったのに十天衆の素材集めに集中してたらこんな時間に……すまぬ、番外席次が何でもするから許してクレメンス

今作でNPC関係ないダークソウルキャラは四人ぐらいしか出しません

や、やらかしたアああ!!

現在ネームレスの心中にあるのはそれである。

本来ネームレスの予定では死の騎士の肉壁相手に苛立っている番外席次を伝説級装備の一つ、ハベルシリーズと大竜牙でゴリ押すつもりだった。

しかし、蓋を開けてみれば番外席次が武技を連発した拳句にモモンガの魔法最強化

マキンマイズ・マジック

した現リアリティスラッシュ断と同火力であろう広範囲武技をぶっばなして来ると言うまったくの予想外に急遽、ハベルシリーズと大竜牙を取りやめ普段のオール神器級・ムスプルヘイム仕様を装備し自分は次元断層を発動、絶対防御を成した。

その後は武技が消えるまで待とうとしたのだが、何を血迷ったのか次元断切ワールド・ブレイクを使つて吹き飛ばし番外席次の左腕を焼き切つて更にはパリュイからの致命を入れて殺す、というネームレス本人もどうしてそうしたのかいまいちよく分かっていない状況だった。

とりあえず消し炭となった番外席次をどうにかしよう、とネームレスはアイテムボックスからスクロールを取り出して――

「か、神よオオオオオオ!! つ、ついに御降臨なされたのですね!?!?!」
ひえ……

目の前で土下座しながら音的に涙と鼻水を出しながら感激の意を示している金髪モブことクアイエッセにネームレスは若干引く。

しかし、顔を伏しているクアイエッセはそんなネームレスに気づく様子はなく言葉が続ける。

「ど、どうか、我ら人類をお導きください……………どうか、どうか」

信仰深く漆黒聖典という法国の深い所に関わっているクアイエッセは勿論六大神や八欲王がプレイヤーである事を知っていた。

そして、先祖返りした事でプレイヤー程ではないがそれに近い実力を持つ番外席をああも容易く打ち倒すなどプレイヤー以外にありえない。……………竜王という選択肢はクアイエッセのなかから消えているようだ。

何より、クアイエッセはネームレスに神を見た。もはや、信仰深い彼がネームレスを神と信ずるのは無理がなく……………。

え、あ、うん

ついでに言えばネームレスは押しに弱い。

ネームレスとしては神扱いされるのはどうしようもなく苛立つがしかし、法国の舵をきるには丁度いい為ソウルから迫り上がる怒りを抑えクアイエッセを見下ろしつつスクロールを使う。

発動するのは伝言^{メッセージ}。予定通りレティシアに言葉を伝え何かを言われる前に切る。

ああ、クソっ……さて、どうするか

ネームレスは火継ぎの大剣をしまい、土下座をしているクアイエッセの肩に手を置く。無論、その際にクアイエッセが燃えないよう炎を消してだが。

「っ……………!!」

あー、名は？

「く、クアイエッセ……ハゼイア・クインティア……でございます……!!」

そういや、そんな名前の奴いたな……。とネームレスは心の中で呟いて顔を上げさせる。

顔を上げたクアイエッセに既視感を覚えつつ、数歩離れた所に出現した黒い歪みに視線を移す。

来たか……

「……お呼びでしょうか灰の方」

「なっ……」

転移門から現れた火防女に目を見開くクアイエッセを放置してネームレスは火防女へ歩き……

レティシアに蘇生して貰いたい娘がいるんだが………

瞬間、背筋に氷を突っ込まれたかのような寒気を感じてネームレスは言葉を止め

た。

あ、失言した。

そう理解した時には遅かったのかもしれない。黙って俯いたレティシアからは普通では無い雰囲気醸し出されている。

氷を突っ込まれたかのような寒気……なんてちゃちなもんじゃあない。きっとこれはエルフリーデよりも寒い何かだろう……うん、間違いなくレティシアからの好感度はパッチへの期待度以下に下がっていったはずだ。

ああ……ナザリックにいる間は教会にしよう。きっと彼女なら受け入れてくれ

るはず……あ、いや、異世界転移してから一度も顔出してないし、若干忘れてたし………好感度下がっていたらどうすればばばば——

「……灰の方、どうか、おやめ下さい………」

え？

俯くレティシアの口から零れた言葉は今まで聞いたことがないほど寂しげだった。

まるで私の思考など見当違いも甚だしいと言わんばかりのそれに私はただ、ただ動揺し

「……もう使命は終わったのです。だから、どうか無闇に自ら危険に飛び込むなんて………ことはしないでください」

………。

ああ、クソつたれ。前回レティシアの所に顔を出した時はなんとも言えない雑なものだったが………彼女はきつと自分の言いたいことを抑えていたのだろう。

想起するのは嘗ての記憶……あの頃、彼女はきつと祭祀場にいた筈だ。外に出た時なんて……最後のあれだけか。

となると彼女はきつとずつと、外へ使命の為に奔走する私を見てきて、傷つきロボロになった私を見てきて……何度も死んだ私を見てきて………ユグドラシルで削り出した時も最初の火の炉から出ずに毎度毎度狩りから帰ってきた私を出迎えるばかり……ああ、まったく

……すまない。それは少し約束できないな

「っ……………」

使命は終われど、今の私には貴公は勿論ナザリックの、友らの子供らをモモンガさんと共に守るという義理がある。だから、すまない

「ですが………」

それに性分なのでな。それは幾ら死んでも変えられない

「……………わかりました。灰の方はずるい御方ですね、私では貴方を止められないようですし」

顔を上げ、微笑を浮かべた彼女に私は手を伸ばしてその綺麗な肌を傷つけないように優しく撫でる。

これだけじゃあ足りないだろうな、またナザリックに戻った時は一緒に食事でもしよう……そして、その時には彼女の所に行かねばな。

と、それですまないが蘇生を頼みたい……出来るか？

「はい、火防女としての役目を果たしましょう……それを使いましうか」

死者復活……いや、あれは死体がなければ無理だったな、ペストーニヤなら真なる蘇生トウル・リザレクシオンが使えたが……まあ、仕方ない。蘇生リザレクシオンで頼む

そう言って先程の戦闘で切り飛ばしていた番外席次の左腕を拾ってレティシアの前に置く。

第七位階なら問題は無いはずだ。これで駄目なら虎の子の真なる蘇生入りのスクロールを使うがアレは他のスクロールと違って絶対数が無いと言うかマイルームのボックスに入れっぱなしだ。

あのザ……リザードマン 蜥蜴人の蘇生直後を思い出してみれば満足に身体が動かせず呂律も回っていなかったが番外席次はどうか分からんからな、もしも蘇生直後に動けてレティシアに危害を加えられても困る為、火継ぎの大剣を用意しておこう。

さて、クアイエッセと言ったか……貴公らは何をしに来た

「っ……!! は、はい……わ、我々は……さ、最高神官長方の御命令により竜王国の危機を単身救った御身を神人かプレイヤー様かを確認、いえ御伺いする為に来ました……」

ああ……それもそうか。人類の守護者を名乗ってる以上、数千のビーストマンを単身滅ぼした相手を引き込もうとするのは当然か

クアイエッセの言葉に頷きつつ、レティシアの魔法行使を見守る。

これなら身体を吹き飛ばさず殺せば良かったな……………いや、駄目だわ。この装備だと種族認識不可の指輪を付けてる代わりに人化の指輪外しているから種族レベル由来のスキルがあるわけで……………死デス・ナイトの騎士取ってたからな、番外席次の死体が残ってたら従者スクワイア・ゾンビの動死体が発生してしまう。そうになったら面倒だ。

間違いないが法国との亀裂は確実だろう。

「蘇生——」

行使される魔法は光となり左腕を包み込んで少しずつ大きくなっていく。

丁度一人分の大きさになったと思えば光は消え、そこには一糸まとわぬ番外席次が——

「は、灰の方!!」

ぐふっ——

「アアッ!?!」

兜のスリットに入り込む白魚の様に美しい二本の指、眼球に走る激痛、隣から聞こえたクアイエッセの悲鳴。

おうふ、目が痛い。

「灰の方、何か、何か着替えを……!」

あ、ああ……こ、これでいいか……

片手で目元を——兜を被っているため正確には目元を押さえられていないが——押さえつつもう片方の手でアイテムボックスを開き鎧ばかりの装備の中からローブ系……黒金糸の上下を取り出してレティシアに渡す。

そういえばそうだった。蒼の薔薇と違いシャルティアの様に遺体がない状態での蘇生だから裸で蘇生されるのか……ああ、目が痛い。

「……もう、大丈夫ですよ」

……目が……

そこそこに回復した視力でちらりと番外席次をみれば元々十代前半そこらの体軀であった為にややぶかぶかな黒金糸を着ている少女がいる。つい先程までの戦意などなく、何やら妖しい……いや、やばい眼をして更にはやばい雰囲気を醸し出している。

そう、とても嫌な予感しかない。さながら狭間の森その湖の奥にあった黒い歪み、さながらあのマヌスの落とし仔な王妃、さながら螺旋の剣が刺さったグンダ。

……え、あ

だから、だろうか。私はつい、呻くように数歩下がり……

「私貴方の子を孕むわ——」

ファツ——!?

番外席次の言葉に私はモモンガさんと違って臍物がある為に胃がキリキリとしているのが嫌にはつきりと理解出来てしまった。コフツ

火は燃える。

火は燃える。

嘗て使命に囚われた憐れな火防女は火の無い灰に語った。

火は消える。しかし、どれだけ小さくとも、暗闇の中に火は現れる。

そこは大地の中にあつた。

岩を削り出したかのような建築物、普通に建てられた建築物、そんな複数種類の建築物が立ち並ぶその都市には天井があつた。

先にも述べた様にその都市は地下に広がる都市……いや、一際巨大で悠然と佇む建築物をみればただの都市ではなく王都という呼称が正しいだろう。

そんな王都には小さくずんぐりとした体躯のモグラのような種族が跋扈しているがきつと彼らがこの王都の支配者ではないのだろうか。

文明に対して彼らの身なりが釣り合っていない。さしずめ侵略した都市にそのまま居座っているのだろうか………。

そんな王都の中心街路にポツリと異様なモノが頭れた。

灰に埋もれた白骨。

唐突なそれに誰も気が付かない。

そこに突き立てられた螺旋の剣。

そして、火は舞い、灰は散り

火が熾った。

——火を継いだ者がこの世界に顕れた事で縁は作られ王の縁者もまた火の無い灰として顕れた。

そして、いま、また一人

火は吹き上がり、その中より一つの人影をこの世界にい出させた。

しかし、その体軀人にあらず。

家屋二階分では足りぬ体軀に人二人分はあろう大鉦を持ち、王冠を戴く者。

「……………old friend
古き友よ」

ヒロインアンケート

イビルアイ……………13

ドラウディロン……………12

聖棍棒、ラキュース……………9

レイナース……………3

ネイア、アルシエ……………2

エンリ……………1

こんな感じですかね。イビルアイがドラウディロンを抜かしたようです。とりあえず土曜まで受け付けてるのでまだの方はどうぞ

変化

本っ当に遅れました。

ネームレスや三人称視点ばっかだったので別の視点とかを書いては何か違うとか書き直したりとかやっぱりやめたりとかで時間をかけ、グラブルで四象が来て、なかなか書き終わりませんでした。

アンケート結果は後書きです

よう考えたら3の主人公ってルートによりますけど公式カプとしてアンリいますね。なんせ伴侶なんだから……つまり、かぼたんは浮気相th(うわ、やめろ、かぼたん……【YOU DIED】

『と、まあ、そんなわけで現在法国の暗部の一人に神認定からの崇め奉られて、法

国の鬼札から貞操もとい胤を要求されています』

『いや、どうしてそうなった』

やや空が赤くなり太陽が地平線の彼方に沈みかけている最中、私は冒険者稼業を頑張っているであろうモモンガさんに緊急の連絡としてつい少し前に起きた事とそこからの顛末を伝えていた。

レティシアの力を借りて無事蘇生した番外席次、死者復活よりもレベルダウンは緩和されているとはいえちよいレベルダウンした番外席次は指輪によるとちやうど九十ピツタリらしい。

ともかく、そんな番外席次からの蘇生成功一言目によりアンデッド故にどうなっているのかわからない胃への痛みを覚えつつ、感涙故の滂沱から落ち着きを取り戻し正気になったクアイエッセから番外席次の行動に対して止めなきや間違ひなく自害していたであろう程の謝罪を受け、暴走しだす前に番外席次を押さえつけた。

『え、いや、だから、竜王国救ったらなんか法国に目をつけられて神人オアプレイ

ヤーカの確認をしに来た使者のうち現地人最強に襲われまして次元★断切しました』

『ええ……というか神人って？』

『プレイヤーの子孫が先祖返りした実力がある人物らしいです』

『……うーんと、やっぱり法国はプレイヤー関連なんですね？』

とりあえずクアイエッセから得たていの情報をモモンガさんに流しつつ、これからどうするかを考える。

予定通りに盗賊団を討伐して、ブレイン・アングラウスは適当に逃がすか……で、その後は……破滅の竜王調査の漆黒聖典と合流するか？ いや、してどうする……漆黒聖典に実力を見せつけるか？

いや、実力云々は番外席次を一回殺した以上こっちにかなり従順……従順？ ぶっちゃけ原作のアルベドみたいに押せ押せな気がしないんだが……うっ胃が……。

『……スルシャーナ、確か俺と同じオーバーロードのプレイヤーらしいけども……

なのに法国は人間至上主義……いや、王国や帝国に法国とかの外側をみれば亜人国家が多いらしいし……ネームレスさんが救った竜王国なんて何度も何度もビーストマンに襲撃を受けてるから……人類を纏めるのに特定の敵を作るのは必要で………』

うーん、モモンガさん。伝言で独り言始めたぞー。

まあ、とりあえずモモンガさんは置いといて現状の依頼とかを片付けた後、ナザリックとしての動きを考えよう。モモンガさんと話し合って多少変わるが人化の指輪でそれなりに人間性があるモモンガさんならすんなり受け入れてくれるだろうモノを。

まずデミウルゴスにはスクロールの素材探しさせてるが……対象はある程度制限させとこう。まあ、間違いなく人間だろうが……せめて悪人、例えば今回の依頼の盗賊団などを対象にさせよう。そういうえばビーストマンはどうなんだろうか、一つ試させておくか。上手く行けば法国に対して人類の味方ですよアピールしつつ竜王国のビーストマン狩りが出来る。

次に聖王国………やばいな。まっつたく覚えてない、なんか目付きが悪い貧乏くじ引かされる少女しか思い出せない……ああいう娘結構好きよ。とりあえずその辺は調査してからにしよう。

王国はとりあえず腐敗してる所を引きちぎる。あの八本腕だか足だかは悪人だろうからスクロールの素材に使えるだろう。

帝国は………あー、うん。フォーサイトと知り合ったからなあ……出来れば生かしてやりたいところ。

まあ、そこらはモモンガさんと要相談だな

「どうかなされましたか？神」

あー、別に気にしないでくれ。ちょっと独り言だからな

私の独り言に反応したのか、私の横を鷲馬で並走しているクアイエッセが声をかけてきたが適当に私はそれをあしらい、私と同じ馬に乗って私の腹に腕をまわす誰かさんに内心溜息をつきつつ独り言で思考し続けるモモンガさんに呼びかける。

『おい、戻ってこい骸骨』

『てことは八欲王はだいたい異形種狩りを騒いでたプレイヤーってわけで……恐らく例え異形種プレイヤーでもスルシャーナという前例がある以上人間を守る意思があれば彼らは従う気もあるわけで——なんだ、焼死体』

『独り言長すぎ。いや、自分の事言えないが……ともかく、納得した？』

『ええ、まあ、なんとなくは。それよりもネームレスさんだけイベント豊富でズルいなと思ってます』

『羨ましいだろ』

モモンガは激怒した。必ず、彼の邪智暴虐の薪の王を除かねばならぬと決意した。そんな冗談交じりの怒気を見せる彼に私は笑いそうになる。誰か友人が一人いるというのは気分がいい、そもそもこの転移とてモモンガさんと一緒にではなく私人ナザリックと共に転移していた場合だってあったのだ、彼と共に転移できたのは良い事だった。

『で、法国に対してどうします？ 陽光聖典は無傷で返すのが得策かと』

『それで我々二人が彼らと敵対するつもりは無いって証明すればいいんですね？
……出来ます？』

『ぶっちゃけ下手に出ず、こちらの武力を見せつけつつ上位者として人類を守ると
いうていさえ出せばいいんじゃないですかね。人類至上主義はまあ、一致団結に必
要だったんでしょうから適当に少しづつ緩めさせて最終的に無くせばいいんです
よ。スルシャーナの例を出せばいけますって』

『ちゃんとそれっぽいな事を言いつつ微妙に不安を残す辺りやっぱりネームレスさん
ですね』

『おい、それはどういう意味だ。うちの孔明とかと比較するな』

まったく失礼な話だ。人の提案をそんなふうにするなんて……いや、まあ、うん、
昔からそういうところがあるのは自覚してるから……。にしても本当にモモンガさ
ん、なんとというか言うようになったな。

こう私の中のモモンガさんのイメージというか印象は自分の意見をあまり言わずちよいちよい微妙に遠慮しながら言うだけだったが……今はどうだ。こうなんというかずけずけ言ってくる……湯に入れて出汁取るか。

『一先ず法国に対しては色々胃とか辛くなるでしょうがこちらを上位者もとい神として敬わせる方向で行きましょう……魔王ルートかと思えば神ルートか』

『考えただけで胃が……いま、人間状態ですから……実物があるだけに……うっ』
『やめよう、これ以上は胃に悪い』

胃がキリキリし始めたのを感じてすぐに話を切り、次の事に移らせる。……くっ、不死人であっても胃痛からは逃れられないのか……結晶トカゲかアンリがいればこの胃痛は治まるぞ。

結晶トカゲ……適当に殴って倒した身体を持ち上げてみると意外とぷにぷにしているとても癒された……んあ？……違和感があるようなないような……気にすることでもないな。

『とりあえず法国を助ける事を考えると自動的にナザリックの面々に人間を簡単に殺すなど言いつけないと駄目ですな』

『そうですな。……シャルティアには強く言い聞かせないと駄目だろうなあ』

『あー、確か若干アホの子でしたっけ？ ペロ助エ……ついでに偽乳、両刀、ネクロフィリア……業が深すぎるだろお前』

『ペロロンチーノさん……』

今亡きペロロンチーノの業の深さのため息をつく私とモモンガさん、いや決してペロロンチーノは死んだわけではないが………うん、もしかしたらしばらくシャルティアを見る目が可哀想なものを見る目になりそうだ。

アウラとマーレは言っておけばなんとかなるだろう、コキュートスやセバスは言わずもがな。

『問題はデミウルゴスとアルベドですな』

『私はナザリックでそんなに話してないんで知らないんですが……そんなにですか？』

『いや、あの二人、種族が悪魔じゃないですか。こうなんというか……オーバーロードならともかく今の人間状態で考えると悪魔的基準で……』

『あー……異形種状態でなら流せても人間状態だと悪魔の異質さは分かりますよね。例えば人間を羊扱いとか』

意外と鋭いな。しかし、なるほど、人間視点だからこそ察せるものもあるのか……さりげなくデミウルゴスが人間を羊扱いする可能性を出しておく。

これで最悪人間は悪人でも駄目だと言われてもビーストマンなら……となるかもしれない。多分。

『ま、その辺はナザリックに戻ってから話しましょうか』

『ですわね』

そう言って伝言を切り首を押さえる。……ううむ、身体は変わっても癖は直らないのか。

さて、どうするか。

まあ、なんとかなるだろう

意識を思考から現実に戻して私は手元の地図を見る。銀級冒険者の報告より得た地図によればそろそろ件の盗賊団のアジトとなる。

一応私の依頼だから、クアイエッセと番外席次はこの辺で待機させておこう……ああ、レティシアは既に転移門でナザリックに戻っている。

それじゃあ、ここからは依頼なのでな。すまないがここらで待機してくれるといいのだが

腹に回された腕を外して……流石レベル九十……力強いな、おい。ともかく、番

外席次を引き剥がして馬から降り、クアイエッセらに告げる。暗についてくるな、と込めて。

「で、ですが……万が一にも」

「その万が一って殆ど無いようなものよね」

私と同じぐらいのがそんなぼいぼいいるわけじゃないじゃない。と正論じみた番外席次の言葉にクアイエッセは言葉が詰まったが………すまない。お前並みの実力者がぼいぼいいるユグドラシルですまない。

ともかく、そんな二人を置いて私は盗賊団のアジトがあるらしい森へと歩いていった。

まずその姿を見た時に感じたのは嘲り。

つい先日にも十人余りでやってきたがあつという間に自分たちの用心棒に一人を除いて殺された冒険者たちを思い出しての事だ。

自分たちを見下していた奴らがあつという間に殺されていく姿を見るのは大いに自分たちの自尊心を満たすのに役立っていた。

冒険者が一人逃げたのは知っている。間違いなく冒険者組合に情報が行っているのだろう。そして殺された冒険者たちよりも強い冒険者が派遣される。だが、それがどうしたというのだ。

自分たちの用心棒はあの男だ。周辺国最強の王国戦士長ガゼフ・ストロノーフと互角に渡り合った男だ。王国戦士長本人が出張らない限りこの盗賊団は安泰なのだ。

故に現れた冒険者一人を嘲笑う。その胸に最高位のアダマタイトのプレートが

下げられていようが勝てるわけはなく。

そんな盗賊団のアジト入り口の警護をしていた盗賊は決して自分たちが強くなつた訳でもないのに目の前のアダマントタイトを殺せると信じてその剣を引き抜き――

呆れた事だ。他者の強さで組織が強くなれども貴公が強くなったわけではないだろくに

次の瞬間には装備の残骸とミンチとなった肉が混じつたものが二つ出来上がり、アストラの鎧に身を包んだ騎士は肩を竦めた。

振り下ろしていた武器を肩に背負い、そのまま堂々とアジトへと入っていく。なお、入り口にはそれを知らない人間――仲間以外が通れば分かる様に鳴子がかけられているが騎士はそんなもの関係無しと進む。

アジト内に響く鳴子に盗賊団の者が武器を片手に嘲笑を浮かべながらやってくる。

哀しいかな、誰も彼もが自分が強くなったと過信して疑わない。

だからこそ彼らはガラクタと肉の合い挽きが変わる。振るわれるのは身の丈はある無骨な棍棒——否、それは牙である。古龍の牙をそのまま武器としたモノ、名を大竜牙……騎士セレネがユグドラシルで竜種のワールドエネミーの素材から作り出した神器級のドラゴンウエポンである。

フンッ

既に人化の指輪により若干のステータスダウンが発生しているとはいえ、この世界では到底辿り着けない——番外席次という例外はあるが——ステータスから振られる大竜牙は正しく竜の一撃と言っても過言ではなくて。

一振りする毎に数人の生命が散る。

思えば、セレネが直接的に人間を殺したのはこの依頼が初めてではないだろうか。

番外席次？彼女はただの人間として扱うのは難しすぎはしないか、ともかくセ

レネ否『』は 人を殺すのは初めてだ……だがしかし——

そう、初めての筈なのだ。にも関わらず私は……どうも思わない。

正確に言えばそれは違う。決してどうも思わない訳では無いのだ。ただ、慣れてしまっていたのだ。

ネームレス、『』の感覚を侵す程のセレネの記憶。不死人の記憶はただの人間であった彼を容易く侵し、彼は違和感を感じられどもそうなのだ、と認識出来ないでいた。

原作にてモモンガがその人間性を大きく失っている事に気がつかないように。

まあ、気にするだけ無駄か。

しかし、セレネはドラゴンウェポン・大竜牙を振るいながら、自分の中に湧いた

疑問を薙ぎ払うように盗賊達を葬っていく。

そうやってどれほど進んだらうか、どれほど殺しただらうか。

血濡れの通路を進んでいると、ふとセレネは足を止める。

「よお、何ともまあ派手にやったじゃないか」

通路前方より姿を現した男。

クセのある青い髪に無精髭を生やした軽装の青年。そして、セレネの目を引くのは腰に下げた刀、セレネは嘗て見た達人と名乗る男を思い出したがすぐに捨て置き、大竜牙をしまった。

貴公がブレイン・アングラウスか

「……………ああ、そうだ。俺がブレイン・アングラウスだ」

目の前で身の丈ほどの武器が唐突に消えたことに一瞬目を見開いた為か、返答に

やや間が空いたがセレネはそんなブレイン・アングラウスに兜の下で笑みを浮かべつつ腰から剣を引き抜く。

「アダマンタイト……そうか、先日逃げた奴が組合に情報を届けたわけだ」

そうなるな。周辺国最強の王国戦士長と互角に渡り合ったという男にはアダマンタイトでなければ駄目だろう？

「はっ、アダマンタイトじゃ足りねえよ」

不敵に尊大な笑みを浮かべるブレイン・アングラウスにセレネは剣を突きつける。

なら、試してみるか？

私は強いぞ。そんな威を放つセレネにブレイン・アングラウスは尊大な笑みを歪め、獲物を狙う猛禽が如く鋭い瞳で刀を鞘から抜き放ち水平に構える。

「そうかい、なら俺の強さの為の踏台になってくれよ——」

そうして、どちらが先かその刃を振るった。

アンケート結果

ドラウデイロン……38

イビルアイ……26

カルカ……15

ラキユース……13

アルシエ……5

ネイア、エンリ、レイナース……3

ネム、ハムスケ……1

アンケート御参加ありがとうございます。

ドラウディロンの投票多いな、おい。2位と10以上差があるんだが……。とい
うか、それ以前に何故にハムスケに入れた……。NPCや対象外じゃないから有効票
にしたが……

とりあえずこのアンケート結果によりドラウディロンはヒロイン確定って事にな
りますね……。しゃあない竜王国にはもう少し大変な目にあってもらうか。ついでに
聖王国にも

さて、しばらくネームレス視点や三人称視点がありますがきちんと他の、NPC
の視点とかも書かせていただきます。

ところで、冷たい谷の踊り子って……。イイよね

不可視の刀

うーん、短いけど早めに投稿できてよかった。

ちなみに前回のアンケートですが。あくまで現地ヒロインの中でドラウディロンがヒロインになるのが確定しただけなんで、決してドラウディロンだけがヒロインと言う訳では無いです。運が良ければ他の娘もヒロインになれますよ……ええ、運が良ければ

ナザリック地下大墳墓が守護者の一人、デミウルゴスはナザリックよりそれなりに離れたとある土地にてちょっととした拠点を置いていた。

遊牧民族が使うゲルの様な形のテントの中で様々な生物の革とおぼしきモノを両

手それぞれ違うのを持ち何やら比べていた。

「ふむ……やはり、ただの獣の革ではスクロールには耐えられませんか……」

そう残念そうに呟いて革を丸め機の端へと寄せる。

現在デミウルゴスが行っているのはナザリックの支配者にして至高の御方々とナザリックの者らが崇拜してやまない存在の一人であるネームレスより命じられた消耗品であるスクロールの素材搜索。

サンプルとして周辺の様々な獣の革を使ってみたがどれもこれも仕込む魔法に耐えきれず焼け消えてしまっていた……が。

「ですが……この革はどうやら第三位階までなら込められるようですね」

そう言っていくつかの成功したスクロールとその素材となった革を手取る。

それは何やら獣の革とは思えない何処か違ったもの。当たり前だろう、何せその

革の持ち主、その種族は獣ではなく

「人間の皮……意外な価値だ」

人間の皮だ。無論、デミウルゴスもその部下も悪魔という人間など弄ぶ対象でしかなく今更、皮の一枚二枚剥いだところで忌避感などはない。

しかし、デミウルゴスとはある事に慄いていた。

「よもや、あの御方はこの事を知っておられたのでは……」

デミウルゴスは想起する。

自らに素材搜索を命じた際にネームレスが告げた言葉を。

素材サンプルにするのは消えても問題無い奴にしておけ

消えても問題無い者。すなわちそれは社会において悪とされ、消える事を望まれる者または消えた事が気付かれないような者。

つまりは盗賊などの悪人、スラムの片隅に転がっている浮浪者。

「我々異形種や亜人種、そして人間種にすら慈悲を向け安寧を齎す理想郷。ただ支配するのではなく………ああ、なんとという」

そして、何よりもその対象となる人間のほんの一部とはいえこうしてデミウルゴスら悪魔の嗜虐心を満たす事とナザリックの物資の為に使う事を許された。

そういった事からデミウルゴスはネームレスが人間の皮がスクロールの素材となる事を知っていたのでは？と考えそしてその叡智と慈悲に胸を打たれた。だがしかし、ネームレスとしてはそんな考えはなく単純にサンプルの獣がその周囲の環境や生態系に影響を及ぼす様なものじゃない、消えても大して影響のないそういうのにしておけよ、と言うニュアンスだったのだが深読み過大評価のデミウルゴスには察してもらえずガツツリと勘違いされている。

ほぼ間違いなくネームレスが聞けばその勘違いによるより深い崇拝に胃痛と吐血しかねないだろう。

「ええ、お任せ下さい。このデミウルゴス、モモンガ様ネームレス様の御期待に
えてみせます!!」

応えてくれるのはありがたいが、出来ればこうもう少し俺たちへの期待的なモノ
は抑えてくれると助かるんだが……。

そんなモモンガの声が聴こえてきそうだが、デミウルゴスにはそんな幻聴は聴こ
えるわけはなくモモンガとネームレスへの期待は深まるばかりである。

先にどちらが振るったのか刃は互いにぶつかり合い甲高い音をたてた。

そして互いに鏢迫り合う事もなくすぐさまその場を退く。しかし、そんなのはほんの一時でしかなくすぐに刃を振るい合う。

セレネが振るうアストラの直剣は地面を削りながら切り上げの一撃として迫り、ブレイン・アングラウスが振るう刀は大気を切り払いながら袈裟斬りの一撃として放たれた。

互いの刃と刃が打ち合い、またすぐに離れ別の一撃を放ち合い、三度打ち合う。

「ちッ」

これで三度ブレイン・アングラウスはセレネと刃を打ち合わせた。だからこそブレイン・アングラウスは理解したのだ、目の前の騎士は自分や宿敵であるガゼフ・ストロノーフに比肩しうる実力者なのだ。

だからこそブレイン・アングラウスはやりづらさを感じた。セレネがつい先程まで盗賊を挽肉にするのに使っていた武器、それは国宝などとは比べ物にならない程

の大業物であった。だが、それをしまつて鞘から引き抜いた剣はなんだ。

「よくて俺のコレに届くかどうかの剣だぞ」

確かにアダマンタイトが振るうに相応しい武器だが、先程の様な大業物を持つものが使うには些か格が足らない。強くなる為には秀才の努力をした天才たるブレイン・アングラウスの持ちうる観察眼はそう判断した。

そしてだからこそやりづらいのだ。

「(明らかにこいつは手加減している)」

こちらを侮り手を抜いているならその傲慢を嘲笑いその首をはねよう。だがしかし、同等いやそれ以上かもしれない実力者が手を抜いている状態で切り殺してどうするというのがだ。

そんなもの、自分が強くなる為には認められない。

「どうした！様子見か!?手抜いてんならさっさと真面目に剣を振れよ！」

だから、俺が強くなる為にお前は本気を出せ。そう吼える彼にセレネはその兜の下でほんの僅かに驚きの表情を浮かべて——そのアストラの直剣を鞘に納め新たな武器を取り出した。

まずは詫びよう。確かに私は貴公を下に見ていた、侮っていた、手を抜いていた……だが、そう吼えられたのなら抜いた手を戻さねばならないな

「はっ、好き勝手に言いやがって」

そう吐き捨てるブレイン・アングラウスだが新たにセレネが取り出した武器を見て鳥肌がたちはじめていた。

それは異形の剣だ。八つの枝刃に無数の棘を持つ黒い直剣。

まずそれは到底人間が振るうことなど許されないものだろう、きっと自分が握れ

ば即座に呪殺されそうな程の何かを纏ったそれに警戒する。

だから。

「殺られる前に殺るッ!!」

放たれる連撃、武技ではないがそれは常人では到底成せないもの。しかし、セレネはきちんとそれら全てに刃を滑らせて防いでいく。

連撃後の隙、それを見逃すようなセレネではない。連撃に刃を滑らせてから流れるように刺突を放つがブレイン・アングラウスは無理矢理に横っ跳びする事でその刺突から逃れ直剣よりややリーチのある刀で逃れる際に斬撃を放つが籠手を薄くかする程度に止まる。

ブレイン・アングラウスはそれに軽く舌打ち、地面を一度二度転がりすぐさま立って構え直す。

「分かってはいたが、奴は強い。身体能力だけの馬鹿じゃない、対人慣れしてい

る……いや、アレは戦士としての頂点に近い……だが、だからこそ俺はこいつに勝つ、勝ってみせる」

さて、どうするか

剣を引き、柄に添えていた左手を離し考える。現在セレネはガゼフ・ストロノーフよりもやや強い程度の力量で戦っているがそれでも決して侮らず半殺し程はするつもりで戦っていた。

だが意外にもブレイン・アングラウスが奮戦する為、攻め悩んでいた。少し力の天秤を動かせばこの奮戦も無くなるだろうがそれはブレイン・アングラウスが死ぬという事。そのためその選択肢はとうに切り捨てた。

では、どうするか。

なるようになるさ。

そう兜の下で笑ってその刃を振るう。

右からの薙ぎ払い、下段からの刺突、そこからの切り上げ、袈裟斬り、再度切り上げ。

鋒による刀身をずらす、斜め前へと逆に出ることで刺突の回避、切り上げに合わせる。刃を滑らせ袈裟斬りを避ける様に袈裟斬り、切り上げからの退避。

常人では理解出来ぬ剣戟が繰り広げられている。

互いに一瞬でも、否ブレイン・アングラウスはほんの一瞬でも気が逸れてしまえばその時点でもはや終わりと言うべきぶつかり合い。

そんな戦いにブレイン・アングラウスはこのぶつかり合いの最中に髪が白くなってしまうのではと、いや老人になるのでは？と考えてしまいそうになるほどの緊張をもって挑む。

次だ

「ッ!!」

言葉が呟かれたかと思えば、ブレインは大きく距離を取っていた。一体何が来たのかなど見てはいない、ただただ本能に従いその場から飛び退いたのだ。

何故、などすぐに気づいた。明らかに先程まで以上の威を滾らせ兜のスリットからまるで炎のような瞳が見えた。

もはや、なりふり構ってなどいられない。

「つう——」

刀を鞘に納め、その鏢に指をかける。すなわち居合いの構え。

瞬間、ブレインを中心として三メートル程の不可視の円形の領域が発生する。

これこそがブレインが宿敵ガゼフ・ストロノーフに勝つ為に作り上げたオリジンナル武技・領域。この領域内においてブレインは極限までに攻撃命中率と回避率、そして知覚能力を上昇することが出来る。

面白い

セレネにはその領域は見えない。だが、何かあるのは分かっている、だからこそセレネは一撃を放つのだ。

地面を蹴り、片腕での刺突。

先程までのブレインならば視認する前にその胸に刃が突き立てられていただろう。

だがしかし、知覚能力が極限までに上昇している今なら別なのだ。それこそ、その刺突が胸に触れる前にセレネの首を落とす一撃を放つ事が出来るほどに――

「秘剣――虎落笛」

第二の武技・神閃。神速の一刀を放つその武技と絶対必中の領域を合わせる事で成立する、対象の急所たる頸部を対象に知覚させる前に一刀両断するブレイン最強の武技。

居合切りであるそれは恐ろしい速さで鞘から引き抜かれそのまま直剣よりもや

やリーチのある刀の鋒が寸分違わずセレネの兜と鎧の繋ぎ目へと放たれて――

「は――？」

吹き上がる血飛沫。

ブレインの頬を濡らす熱い血潮。

熱を帯びる腹から右肩への一本線。

振り上げられた柄だけ握ったセレネの左腕。

直剣が貫いたのではない、領域ですら知覚できなかった一撃が己を切ったのだと理解し……………そこでブレイン・アングラウスはその意識を闇へと溶かした。

見事。ああ、貴公……………見事だよ

作者の中でアンリは能登さんボイスです。偽ヨセフカと同じ声優さんらしいので日本語訳なら能登さんやろ、ということ。

休息

ちよつと遅れましたね投稿。

風古戦場、風パが弱くて辛たん

これからどんどん暑くなってくぞお
るしふぁーの声には笑ってしまった

「むう……」

俺、モモンガこと鈴木悟、現状冒険者モモンとはある悩みを抱えていた。

なんやかんやで冒険者として先輩である銀級冒険者チーム・漆黒の剣と一緒にモンスター狩りをしようとしていたら、あの街エ・ランテルで有名なタレント持ちの

葉師ンフィーレアより指名依頼でこの葉草取りの護衛に来たわけだが……一つ問題が出来た。

いや、同じ魔法詠唱者で声も似てて名前も似てたからという理由でエンリ・エモットにカルネ村を救った魔法詠唱者モモンガだとバレてしまった事は……うん、そんなに問題じゃあない。

彼女には内緒にしておいて欲しいと頼んでおいたし、彼女も内緒にしてくれると約束してくれたし……で、その問題なんだが……。

「……やはり、無理ですか」

「ああ、無理っばい……」

トブの森にて現在依頼である葉草取りの護衛をしている俺たちだがせめて自分らも葉草取りを手伝おうとンフィーレアから葉草と取り方を教えて貰ったのだが……何故か、俺は葉草が摘めなかった。

え？パンドラズ・アクター？最初は摘めなかった癖に何か考え込んだと思った

ら摘めるようになってたよ！なんなんこいつ……泣くぞ

「……お前、どうやって摘んだ」

「恐らく取得しているスキルか職業または種族の問題かと思ひまして至高の御方々の中から指輪を装備出来て且つ森司祭等の職業をお持ちの御方の姿を取らせていただきます」

まあ、さらに鎧を装備出来る職業をお持ちであるという条件もありましたが、と笑うパンドラズ・アクターに俺はひとまず納得し少し考え事をする。

恐らく俺やパンドラズ・アクターが最初薬草を摘めなかったのはパンドラズ・アクターの言う通り職業やスキルの問題なのだろう。だが、それなら魔法詠唱者であるニニヤや戦士であるペテルが摘めるのは何故か？恐らくユグドラシルというゲームシステムの影響下にいた我々と違って彼らはそういう経験があった故に出来るのだろう。

ゲームが違うがなにかの行動についての熟練度により、より良い結果を出せるな

どそういったシステムを思い出せば納得出来る話だ。

経験を積む事で最初は出来なくとも段々と出来るようになっていく、熟練度がレベル関係無しにあるのならそれはきつと我々プレイヤーやNPCたちが限界を超えた成長を得ることが出来ることではないだろうか。

………アレエ？ そうなると焼死体がより強くなって爆走し始める未来しか見えないぞ。PVPはタイピングとか何とか言うあの人がもし、熟練度上げてこの世界特有の武技なんか手に入れたら……うわあ、えぐっ。

鬼に金棒じゃなくてたっち・みーさんにウルベルトさんになってしま……。

「モモン、どうした」

「ん、あ、いや、すまない。少し考え事をしていた」

危ない危ない思考の海にどっぷり浸かってたようだ。アクトに戻ったパンドラズ・アクターに声をかけられ現実に戻ってみれば既に葉草摘みは半分近く終わっていた。

どうやら、パンドラズ・アクターは俺や別の方で警戒しているルクルットの様に周囲の警戒に回ってきたようだ。

「それにしても災難でしたね。正体がバレるとは」

「お前、他人事だからって軽く見てないか？というか、お前創造主に対して軽くない？」

いや、ほんと。他のNPCたちに比べてもなんかパンドラズ・アクターはなんていうか気安い。つつい素が出る程度に気安いんだが……もしかして他のギルメンはともかく自分の創造主に対してはどのNPCもこんななのか？

いや……アルベドといいデミウルゴスといいセバスといい、こんな態度はしないだろう……多分。

「いえ、実はネームレス様に言われました。モモンガ様はナザリツクのシモベから寄せられる過剰すぎる信頼と言いますか期待と言いますかそういうったプレッシャー

に对应しようと自らを抑えられている、と。なので不肖、この息子パンドラズ・アクターはモモンガ様の為にこうかるーく接しています」

なので必要ならどつきます。そう漆黒の剣やンフィーレアには聞こえないように小さな声で俺に告げたパンドラズ・アクター。

ネームレスさんから貸し出された兜でその表情は見えないがきつと笑っているのだろう。……ああ、本っ当にネームレスさんがいてよかった……いや本当にありがとうございます。

なんか、パンドラズ・アクターの大仰な仕草やら言葉遣いをこう普通にさせてくれて………だけどきつと、パンドラズ・アクターはストレス感じてるんだろかな……俺が設定したとはいえ普段の振る舞いをするなって言われたわけなんだから………よし、ナザリックに戻ったらなんかしてやるか。これも支配者として必要な事だな。

………まあ、なんか、その支配者もといまとめるモノがつい昨日増える予定が出来てしまったんだが……いやいや、法国って………しかも神って……俺、ただ

のサラリーマンなんだけど、小卒のしがたない社畜だったんだけど……どうしてこうなった……とりあえずネームレスさんに投げつけよう。あの人ならなんとか出来るだろう多分。

「はあ……」

「で？名声の為に例の森の賢王とやらを呼ぶのは？」

「ああ、それは止めた。ネームレスさんがランクアップの為にチャンスを上手く作ると言っていたから……それに銀級の言葉よりアダマタイトの言葉の方が大きいからな」

切り替え早いなーと思いつつ、カルネ村で考えていた案を思い出す。

聞けばこのトブの森には森の賢王とかいう魔物がいるらしく、冒険者としての名声を勝ち取るべくその森の賢王を倒すか屈服させるかする予定だったのだが……その旨をネームレスさんに伝えたら、なんか普通に「銀級よりアダマタイトの推薦の方が良くないですかねえ……いや、別にカッコつけたいならどうぞ」って言われ

たからなあ……。。

アレだよなあ、プレイヤーから見れば初心者プレイヤーの前でそこそこの奴瞬殺して、それを自慢するカンストプレイヤーというなんか恥ずかしい光景だよなあ。

「なるほど、強さ自慢が恥ずかしいんだな、分かるよ」

「口にしなかったことを言わんでいい」

「あ、モモンさん、アクトさん、葉草は取り終わったので森を出しましょう」

と、どうやら、終わったようでニヤが声をかけてきた。俺はそれに軽く会釈し、パンドラズ・アクターを連れて彼らの方へ足を向ける。

それにしても、偉業を用意するっていうのは別に俺的にはいいけども……………
ネームレスさんだからなあ……………。

「むう……………新作の素材がなんか色々足りないな……………ちよろまかした分合わせても足

らない……どうするべきか」

「やはりマラソンか、私も行こう」

「焼死た院」

あのるし☆ふぁーさんとそれなりにつるんでいて無茶振りかますところあるからなあ、普段は趣味に全振りなロールプレイヤーで気配りもするけど、結構……アレなところあるからなあ。

変な無茶振りが無いことを祈っておこう。

「よろしかったのですか？」

ん？何がだ？

エ・ランテルに幾らかある中でも最高の宿屋である黄金の輝き亭、その宿屋の一角にある部屋にて一人の騎士に青年は疑問を呈していた。

普段装備している鎧は既に脱ぎ、この世界から見てもそここの私服に身を包んでセレネはナザリックのそれとは比べられないほど格の下がったソファアに腰掛けながら、何やら書類のようなものを書いていく。

「いえ、あのブレイン・アングラウスという男です。確かにあのガゼフ・ストロノーフと同格で人類の戦力としては申し分ありませんが……仮にも盗賊に与していた男、逃がしてもよかったですか？」

ああ、それか。そう呟きながら万年筆を走らせ書類から目を離さずに青年、クア

イエッセに告げる。

「アレは強くなるよ。流石に私たちにはいかないだろうが貴公らには届くだろうさ
「……我々にですか」

崩す。
流石に受け入れにくいその言葉にクアイエッセは顔を顰めるがすぐにその表情を

自分たちでは決して届かぬ存在、神たる御方がそうおっしゃるのならきつとそうなるのだろう。私如きではその理由は分からないが、神はそれを見抜いていらっしやる……おお、なんと素晴らしい事か。

と、まあ、自己完結し始めたクアイエッセをよそにセレネは先程から自分の背中与ソファアの間に入り込みセレネの背中に張り付いている人物に意識を向ける。

それで貴公はいつまで私に張り付いてるつもりだ？

「貴方の子供を孕むまで」

ちっ、死ぬまで離れないのか

死んでもお前を抱かん、そう宣言してるに等しい言葉を受けても番外席次は動か
ず離れない。

そんな彼女にため息をつきつつ書き終わった書類を傍らに待機していた影の悪魔
に手渡し、腰を上げる。無論、番外席次は張り付いたままである。

……………降りろ

「嫌だ」

降りろ

「孕ませて」

剥がそうと番外席次の腕を掴むが流石はレベル九十代、ステータスダウンにより
殆ど同等のセレネではなかなか手古摺るようでその表情は引きつり、それを見てい
るクアイエッセはオロオロしていた。

だが、そんな二人など一切気にせず番外席次はセレネの首元に顔を埋めたままである。

「か、神……………」

こ、これ以外に出るわけにも行かんしなあ……

どうにかして引き剥がさないとなあ、そんなふうには愚痴りながらも一度ソファ―に腰掛けようとして――

む……

伝言が繋がったのを感じ取り、指を頭に当てる。

『私だ——誰だ』

『はっ、アルベドでございます。御忙しい中、御身の時間をしばし頂くことを御許

してください』

『アルベドか……なんだ』

アルベドからの伝言に珍しいなと感じつつ、用件を聞く。

『ネームレス様が御命じになられた童王国の周辺ビーストマンの調査ですが……どうやら、おおよそ一ヶ月以内に童王国に攻め入るようです』

『ほう……それは面白い、予測規模は？』

『報告された時点で数万……少なくとも五万は超える見込みです』

『なるほど、前回のは本番前の斥候じみたものか……：……ならば、利用するしかないだろう』

そう、アルベドに告げて妖しげな笑みを浮かべるセレネ。それを見たクアイエツセは背中に冷や汗が垂れるのに嫌な予感がしつつも、それが人類にとって良い事ではあるのだろうと察し、ここにはいない最高神官長らに後を任せ自分はただ仕える

ことを決めた。

悲しい話だ。読者の表によって竜王国により大きな災厄が……

明後日……2章が楽しみです。オフエリアを泣かせたい、屈服させたい、調教したい！（欲望だだ漏れ）

心をもっかい折って依存させたい

前兆

2章クリアしました。楽しかった。屈服？何それごめん流石にやれないわ、あの娘に。

例のキャスター、真名予想したんですけど、半分あって半分違って笑った。北欧の異聞帯だから、あっちじゃなくてこっちだろ……と思ったんですがねえ

ちよいと今回は短いです

瞬間、幾度もの金属音が路地に響き渡る。

「チッ、いったいどんな素材で出来てんだッ!!」

エ・ランテル、バレアレ薬品店の裏口付近にて二人の人物が激突していた。

片方は金髪ボブカットの恐らく二十歳前後であろうステイレットを操る女戦士。それに対するのは竜を象った灰色の全身鎧を纏う重戦士ことアクト。

常人では簡単には目で追えない速度で放たれるステイレットをアクトは尽くその大盾で防いでいく。

謎の女戦士の連撃を防ぎつつ、アクトことパンドラズ・アクターはこうなった経緯を思い浮かべる。

トブの森での薬草採りを終えたアクトらは多少の雑談混じりで陽が落ち切る前に無事エ・ランテルへと帰還した。

漆黒の剣のリーダーであるペテルとモモンはそのまま依頼から戻った旨を伝えに一行から別れ冒険者組合へ、アクトと漆黒の剣の三人はインファイレアと共に採取した薬草をバレアレ薬品店に保管するために運びに向かった。

道中何かあるわけもなく、そのままバレアレ薬品店の裏口へと辿り着き、アクト

は葉草の入った箱を持ち上げて——先に裏口から店へと入ったンフィーレアが唐突に声を上げたのを聞きその手を止めた。

すぐさま漆黒の剣の三人と共に店へと入れれば、そこにはンフィーレアと彼の前にいる黒い外套で身を包み片手でステイレットを遊ばせた金髪の女。まるで猫を思わせる嗜虐的な笑みとンフィーレアの反応から決して知人では無いことを悟ったアクトはすぐさまンフィーレアの前に身を出し、同時に放たれた一撃を受け止める。

如何に変身対象……ネームレスの八割程の性能しか出せないとしてもワールドチャンピオンの一角の八割、いやそもそもレベル三十代が英雄級と呼ばれているこの世界においてそうそう彼らを脅かすものはなく。現地人にしてはかなりの速度の一撃にアクトはまず盾で上手く滑らせ、伸びきった女戦士の腕を掴みそのまま投げつけた。

手加減したとはいえ上位者のそれにより、そのまま店の窓を突き破って路地へと出た女騎士はさながら猫のように着地し、苦々しくアクトを睨みつける。

ここで漸く状況を理解したのか、漆黒の剣の三人はアクトの名を呼びかけ、それにアクトは三人にンフィーレアを任せ自分も路地へと出ていき——こ

うして現在に至る。

「オラァ!!」

「……………」

女戦士との戦いが始まって暫くは、獲物を狩るが如き嗜虐的な笑みを浮かべていた女戦士だが、自分の攻撃が尽くアクトに防がれるという事と熔鉄の童狩り鎧にかすり傷とも呼べない僅かな傷しか付けられない事にだんだんと苛立ってきたのか、今ではもう当初の余裕のある連撃は形を潜め、余裕のない歪んだ表情のまま繊細さの欠ける攻撃をし始めていた。

（ふむ……金髪に黒い外套、そしてステイレット……最初は偶然と思っていましたが、この現地人にしては高い能力………ネームレス様が仰っていたこの街に潜んでいる、この世界の実力者ですか）

アクトことパンドラズ・アクターはモモンガと共に冒険者として活動する為にナザリックを出る際、あらかじめネームレスが調べ提出したエ・ランテルの実力者の調査書に記載されていた人物と目の前の女戦士が同一人物だと理解し、どうするかを考えていた。

（レベル的にここで倒すのは正しく赤子の腕を捻るより簡単でしょう………ええ、物理的に簡単ですね。何せ、やろうとすればほぼ間違いなくそれを止めようとするシモベがいますからね！）

そんな冗談めかした事を考えながら、目の前の女戦士をここで倒した際にどのようなメリット及びデメリットが生まれるかを考える。

少なくとも女戦士とその仲間が企む何かを頓挫させられるだろう、しかしデメリットとしては女戦士の裏にいるかもしれない存在の情報が知れないこと。逃せば襲撃者を逃したという汚点は付けども何か起きた際に真っ先に向かい解決すればい

い……

(さて、どうしましょうか……)

自分だけの失態ならば我慢は出来るが、創造主であるモモンガにもそれが波及する可能性を考え出来うる限りここで捕縛する事を決めて――

「ああああ!!??」

「――何ッ」

「あはっ」

唐突に店の中から響いたニニヤの悲鳴にアクトはそちらへ注意が向いてしまい、その隙を突くように女戦士はその場から飛び退いて近場の壁を蹴り家屋の屋根へと飛び乗る。

そんな女戦士にアクトは舌打ち、追撃をかけるのは諦める。無論、その気になれ

ば一瞬で家屋を傷つけず且つ一撃で殺せるが重戦士がそんな速くに動いたのを誰かに見られれば面倒ごとになりかねないと判断した。

「ねえ、アンタ名前は？」

「……アクト」

「ふうん。ま、覚えておいてあげる……共同墓地に來い、そこで殺してやるよ。このクレマンティーヌ様が！」

一瞬猫なで声でアクトを苛つかせたとせば、次の瞬間にはその表情を歪ませ憎々しげにアクトを睨み殺害予告を告げる女戦士、クレマンティーヌ。

そんなクレマンティーヌにアクトは大斧を向けて受けて立つ旨を告げる。なお、内心パンドラズ・アクターはわざわざ敵に名前と拠点をバラしたクレマンティーヌに呆れていた。

（いや、普通……そこはプライドが許さなくとも情報は隠すべきなのでは？……

ちなみに私が同じ立場なら虚偽の情報を匂わせるのですが………この方、プライド優先にしていますね)

そのまま夜の闇に消えるクレマンティーヌに心中でダメ出しをして、つい先程の悲鳴を思い出しパンドラズ・アクターもといアクトは店の中へと駆け込んだ。

「それで、どういう状況だ」

クレマンティーヌによるバレアレ薬品店襲撃からおよそ十分も経っていない頃、バレアレ薬品店にモモンガことモモンとペテル、そしてこの店の主人でありンフィーアの祖母であるリイジー・バレアレが店へと姿を表し、モモンが三人を代表して店内の光景を見て声を漏らした。

何やら溶けたような痕がある床、破碎した籠、そして微かに臭う腐乱臭。何よりも両腕の皮膚が溶けかけたかのような有様のニニヤの姿にポロポロなダインとルクルト、そんな三人を介抱するアクト。ンフィーレアの姿はここにはない。

そんな光景に狼狽する二人を無視して聞いたモモンにアクトは申し訳なさそうな声音で仔細を話し始めた。

「……ここに薬草を保管しに来たのだが、我々が外にいた際に店内からンフィーレア氏の叫び声が聞こえてな、急いで入ってみれば武器を持った妖しげな女がいた」
「それで……？まさか、お前がいたのだから」

「……女を咄嗟にその窓から外へ投げつけてな、ンフィーレア氏に手は出させないようンフィーレア氏を漆黒の剣の三人に任せ、私は外でその女とやり合ったのが……」

途中で話を区切るアクト、それを引き継ぐように今度は比較的軽傷のダインが口を開いた。

「一度、ンフィーレア氏を連れて冒険者組合へと移動しようとしたのであるが、どうやら仲間が来ていたようで……数人の魔法詠唱者に襲われニニャは腕を我々二人は吹き飛ばされ………面目ないのである」

意気消沈した表情と声音の言葉にペテルもリイジーも目を見開く。ンフィーレアが攫われたというショックが大きすぎたのかリイジーは膝をついてそのまま倒れ込んでしまったのを隣にいたペテルが受け止める。

「……アクト、その女は何か言ってたか？」

「墓場で待ってる、とき。どうやら、まともな一撃を入れられなくて相当御立腹のようだ。虚偽の情報なんて考えないでいいほどプライドを優先していた」

「そうか………なら行くぞ」

「ああ」

まるで友人の家に行くかのような気軽さでモモンは提案し、アクトは頷いた。そんな二人にペテルは驚き何かを言おうとして、その前にモモンはペテルへ視線を向けて口を開いた。

「我々の依頼者を攫った、こんな馬鹿にするような真似を許せると？」

その視線と言葉にペテルは何も言えず、動けず、そんなペテルから視線を外したモモンとアクトはそのまま店を出ていき、そのままペテルの視界から消えた。

……そう、か。

ネームレス直下の諜報役兼護衛である八肢刀の暗殺蟲が告げた言葉にセレネは頷き、腰掛けていたソファから立ち上がる。

その際にいまだ背中に引っ付いていた番外席次を若干無理矢理引き剥がし、冒険者時に使っているアストラシリーズを着込んでいく。

背負うのは冒険者としての異名『白晶』の元となった大剣。

「神よ……」

クアイエッセ、私は冒険者としての働きに向かう……貴公らは待機せよ。何、下手人は分かっているし——これは我々が解決する案件ではない

「御心のままに」

止めようとしたクアイエッセに先んじて釘を刺し、脚に引っ付く番外席次の首根っこを掴んで適当にソファァーに放り投げ部屋の扉を開ける。

番外席次、とりわけ貴公は部屋を出るな。もしも出て追いかけてきた時は………
………ともかく、来るな。分かったな？

「はあい」

番外席次へと念押ししてからセレネは部屋を後にして、数秒後。

ふと、クアイエッセは何かを思い出したかのように軽く天井を見上げ——

「あ、愚妹」

神降臨で世界の彼方まで吹き飛んでいた今回の任務の内容の一つをポロリと口にした。

Twitterでも言ったんですが、この作品がだいたい原作でいう大虐殺辺りまで上手く進めたら並行してシンフォギア原作で別の書きたいと思ってます。チーズにするかは未定、チーズにするならもしかしたら先に短編の方にプロローグ的なものを投稿するかな？

死の螺旋

ちよいと遅れましたが投稿です。

風古戦場はあまり回れませんでしたね……

エ・ランテル共同墓地に恐怖の叫び声が上がった。

その叫び声の主は共同墓地と市街地を分ける門にて職務を行っている衛兵たちのもの。何故に恐怖の声を上げているのか、それは簡単なことだろう。墓地で恐怖するなど死体が動いたか幽霊が湧いたかの二択ぐらい。

そして、今回は前者だ。

墓地から、奥から夥しい数のアンデッドが湧き出し、門へ目掛けて来たのだ。
スケルトン、動死体では飽き足らず他にも食肉鬼グール、内臓の卵オーガン・エッグ、血肉の大男ブラッドミート・ハルク、骸骨弓兵など多種多様のアンデッドが湧いている。

如何に衛兵たちが門及び壁上から攻撃を加えていても、アンデッドらの数もあり次第にその数を減らしていく。

「だ、駄目です。兵長!？」

「アンデッドの数が多すぎて——アァッ!？」
「なっ!？」

悲鳴をあげるように現状報告をした衛兵の一人が内臓の卵から飛び出た腸にその首を巻き取られ墓地へと引きずり込まれたのを見た衛兵長は部下が死んでしまうことに嘆きと憤怒に顔色を染めて、別方向から伸びてきた内臓の卵の腸を素早く切り裂く。

「くっ……このままでは門は破られこいつらが街に……いっただうすれば」

「へ、兵長!？」

「どうしたッ——な」

部下が何か恐ろしいもの——眼下の状況ほど恐ろしいものは無いが——を見たかのように声を漏らし、衛兵長は部下が震え青褪めながら指差した場所、ア
ンデッドらの群れのやや奥を見て絶句した。

いっただい何だあれは。

衛兵長は当たり前に、他の衛兵たちもそれを見てそう思った。

それは彼らが一度たりとも見た事がない化け物だ。

二、三メートルはある体軀にその四分の三近くの大きさなタワーシールドと一メートル少しはあるフランベルジェを持ち、血管のような紋様があちらこちらに走っている棘が所々に突き出た黒い鎧に悪魔の様な角を側頭部から生やした同じく黒い兜をつけた怪物。フルフェイスではないのか、兜の顔は開いており眼球の無い眼窩に煌々と揺らめく赤い光が灯っている腐りかけた動死体の顔が見える。

まさしく未知のアンデッド。

死デス・ナイトの騎士と呼ばれるこのアンデッドは決してこの世界に存在しないという訳では無いが伝説級である為にこうして未知のアンデッドとして扱われ、だからこそ衛兵たちにとってもない恐怖心を抱かせた。

「アンデッドの騎士……」

「み、見たことないぞ、あんなの……」

「あんなのが来たら……もう、お終いだ……」

恐怖心だけではない、その目の色には絶望と諦めの色が混じっている。もはや、抵抗する事すら諦めた彼らはその手に握っていた槍を弓を剣を落とし、床に膝をついて――

「死の騎士か、問題ないな」

「ああ」

軽く、当たり前のように放たれた言葉がやけに強く彼らの耳に響いた。

そして、次の瞬間には何かが一つ自分たちの頭上を通して、墓地へと降り立った。

「エレクトロ・スフィア
電撃球」

「!？」

着地と同時に灰色の全身鎧に大斧を持った重戦士がその大斧を振るえば周囲のアンデッドが軒並み破壊され、それにより生まれた空白に降り立った漆黒のローブを着た魔法詠唱者により放たれた雷撃の球は死の騎士へと着弾し、その身体を殆ど破壊した。

しかし、どうやらそれだけでは死ななかつたのか、邪悪な笑みのようなものを浮かべた死の騎士はその手のフランベルジェで魔法詠唱者を殺す為に足を前に踏み出し……膨張した雷撃がその肉体を完全に滅ぼした。その際に周囲の何十ものアン

デッドを巻き添えにして。

「は？」

「……夢、か？」

「何が……いったい」

突如として現れた未知のアンデッド。生きてきた中で最も強く恐ろしい存在が現れたと思えばそれがたったの二発……いや正確には一発の魔法で消し飛んだという事実に目の前の光景や状況が夢なのでは？と考え始めてきた衛兵たちだが、衛兵長はすぐに正気になり慌てながらも呆ける彼らへと指示を飛ばしていく。

「お、お前ら！武器を拾え！あのやばいのは消し飛んだ！」

あまりに呆気なかったが決して死の騎士が弱い存在である、とは衛兵長は勘違いしなかった。あの魔法詠唱者が強すぎるのだ、と理解した。

少なくとも魔法の知識を聞き齧った程度にある衛兵長は、死の騎士に使われた魔法が第三位階の電撃球だというのは理解し、且つ強化してもないのにあの馬鹿げた威力を見たのに侮れるはずがないのだ。

急いで墓地の二人の方に視線をやれば既に奥へと進む後ろ姿しか無く、

「……俺らは伝説の一端を見たのかもしれん」

慌ただしく動く部下達を余所に衛兵長の呟きは墓地に消えていった。

ああ、まったく。

エ・ランテル市街地。その一角で、いったいどうやって共同墓地から出てきたのかわからない何体ものアンデッドたちが現れていた。

墓地と市街地を分ける門にも現れていた死の騎士が二体、スケリトル・ドラゴンが数体、そしてスケルトンや動死体が数十体近く。

スケリトル・ドラゴン自体はミスリル級がきちんと準備を整えチームで挑むならば勝てるだろう、スケルトンや動死体は言うに及ばず……しかし、その数が問題だ。何より死の騎士というこの世界において伝説級のアンデッドが二体。その二体から溢れ出る負のオーラに集まった冒険者たちも冷や汗を垂らし、数歩無意識に後ろへさがっていた。

そんな彼らを近場の建物の屋上から見下ろしているセレネは手を兜の額に当てて首を振っていた。

いや、確かに死の騎士はこの世界じゃあ伝説級だが………はあ、勝てなくとも

挑む気概は欲しいものなんだが……

レベル三十五を二体はやり過ぎたか。そう呟いて、大剣の柄に指を這わせる。

そう、何を隠そう。この眼下のアンデッドや門に現れた死の騎士はセレネが用意したものであった。その理由としてはまず、セレネが知る原作ではこの日と同日に商人として調査をしていたセバスとソリュシャンが乗った馬車が盗賊に襲われるが武技を使う人間の捕縛を命じられたシャルティアに蹂躪され、アジトももちろん蹂躪され……最後に破滅の竜王の調査に赴いていた漆黒聖典が装備していた世界級に
よりシャルティアは洗脳。

そして、その討伐依頼が冒険者組合で組まれ、モモンことモモンガがシャルティアを打ち倒し結果としてアダマンタイトになる——が本来の流れであったがしかし、セバスやソリュシャンを襲うはずの盗賊団が既になくなればシャルティアが漆黒聖典と相対する状況はない。ならば、シャルティア討伐も無いためにモモンガのアダマンタイト昇格は無くなる。

それを考慮し、セレネは今回のブローラーノーンによるアンデッド大量発生を利用

したのだ。

一応、殺しはするなって言っておいたし……スケルトンや動死体は巻き込んでい
いって言ったからなあ。

さて、どうするか。ちらりと墓地の方向へと視線を向けて、すぐに大剣を挿み屋
根を駆け出し眼下のスケリトル・ドラゴンへと飛び込んだ。

「モモンガ様」

「ああ……どうやら、セレネさんの事前情報通りのようだ」

一時的に人化の指輪を外し、アンデッド特有の闇視を発動して墓地の奥を見ればネームレスさんが調査して報告してくれた通り、何やら神殿のようなものがあったその前に複数人のローブを着込んだ怪しげな人間が何かをしている。

確かズーラーノーンだったかな？

アルベド曰く死霊ネクロマンサー魔術師のカルト組織とか何とからしいが………あれ？死霊魔術師の最上位な俺がオーバードの姿でいけば終わるのでは？

「モモンガ様、お言葉ですが今回は冒険者としての地位を高める為………それはやめておきましょう」

「いや、お前何ナチュラルに俺の心読んでるの……」

「息子でございますから」

え、いや、それ理由になってないだろ。

……はあ、まったく。それでどうするか。

「まあ、アレらを倒すのが正解なのでしょうが……」

「……ああ、お前が戦った……戦ったとは言えんか。ともかくクレマンティヌとかいう女はお前に任せる。あの魔法詠唱者は私が適当に相手をしよう」

「一撃で終わらせるのですぐに戻りますよ、モモンガ様」

まあ、一撃だよな。

さて、行くか。私は人化の指輪を再び付け奴らのもとへ向かって歩き始めた。

今回も短かったですね。戦闘は長くしたい……かもしれない

雷撃

前回投稿からそこそこに間が……

シグルド当たりました。やはり単発か

ところで今年の水着はジャンヌだそうですが……滾りますなあ

霧と夜の闇が満ちる墓地の奥、謎の神殿のようなもの前で数人の怪しげなローブを着込んだ者らが何やら儀式の様な事を行なっていて——その中の一人がローブのフードを被っていない禿頭の男へと声をかけた。

「来ました、カジット様」

「……ふん、来たか」

カジットと呼ばれた禿頭が視線を動かせばその先、街の方向から二人の人影がやってくる。片方は全身鎧、片方はローブ、両方共に銅級のプレートカッパを付けた冒険者。

カジットはそのプレートに怪訝な表情をする。

最下級、すなわち銅級の冒険者がたったの二人だけであのアンデッドの群れをどうにか出来るものか、と。カジットとしては来るのはこのエ・ランテルに最近現れたという竜退治を成し遂げたアダマタイト級冒険者だろう、と考えていたが来たのは銅級。

首を傾げるがすぐにどうでもいいと考える。

「やあ、今夜はいい夜だな」

「まったくだ、かび臭い儀式をするには惜しくないか？」

さながら茶を誘うかのような気軽さで告げられた言葉にカジットは苛立ち気に言葉荒らげる。

「アンデッドの群れはどうした」

「吹けば散るような脆弱さだ」

「全部吹き飛ばしたに決まってるだろう？」

さも当然のように告げた二人にカジットは見え透いた嘘を、と零し二人の冒険者を睨みつける。

恐らくどこかに伏兵が潜んでいて、目の前の二人は陽動なのだろうとあたりをつけて。

「ふん、貴様らなんぞにそんな事が出来るわけがない。どうせ、伏兵がいるのだから？」

「フッ、信じるも信じないもそちらの自由だ。無論」

「すぐに理解するが、な——」

瞬間、魔法詠唱者の手元に稲妻が迸り、カジットらへと襲いかかった。

それに気がついたカジットはすぐさま近くにいた配下の襟首を掴み、自分の前へと突き出す。その際に生まれた反動を利用して他の配下からも充分に距離をとって

—— 恐らくは雷ライトニング撃であろうそれは配下たちを炭へと変えた。

第三位階にしては威力があるそれにカジットは二人のプレートがこちらに対する偽装工作と見抜き—— そんなわけはない—— 内心舌を打ち、声を荒らげる。

「クレマンティーン！ 貴様の出番だぞ！ 殺せ！」

カジットの叫んだ名前に冒険者の重戦士は一瞬、その手の大斧で反応したがそんなことに気がつくカジットではない。

「カジっちゃんさあ、私に中にいろって言ったくせに出すんだア」

「ふん、ワシだけでは時間がかかると判断しただけだ。貴様がいれば無駄に時間もとられんだろう」

「そりゃあそうだろうけどさあ。まっ、別にいいけどね」

神殿の内部から姿を表したローブを着込んだ金髪の女、猫を思わせるその嗜虐的な表情は間違ひなくその女がつい少し前にアクトが逃した女戦士クレマンティーヌだと理解させ、アクトは武器を構える。

「ああ、約束どおり来てくれたんだア……ふうん、今度はお仲間と一緒に一緒お？んじゃあ仲良くあの世に送ってやんよォ！」

「ぬかせッ」

嗤いながら一気に距離を詰め、そのステイレットでアクトを殺そうと鎧と鎧の繋ぎ目へと高速の突きを放ってきたクレマンティーヌに対して、アクトはその大盾を

上手く使いその刺突を弾く、そしてそれを皮切りにクレマンティーヌはアクトの大斧の間合いを潰すようにアクトに張り付きながらの攻撃を始めた。

無論、モモンはそれを見過ごすほど甘くはない——がそんなものはカジットとて同じだ。

「アシッド・ジャベリン酸の投げ槍」！

「ショック・ウェーブチツ、衝撃波」

クレマンティーヌとアクトの距離を離そうとモモンが魔法を使おうとすればすぐさまその隙をついてカジットが魔法を先んじて放ち、クレマンティーヌへ放とうとした魔法でカジットの魔法を防ぐ。

それを尻目にクレマンティーヌは曲芸師のような動きをもって着実にアクトへと攻撃を打ち込んでいく。

「マジック・アロー魔法最強化・魔法の矢」！

「ファイヤー・ボール火球」

カジットが新たに魔法を唱えればカジットの周りに四つほどの光弾が現れ、モモンへと殺到する。だが当たり前のようにモモンはそれを人の胴ほどはある火球で迎え撃ち、四つの光弾を飲み込む。

その様を見る前にカジットはその場から距離を取り、すぐさま新たな魔法を紡ぐ。

「シールド・ウォール魔法最強化・盾壁」

それにより不可視の壁がカジットの前面に出現し——その次の瞬間にはカジットの魔法の矢を飲み込んだ火球が炸裂、内部に溜め込んでいた火を撒き散らした。

「ぬううう!!」

「存外、手こずるな……」

事前に発動しておいた盾壁により、炸裂した火のダメージを減らしたもののカジットは身体の所々に大きくはないが火傷を負い、それを見ながらモモン——モモンガはあくまで現地人の中でそこそこ強いだけで自分からすれば雑魚同然という判断を切り捨てた。

確かにレベル百からすれば弱いが、それでも経験がある、実力がある。何もレベルで強弱を判断するものではない、とモモンガは判断しその上でカジットを倒すと決めた。

「魔法最強化・雷げ——!!」

その為に最強化した魔法を放とうとして、何かを感じ取ったのか唐突に魔法の詠

唱を止めその場から飛び退いた。

その判断は正しかったのか、次の瞬間モモンがいた場所に何か勢いよく叩きつけられた。

「何……スケリトル・ドラゴンだと?」

現れたそれを見れば無数の骨が集まりドラゴンの形をしたアンデッド。スケリトル・ドラゴンがその尻尾を叩きつけており、モモンは面倒だと思いつつもそれごとなぎ倒すと考える。

「そうだ、魔法に対して絶対耐性を持つスケリトル・ドラゴン!魔法詠唱者にとって天敵である此奴を——」

「チッ……」

カジットの後方、神殿のような建築物の上空から更に二体ものスケリトル・ドラ

ゴンが降り立った。

つまるところ、三体ものスケリトル・ドラゴンがこうしてモモンの前に立ちはだかった。

この世界において魔法とは神話でも見なければ早々第六位階以上という魔法は無い。現地人では帝国のフルーダと呼ばれる魔法詠唱者が第六位階に到達しているが、しかしスケリトル・ドラゴンには第六位階以下の魔法に対する耐性を持っているためにこの世界では実質的な魔法に対して絶対的な耐性を所持している、と言っても過言ではない。

だが……………

（スケリトル・ドラゴンは別に絶対耐性じゃないんだが……………ああ、そう言えばこの世界第七位階なんて神話レベルだったかあ）

「行けいッ！ 奴を踏み殺せ!!」

「カジットの指示に応えるように咆哮を上げてモモンへと殺到する三体のスケリトル・ドラゴンにモモンは飛行を発動し、するすると攻撃を回避していく。

その傍ら、モモンは視線を自分の相方であるアクトへ向ける。

「で？ どうした」

「クソが！ 硬えんだよ!!」

超至近距離で刺突を繰り返すクレマンティーヌに体捌きで鎧の隙間への攻撃を上手く弾いていくアクト。

オリハルコンコーティングされたスティレット、というこの世界ではそれなりの武器とクレマンティーヌの常人離れた身体能力であっても凹みもしないアクトの鎧にクレマンティーヌは苛立ちを隠せず、アクトは余裕の態度である。

「さて、そろそろ煩わしい、なっ！」

「ッ———!？」

唐突にアクトの手がクレマンティーヌの腕を掴んだと思えば、そのまま投げられる。さながらそれはつい少し前、クレマンティーヌがバレアレ薬品店を襲撃した際にアクトにやられた事と同じようなもの。

投げ飛ばされた勢いが強いのか上手く体勢が立て直せないクレマンティーヌは空中で苛立ちを露わにして、

「ツア!？」

「いや、おい」

「なっ!？」

モモンを襲っていたスケリトル・ドラゴンのうちの一体の頭に激突しそのままその頭部を破壊した。

スケリトル・ドラゴンに激突した際にクレマンティーヌはややダメージが入ったのか、腰元から取り出したポーションを飲み、スケリトル・ドラゴンの首へと飛び

移りその場で何やら片手でステイレットを持ち女豹のようなポーズを取ってみせる。

アクトとモモンはすぐさま、それが本気の一撃の予兆だと理解しアクトは武器を握る手を強め、モモンはすぐさま魔法を発動できる様に準備をする。

「ぶっ殺す——〈疾風走破〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉」

「武技……か」

次々と発動していく武技にカジットはクレマンティーンの勝利が確定したことにため息混じりに呟き、自らも早々に決着を付けるためにモモンへ視線を向け、仕留める隙を窺う。

「死ねッ！！！」

弦につがえた矢を引き絞るように身体を引き、その力を限界まで溜め込んだ瞬間

にクレマンティーヌは撃ち出された。その際にクレマンティーヌの脚は足場であったスケリトル・ドラゴンの首を粉碎しながら。

魔法詠唱者であるカジットでは決して目に追えない英雄の領域に踏み込んだ存在の全力の一撃、避ける所か防ぐ事すら出来ぬソレはアクトの身体を容易に粉碎する様をカジットは思い浮かべ——

「へシールドアタック」

「は」

それに合うように突き出された大盾はクレマンティーヌの一物をへし折り、ありえないそれに目を見開いたクレマンティーヌを余所にアクトはその竜狩りの大斧を両手で持ち掲げ、雷撃が迸った。

激しき雷撃迸る大斧は古竜の体躯を破壊する——無論、型落ちでしかないそれにそこまでの力があるのかは不明であるが……たかだか英雄の領域程度に踏み入っただけのただの人間を討つにはあまりにも、あまりにも強過ぎる。

「〈戦技・落雷〉」

大盾でタイミングを合わせ防がれたクレマンティーヌ、その硬直は長くクレマンティーヌ本人も掲げられた大斧から目が離せなかった。故に逃げる事は不可能、大斧は振り下ろされクレマンティーヌの肉を切り裂きその雷撃がクレマンティーヌの肉を焼き焦がした。

「な、な、な……」

「と、言うわけだ。こちらもこれで終わらせよう」

クレマンティーヌの死を見て言葉が出ないカジットにモモンは軽く笑みを浮かべアクトの大斧同様雷撃を手に纏い、詠唱する。

「〈チェイン・ドラゴン・ライトニング連鎖する龍雷〉」

手からのたうつ龍の如き雷撃。第六位階以下の魔法に対して耐性を持つスケリトル・ドラゴン、その耐性を超える第七位階の魔法はそのままモモンより放たれ、そのままモモンのそれに気付かずにカジットはスケリトル・ドラゴンらと共に消し炭と化した。

「……ふう、アレだな。こうしてある程度縛りがあるとなかなか厄介に感じるな」
「それでも、飛び回って仕留めにくい虫程度の厄介さですが」

モモンガの言葉にパンドラズ・アクターは言葉を加える形で首肯し、この墓地に佇む神殿のような建築物へと入っていった。

ろくに活躍出来なかったスケリトル・ドラゴンさんたち

「[[[(、・o・、)]]」

今回は時間がかかり何か変な気もしますが……そこは目を瞑っていただけで……
ところでネームレスがダクソロールじゃなくてブラボロールだったら、どうなる
のかと考えたら法国がエグい……恐ろしくなります

後日談

様々な予定が重なり、なかなか執筆時間が取れずこうして投稿が遅くなりました。待っていた皆さんにまずはすいません。

とりあえず今週からはある程度時間が取れるので更新を頑張りたいと思います。

嗚呼、ここは何処だろうか

ろくに声が発せず且つ動けない中、私は靄がかった視界をぼんやりと見つめる。ここは何処なのか。ぼんやりとした視界が映すのは石室……ひんやりと涼しく決して薄汚くない場所……何処かの牢屋なのだろうか……いや、私はいったいどうしてこんな所にいるんだっけ？

……ああ、確か……法国で人形から額冠を剥いで発狂させたんだっけ……うん、その後はどっかの聖典が追っ手になって……確か、そうエ・ランテルのカジッチちゃんの所に行っ

「ア、ああ……!!」

そうだ。そうだ。そうだ。そうだ。

私は、私は、私は!!あの時、カジッチちゃんの計画を手伝ってあの『どのようなマジックアイテムも扱える』という破格のタレントを持った薬師を攫って、それでエ・ランテルの共同墓地で私は……あのいけ好かない全身鎧の大斧野郎と戦ってそれ

「おや、漸くお目覚めかな？」

「ッ」

石室に響く私以外の声。

声音から恐らく男、そこそこの年齢であろう男だが……明らかにこちらを見下している奴の声だ。私は痛む身体……と言っても何故か首ぐらいいしか動かせない為、無理矢理その声のする方へと首を動かし視線を向ける。

臆気な視界、そこに映るのはオールバックの黒髪に日焼けしたような肌で丸眼鏡をかけた……何やら仕事の出来る男という風体な男。それに加えて白い装束に身を包んだ烏の嘴を思わせる仮面を付けた何かと腕が太く全身の肌が乳白色に加えて体にピッタリとした黒い革の前掛けに頭は隙間が一切ない同じく黒いマスクを付けた二体の何者か……。わかる、経験上これらがなんなのか分かってしまう。

「あ……く、ま」

「ほう、どうやら現状が理解出来ているようだ」

私の掠れた声で零れた奴らの正体に丸眼鏡の悪魔はまるで問題に正解した生徒に教師が向けるような笑みと言葉で私を見る。

いったい、どういう事だ。死後の世界だとも言うのか!?
そんな私を奴らは嘲るように見て……その表情を正した。

「……さて、無闇矢鱈に騒ぎ立てないでくれたまえ?我々としては君たち人間の悲鳴は実に愉快であるが………至高の御方の前に我々の趣向は無視すべきものだからね」

至高の御方?なんだ、それは。こんな悪魔どもが至高と平伏する何かが存在すると?馬鹿げてる……こんな、どう考えても私じゃ勝てないようなバケモンの上位者なんて——

そこまで考えて私は、自分の元隊長とあのバケモン女の事を思い出した。
法国の切り札。最強の人類。

ならば、アレらに類する神人か何かがこれらの裏にいるのだろうか。

「ああ、ああ………!」

すまない。待たせたな

「いえ、そのような事は」

また、誰かが来た。

臆気な視界に姿を現したのは……銀色の騎士風の誰か。

まるで英雄が討ち倒した獣の皮を纏うように両肩を覆う毛皮、腰に下げた二本の剣。その佇まいから間違いないくあのバケモン女に近しい力を持っているというのを察せられる……だが、これが神人なのかは分からない。

得体の知れない何かだというのは分かるがしかし、理解出来ない。

ああ、そうだ。蘇生ご苦労

「至高の御方々の御命ならばどのような事でも」

本当に助かるよ……そうだ、何か褒美をやろう。何が欲しい？

「そ、そのような……御方の御命ならばそれに応えるのが守護者いえこのナザリッ

クのシモベとして当然の事、褒美など恐れ多く……」

むう……そうか、なら仕方ないか

そう、騎士風の男は悪魔との話を終わらせ私を見下ろす。

この石室が暗いためか兜のスリットから顔は一切窺えない……いや、いや、覗か
れている。

「あ」

兜のスリット、その闇に浮かび上がる赤いソレが私を覗き見ている。

ソレは火だ。熱い視線を送るとい言葉があるが、いま向けられているソレは比
喩なんかではなく正しくそれそのもの。

熱量を伴った視線だ。この男がその気になれば私はこの視線だけで焼け死ぬだろ
う。

クレマンティーヌ。我が徒たる、クアイエツセが妹よ。貴公は神に仕える巫女姫を徒に狂わせた背信者。異邦なれども誓約は我が心に健在故に

手が伸びる。

あの糞兄の名前が出てきたがそんなものはどうでもいい。

身体が動かせれば私は今すぐにもみっともなく悲鳴をあげて、ここから全力で逃げ出したい。

嫌だ、やめてくれ。何をされるのか分からない。分からないが……その何かが終わったら私は終わりだ。

私が、俺が仕留めたわけではないがその証は貰い受けよう。何にせよ復讐は果たされたのだからな——

手が私の頬へと伸びて

「おあ——」

引きちぎられた。

焼けた。

音が消えた。

「耳、だけでよろしいのですか？ ネームレス様」

ん、構わんよ。もとより私の信条の為に蘇生させたからな……

血を抜き乾かすといった処理を終えた一対の証を布に包み懐へしまい込むネームレスにデミウルゴスはやや遠慮気味にそう聞いた。

そんなデミウルゴスに対してネームレスは兜を揺らすようにクツクツと笑いなが

ら想起し口を開く。

なんなら、青ざめた舌を取るというのもあるが……私は暗月の剣、何より復讐の証の方が良いのだ。まあ、今では廃れた風習であるが……

「暗月の剣……ネームレス様、御身が時折口にしていたその暗月の剣とはなんなのでしょうか……どうか、この愚か者に御教え頂きたく」

ん、あー……そう、だな

まさか、ソレを聞かれるとは思ってもいなかったのかネームレスはやや戸惑ったような気恥しいような態度を取りつつ兜の頬をかく。

思い出すのはユグドラシル時代、ギルドではなくクランであった頃、ナインズ・オウン・ゴールに入ったばかりの際にこの目の前のデミウルゴスの創造主であるウルベルトより似たような質問をされた時のこと。

その際は上手く誤魔化したが、この今は違う。

原作のデミえもんを知っているネームレスとしては下手に誤魔化せば深読み勘違

いによる胃痛の運命が待ち受けているのを手早く察した。

ん……まず、私はユグドラシルより前にも別の世界で冒険をしていな

「ユグドラシル以前にですか？」

ああ。神代の時代に一人の人間としてひたすら駆け抜けていた。ただ、ただ、使命に殉じて神を屠り、古竜を屠り、英雄を屠り……まあ、そんな頃に属していたのが暗月の剣という復讐代行、神の敵を始末する者、背信者狩り

「なんと……ネームレス様はアンデッドになられる以前から強者であらせられたのですね」

ネームレスの過去に感激しているデミウルゴスを余所にネームレスは石室の出口へ歩いていき

まあ、そんな頃の名残だ。捧ぐ対象はもはやいないが時折こうしてな。それと、今回の褒美となるのか分からないが……ソレはお前達の好きにして構わない。この

世界じゃあ英雄クラスらしいからな、交配実験、スクロールの実験、好きに使うと
いい

そう最後に告げ、感動に打ち震えている悪魔たちのいる石室をあとにした。

……………竜王国か聖王国に行きたい

「では、今日この時から君たちチーム『漆黒』がアダマンタイト級冒険者チームとして活動する事をエ・ランテル冒険者組合組合長プルトン・アインザックが認める」
「ええ、ありがとうございます。組合長」

エ・ランテルを舞台に起きた大事件、邪教集団ブローラーノーンによるアンデッド大量発生事件が解決してはや二日。

早期の事件解決、多くの冒険者の協力により驚くほど被害が少なく済んだエ・ランテルは事後処理を終えたこの日、事件解決に尽力した冒険者たちに対して冒険者組合及び都市から報酬が与えられていた。

無論、今回の件でしっかりとした活躍をした冒険者は評価されその実力に見合ったランクへと昇格する事を許された。モモンガことモモンもまたその冒険者たちの中の一チームだった。

冒険者のランクとして最上級のアダマンタイト。

今回の事件を直接的に解決したモモンとアクトに与えられた報酬の一つがそれへ

の昇格、無論如何に今回のような大事件を解決したからといって銅級でしかなかった新人チームが最上級ランクになるなど本来だったらありえない話だ。

では、何故こうしてモモンはアダマンタイトに昇格出来たのか、それは――

(いやあ、まさかあのクレマンティーヌ？ の実力を証明してくれる人がいたとは。ネームレスさんはなんか疲れてる感じ出てたけど、ラッキーだったな)

事件の主犯の一人である元スレイン法国の特殊部隊・漆黒聖典所属であったクレマンティーヌの情報を組合長と都市長に開示した人間がいたからだ。

それは元々裏切り者であるクレマンティーヌの処理を命じられていた――戦神と崇めるネームレスに出会った事について忘れていたが――クアイエッセが自らの身分を提示しクレマンティーヌの実力を組合長と都市長へと伝え――正確に言えばあくまでクレマンティーヌは法国が追っていたズーラーノーンの幹部の一人で法国の裏切り者という事は伏せた情報であるが――更には現アダマンタイト級冒険者であるセレネの推薦もあり、こうして彼らはアダマンタイトへの異例の大

昇格を手に入れたのだ。

（あらかじめ用意していた——なわけないか。なんか、ネームレスさん去り際に用意してたものが使えなくなったとか言ってたし）

モモンガが思い出すのは組合に呼ばれる少し前、アダマタイトへの推薦その他の旨を伝えるにきたネームレスがまるで苦虫を噛み潰したような表情で言ったこと。

曰く、本来ならちゃんとモモンら漆黒がアダマタイトになれるようなものを用意したのだが今回の事件は誤算で仕方なく手を回し、一部のアンデッドを配置したとの事。

そもそもネームレスとしてはミスリル、運が良ければオリハルコンになるだろうという考えで推薦し、そんなアダマタイト級冒険者に恩を着せようとした為はこの破格の昇格となった。

（……いや、でもなあ。アダマタイトになったはいいけど、新人がいきなり最上

級ランクになるって……絶対ベテラン冒険者に難癖付けられるよなあ)

出る杭は打たれる。陰口、嫌がらせ等の心配がフツフツと湧くモモンガだが、そんな心配は杞憂である。

原作ならば確かに銅級からミスリルへと昇格したモモンに対して先輩ミスリル級冒険者であるイグヴァルジが突っかかっていたが、この世界においてはイグヴァルジは先日に見れたアダマタイト級冒険者セレネの勇姿を見て嫉妬心というものを無くし、セレネの推薦があったモモンの実力に納得しているのである。

そんな事は知らないモモンガは組合長から手渡されたアダマタイトのプレートを見ながら内心で溜め息をついた。

クレマンティーヌは冒険者組合の遺体を回収、その後ナザリック行きとなりました。

そういえば仮面ライダービルドの映画公開されましたね。まだ作者は見に行けないので早いうちに見に行きたいと思います

台間的一幕

今回もなんやかんやで投稿が遅れました。

理由としてはF G Oの夏イベで少し創作について考えさせられたりしました。

T w i t t e rで弱音を吐いた際には暖かいお言葉をかけていただきありがとうございます。
ございました。

義務感で投稿するのではなく、楽しく投稿する。

ナザリック第九階層。

ナザリックの中では居住区にあたるその階層にはB A Rや大浴場、美容院、雑貨屋、果てはエステやネイルサロンまである。そんな階層の奥に一つ、守護者や至高

の四十二人ですら入るのに制限のかかる施設が存在する。

その施設の名は教会。

このナザリックにおいて崇拜し信仰する対象など至高の御方々において他に存在しないわけであるがその教会は至高の四十二人を信仰しているというわけではない。かといって他の神を崇めているかというところでもなく、単純に教会という施設に近い部屋であるだけ。

さて、何故この施設に入るのに制限があるのか。それはこの施設が至高の四十二人の一人であるネームレスの第二のプライベートルームであるからだろう。

ナザリックを手に入れ内装等の様々な作業を行っていた頃のギルド『アインズ・ウル・ゴウン』。その際に第九階層にいくつか部屋が余ってしまった事があり急遽として行われた『チキチキナザリック余り部屋は誰のものでしょうかゲーム』というイベントにて勝者の一人となったネームレスが獲得、二人目の自作NPCを設置し第二のプライベートルームとした。

教会という施設にしたのは単純にその自作NPCに合わせた為である。

寝室同様許可なくば入室を許さぬその教会。

その扉の前で至高の四十二人が一人、この教会の主であるネームレスが護衛とメイドを連れて呆然と立っていた。

(……最後にここきたのいつ以来だったか。確か、三年前か?……最初の火の炉を造ってからはまったく来なくなっただけだからなあ)

(いや、それよりも動いてるんだよな。レティシアを見る限りあちらの世界での記憶があるっぽいからな。ううむ……戦闘の可能性を考えなきゃ駄目か)

まあ、それを考えたからこれなんだがな。そう呟きながら肩を疎めるネームレスの姿はいつも通りのファーンナムシリーズと呼ばれる神器級一式装備。指輪は斬撃耐性や氷冷耐性、炎熱耐性ときっちりとしたものを選び、腰には愛用の双剣であるゴッドヒルトの双剣が下げられている。

……ふう、行くか

息を吐き足を前へと進める。その際に付き従っていたメイドが教会の扉を開けようと手を伸ばすがネームレスは無言でそれを制し自ら扉を開く。

扉が開き、廊下より教会内部が窺える。

それはとても落ち着いた空間。静寂というのだろうか、そういった雰囲気が扉の前にいるメイドや護衛に感じ取らせ、そんな事はお構いなくネームレスは教会へと足を踏み入れる。

無論、それに追従しようとするメイドと護衛だが、その前にさっさと後ろ手に扉を閉める。

「ネームレス様!？」

ここより先は私と私が許した者だけの場。今宵はここにいる、貴公らは普段通りの仕事に従事せよ。いいな

「は、ハッ」

兜の下で面倒くさそうな表情をしつつ、メイドと護衛に解散を言いつけ扉を完全

に閉める。

教会へと足を踏み入れたネームレスはそのまま敷かれた絨毯を歩いていきながら、視線を辺りへ向けていく。

ナザリツクの内装と比べれば二段階ほどはランクダウンしている内装、それは作成者であるネームレスがあまり華美にしたくなかった為で、静寂を感じるゆつたりとした華美になり過ぎず尚且つ質素すぎないように調整したもの。

ギルドメンバー最年長の死獣天朱雀からアドバイスを受けながら作ったそれはネームレスの心に安らぎを与えていた。

……最初の火の炉とはまた違った安らぎがあるな。

「それは良いことですね。亡者の王よ」

——ッ

教会に女の声が響いた。

その声にネームレスはその足を止め、前方を注視するがそこに女の影はない。で

は、とゆったりと後ろを振り向けばそこには嘗て自分が創り出した女が佇んでいた。禁欲的な修道服に身を包みフードを被った裸足の女性。

エルフリーデ……

「ええ。御久しぶりですね、亡者の王」

ネームレスの中にある嘗ての記憶と違いフードで目元まで隠していない彼女の微笑みにややたじろぎつつも、その腰に下げている武器の柄に手を伸ばす。

しかしそんなネームレスの心中など知らんと言わんばかりにエルフリーデと呼ばれた彼女は微笑みを絶やさずにネームレスへと近づいていく。

(あれ……全然敵意を感じないのだが。いや、俺……私はアリアンデルの絵画世界でアリアンデル諸共彼女を殺したわけで……敵意を抱かれない筈がなくて……ええ？)

「?……ああ、いま私が貴方と殺し合った所で何も意味はありませんので」

むう、いや、確かに……そうではあるだろうが

「こうして死んだ筈の私を甦らせたのはそもそも貴方でしょう……思うところが無いというのは嘘になりますが、我が妹の様に今生では貴方を王として仕えるのも吝かではありません」

あまりに予想外な言葉にネームレスは兜の下で口を開き唾然とする。そんなネームレスに気づかずエルフリーデは近くにあった長椅子に腰掛ける。

……いや、待て。

「どうしました？」

別に貴公が私に仕えるというのとは私としても嬉しい話だ。その前に少し聞きたいことがある……貴公、貴公はこの現状……今生をどう認識しているんだ。

「今生をですか？……そうですね」

今生、すなわちユグドラシルにてナザリックのNPCとして作られてからという

事。

先日、ネームレスがもう一人のNPCである火防女レティシアにも似たような質問をした際には嘗てとは違う世界にてネームレスがレティシアのソウルを基にレティシアの肉体を創った事で甦った、と返された。ネームレスはレティシアもエルフリーデも同じなのかそれとも差異があるのかを確認する為にこうしてエルフリーデにもこの質問をぶつけた。

無論、やや混乱した頭を整理する為の時間稼ぎという理由もあるにはあるのだが。

「……貴方がアリアンデルの絵画世界にて私を殺し、得た私のソウルを用いて、このナザリックという領域に在る存在として肉体を創った為に私はこうして嘗ての記憶と共に甦った。そう認識しています」

「そして、このナザリックには至高の四十二人と呼ばれる上位存在、神々が如き者が存在していた……今では貴方ともう一人だけ。絶対の忠誠を誓う事は……難しいでしょうが少なくとも私は貴方の事を我が主、もう一人の御方も敬意を払うべきと考えています」

そ、そうか……（レティシアと概ね同じ、と。にしてもエルフリーデが私を主と認めるなんてなんというか……考えつかん。これがユリアやヨエル辺りなら分かるんだが）

そんな微妙な反応を返すネームレスにエルフリーデは首を傾げる。

殺し合った相手である為に目の前の姿があまりにも想像出来ず、ネームレスは頭を抱えるばかりである。だがすぐにこういう事もあるのだろうと割り切り……割り切れてはいないが姿勢を正す。

ま、まあ、とりあえず、貴公の考えはよく分かった。……では、改めてよろしく頼む

「ええ、どうぞよろしくお願いします。我が主」

仕えられる側が立ったまま、仕える側が座ったまま。そんな些か奇妙な主従の誓いにネームレスは兜の下でクツクツと笑った。

「ところで、何故私にしたのですか？」

奴隸騎士や闇喰らいよりも強かった、からだな

ネームレスが教会へともっている頃、同じくナザリック第九階層・モモンガの執務室にて部屋の主であるモモンガ、守護者統括アルベド、第七階層守護者デミウルゴス、そしてモモンガが創造した宝物庫領域守護者パンドラズ・アクターが何やら様々なものが書かれた書類を見ながら考え事をしていた。

「ふむ……やはり、法国の後に法国へ武威を示す為にビーストマンの群れを殲滅。この流れが一番か」

「はい、やはり法国を支配下に置く為には我々ナザリックの、ひいては至高の御方々の御力を示すのが一番であると愚考致します」

書類を見ながら呟いた言葉に反応したデミウルゴスが胸に手を当て、意見を述べる。そんなデミウルゴスの意見にアルベドはやや顔を顰め口を開く。

「わざわざ至高の御方々の御力を見せなきゃならないの？そもそも至高の御方々の玉体を眼にするだけでも生命を捧げ感動する程の榮譽なのよ？」

「いえいえ、アルベド殿。あくまでそれは我々ナザリックの価値観。将来の彼らの子孫ならばともかく今の彼らにそれを求めるのは些か酷でしょう」

「パンドラズ・アクター……」

文句を言うようなアルベドを窘めるようにパンドラズ・アクターが口を開き、そんな彼らを見てモモンガは内心頷いていた。

(いやあ、パンドラズ・アクターを宝物庫から出してほんとに正解だったなあ。俺が創ったNPCだから遠慮する必要も無いし、なんか俺の素も知ってるから気を抜いても大丈夫だし。……うん、あのわざとらしい派手な動きと喋り方がなくなるだけでこんなに感じ方が変わるなんて……ほんと、ネームレスさんありがとうございませす！)

(それに何より、こうして人間蔑視をするアルベドを窘める言葉をかけてる。頭ごなしに否定するんじゃないなくて改善するようにしてる……うんうん、いいぞ！)

(貴方様に創られたこのパンドラズ・アクター。見事期待に答えてみせますとも！)

(お、おう……)

互いにコンタクトする眼球が無い創造主と被造物による唐突なアイコンタクトが

行われたのをデミウルゴスもアルベドも知ることは無くより一層計画は練り込まれていく。

「モモンガ様。このビーストマンですが調べましたところ、ビーストマンの革には第四から第六階魔法が込められることが判明致しました」

「ほう、第四から第六階魔法を……」

「はい。無論、第六階と言いましてもどの個体も可能というわけでなく、ビーストマンの中でもとりわけ強力な個体のみ第六階魔法を込められる革が得られました」

デミウルゴスの説明にモモンガは手を顎に当てながら考えこみつつ、その視線をパンドラズ・アクターへと向ける。

その視線に気がついたのかパンドラズ・アクターはアルベドやデミウルゴスに気づかれないように頷いた。

「デミウルゴス殿。つまるところ、今回のビーストマン殲滅に際してとりわけ強力な個体、すなわちリーダー格は捕獲するという事ですか？」

「ええ、既に一体程捕獲していますが、一度に取れても精々片手で数えられるほど。安定した供給の為にはせめて五、六体は欲しいところでして」

「なるほど……アルベド殿、ビーストマンの軍勢の正確な数は如何程で？」

デミウルゴスの言葉に頷き、その次にアルベドへと質問を投げればすぐに返答がくる。

「そうね、流石に細かくは分からなかったけれど、だいたい十万少しじゃないかしら？少なくとも十万は下回らないわ」

「それほどの数ならばリーダー格が数体……いえ、十数体はいてもおかしくありません。ならば、法国や竜王国へのアピールとなる首の為に殺してもスクロールの素材も確保出来ますね……」

モモンガにもわかりやすく質問と解説をした、パンドラズ・アクターに心の中で礼を言いつつふとモモンガは心の中で頭を捻る。

(……これって別に俺が出なくてもいいんじゃない、そもそも竜王国には以前竜王国を助けたネームレスさんの方がいいだろうし、俺が一人で超位魔法を使うのとは訳も違うし……よし、ネームレスさんに丸投げしよう。うん、冒険ならともかく戦争は遠慮したい)

戦争はネームレスさんに任せよう、そう考えながらナザリック側の軍編成に目を通していると、とある部分で目が止まった。

「む、アルベド。この死神部隊というのは？」

「はい、それでしたらモモンガ様が御創りになられた不死デス・ウォーリアの戦士で編成した部隊をネームレス様が直々に率いると伺っております」

「不死デス・ウォーリアの戦士？……ああ、先日ののか」

思い出すのはつい先日。何やら実験に使いたいと言ってネームレスがデミウルゴスに用意させた騎士の遺体数人分を使って作成したアンデット。

遺体を使って作った為、消えなかったのか……そうモモンガは納得し頷いた。

それに気がついたのは蛇によく似たビーストマンであった。

平均的な成人男性の胴回りよりやや細めの身体をした鼻先から尻尾の先までが凡そ二メートル少しの蛇に人間の様な手足……無論、鱗が生え指の数は違い筋肉量も違うが、手足が生えた人間からすれば奇妙か醜悪な見た目の怪物。

そんな蛇のビーストマンが何やら奇妙な物音に気づいたのは蛇らしく日陰にいたからだろう。

舌をチロチロと出しながらその奇妙な物音に首を傾げつつも、好奇心が勝ったのか物音のする方向へと足を向けた。

そこはビーストマンの溜まり場もとい集落に面した森の中。

入り口ではない場所から入って凡そ数分もしない場所。

藪を掻き分け、物音のする場所を覗いて見れば……そこには不審なものがあつた。

「血……?」

まるで何かを殺し解体した……いや、解体というには地面や周囲に溜まり飛び散った血の量が尋常ではない光景。

よく見れば何か毛皮の切れ端のようなものが落ちていたりする。

ビーストマンという面から見てもあまりに奇異なその光景に何か感じたことの無いものを抱き、本能が警鐘を鳴らし始め、すぐさまその場から離れようと蛇のビーストマンは一步後退して――

「やあ^{Hello}」

「あ——」

肩……人間でいう肩と呼ぶ場所、腕の生え際へと置かれた冷たい感触と囁かれた音に蛇のビーストマンは固まった。

振り返る事もせず、ただ目を見開き口を半開きに舌を出したまま蛇のビーストマンはそこから動けない。

そんな蛇のビーストマンの反応にどう思ったのか、腕の生え際の感触は消え蛇のビーストマンは一瞬安堵の息を漏らそうとし——

「ツア——!？」

声にならない悲鳴が盛大に漏れ出た。

それは右脇腹に生じた激痛が原因なのだろう、いきなり何か太いもので殴りつけられた様な痛みを感じ、蛇のビーストマンは膝を突いた。

次の瞬間、今度は膝を突いた為に下がった側頭部目掛けて何か直撃し、蛇のビーストマンはその意識が揺さぶられそのまま横に倒れた。

殆ど潰れた視界。見えるのは赤、朱、紅。

そして、倒れた蛇のビーストマンを見下ろすように立つ金と白の鎧に身を包み鉄塊とも言うべき武器を振り上げる一人の騎士が見た。

「さよなら」

処理を終えた騎士は武器の血を拭き取り、その場に佇む。

その兜のスリット、そこから覗き見えるのは亡者の赤い瞳であった。

オリジナルモンスター

・不死の戦士(デス・ウォーリア)

……レベル五十台後半のアンデット系モンスター。ゾンビタイプで戦士系職業をとっており、死の騎士と違い比較的人間サイズ。

……鎧を装備させると見た目が変わるなど見た目が変わる事で一部には人気だが死ねば装備しているアイテムを一部ドロップする、死の騎士よりレベル高いのに性能的に死の騎士の方がいい、などの理由であまり召喚されないモンスター。

ネームレスのNPC 2人目は修道女フリーデです。おじいちゃんや闇喰らいよりも死んだ回数が多かった思い出がありますね。

何故、エルフリーデなのかと言いますと、DLCの中でエルフリーデが特に好きで、強く、後は主人公は暗い穴8つ持ちの亡者の王なので黒教会繋がりでですね。

台間的一幕Ⅱ

難産だった癖に短いです。

もう少し増やそうとしたんですが流石に時間が足りなくて、ここで切って投稿しました。

武技・領域。

自身を中心としておよそ三メートル程の不可視の円形の領域を創り出す。宿敵に勝つ為に編み出したオリジナルの武技であるそれを使い、鞘に収めた刀の鏢に指をかける。

相手はその領域に入り込み隙を見せれば、その瞬間もう一つのオリジナル武技に

よる一撃を放つ。

故にその瞬間を待ち続け……相手がその右手に握った鋭利な刃による刺突を放ち
—— 鞘に収められた刀が走り、その鋒が相手の兜と鎧の繋ぎ目へと吸い込まれ
ていく。

コフッ——

腹から右肩へかけての熱、それは自身の血潮によるもの。

口から血を吐きながら視線を動かせば相手が右手で何か柄の様なモノを持ち振り
上げていた。必殺の一撃は外され、絶対の自信があつた領域ですら知覚出来なかつ
た不意の一撃。

薄れゆく意識の中、身体はそのまま崩れ、膝を地面に突き、死の一撃を見る前に
終わる。

「……ああ、またか」

意識が闇の中へ消えるその瞬間に男は目を開き、口を開いた。

視界に映るのは戦っていた相手ではなく、洞窟を利用して造られた戦いの場でもなく、木張りの天井。男がここ最近見るようになった光景でいまだに慣れない光景。

男は手を伸ばし、握っては広げる動作を繰り返す。

「また、あの日の事を……」

そう辛い様な悔しい様な悲しい様な釈然としない様な声音で呟きながら、男は自分が寝ていたベッドから抜け出す。

ベッドの脇に置いてあったブーツに足を通し、立てかけておいた愛用の刀を手に取り腰へと吊り下げる。その際にふと、視界に映ったモノへと視線を向ける。

借りた部屋にある戸棚、そこに立てかけられている一振りの剣。特に飾り立てされているわけでない至って普通の直剣であるがその質は男の愛用している刀に近しいもの。

それは決して男の物ではない。

「……………」

男の名をブレイン・アングラウス。周辺諸国最強とうたわれるリ・エステイーゼ王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに勝るとも劣らない実力を持つ剣士。

嘗てのブレインは宿敵ガゼフ・ストロノーフに打ち勝ち己こそが最強だ、と示したかった……しかしもはやブレインにはそのような思いはなく、あるのは敗北の記憶。

立てかけられた直剣の持ち主。それこそがブレインを切り裂いた騎士であり、夢の中で何度も何度も切り裂く人物。

いったいどういう意図があつて、敵である自分を生かし更には武器を置いていったのか、ブレインには分からない。

「…………クソっ」

苦々しい表情で吐き捨て、ブレインは部屋から出ていく。

胸の中に渦巻くグチャグチャな感情、それに上手く向き合えないブレインは、まだ敗北より立ち直れていない。

しかし、それでも、と。ブレインは足掻いている。

部屋を出て、廊下を歩き階段を降りていくブレイン。その際に降りた先の部屋に家主がいないことを確認しそのまま玄関へと進んでいく。

「……今日で何度目だ。少なくとも片手じゃ数え切れない」

ブレインが敗北の夢を見始めたのは敗北し、意識を失ったその日から。

騎士に敗れ意識を失ったブレインは殺される事もなく、切り裂かれた傷もなく、一人用心棒をしていた盗賊団のアジトにいた。意識を取り戻したブレインは自分の身体に傷一つ無かった為に先程の戦いは夢幻そのものであったのでは？と考えた。周囲の状況からそれは違うと断じた。

何より、ブレインの傍らに一振りの剣、騎士がブレインとの戦いの際に振るって
いたものが鞘に収められ置かれていた。

どうして見逃されたのか、どうしてここにこの剣があるのか、様々な事柄が頭の中
に渦巻きながらもブレインは剣を抱えて走った。その理由はブレインには分から
ない。

「だが、あの夢も悪いことばかりじゃない……」

そう、最後の一撃。あれは俺と同じ刀によるものだ。

ブレインは何度も夢を見た事でその時では気づけなかったものを僅かながらに気
づくことが出来た。夢の中の自分と夢を見ている自分、それは決して同一ではなく
夢を見ているブレインは夢の中のブレインと同じ体験をしつつも一歩引いた視点で
夢を見ていた。

だからこそ、あの瞬間では気づけなかった騎士の一撃がどのようなものなのかを
知れた。

「……まあ、知ったからどうなんだって話だな」

そう、思考を終わらせブレインは影のある表情を見せ、手頃な店へと足を向けた。居合いの剣士、その皮が剥けるのはまだ先の話。

ナザリック地下大墳墓以下略。

私ことネームレスは自室にてモモンガさんと一対一の話し合いをしていた。いや、割といつも通りのことだけでも。

「と、言うわけで今度のピーストマン戦はネームレスさんにお任せしますね」

あー、まあ、別に私としてもそれは構わないんだが。私に押し付ける事に関して罪悪感または謝罪の一つや二つはない？

「え？あるわけじゃないですか。何をいまさら」

おい、ギルマス

曰く戦争は遠慮したい、そんなモモンガさんから私は今度の竜王国へ侵攻してくるピーストマンの大軍に対する戦争？蹂躪？の総責任者を押し付けられた訳だがとうのモモンガさんはその事について一切の遠慮はなく。

清々しい表情で笑っている。殴りたいこの笑顔。

だが、まあ、これもモモンガさんが原作よりも人間らしいという証なのだろう。私としてもこういった傾向は嬉しいものだ。

だが、それはそれ、これはこれ

冒険者稼業！神様稼業（仮）！戦争指揮！私に自由はないのか！？

「少なくとも全部貴方が自分で関わってると思うんですが？」

気のせいです！

そう、気のせい。気のせい以外の何者でもない。

そもそも法国に関しちや番外席次が来たのが悪いのであって私は一切悪くないと思ふ。

「ともかくその件はよろしくお願いしますよ？その後は適当に自由にしてくれて構いませんから」

自由……そうだ、帝国に行こう

「帝国ですか？あ、じゃあその時は現地調査お願いしますね」

自由とは何だったのか

溜息を吐きながら、事前に自分で用意したミルクティーを飲む。

……む、記憶を頼りに作ったから不安だったがそこそこ美味い。茶葉か、やっぱり茶葉がいいのだろうな。

仕方ない。とりあえず既に資料が作られてるから上手い具合にそれを使って指揮をしよう。索敵にはニグレドを借りていこう……あの部屋嫌いなんだよな、怖くて。

「そういえば、帝国と言ったらデミウルゴスが事前に調査してたんですよ」

おい、なら現地調査いらなのでは？

「え、いや、NPC目線ではなく我々目線での調査が必要だと思ひまして」

モモンガさんの言い分に私は納得し、帝国がどんな国だったかを思い出す。

憶えているのは多くの貴族を粛清したという鮮血帝とこの世界の住人にしては高レベルの魔法詠唱者……無論、大した相手じゃない。他には鮮血帝の護衛もとい帝国の最高戦力の一つである四騎士……確か、一人だけ女騎士がいた記憶がある。

呪い何かを解く手段を探してて、鮮血帝に仕えているのもそれを探す為だと

か……そして、それを解いてやれば喜んでこちらに着く……だったか。解呪……解呪かあ、呪い、バジリスク、集団リンチ……う、頭が。

「え、ネームレスさん、いきなり頭抱えてどうしたんですか？ そんなに嫌だったんですか？」

いや、気にしないでくれ。うん、ほんと。

最下層で呪死した挙句、それを解呪する為に小ロンドへ足を運び道中で何度も何度も幽霊に殺され殺され殺され心が折れそうになった時に、不死街教区の鐘がある塔に解呪石を売ってくれる男——名前は忘れた——がいる事を知った私はなんというか、その、つい、無意味にロートレクの前に座っていたなあ。すまん、ロートレク。

さて、それは置いといて。……帝国にはワーカーがいたな。

ろくに憶えていないが確か、カツツェ平野で会った四人組のワーカーがいたな。

………待て、ちょっと待て。名前、名前名前……歳か？ いや、恐らくセレネの

記憶が圧迫しているのだろうか……本人達からもチーム名は聞いたはずだ……なんだったっけ……

「それじゃあ、帝国の件とピーストマンの件、よろしくお願いしますね？」

あ、ああ、任されたよモモンガさん

「ということ。あ、何かあったら伝言飛ばしてくださいね」

そう言い残して退室するモモンガさん。

そんな彼の背を見送って私はふと、思い出した。

クウ、クソがあああ!! だったっけ。

何か違う気がしたので私はとりあえず、法国へ行く時の装備をどれにするか考えるべく椅子から立ち上がり、そのまま最初の火の炉へと向かう事にした。

とりあえず次回は本編に戻ります。

グラブルも11月まで古戦場はありませんから執筆時間は十分に確保出来るので早めに投稿したいと思っています。

会談

もう、法国というかこういいう話は頭を使う。

書いて納得出来ず消し、書いて何か違うから消し、書いて書いて書いて……ふと心の中のジョースター(父)の声を聞きここに出来ました。

時間かけすぎたなあ

あ、G11出ました

カタツ

スレイン法国中枢、最高神官らが集まる神殿奥にて世界の転換点を告げる始まりの音が響いた。

法国のトップである最高神官長と六人の神官長、そんな彼らを守護する番外席次を含む漆黒聖典の十人と法国の至宝を纏う老婆の計十八人の目前に広がる虚空に突如として広がった黒い孔。

そこより伸びたモノが足音をたたせる。

まず最初に現れたのは大盾と大鎚を背負った金色の騎士。

それを皮切りにさらに三人もの騎士が孔より姿を見せていく。

殺意の表れともいえる鎧のあらゆる箇所から棘が伸びた騎士、折れ曲がった特徴的な帽子を被り顔を銀仮面で隠し薄汚れた上衣を着た騎士、目元以外を鉄面で隠した斧を持った鎧の上にサーコートを纏った騎士。

神人として生まれ番外席次を除き人類最強と自負する漆黒聖典の隊長はその現れた四人もの騎士を見て理解した。この四騎士は全て自身と同格の戦士である、と。そんな漆黒聖典の隊長の理解などどうでもいいと言わんばかりに四騎士は法国の人間らに対して一切反応せず孔の前より早々に退き、左右へ分かれ各々が跪き孔より現れる自分らの主を迎える。

「ひっ——」

誰が漏らしたのだろうか、そんな悲鳴にもならない音が響いたのと同時にソレは現れた。

闇よりも暗い漆黒のローブ、それと反するように白魚の如き白骨、法国の至宝と同等たる世界の代物である紅玉を肋骨で覆う死の超越者。

三メートル程の長駆に神話の中の代物としか思えない色鮮やかな水色のキュレツト、肩を覆う毛皮が目につく流麗な威風堂々たる鎧を身につける戦神が如き騎士。二柱もの異形の神。

そしてその神々に付き従い現れるのは黄衣の軍服を纏いまるでゆで卵に埴輪のような顔を付けたような異形と修道女の装いをした裸足の女。

瞬間、何人かの神官や漆黒聖典の者達は法国において漆黒聖典の隊長よりも強い法国の切り札たる番外席次へと視線を向けたが番外席次の笑顔で首を横に振るのを見てその顔を青ざめさせた。漆黒聖典の一人は現れた神を見て一瞬発狂しかけたが神々の前で無様を晒すわけにはいかないと自制心をもって自らの発狂を抑え込む。

そんな同胞らの反応を見て一人の神官は内心笑い、一歩足を前へ出す。

「此度は我々の願いに御応え頂き感謝申し上げます」

「よい。我々としても言葉を交わさず敵対するというのは好ましくない故な」

闇の神官長の礼に死の超越者モモンガは威厳ある言葉でもって応える。それを聴きながら騎士ネームレスは腹の中で苦笑しつつその視線を法国の者達を舐め回すように動かす。

前世よりの知識では目の前の神官長らの詳しい情報はなかった。同時に法国にある世界級のアイテムの詳細な情報も。

故に万が一にいつでも対応出来るように彼らを観察する。

「御身らはプレイヤー様であると漆黒聖典第五席次より聞き及んでおります。疑うべくもございませんがそれは真でございましょうか」

「無論」

あらかじめ決まっていたように虚空よりユグドラシルのポーションを取り出すモモンガに闇の神官長は頷き、他の者達も一様にモモンガとネームレスが自分たちの神と同じ存在である事を改めて理解する様に頷いていく。

無論、赤いポーションなどあくまでユグドラシルのポーションであるということ
を証明出来るだけでモモンガたちがプレイヤーと証明出来る訳では無い。だが、その
取り出し方こそが証明となった。アイテムボックスなどこの世界のモノでは使え
ずプレイヤーの行う御業である——NPCも可能であるが——という認識
が彼ら神官長らにはあった。

普通ならばもう少し他にもあるだろうとネームレスは内心呟くがそこは御都合主義か単純に自分らの切り札である番外席次を一度殺しその後すぐさま蘇生した存在と同格のモノなど自分らの埒外の存在、プレイヤーと認識するしかなかったのだから、と諦める。

「プレイヤー様。どうか、何卒、我々人類を御導き、いえ御護りくださいませ」

「——」

そんな闇の神官長の言葉と共に繰り出された行動に神官長らや漆黒聖典の者達は息をのみ、ネームレスは嘆息する。

一体何をしたのか。

土下座である。紛うことなき土下座を闇の神官長は自らの立場など一切気にせず、やって見せたのだ。国の中枢機関の中でも最上位に連なる立場の人間が躊躇なく行ったそれにモモンガは内心困惑し、ネームレスはそんなモモンガの内心を見透かし闇の神官長の行動理由を察する。

（自分の立場よりも民草を優先する、か……異形種が相手だと言うのに……いや、その辺りは聞いていた通りか）

ネームレスが想起するのはつい先日 of 番外席次との会話。

闇の神官長が元々は司法機関の出であるがかなりのスルシャーナ信徒である、と。

故に異形種が新たな神になる事に忌避するものはなく人類の護り手となって貰えるのならば喜んで生命を差し出すような男、そんな番外席次の評価に半信半疑だったネームレスはその評価が正しかった事に一人頷く。

そして、モモンガからひっきりなしにかかってくるヘルプの伝言に苦笑しながら助け舟を出す。

護る、か。そもそも貴公らは人類至上を掲げ異形種や亜人種の排斥を行っていたはずだ。私もモモンガも異形種であるが？

「その御考えは尤もでございます。確かに我々は人類が滅びを回避する為に人類を纏めるために異形種や亜人種を排斥してきました。我らの信奉する神々の中に異形種であらせられるスルシャーナ様がおられるにも関わらず」

土下座のままで語る闇の神官長にモモンガは平静を保っているようで中身は全然落ち着いていない中、ネームレスはやや圧を出して闇の神官長に問いを投げかけていく。

それで？自らの神を裏切る様な真似をしておきながらなにゆえに我らに乞うのか。

「一重に人類存続の為。人類至上の考えも御身らにより護られ世代を重ねればいずれ消えましよう。今よりも未来の為に」

そんな堂々とお前達を利用してやる、ととれる言葉にネームレスは内心笑い、モモンガはこの場にアルベドやデミウルゴスなどを連れてこなくて正解だったと考え脳裏を過ぎった連れてきた場合の面倒事の可能性に今は無い胃を抑えようとするが状況を思い出して踏みとどまる。

モモンガ。

「そう、だな。なるほど、いいだろう。お前達人類を我々の庇護対象として認めよう……無論、お前達人類だけを最優先するつもりは無い。我らは神として人類もエルフもドワーフも多くの種を平等に庇護する」

我らに牙を向けない限りはどのような種族であろうとも受け入れる。故に人類至上主義をすぐにとは言わぬが徐々に消していけ……わかったな？

「ハッ!!」

漏れる圧力。

モモンガとネームレスから溢れ出る神威とも言うべきそれに他の神官長らは圧倒されゆく中、闇の神官長は二人の言葉を胸に刻み込み一切の異論無く難しい条件を飲み込む。

普通であるならば引っかかる事にも反応せずにこうして流れる様にモモンガとネームレスを新たな神として新たな人類の守護者として奉じる事が決まった。

その光景をモモンガの背後で見ていたパンドラズ・アクターはこの時の事をこう語る。

「従う以外に道がない最上級の脅し文句。父上は無意識でしょうがネームレス様はわりと確信犯ですね」

「くっそ疲れた!？」

なんか、若干無茶苦茶言った気がする……

法国上層部との会談……会談といえるのか？いや、それはともかく諸々が終わった私たちはモモンガさんの部屋で護衛やメイド等を一切入れずに二人だけで息を抜いていた。

思い返すのはつい先程までの会談が予想よりも遙かにはるつつつつかに呆気なく終わった事、予想していた事よりも早くに終わってしまった為に逆に私たちは疲れってしまった。

私の予想では色々と反発が来てそれを潰すかある程度の妥協を見せてやる様なものだったがまさかの……ええと、闇の神官長だったか？が土下座をやったのが意外過ぎた。番外席次から色々と人となりを聞いてはいたからある程度、我々を神として迎え入れるのに不満は無いだろうとたかを括っていたらコレだ。

あの時は何となくそれっぽい納得を自分の中でしたがやはりなんとというか釈然としない。

いや、何故に？

「どうしましたか、ネームレスさん」

え、ああ……いや、あの土下座とかを見てそんなんでいいのか？ って思いました……

「ああ……あの時は俺、困惑しましたけども今考えたら少しわかりますね」
へ？

モモンガさんの言葉はまったくもって意外だった。あの行動をモモンガさんが理解しただと？天変地異の前触れだろうか。

「ネームレスさん。もしもナザリックにユグドラシルではない全くの未知な存在……それこそ、ナザリックなんて簡単に滅ぼせるような存在が徒党を組んで現れたらど

うしますか？あ、勿論俺たちプレイヤーやルベドでも勝てないような奴らです」

「……………どうしようもないですね。そうなたらお手上げ、逃げる……………いや、無理か」

「俺なら頭を地に擦り付けてでもナザリックを護りますよ」

嗚呼、なるほど。下手な気まぐれで滅ぼされかねない以上、生き残る為に土下座をしてでも見逃してもらおう……………いや、あの神官長からすれば庇護下に入れてもらう、か。

外道畜生、それこそ例の八欲王どもならそんな土下座、下げた後頭部に足を乗っけて嘲笑い滅ぼすだろうが……………運がいいと言うのかなんというのか。まあ、私としては舌戦やら交渉事をやらないですんだのはそれでいい。

なるほど、まあ、あの神官長が土下座した理由は改めてよく納得しました。……………ともかく、結果として私とモモンガさんは必要事項とはいえなんやかんやで神になりましたがその辺の御感想は？

「恐怖の大魔王じゃないだけ上々ですよ」
ま、そうですね。

今回のイベントは戦場よりも疲れた……なんというか会談の際になんか変な事
言っていないか心配だわ……多分なんか首を捻りそうなこと言ってるんだろな。あ。
そんな風の中にボヤきつつ、モモンガさんの部屋より出て廊下で待機してい
た伝説級の武器や課金アイテムによってレベルの底上げをし、八十代まで強化した
不死の戦士^{デス・ウォーリア}四体を引き連れ自室へと足をむける。

今日は風呂に入らずにこのまま寝てしまおう。

風呂は明日。

アンデッドだけれども精神的疲労からは逃れられんのだ。

後日、法国がモモンガさんを冥府神、私を戦神として崇める事を決めたときクアイ
エッセより聴いた私はついギリシャの様だと笑ってしまった。

階層守護者の情報制限などの為に且つビーストマン蹂躪の為に用意した課金アイテム等で強化したオリジナルモンスターこと不死の戦士×四体。

きつとみなさんも今回のというより法国との会談でなんとも言えない気持ちになるでしょう。それは作者も一緒です……俺には難しい話は無理なんだ……デミえもん

ビーストマンの前に王国やろうかな

祈る者／吐き捨てる者

ギリギリセーフ！

いやあ、何とか今日中に投稿出来た……危ない危ない。

そこそこに難産でしたね……休日でもネタも無く死んだり、忙しかったりとしたせいでなかなか筆が動きませんでした。

でも、投稿出来たから許してください。

所でドルフロの代理人……いいよね

ナザリック地下大墳墓より凡そ北東方面にてあるは竜王国。

嘗てネームレスがこの世界に降り立った際に初めて訪れた国であり、そして最初

の戦場。

偽りの竜王と呼ばれる女王、真なる竜王たる七彩の竜王が人間との間に作った子の子孫、竜王の血を八分の一ほど引いている彼女、ドラウディロン・オーリウクルスが治めている竜王国は今、嘗て無いほどの窮地に陥っていた。

竜王国は何年も前からビーストマン達の脅威に晒されていた。

竜王国を餌場と認識し、人々を喰らいに来ていた獣共の脅威に。

三つの都市が落とされた、竜王国が有するアダマンタイト冒険者らを中心に何度も撃退はせれども大きく戦況は変わらなかった。

そして、つい先日にも竜王国の王都を襲ったのは数千ものビーストマンの群れ。もはや滅ぶかもしれない瀬戸際にて、それが現れた。

戦神が如き騎士がその双剣を振るい獣共を尽く斬り殺した。

まるで神話の如き戦場……否、神話の如き蹂躪を彼らは見た。

王都を襲った獣共は駆逐された。

それに女王も兵士らも冒険者らも国民たちも沸き立ち——

「巫山戯るな——」

女王は怒号のような嘆きのような叫びをあげた。

もはや、万人受けを望んでの少女の姿を取っていられる程の余裕などあるわけが無い女王は本来の姿をとって玉座の間に訪れた兵の前で王威を露わにしていた。

竜王の血を引いているだけあり、その露わになった王威に伝令の兵は過呼吸に陥り宰相の命令で他の衛士達が速やかに兵を連れて玉座の間から出ていく。

さて、いったいどうして女王が今まで人前で使用していた少女形態を解き本来の大人としての姿を晒してこうも冷静でないのか。それは今現在竜王国へと迫っている脅威、過去を見ても決して存在しない程の脅威にある。

「十万の軍勢……だと……!?!」

そう憎々しげに言葉を吐き捨てる女王はその傾国の美女とも言える美しい相貌を歪ませる。何を隠そう、今現在竜王国の王都へ向けて凡そ十万ものピーストマンの

群れが侵攻しているのだ。

未だ王都へ到着はしていないが既に一つの都市が落とされ、その都市から一割にも満たない民草らが王都へと逃げ込んできた。

少しでも侵攻を遅らせようと兵士らや一部の冒険者らが向かったが多勢に無勢と
言うべきかその大半が仲良くビーストマン達の胃の中へと収まってしまった。

「法国からは何も連絡はない……いったい、いったいどうしろというのだ」

真なる竜王の血を引く女王、ドラウディロンだが彼女は条件を満たせば竜王の扱
う切り札を切ることが出来る……がしかし、それを行うには王都の民草の命を生贄
にせねばならず仮にやったとしても到底十万ものビーストマンなど殲滅出来ない。
これが二、三万程ならば苦渋の決断として行っただろうが流石の数に無駄死にでし
か無い。

それを理解してるからこそ、ドラウディロンはどうしようもないこの現状に頭を
抱えている。

曾祖父である七彩の竜王へ竜王国を救う事を願った所でそれはきつと無為に終わるだろうとドラウディロンは切り捨てる。そもそも曾祖父と曾孫の関係ではあるが決して直接会ったことがあるわけではないのだ。ほぼ間違いなく救援は拒否されるだろう。

もはや、絶体絶命。

「……そうだ、彼奴。彼奴なら……いや、如何に彼奴が強くとも十万もの群れに勝てるわけがない……」

この脅威を乗り越える方法など、どこにもない。国民を連れて逃げようにも国民の数や逃亡の準備を考えればそれを行う前にビーストマンが王都へと着くだろう。仮に逃げれたとしてもビーストマンの脚と人間の脚どちらが速いかなど論ずるまでもなく……そもそもどこへ逃げればいいのか分からない。

「——どうしろというのだ……!!」

心の叫びを露わにするドラウディロン、それを聴いている宰相は心痛そうに俯き、ただただドラウディロンの叫びだけがこの玉座の間へと響いた。

ビーストマンの群れが王都へ到着まで後一週間――

「ほう……不死者か、私の姿が見えるのか？……面白い。人の身で私の姿を見る者は久しぶりだ……才もある」

彼女と出会ったのは二つ目の鐘を鳴らして、そう時間が経っていない頃の事だ。最下層で助けた呪術師の男ラレンティウスにより呪術を昇華させた私は一先ずそれ以外の武器を鍛える為の素材を集める為に病み村を訪れ、ついでに最下層のネズミや侵入してきた闇霊より奪った人間性を混沌の娘……白姫に捧げようと考えその住居へと足を向けた時に私は彼女に出会った。

「お前も私の呪術が目当てなのか？……あのザラマンのように」

「ふうん。そうか、そうだな。だったら、お前を私の弟子にしてやろう。だが、私の呪術は、それなりの種を要求するぞ。お前に応えられるものかな」

聴けば彼女も呪術師だという。ラレンティウスが知らない呪術というのに私は惹かれ、彼女に教えを乞うた……馬鹿弟子呼ばわりには何とも言えなかったが実際の所彼女の方が年齢的にも呪術師としても目上であるから、私はそれを受け入れた。その旨を伝えた際に思いつき頬を張られたのは私としては辛い思い出だ。

「呪術とは、炎の業。炎を熾し、それを御する業だ」

「だがいいか。これだけは覚えておけ……炎を畏れる。その畏れを忘れた者は、炎に呑まれ、全てを失う」

彼女、師匠との研鑽は私にとってとても有意義な時間だった……彼女より教わった呪術は不死の使命をまっとうする為に大きな助けとなった。

砦での巨人や鉄巨人との戦いに、神の都にて立ち塞がった竜狩りと処刑人との戦いに……友との殺し合いに。

そして、火継ぎの為に王のソウルを集めるといふ新たな使命を示された矢先に私は師匠より聴かされた。

「一つ頼みがあるんだが……」

「私の母は嘗て最初の王の一人だった……最初の火の近くでソウルを見いだし……王となった力で自らの炎を熾そうとして……制御出来ずに、混沌の炎は母も妹たちも呑み込んで異形の生命の苗床にしてしまった……だが、私は、私だけは逃げ出し

てしまった……母も妹たちも、ずっと、ずっと苦しんでいるというのに……」
「だから、お前に頼みたい……どうか母を妹たちを……混沌の炎から解放してくれ……」

そんな、まるで縋るような悔いるような声音の弱々しい彼女の言葉を姿を聴きたくも見たくもなかったのだろう。私は彼女の為に最初の死者でもなく鱗の無い白竜でもなく封じられた公王らでもなく真っ先に混沌へと挑んだ。

そこで私はもう一人の友人を失った。

そして、苗床を殺しそのソウルを奪った。

「ありがとう……お前に会えて、本当に良かったよ」

「もう、お前には何も教えることは無いな……そろそろお別れだ。短い間だったが、楽しかったよ」

彼女の解放されたような笑みに私は荒んだ心が安らいだのだろう。

目覚めの鐘がなった。

冷たい谷のイルシールへと向かう最中に立ち寄ったカーサスの地下墓……その奥底に広がる燻りの湖……その先にあつた懐かしいとは口にしたい者たちが潜む遺跡にて私は彼女たちに再会した。

物言わぬ混沌の娘、そして彼女を抱きしめ息絶えた我が師。

いったい何が、どうして、そうなったのだろう。

私は嘆き泣き叫び

「違う。それは俺じゃない」

瞬間、視界の全てが黒い炎で塗り潰される。

それと同時に割れたグラスが俺の手を傷つける。

「……寝落ちてたか」

視線を動かせばいつも通りの俺の部屋が広がっており、俺は寝台ではなく椅子に腰掛けワインか何かを飲んでいたのでだろう、手には握り割ったグラスがありワインが手とテーブルを濡らしていた。

グラスの破片を握る手を開き、テーブル脇に置いてあったタオルで手を濡らすワインを拭い別の手で顔を覆い天井を見上げる。

どうやら、人化していたせいで酔ってそのまま寝落ちしてしまったようだ。

「はぁ……最悪だ」

寝ていた最中に見たあの夢……いや、記憶と言った方がいいのだろうか。

記憶……決して俺の記憶ではない。例え、アレがこの身体の記憶なのとしても

俺のものではない俺は、俺にはあんな経験なんて一切無い。

この世界に来てから、ネームレス……いや、セレネの記録が現実化し始めてから俺自身が気づかないうちに俺を蝕んでいた。そして、気がつけばこれだ。

まるで本当の記憶のように俺は夢に見てしまっている。モモンガさんをモモンガではなく鈴木悟のままに出来てはいるが……肝心の俺がこれか。

「笑えない冗談だな」

適当に割れたグラスを処理して俺は椅子を立つ。

半分も残っていないボトルを直接口に運び飲み干してから、俺は部屋に置いてある姿見の前に立つ。

そこに映っているのは髪色や彫りのある俺ではない男が黒金系のローブを身にまとっている姿。『』は、俺は別に髪が灰色がかかってるわけじゃないし、白人のような顔じゃあない。

鏡に映っているのは俺ではなくネームレス。なるほど、それはいい。

この身体はネームレスであるから……だが中身は、中身がセレネでは駄目だ。中身は俺だ……俺でなければならぬ。

「俺たち風に言えば、私のソウルが俺の脆弱なソウルを喰らおうとしてるって所か」

三度の旅を経て王となっている……最後は王ではなかったか、ともかくそんな不死人のソウルとただ転生した程度の人間のソウルじゃあ比較になんてならない。むしろ、こうして未だに俺が残っているのが不思議なくらいに。

「ハハ、ハハハッ……ッア」

——パキンッ

乾いた笑い声が出たと思えば、俺はいつの間にか姿見に手を叩きつけていた。鏡はヒビが走り映る俺の姿は歪みちゃんとした姿見としては使えなくなってしまうがそんな事は至極どうでもいい。

俺はアイテムボックスから早着替えの指輪を取り出し、それを指にはめて黒金糸から指輪に登録していた装備へと切り替える。

最初^セに火を継いだ不死人^ネではない、絶望^セを焚べる者^ネではない、火^セの無い灰^ネではない、あの時間違いなく私^セではなかった俺の鎧^セを身に纏う。

異形の冠に歪んだ鎧、不死人ではなくワールド・チャンピオンの俺の鎧。

大剣を装備して俺は姿見から離れ、扉へと向かっていく。

悪いが俺は俺だ。もう、これ以上、俺はお前に近づかない。

鎧を装備する前に見た、ヒビ割れ歪んだ姿見に映っていたまるで俺を嘲笑っていたような私に俺はそう吐き捨て部屋を後にする。

俺からネームレスへと、しかしセレネには確実に線引きをして……。

暗月の不死人よ焼け落ちろ。

とりあえず、ドラウディロンと竜王国には絶望を投げ込んで起きますね☆

それと、今回はセレネという設定でしかなかった存在に自分が塗り潰されかけてることをネームレスが自覚し吐き捨てるのを書きました。

ちなみにクラーナ師匠は好きです。混沌の娘も、クラীগも好きです。

あ、ドラウディロンの容姿ですがまだ上手く自分でイメージ出来てませんがとりあえず金髪……長さは特に考えてませんね。大人版の顔としては傾国の美女だけでも何処と無く幼さを感じれるっていう感じです。ええ、the大人の美女って、あまり作者が得意じゃないので

奮起

やったね、早めの更新だ。

ところでアズレン……エセックス未だに来ないのにイベント期間終わりそうなん
ですがそれは……

ハロウィン復刻！ところでメカエリ、多分前回とは違う方とるんだろっけども……
別鯖扱いになるのだろうか？

ナザリック地下大墳墓、第六階層。

第六階層に広がる大森林の向かい側、闘技場を挟んだ方向に広がる平原にて夥しい数の戦士達が隊列を組みまるで群体の様に一糸乱れぬ行軍を行っていた。

彼らはナザリック地下大墳墓にのみ生まれるアンデッドの一種、ナザリック・エルダー・ガーダー……平均レベル三十前後が凡そ五千。レベル三十台が英雄クラスであるこの世界において英雄クラスが五千体という頭の可笑しい軍勢であるがしかし、ナザリックからすれば雑兵もいいところである。

そんな彼らがこうして集められ隊列を組み、行軍をするのはもうまもなく迫るナザリックがこの世界に来て初めての戦争の為である。

竜王国へと侵攻するビーストマン十万に対してぶつけるには心許ない数字であるがしかし、既にビーストマンの群れを率いている強力な個体も精々がレベル三十台後半でしかなく如何に数の差があろうとも勝利する事は容易いとナザリックの知恵者たちは太鼓判を押した。

いや、そもそも十万全てを相手にする必要などないのだ。

「凡そ半分近くのビーストマンは我々別働隊が処理するのだからね」

そう告げるのは行軍する彼ら全体を見る事が出来る闘技場上層に佇む赤いスーツ

の悪魔、ナザリックが第七階層の階層守護者であるデミウルゴス。そんな彼の言葉に耳を傾けるのは今回の戦にて軍勢の指揮を執るライトブルーの蟲の異形、デミウルゴス同様にナザリックの階層守護者……任されるは第五階層のコキュートス。

「ナルホド、二面作戦トイウワケか」

「そうなるね。ネームレス様と君が率いる軍勢が正面から半分を相手取り、私の率いる悪魔が魔法により残りの半分を対処する……そして、ある程度の数になったら眠らせて私の実験場へと運んでいく、という話さ」

流石に五万も収容は出来ないからね。

そう笑うデミウルゴスにコキュートスは頷き、拡声器の様なマジックアイテムで行軍する軍勢に指示を出していく。付け焼き刃でしか無い軍略に未だ慣れていないのか、少しぎこちない指示を出すコキュートスにデミウルゴスはそれを馬鹿にするように笑うのではなく友人の成長を微笑む。

「まだまだぎこちないがなかなか慣れてきたんじゃないかな？」

「ムウ、ヤハリマダギコチナク見エルカ……マダマダ未熟、精進セネバ」

そう意気込むコキュートスにデミウルゴスは頷き、同時に負けられないと言わんばかりにその頭の中で今回の戦での動きを次々とシミュレーションしていく。どんな事が起きようとも問題なく対処出来るように、万が一にも失態を晒さないように。そう、思考を回しているとふとある事を思い出したデミウルゴスはシュミレーションを切り上げ、手元の戦略書に目を通すコキュートスに向き直る。

「コキュートス、そういえばだが」

「ム、ドウシタ、デミウルゴス」

「実はだね。ネームレス様が今回の戦いに際して戦力の強化にあの御方が所有なさっている世界級アイテムの力でエルダー・ガーダー五千体分の装備を御用意なさるそうだ」

「ナント……!?!」

予想外の言葉にコキュートスはその大顎をカチカチと鳴らし反応する。

たかだか雑兵らの為にわざわざ至高の御方直々に装備を用意する、というあまりにも、ナザリックのシモベとして大きすぎる榮譽にコキュートスは自らが指揮するナザリック・エルダー・ガードー達に嫉妬を抱きつつもそこまで期待されているのだ、とより一層に奮起する。

自らが装備を賜れない事は確かに残念であるが、装備を賜った兵らを指揮する以上コキュートスに敗北という失態は考えられない。

「ナラバ、ナラバ……！ヨリ一層ノ研鑽ヲ、ギコチナイ指揮ナド見セラレヌ。コノコキュートス、必ズヤ御身ノ御期待ニ御応エシマシヨウ!!」
「ああ、頑張ってくれコキュートス。私も応援しているよ」

より一層の奮起を促したデミウルゴスはコキュートスの言葉と態度に微笑を浮かべ、この第六階層を後にした。

竜王国への今までに例を見ない程のビーストマン大侵攻の件はすぐ様に周辺諸国へと知れ渡った。それは竜王国より逃げてきた商人たちが、決して叶えられるとは思っていないが藁にもすがる思いで出した救援要請によって知らしめられた。

それに対してバハルス帝国は自国の護りを強化させ、更には魔法詠唱者マジックキャスターの増員及び育成に力を注ぎ始めた。恐らくは竜王国に侵攻しある程度は数が減るだろうと考えそれを迎え撃つ為の行動。

長年竜王国に手を貸していたスレイン法国は未だ沈黙を保っている。スレイン法国から来た一部の商人らは新たな神が降臨したなどという真偽の疑わしい噂をする

だけ。

ローブル聖王国はやはりと言うべきだろうか、多数の亜人種の紛争地帯であるアベリオン丘陵と隣接している彼らは近頃活発化している彼らを理由に救援要請を断った。

さて、それでは、残ったり・エスティーゼ王国は？

そんなもの聴くまでもないだろう。

竜王国を生贄にすれば満足して王国までは侵攻してこないだろう、と腐った貴族たちは一様に阿呆みたいな考えを信じて国王ランポッサ三世の出す救援を取り止めさせたのだ。頭の回る一部の貴族らはそんな腐った貴族と第一王子の考えに頭を抱えるばかりだ。

「で？ どう思うよラキュース」

「本当に万を超えるビーストマンの大侵攻なら、私たちだけが行って……」

さて、そんなリ・エステイーゼ王国の王都にある冒険者組合にて二人の冒険者がその事について言葉を交わしていた。

一人は美しい金糸の如き髪に緑色の瞳を持つ白い鎧を身にまとった女騎士。彼女の対面に座るのはそんな彼女とは対称的な巨石を思わせる大柄な体軀、金髪は髪は短く刈り上げられ肉食獣の様な瞳に女性の太腿を両方合わせたようなサイズの首、その腕は丸太のように太い。正しく巨漢と言うべき戦士であろうがそのハスキーな声音から分かるやもしれないがこれでも女なのである。

前者の名をラキュース・アルベイン・デイル・アインドラ、その名から分かる通り彼女はこのリ・エステイーゼ王国の貴族の令嬢である。後者の名はガガーラン、ラキュースとチームを組んでいる冒険者の一人である。

「確かにな。聞きゃあ、アイツらは普通の人間の兵士の十倍強えらしいからな……そんなんが万超えなんて流石の俺らも不利すぎる」

「ええ……私の魔剣キリネイラムを使っても……難しいわ」

「だよなあ……」

そう、二人はため息をつきラキユースが机のカップへと手を伸ばそうとして、彼女の視界に入っている組合の出入り口から組合へと入ってきた人物が視界に映る。

「あ」

「んん？おっ、こっちだこっち！」

ラキユースの漏らした声にガガーランがラキユースの視線の先を辿り、顔見知りを見つけ声を上げて呼ぶ。

そんなガガーランの声に気づいたのかその人物は片手を上げて応え、そのままラキユースとガガーランのもとへ歩いていく。

「よお、久しぶりじゃねえか。どこ行ってたんだ？仕事か？」

「うむ、レエブン公の領地にある湖でハウスイーターが群れを作っていた様でな。それらの駆除を頼まれた」

「へえ、ハウスイーターの群れか。流石じゃねえか……これなら、もうすぐオリハ

ルコンか？」

ガガーランと和気藹々と話すのは一人の偉丈夫。赤い羽根が一枚刺されたバケツの様なヘルムを被り、鎖帷子の鎧の上から着ている鉄板鎧を覆う白布と背に背負う円形の中盾にほ共に彼が手ずから描いた太陽のマーク。その胸にかけているプレートはミスリル。

彼はこの王都の冒険者組合にある日、ラキュースらのチーム『蒼の薔薇』に導かれそして瞬く間にそのランクを上げていった冒険者である。竜王国より流れてきた竜殺しであるアダマントイト級冒険者『白晶』や先日エ・ランテルで起きたアンデッド事件によってアダマントイトに昇格した冒険者チーム『漆黒』に続いて王国のアダマントイト級冒険者になるであろうと冒険者組合から期待されている。そんな彼は温厚そうな声でガガーランとラキュースに対して話を投げかける

「ところで、王都へと戻ってきた際に耳にしたのだが……竜王国へビーストマンの大侵攻があるというのは本当なのだろうか」

「ええ、残念ながら本当よ」

「流石に十万つてのは誇張だろうが、まあ、万超えなのは事実だろうな」

言葉尻の弱い二人に噂が本当であると理解した彼はすぐ様身体の向きをラキュースから組合の出入り口へと向け今すぐにも走り出そうとするが、嫌な予感がしたガガーランが彼の肩を掴む。

「おいおい、どこ行く気だよ」

「無論、竜王国へ」

「話聞いてたか？万超えのピーストマンだぞ？」

言外に無理だと語るガガーランに彼はそのバケツの様なヘルムにあるスリットから見える意思を感じさせる瞳は決して覆せぬものであり、ガガーランはその瞳に睨まれ一瞬後ろへ退りそうになったが持ち堪える。

と、そんな二人を落ち着かせようとラキュースが席を立とうとして、新たな乱入

者が姿を現した。

「どうした、お前たち」

「イビルアイ……！」

赤の外套に白地に黒で何らかの模様が施された仮面を付けたおおよそ十代前半の少女ほどの体格の人物、イビルアイが三人に声をかけた。その後ろには双子なのか瓜二つの金髪の少女らがガガーランと彼を見ていた。

すぐ様、ラキュースは現状と経緯をイビルアイに話しその間に彼がどこかへ行かないようにガガーランは彼の肩を掴む手に力を込める。

「ふむ……なるほどな。こいつらしいと言えよこいつらしいが……死ぬぞ」

「修羅場は何度も潜り抜けている」

イビルアイの鋭い言葉に彼は何をいまさらと言わんばかりに胸を張って応える。

そんな彼にイビルアイはため息をつき、目の前の男がどういう訳か自分の生き死にを重要視していない事に頭を抑える。そして、恐らくラキュースや自分たちがいくら言葉をかけても止まることのない未来を容易に予想出来ることに再びため息をつく。

「ラキュース、無理だ。馬鹿につける薬はないぞ」

「イビルアイ……」

「……たくっ。認める以外にねえって事か」

ガガランもため息をつき、彼の肩を掴む手を離す。

「もうどうしようもねえんだ。行きたきゃ行っちゃまえ、だが死ぬんじゃねえぞ」

「ああ、分かっているとも。何より、俺は俺の使命をまっとうするまで死ねんからな」

ハッハッハッハ!!と笑う彼にガガーランとイビルアイだけでなくラキュースもため息をつき、双子はオーバーなりアクションで肩を竦めて首を横に振る。

そうして、いつの間にかに組合から出てった馬鹿がどうなるのか、イビルアイは柄にもなく心配していた。

コキュートス喋らせるの大変。

今回名前だけ出したハウスイーターってのはまあ、村の家屋ごとバックリ食べちゃうデカイワニのモンスターと想ってくれれば。

苛立ち

私は頑張った。

バジリスクに呪死させられたのにそのまま解呪せずにオンスモを倒す程度には頑張った。

前話を投稿して来た感想がほぼ太陽万歳だった。普通に吹いたわ焼き鳥食べたい。

あ、Twitterで質問箱始めました。興味があったら来てね

それは唐突だった。

大地を揺らす無数の行進。

大気がうねる程の幾つもの咆哮。

気分が悪くなるほどの血の臭い。

それを感じとった村の人々は一様に間に合わなかった、と嘆いた。そんな大人たちを見て子供たちはいったい何なのかは分からないが言い知れぬ不安感、恐怖に襲われた。泣き出すもの母親へ逃げるもの家の中に隠れるもの色んな色んな反応をする。

そんな子供らを守るために女は子供らを連れて村の倉庫へ、男は農具や狩り道具にボロい剣や盾を握る。彼らは皆結果を理解していた。

だが、それでも、と抗う事を決めたのだ。

音が近づいてくる。臭いが近づいてくる。

より恐怖し逃げ出したくなつて、それでもなけなしの勇気を振り絞って構え……

『アアアア!!!』

獅子の様な獣、豹のような獣、虎のような獣、蛇の様な獣、猫のような獣、狼のような獣、猪のような獣、色んな色んな獣共が藪を突き破って村へと殺到した。

目は血走り、口からは涎を垂れ流し、その手足を乾かぬ血で濡らしながら獣はピーストマンの小さな群れが無辜の民草へと踊りかかった。ただ喰らうために、ただ食欲を満たすために、ただお腹が空いたがために。

腕が振るわれ、尾が振るわれ、口を開いて、その度に鮮血が吹き上がり、悲鳴が上がり、ピーストマンたちの雄叫びが上がる。血肉を喰らい、血肉を大地に混ぜ、臍物の中身を撒き散らす。

そんなさなかにとある一匹が微かに人間では聴こえないような嗚咽を耳にした。

『キィヒャア……』

愉悦の笑みを獣は浮かべる。そうして嗚咽の発生源を探し始めれば、何かを探す動きをする同胞に周りの獣らもその意図を察して探し始める。

一体だけならば周囲の騒がしさに見つける事は難しかったろうが複数体による捜

索は嗚咽の方向を特定し、其方にある有人の建築物を特定していく。

目指すは一軒の倉庫。其方へ向かう何体かの獣らに別の獣らがついていく。そうして近くへといけば匂うのは獲物の匂い。柔らかで甘い子供や女の匂いに獣らは涎を垂らして倉庫を襲い殺到していった。そうすれば倉庫から響き渡るのは女子供の悲鳴や獣らが肉を貪る咀嚼音。

聴くに堪えない、見るに堪えない。

そんな血肉の狂宴に苛立たたしげにソレは足を踏み入れる。

踏み締めた地面に焦げ跡のような足跡が生まれる。

呼吸と共に火の粉が吹き上がる。

そこに居るだけで空気が熱されていく。

真っ先に周囲の環境に変化が生じた事に気がついたのは配下の獣が連れてきた未だ産まれて数ヶ月程の赤子を喰らい一休みしようとしていた他の獣らよりも一回りは大きく白い体毛の獅子の様なビーストマン。

白獅子のビーストマンは腰を下ろそうとしていたのを途中で止め、すぐ様立ち上がった。何か空気が変わったのを感じとったのだろうか。

次に気がついたのは蛇の様なビーストマンたち。他の哺乳類に近しいビーストマンと違い爬虫類寄りであるために変化に気づいたのだろうか。

そして、ソレが姿を現した。

捻れた螺旋の大剣を握り締め、片手に火を灯す薪の王。

人ならざる体軀から火の粉を舞わせ、炎をチラつかせるネームレスはまるで苛立っているように荒々しく大地を踏み締め、その兜から覗く亡者の赤い瞳はまるで熱視線の様な感覚をビーストマンに抱かせる。

『ギィアアア!!』

そんな熱視線に耐えれなかったのか一体の蛇のビーストマンがネームレスへとまるで恐怖を押し退けようとする様に奇声をあげて向かっていく。

ネームレスはその大剣を持たぬ手で向かってくるビーストマンの攻撃が当たる前

にその蛇の鼻面に触れ――

邪魔だ

瞬間、ビーストマンは黒ずんだ炭へと変わった。

火炎領域最強であるネームレスが保持するパッシブスキル・『灼熱のオーラ』による炎熱系の魔法ダメージ。憤怒の魔将イビルロードが保持する『炎のオーラ』とは格が違うそれは触れたビーストマンを意図も容易く炭へと変えて見せた。

そんなスキルによるものなどわからないビーストマン達は驚愕し一様に立ち上がり、突然現れた敵を殺そうと口々に吠え立てる中、リーダー格である白獅子のビーストマンだけは今すぐにでも逃げ出そうとしていた。

本来群れのリーダーに必要なものとは強さよりもまず臆病さである。それは群れへと迫る脅威を誰よりも早く察知し群れを率いてその脅威から逃れ生きる為である。無論、ただ臆病では誰もリーダーについてこないため強くなければならないが。その点を見るにこの白獅子のビーストマンは優秀なリーダーであったのだろう。

『あ、ああ、アアア……』

無理だ、勝てない、いや、それよりもコイツらはアレがなんなのか分かっていないのか？

凡そ三十代後半のレベルでしかない白獅子はネームレスとその背後の存在に全身から汗を流し、恐れ戦き、同時に部下のビーストマンたちがそれに気がついていないことに驚いていた。

灼けろ

ネームレスが左腕を振るえばそのまま炎の波がビーストマンたちを飲み込みにかかると。恐怖心を誤魔化そうとするビーストマンたちはそのまま炎の波へと自ら身を投じ、白獅子のビーストマンはその炎の波がまったくの別物に見えた。

巨躯の狼より放たれた何体もの、何十体もの狼の群れ。亡者の赤い瞳を煮え滾ら

せながらその牙の如き刃を振るい自分の肉を切り裂こうとする狼の群れに。

焼けた村だったもの。

幾つものビーストマンであった炭の塊が転がり炭として残らず灰と変わった村人たちだったもの。

そんな村の中心、広場の真ん中でネームレスは一人焚火の前で腰を下ろしていた。火を灯す遺骨と灰と螺旋の剣。

不死人の抛り所でネームレスは一人火を見つめている。

「我が亡者の王」

どうした

「生き残りが」

火を見つめるネームレス、その背後に跪く騎士が一人。

金色の鎧を纏い背に身の丈ほどの鎚を背負った騎士。ネームレス曰く、とある神ロイドを最高神と信ずる白教において最初の不死である聖騎士の装備を模したモノを身に纏った不死の戦士^{デス・ウォーリア}。

その纏っている鎧から便宜上、その不死の名を与えられた彼の名はリロイ。

スキルで呼ばれたモンスターにも性格の違いがあるのか、それとも聖騎士であったその鎧と名前の持ち主が影響しているのか、アンデッド系モンスターであるにも関わらずカルマ値が善よりの行動をする彼の腕には幼い子供が抱きかかえられていた。

性別は

「は……恐らく少女と思われます」

そうか。そう口にしたネームレスは近くに転がっていた白獅子だったモノの腕を火に焚べる。

ならば、クワイエッセの下へ送るか。……火防女見習いにでもする

「はっ」

頭を下げそのままの体勢でその場に留まるリロイ、そんな彼に振り向かずネームレスはただただ火を見つめる。

ナザリックを留守にして二日、ネームレスはリロイを含む四体の不死の戦士を引き連れこうして竜王国内に侵攻し、途中から軍勢から離れ村を襲っているピーストマンどもを気まぐれに焼き払っていた。決して決戦となる日までに死ぬ村人達を憂いての事ではない、二日ほど前にネームレスが気がついた事柄に苛立ちそのストレスを発散しているだけだ。

しかし、ストレス発散を数こなしているがネームレスの中の苛立ちは寧ろ火に油を注ぐかのように燃え続けている。

……カーク、クレイトン、レオナルド

「ここに……」

「村人及び獣の死亡を確認」

「……リロイの抱える幼子を残し全滅」

そうか……
《転移門》

トゲの騎士カーク、放浪のクレイトン、薬指のレオナルド。ネームレスの記憶にある不死人の装備を模した装備を与えられた彼らが戻ってきたのを確認し、ネームレスは指輪に込められている魔法を行使する。

不便だろうと余っていた指輪にモモンガが込めた魔法・転移門が発動しネームレスの横側に黒い歪みの様なものが発生し、立ち上がったリロイが子供を抱えたまま入っていく。暫くして出てきたリロイを確認してその歪みを閉じ、ネームレスは立ち上がる。

行くぞ

「「「はっ」「」」」

ネームレスと四騎士はまた次の村へと向かってその足を向けた。

今回は短め。

なんでクレイトンを選んだのかというとなく。

多分、シーリスイベにも出たからかな？

焼き鳥食べたい

狂喜

おかしい。ショットガン記念に主夫高校生を書いていた筈なのに関わらず、俺は UNDEAD を書いていた……なぜだ。

あ、一年越しの刑部姫当たった。

涙を啜る音がする。

神へと祈る声がある。

自暴自棄となり泣きながら怒声をあげる者がいる。

どうしようも出来ぬ己を嘆く者がいる。

そして、そんな民草の為に何も出来ず絶望に沈む女王がいた。

竜王国の女王ドラウディロン・オーリウクルスは玉座の間で玉座に頭を抱えながら座り込んでいた。彼此数日間、彼女は現状をどうしようもない自分に対して、目前へと迫っている終わりに対して、自分の国民たちを救えないことに対して、ただただ絶望していた。

逃げるにしても準備等で時間はかかり、人数が人数故に逃亡中に間違ひなく追いつかれる。

自らの力を使っても国民は死に絶え、決して全てを殺せる訳では無い。

自らの無力さを責める彼女はそんな余裕を無いのか目元には薄く隈が出来、髪は少しはね、やややつれた様な表情と頬をつたっていた涙が乾燥し跡がくつきりとしている。

他国へ向けた救援要請も突っぱねられ、もはや絶望の奈落へと堕ちていくばかり。いつもは宰相らしからぬ軽口を叩く宰相も口を噤み俯いている。

だがしかし、何事にも希望というものはあるのだろう、玉座の間の外より響いた

声にドラウディロンも宰相も顔を挙げさせられた。

「失礼します！ 法国より使者の方々が参りましたッ!!」

「ッ!? 通しなさいッ!?」

すぐ様宰相が声を上げ、扉を開かせる。

使者が来た、という事はそういう事なのかもしれない。

ドラウディロンにも宰相にもその心うちには微かにであるが光が見えた。使者と会うのには身嗜みが少々不味い自分の状態を忘れるほどに。

「此度の侵攻に対しての心中お察し致します……ブラックスケイル・ドラゴンロード黒鱗の竜王陛下」

兵士に連れられ玉座の間へと入り、そのような言葉と共に礼をした法国の使者。入ってきたのは二人の男、内一人の事をドラウディロンは知っていた。竜王国が少なくない額の寄付をする事で応援として来る法国の特殊部隊の一つの部隊長の

男。人混みに紛れ込んでしまうような平凡な顔立ちに頬に傷がついている金髪の男。

陽光聖典の隊長。名前は、残念ながらドラウディロンは思い出せなかった。

そして、もう一人。

陽光聖典の隊長同様金髪の若者、白と茶のコートに腕輪の様な装飾の装備。その装備からして通常のそれではない事がドラウディロンにも見て取れる。

「さて、今回の件にて法国より例年通り陽光聖典、それに加え漆黒聖典より私、クアイエッセが参りました」

膝をつきそう貼り付けた笑みを浮かべながら若者、クアイエッセが告げた言葉にドラウディロンも宰相も耳を疑った。

「ま、待て……一部隊に貴様一人？……あ、明らかに数が足りなさ過ぎる!!」
「今回の侵攻はいままでのものとはわけが違うのですよ!!」

そんなドラウディロンと宰相の叫びに陽光聖典の隊長は背中に冷や汗をかくがその隣のクアイエッセはまったくもって意に介し無い。

何せ、クアイエッセはどうにかなる事が分かっているから。

「ええ。分かっております。なんら、問題はありません」

貼り付けた笑みは変わらず、クアイエッセは言葉を重ねる。

「此度。我らが新たに降臨なされた神がその軍勢をもってアレら獣の群れを尽く蹂躪するのですから」

「は？」

クアイエッセの口から出てきたあまりにおかしな話にドラウディロンも宰相もまるで鳩が豆鉄砲を打たれたかのような表情と声を出した。

そんな二人を見て、陽光聖典の隊長ニグン・グリッド・ルーインはなんとも言えないまるで哀れむかのような表情をしつつこれから起こる事にただただ諦めていた。

場所は移り変わり、竜王国王都の外壁壁上。

元漆黒聖典第五席次クアイエッセの言葉により宰相と何人かの衛士らと共に壁上へと足を運んだドラウディロン。

彼女が目にするのはもはや後十数キロ程までに迫っているビーストマンの軍勢の

姿。

竜王の血を引いているが故に常人よりは身体能力の高いドラウディロンの視力が見せるのは口から涎を垂らしながら血走った眼をしているビーストマンたち。明確に絶望を視認したドラウディロンの顔色は真っ青である。

だが、クアイエッセは違う。

まるでヒーローショーが始まるのを待つ子供のように今か今かと待ち焦がれている表情を見せている。なお、クアイエッセの傍らに立つニグンとニグン率いる陽光聖典らは顔を俯かせている。

「クアイエッセ・ハゼイア・クインティア」

そして、そんなドラウディロンらの意識を遮るようにクアイエッセの名を呼ぶ声がした。そちらへその場にいた全員が視線を向ければそこにいるのは一人の女性。

修道女の衣服に身を包みフードを深く被って鼻から上が伺えない裸足の女性。

そんな彼女を確認してすぐ様クアイエッセと陽光聖典らはその場に跪いた。

「おお、従属神様……」

「本当に竜の血を引いているのですね……」

クアイエッセを無視し、チラリと修道女はドラウディロンに視線を向けたがすぐ様跪くクアイエッセへと視線を戻し口を開く。

「じき、始まるでしょう。貴方達はここより我が主の示される威を目に焼き付けなさい」

「はっ！」

そう言ってクアイエッセより視線を壁外へと向ける修道女。

周りの人間、ドラウディロンをはじめとする竜王国の人間らはまったくもって何事なのか理解出来ていないが陽光聖典もクアイエッセもそんなものはどうでもいと立ち上がり修道女同様壁外へと目を向ける。

そんな彼らにドラウディロンは本当に神とやらが何かをするというのか、と疑いつつも壁外へと目を向け――

そこには幾つもの歪みがあった。

王都壁外に横に並ぶ幾つもの暗い暗い歪み。

ドラウディロンはその歪みを見て、熱を帯びた寒気が走った。まるでそこにおぞましいモノがいるかのように。

いや、それよりもドラウディロンはその熱を帯びた寒気という矛盾したモノに覚えがあった。つい先日になんなものを感じさせる者と出会っていた。

そこにあるだけの歪みは揺らめいた。

そうして、歪みより何かが現れる。

それは騎士だ。

槍を持つ者、剣を持つ者。

竜王国や王国、帝国、自国と周辺諸国ですらそんな鎧を用意出来ない。そんな鎧

を着込んだ騎士がぞろぞろとまるで軍勢の様にその歪みから行進して壁外に現れていく。

銀色の全身鎧。二本の角を生やした兜を被った銀色の騎士たちが歪みから現れ隊列を組んでいる。

壁外へと隊列を組んで並ぶ銀色の騎士ら、凡そ五千。

それらが出たあと歪みは真ん中のモノを残して消えていく。

残った一つ。また揺らめいた歪みから姿を現したのは銀色の騎士ではなく、いやそれよりもそもそも人型ですらない。

ライトブルーの異形。

蟲の様な大顎、多腕、冷気を纏う異形。一振りの太刀を握る武人の異形。

そして、その後に見れるのは銀色の騎士と同じ鎧だが色が黒い騎士ら。

彼らが手に持つのは武器では無く旗。

王宮にある調度品の布ですら霞むほどの良質な布で作られたのであろうその旗は、風によってはためきながらその旗に施された紋様を見せつける。

まるで削り出された水晶の様なモノとソレを中心に炎のような模様で縁取られた

円。

ドラウディロンではなく修道女とその紋様の持ち主が見ればそれは『人間性』と『不死の呪い』^{ダイクリング}であると語るもの。

そんな旗持ちの後を追うように現れるのは四人の騎士。

金色の聖騎士、トゲの騎士、放浪の騎士、葉指の騎士。

異形の武人に比べればその武威は弱いだろうがやはり、アダマントイト級の冒険者を凌ぐ存在であろうことがドラウディロンには理解出来た。だが、だが違うのだ。彼らではない。そうドラウディロンは断ずる。

あの歪みが現れてからドラウディロンが感じる熱を帯びた寒気の原因は未だにあるの歪みの向こう側にいるのだ、とドラウディロンは本能で察していた。

そんなドラウディロンに応えるように、それは歪みから脚を出す。

瞬間、熱が湧いた。

銀色の騎士たちが一様にその場で足踏みを始めた。

黒色の騎士たちがその手に持つ軍旗をより高く掲げた。

クアイエッセがその表情を狂喜的な笑みへと変えた。

ニグンが畏れながらも尊いものを崇めるような表情を浮かべた。

そして、ドラウディロンはその本能が、竜王の血が逆らうたと警鐘を鳴らし始めたのを感じ取った。

「(あ、死ぬ)」

空気が熱を帯びた。

竜王国に鐘が鳴り響いた。

空に火の粉が舞った。

その日、竜王国の民はみな一様に同じモノを見た。

空は暗くとても暗く、太陽は黒ずみそれを縁取るように炎が円を描き、そしてその円より炎が、何かが大地へと垂れ流れているような奇妙な恐ろしい光景を。

ただ、彼らはそれに暖かさを感じた。

人間性の暖かさを。

歪みより姿を現したのは一人の騎士。

熱を帯びた螺旋の大剣をその手に持ち、炎を纏う焼け爛れた歪んだ騎士鎧に異形の王冠が兜の後頭部に戴く王威を周囲にばら撒く亡者の王。

その威容は壁上から見ているドラウディロンにも伝わり、衛士らは反射的に跪き宰相は尻餅をつきドラウディロンは放心状態に陥っていた。

そんな彼らをよそにクアイエッセは狂喜乱舞しながら叫ぶ。

「おお、おお！我が神イイイイ！！！！アレが、アレこそが我らを御導きくださる新たな神イ！！戦神たる炎の王！ネエエムレエス様アアア！！！！」

狂信者でしかないクアイエッセの反応に陽光聖典の者達はドン引きしつつもその視線はそれより離せなかった。

戦神。

亡者の王たるネームレスはその手に持つ火継ぎの大剣を迫り来るビーストマンの

軍勢へと向け、

貴公ら、蹂躪せよ——

理不尽を振りかざしてきた獣の群れに理不尽が立ち塞がった。

ネームレスのエンブレムはダークリングの真ん中に人間性を配置したようなモノです。やはりダークソウルといえどダークリングと人間性ですからね。

ビーストマンへの立ち塞がる理不尽

……諸事情で苛立ってるストレス溜まってるネームレス、至高の御方の前だから張り切ってるコキュートス及びシモベ

蹂躪／雷の大槍

久々にランキング上位にいたのを見た。

感謝……圧倒的感謝……!!

それと誤字脱字報告ありがとうございます。ほんとに。

ムスブルヘイム ワールド・チャンピオン
火炎領域の最強の戦士、亡者の王による号令。それは静謐な言葉でありながら
銀騎士の軍勢に響き渡り、武人の異形コキュートスが言葉を発する。

「全軍、前へ……圧倒的ナ勝利ヲ御方へと捧げヨ」

「——！！！！」

銀騎士総勢五千は凡そ十万——途中離脱したビーストマンらはネームレスにより焼き払われ凡そ一万程が焼け死んだがしかし、竜王国内にて暴れていた他の群れが合流した事で数は当初のソレへと戻っていた——のビーストマンの群れへと行進を始めた。

平均レベル三十台のナザリック・エルダー・ガーダーは遺産級レガシの銀騎士装備により底上げされ一体一体がこの世界において一騎当千とは言わずとも一騎当百程の實力を誇る。それが五千、単純計算で現在侵攻しているビーストマンの軍勢の五倍を討ち取れる軍勢である。

しかし、そんなことを知らぬビーストマンの軍勢はろくな隊列を組まずに食い物が自らやってきたと涎を垂らしながら咆哮し銀騎士の軍勢へと我先にと突っ込んでいく。

振るう刃、突き出す槍。

獅子のビーストマン、蛇のビーストマン、虎のビーストマン、豹のビーストマン、猫の、犬の、多種多様なビーストマンがその爪を牙をもって銀騎士へと襲いかかる。だががしかしだ、所詮は獣。

その爪が牙が鎧へと突き立てるよりも早くに銀騎士の振るう劍が槍がビーストマンの肉へと深々と刺さり切り裂いていく。

それはさながらステークをナイフで切り分けるかのように軽々と引っ掛かりもなく容易くその身体を解体していく。

倒れ伏した獣だったものを踏み碎きながら銀騎士たちは進んでいく。

死ね。死ね。死ね。死ね。

勝利を。勝利を。勝利を。勝利を。

銀騎士の兜より覗く亡者の赤い眼光は一樣にビーストマンの死を、至高の御方へと捧げる勝利を渴望していた。

そんな生ある者では感じられない濃密な死の香りに怯える一部のビーストマン。しかし逃れる事は出来ない、既に王の側仕えたる四騎士が戦場へと歩を進めている。不死の戦士。壁役を務める事もある彼らはやはり、その身にある力を使い逃げようとするビーストマンを戦場に釘付ける。

これは王へと捧げる戦。それより逃れる事は一切許さない。

そう言っている亡者の赤い眼光を滾らせ四騎士は戦場を進む。

身の丈ほどある鉄槌、聖騎士リロイのグラントが豹のビーストマンらの顎を頭を肩を身体を破砕し、鮮血の花を作り出していく。

狡猾なる騎士、トゲの騎士カークがその手に握るトゲの直剣を振るい獅子のビーストマンらの身体をバターのように裂きながら進み、白獅子のビーストマンを抱擁する。その夥しい程に幾つものトゲを生やしたその全身鎧により抱擁を受けたビーストマンはその身体に幾つもの穴を空け全身から血を流し死に絶える。

放浪のクレイトンがその竜断の斧を振り払いながら進行方向のビーストマンたちを尽くその身体を切断し吹き飛ばしながら道を作っていく。

そして、銀仮面を付けた葉指のレオナルはクツクツと嗤いながらその欠け月の曲剣を振るっていきまるで舞うようにビーストマンを殺していく、途中で襲撃した街より手に入れたのか盾を持ったビーストマンがいたが曲剣は盾を無視してその身体を切り裂いていた。

抗う事が許されない程の存在である四騎士にビーストマンがどんどん数を減らし

ていく中、彼は未だ苛立っている。

コキュートス、真ん中を開けろ

「ッ！ハッ——中央ヲ開ケヨ！」

ネームレスに命じられコキュートスが軍勢へと指示を出せば、中央を開けるように軍勢は動き、唐突に開いた中央へとビーストマンらが雪崩込んでいく。

そんなビーストマンらにコキュートスは迎え撃とうとして——

灼けろよ

ネームレスの左腕、指にはめられた二つの指輪がその力を発揮する。

片方は先日を使用した召喚モンスターのステータスを強化するサモン・アップ・

リング。もう片方は……

『!!!!!!!!!!』

戦場に王都に響き渡る程の咆哮をあげる存在。

一つの屋敷程はあるだろう灰色の巨軀に動かせば簡単に人間など吹き飛ばであるう翼、生命を容易く奪う鋭い爪と牙、幾つも生えた角に家屋を容易く倒壊させる太い尾。

ネームレスの上空、壁上よりも高所に突如として現れるは一体の竜。

課金アイテムによってネームレスの望む姿に生まれ変わった竜の名は『古の飛竜』、レベル八十代後半の召喚モンスターである。

そんな突如として姿を現した飛竜に中央へと雪崩込んできたビーストマンたちはその脚を止め、そのまま後から来たビーストマンらに押し倒され転んでいきパニックに陥る。

そのビーストマンの醜態にネームレスはその兜の下で眉一つ動かさず腕を振るう、そうすればそれに応えるように飛竜はその強靭な顎を開き、口内を赤く染める。つまるところ、竜種の代名詞とも言える息吹^{ブレス}である。

吐き出された火炎はそのまま左右の銀騎士を灼かずに中央へと雪崩込んでいた。ビーストマンらだけを焼き殺していく。

辺りに満ちる焼けた肉の臭い、それはビーストマンたちに怒りと恐怖を抱かせ、銀騎士たちはその士気を高めた。

好きに灼け

『——！』

ネームレスの言葉に従い飛竜はその場からビーストマンの軍勢の方へと飛翔し時折息吹ブレスを吐いていく。

それを亡者の赤い眼光で見届け、戦場へと歩を進める。

「ネームレス様」

止めるな。心配だと言うのなら旗持ちを連れていく

「ハッ」

止めようとするコキュートスに先んじて妥協案を投げつけるネームレスにコキュートスは頭を下げ、ネームレスの近くにいた旗持ちの黒騎士二体が旗をその場に突き刺し、背負う大剣と盾を手にして中央を進んでいくネームレスに追従する。

中央を進むネームレスは灼けたビーストマンだったものを踏み碎きながら進む。そんなネームレスに怒りが湧いたのか一体の大柄なビーストマンがネームレスへと突っ込んでくる。

緑色の体躯に赤い角を生やし、カメレオンの様な眼を持つ蛇のビーストマンの様な存在。ネームレスはすぐにそれが蛇のビーストマンの王のようなモノだと理解する。

「死ねえッ!!!」

殺意を剥き出しにその手に握られた鈍の様なモノをネームレスへと振るう。

それを火継ぎの大剣で受け止めれば剣が孕む熱に鈍は溶けてしまい、すぐ様ビー

ストマンはそのカメレオンの様な眼をネームレスへと向けて妖しく輝かせるが何も起きない。

「っ!? 何故だ、何故石にならない!?!?!」

ほう……さしずめギガントバジリスクのビーストマンか……面白い……面白いが不愉快だ。

そう恐ろしい声音で呟いたネームレスにギガントバジリスクのビーストマンは熱を帯びた寒気のようなモノを感じてその下顎をネームレスの左手に掴まれる。

瞬間左手から吹き出す炎。

悲鳴をあげる暇もなく首が灼かれ、頭が灼かれ、身体が灼かれ、後に残るのはビーストマンだった灰。

その灰を踏み躪りながら、ネームレスは剣を握り身体だけを右側に捻じる。その眼光も下半身も眼前のビーストマンたちへ向けたまま。

灼け死ぬ、虹の橋よ墮ちろ、世界を斬るは我が焰の剣イイイ……！！

《次元断切》ワールド・ブレイク ウウウウ……！！

限界まで捻った身体を勢いよく引き戻し、そのまま右手に握る火継ぎの大剣を振るい自身の持ちうる最強のスキルを行使する。

先日より引きずっていた苛立ち、戦場での高揚もあるのか、火炎領域最強である自身を同じく火炎領域の炎スルトの王と重ねる様に叫ぶネームレスに応えるように発動したスキルは普段以上の暴力を発揮した。

距離にして数キロ。

放たれた一撃は一直線にビーストマンの軍勢を焼き切り裂き、ビーストマンの軍勢後方にてビーストマンを攫っていた悪魔たちを掠めそうになりながら軍勢からさらに後方まで大地に切傷と焼け跡を残した。

そんな有り得ない光景に壁上のクアイエッセは狂喜の極みで白目を剥き、ニグンは滂沱の涙を流し、宰相や衛士らは半ば気絶し、そしてドラウディロンはポーツと

した表情でそれを見ていた。

無論、コキユートスはネームレスのその一撃に感激し心撃たれより一層に軍勢の指揮に力が入り、それに応えるように軍勢もまたその士気を高めた。

「討ち滅ボスハ今カ、ナラバソノママ潰セエ！」

「——」

振るった大剣を下ろし、ネームレスは自ら作り出した切傷と焼け跡を眺めながらその場で足を止める。

今の一撃でどれほどのビーストマンを殺したのだろうか、ある程度落ち着いたネームレスはそう自問自答をしながら戦場ではなく自分の内を見ている。

苛立ちは最初の時よりもなるほどたしかに無くなっただろう……だが、それでも苛立ちは完全には無くならず、チラチラと意識の端に映る煩わしいモノごと灼こうと火継ぎの大剣に炎を灯し、自分を何としてでも殺そうと迫る他のビーストマンよりも大柄な屈強なビーストマンらを見据えて——

「おお おお おお!!!」

ネームレスの後方より男の叫び声が聴こえた。

コキュートスの声ではない。

四騎士と違い黒騎士や銀騎士は言葉を使う事は出来ない。

ならばいったい誰なのか、意識の端でそう気になったネームレス。次の瞬間、そんなネームレスのつい隣を大槍の如き雷が迸りネームレスの前方に迫るビーストマ
ンらとその雷をもって殺してみせた。

その雷を見て、ネームレスの中の何かが溶けたような気がした。

ネームレスは後方を振り返る。

追従していた黒騎士二体が大剣を構え、その男を警戒する。

指揮をしていたコキュートスが何時でも動ける姿が見える。

そして、肝心の男は……

一度両足を揃えて少し屈み、その後ゆっくりと両手を肘から順に学ランを着た応援団がする様なYの字に広げつつ、軽く胸を張って伸びをする。

知らぬ者が見れば何とも奇妙なポーズでありこの場でやる意味が理解出来ないもの。

しかし、ネームレスはそのポーズを登る太陽を表現し、太陽の光を全身で受けているようにも全身で輝く太陽を表現しているとも見えた。いや、いや、それよりもこの男こそが太陽なのだ知っている。

「おお！太陽 万 歳……！」

そこには太陽の男がいた。

そして、月が炎に消えた。

太陽万歳！

竜種召喚の指輪。セレネとして倒したマッチポンプのヘルカイトと同じくぶくぶく茶釜が当てたLv90ドラゴンのガチャと同じガチャ産の課金アイテム。

課金アイテム等を使用する事で召喚するドラゴンのデザインを変えられる。召喚できるドラゴンはあくまでレベル八十代な為微妙なアイテム。

灼熱の柱

最近の更新速度が自分でもおかしいと思ってるこの頃。
でもここで失速するのはなあ……と思う自分がいる。

『……ついに、ついに、手に入れたぞ、手に入れたんだ……俺の、俺の太陽……俺が太陽だ……』

『……ああ、駄目だ』

『……俺の、俺の太陽が、沈む……。……暗い、まっくらだ……』

脳裏に過ぎるは一人の青年。

嘗ての時代では、世界ではありふれてしまった悲劇の一つ。

太陽を求め、見つからぬ太陽に心折れそうになった際に生まれた隙間に身に割り込んだ蟲により悲劇を与えられた憐れな男。

セレネにとって心が折れそうになるほどの悲劇。

そんな、そんな、死んだ筈の、殺した筈の男が目の前に現れた。

変わらぬバケツヘルムから見えるその瞳は亡者のそれではなく意思強きそれ、その身より感じるのは蟲によって穢された憐れな太陽ではなく、威風堂々たる暖かな太陽。

デス・ウォーリア

四騎士の様なガワだけの存在なんかじゃあない、正しく私の、俺の目の前に立つ男は——

瞬間、俺は無意識に太陽賛美をしようとした自分を止める。

太陽の戦士の誓約をした事があるから恥ずかしげもなくやれるだろうが、しかしここは戦場で俺は竜王国を救う存在として来ているわけで、コキュートスとかもこの場にいるわけで………落ち着け俺。

何か、此奴に返さねば……

……貴公、太陽の戦士か

「おお！わかるのか！！もしや、貴公……同郷の者だろうか！」

いや、違う。俺は……ロンドール、そうロンドールの者だ

そう彼に言って俺はビーストマン共へと向き直る。その際に構えている黒騎士たちに彼の事を気にするなと伝えるのを忘れずに。

いったいどんな奇跡なのだろうか。彼はガワだけの存在なんかではなくほぼ間違いない彼なのだろう、だがあくまでこの世界の彼なだけかもしれない。下手に何か聞くことは躊躇われる。

このまま群れの中へと突っ込む。貴公ら着いてくるがいい

黒騎士たちの無言の肯定に俺は軽く頷き、二発目の次元断切を撃つ為に炎が灯っていた火継ぎの大剣の炎を弱めてビーストマンの群れへと向かおうとして、

「む、ならば俺も行こう」

……好きにしろ

俺の知る彼の様に意気揚々と告げる彼に後ろ髪を引かれるがしかし、それを何とか抑えややぶつきらぼうに応え、黒騎士たちと彼と共に群れへと向かっていった。ふと、思えば。

意識の端にいた筈の月が何処かに消えていた。

突如として戦場に参上した太陽の戦士がネームレスと共にビーストマンの軍勢の中に身を投じたのをコキュートスは見届け、戦場での戦いに目を見開いていた。

ツァーミン・ロード

蟲 王に開く瞼があるのかは不明であるが。

「おお！」

見かけは何の変哲もないロングソード、しかし確かに雷の力が宿っているそれを振るえば軽々と襲いくるビーストマンの身体を切り裂いていた。偶然かどうか、そのビーストマンらはネームレスが斬り殺したビーストマンと同様に焼き切られている。

熊のように大柄なビーストマンであってもその剣は深々と切り裂き、皮下脂肪をその雷の力で焼いていく。一瞬の隙を突いてビーストマンが襲いかかればその左手の太陽のホーリーシンボルを描いた円形の盾でそれを弾き、逆に致命的な隙を作らせ切り裂く。

ネームレスには劣るがしかし、モモンガが作り出しネームレスが装備を与えた四騎士以上の力を發揮する太陽の戦士。

一介の戦士として、コキュートスは太陽の戦士と戦ってみたいと感じた。

邪魔だ、灼けろ

太陽の戦士の死角から襲いかかる白虎のビーストマン、それを察知したのかネームレスがその腕を伸ばし掴んで白虎のビーストマンの内に火を込める。

最初はビーストマンですら気づかない小さな小さな火。だがしかし、次の瞬間には白虎のビーストマンの内では火は育ち内側から上半身を消し炭に変える炎へと成長してビーストマンを殺した。

「む、呪術か」

なんだ呪術は嫌いか

「なに、そんな事は無い。ただ、少し懐かしいと思ってな！」

ネームレスは太陽の戦士と背を合わせ囲んでくるビーストマンたちにその剣を振るっていく。

「ギィアア!!」

煩わしい……!!

剣で胴を切り裂かれながらも蛇のビーストマンが上半身だけで飛びかかってきたのをネームレスは左手を前へと出し、その掌から黒い炎を出し飛びかかってきた上半身を焼き焦がす。

そして、そのまま次のビーストマンを、そんな時にふとネームレスは止まった。先程から特に気にしてもいなかった事が唐突に疑問になったのだ。何故、自分は『呪術』を使っているのか、と。

やろうと思えばスキルの応用で呪術紛いなことは出来る。例えば『発火』や『火球』などのモノマネは当たり前前に出来るがしかし、ネームレスは先程から間違いな

くそれが呪術である事を理解し、紛い物ではなく呪術として使っていたのだ。

どういう事だろうか、そう思考を回そうとして……

「貴公!!」

「死ねえ!!」

立ち止まっていたネームレスを殺そうとつい先程灼き殺したギガントバジリスクのようなビーストマンと同じ種類のビーストマンがその手に握る剣をネームレスの兜のスリットへと突き入れようと迫り、太陽の戦士はそれを止めれず叫ぶ。

太陽の戦士の叫び声にネームレスは思考の中から現実に戻り目の前に迫る剣をギリギリで回避し、振り返った火継ぎの大剣でそのままギガントバジリスクのビーストマンの首を刎ね飛ばす。

「貴公、大丈夫か？」

問題ない……少し考え事をしてしまっただけだ

「戦いのさなかで考え事とは余裕だな、貴公！だが、気をつけろよ？」

心配するな、蟲に寄生される様な失態はしない

「む……むむ……それは、うむ……」

ネームレスの返しにバツの悪そうな声音で唸る太陽の戦士をその場に置いて、突っ込んでいく。その際に走りながら、振り返った火継ぎの大剣を振るい次々とピーストマンの首を刎ねつつその左手に黒い炎を吹き出させ足下へと落とす。

そうすると地面を黒炎が走りうねるように進みピーストマンたちの足を灼いていく。

『黒蛇』………いったいどういう理由かは知らないが………上手く使うとするか

そう呟きながら近くにいたピーストマンの顎を掴み燃やしながら周囲のピーストマンへと叩きつけ、炎をより強く燃え広げさせる。

ピーストマンを次々と灼き殺し斬り殺していくさなか、ネームレスは今まで感じ

た事の無いほどに生を自覚出来た。

清々しく今までの苛立ちが嘘のように消えているのを感じれた。

今ならばきつと何処へでも行けるかもしれない、そんなネームレスらしからぬポエミーな考えが胸中に湧き出たタイミングで、声が響いた。

『ネームレス様。こちら、デミウルゴスでございます……今しがたビーストマンの回収を完了致しました』

そうか、ならばその場より退却。残りは俺が灼く

『はっ』

ビーストマンの軍勢の後方にてスクロールの素材になる羊皮紙を確保する為に、ビーストマンを回収していたデミウルゴスからの伝言でネームレスの中にあった清々しさは一瞬で鳴りを潜め、一気にバク転をして太陽の戦士のもとへと戻っている。

「む、おお!? き、貴公か……つくづく懐かしいモノを見るな、今日は」

太陽の戦士、これよりビーストマンどもを焼き払う。ここにいれば巻き添えを食らうぞ、退け

「む、しかしだな。まだまだ数は多い、貴公だけでは……ぬう!?」

渋る太陽の戦士にネームレスは軽く首を竦め、鎧の襟を掴みそのまま持ち上げる。そんなあまりに突拍子もないネームレスの行動に持ち上げられた太陽の戦士は驚くしかなく、

言っても聴かんだろう。だから、強硬手段をとらせてもらう

「ま、待て、待ってくれ、貴公! ぬう、ぬうああああ!! き、きこおおおおお
お!!!」

そのままネームレスは持ち上げた太陽の戦士をそのレベル百且つワールド・チャ
ンピオンが誇る筋力をもって投げ飛ばした。

無論、太陽の戦士が地面へと叩きつけられて死なないう、すぐに伝言を使用してコキュートスへ受け止めるように指示を出す。

その際に戻ってこないように押し留めておく事も伝えておくのを忘れずに。

……黒騎士たちも範囲外へと退いたか。

探知の指輪を外し、アイテムボックスへしまおう。その際に一つの指輪を取り出す。俺が創ったモノではない神器級装備、マアキ・ニーウ・ローゲ。たちち・みーさんにとってのコンプライアンス・ウィズ・ロー。

その性能はギルド武器さながらのそれ、本来はコンプライアンス・ウィズ・ロー

と同じく鎧系であったが悪質人類種プレイヤーガチャで手に入れた二十の一を使って性能据え置き名前と装備種を変えさせて貰った為に指輪装備の癖して神話級以上の防御力を与えてくれる。

これを付ければ実質神話級鎧を二つ付けているようなモノになるわけだ。

《技術効果範囲拡大化》

《オフェンス・リバース・ディフェンス
剣 盾 反 転》

……

スキルを三度使えば自身の防御力が弱くなったのを感じた……無論、弱くなっても充分番外席次の全力は受け止められるし、その代わり俺の身体に力が漲っている。さて、視線をぐるりと動かせばだんだんと距離を詰めて囲んでいるビーストマンどもがいるのが見える。

俺はいつの間にかに刀身が反り返っている火継ぎの大剣に火を灯し身体を捻る。

レベル百且つ廃人プレイヤーが割り込めば所詮はこんなものか。

まったく、モモンガさんの事は言えないなア!! 《次元断切》!

炎を灯した火継ぎの大剣を俺は身体の捻りを戻す勢いそのまま、回るように薙ぎ払いワールド・チャンピオンの最強スキルを放った。

瞬間、戦場は灼熱の嵐に襲われる。

いつの間にか戦場の中心にいたネームレスが放った次元断切は放つ以前に使用されたスキルの影響を受け、その範囲と効果そして威力が高まりそのままネームレスを中心に広がる灼熱の斬撃の嵐となった。

ビーストマンの軍勢の外周を誰にも知覚されずに駆けた悪魔たちによって戦場から逃げるといふ思考を失ったビーストマンたちが中心へ中心へとまるで砂糖へ群がる蟻のように殺到。そのまま中心より広がる灼熱と斬撃に自ら飲まれていった。

そうして灼熱はビーストマンたちを飲み込むと徐々に徐々に本物の嵐の様にソラへと登っていきそのまま外壁よりも高く高く登る。

そんな灼熱の柱と化した炎の中からネームレスがゆったりと歩いて現れる。

威風堂々とした佇まい、正しく神話的一幕としか言い表せないその姿、異形の冠を戴く兜のスリットより覗く亡者の赤い眼光。

その姿を見る者は等しく畏怖の念を抱く。

クアイエッセはうわ言のように何事かを呟きながら気絶し、ニグンら陽光聖典は滂沱の涙を流しながら崇め、ドラウディロンは一切の抵抗なく庇護下に下ることを決め、宰相はドラウディロンを生贄にする事に決め、コキュートス及び四騎士らナザリックのシモベらは感動に身を震わせていた。

そんな彼らを見てエルフリーデは微笑み、太陽の戦士はネームレスに対して一切物怖じせず太陽の様に笑った。

火の粉が舞い、花が咲き、武器が墓標の様に突き刺さり、灰が、砂が、微かに舞う吹き溜まり。

その中心にそれはあった。

小山となった小さな炎と灰。

突き刺さる一本の剣。

刀身が捻れた螺旋の剣。

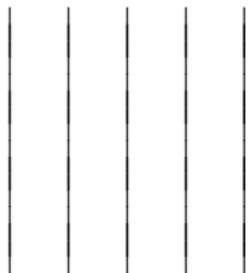
そこに至るは一人の騎士。

幾重もの試練を越え、王たちを玉座へ戻した騎士は遂にその螺旋の剣の前に辿り着いた。

火継ぎの終わりを。

火防女に瞳を授けた騎士は、終わりを望む。

故に手を伸ばす、螺旋の剣、その近くにあるサインに手をかざす為
手をかざし、現れるは——



騎士は至る。

男は至る。

黒い炎を滾らせながら彼は至った。

亡者の王はここに至る。

名も無^ネき火^ムの篡^レ奪^ス者は暗^セ月^レの王^ネの道程を一つ焼^キ払^ッった。

暗月の王の道程はあと二つ

オリジナルスキル

・剣盾反転……使用者の防御力と攻撃力がしばらくの間（60秒）反転する。あくまで本来のステータスと装備のステータスの合計値が反転するだけなのでスキルや魔法などで強化してから反転しても意味が無い。

マアキ・ニールウ・ローゲ

……ワールド・チャンピオン・ムスブルヘイムを決める大会の優勝賞品だった鎧の成れの果て。プレイヤーガチャまたは暗月ガチャでPKKをした際に手に入れた蛇で運営に性能そのままで装備種と名前を変えてもらった。

……長方形の黒曜石に九つの炎の様な宝石が嵌め込まれた指輪。

外交／因果

ちよいと時間かかったけども気にしない気にしない。

ONILANDが始まり、ひとまず今回のドスケベ礼装は何としても限凸せねばならないと思いました、ええ。

パライソ欲しいなあ……

「陛下がどのような事も致しますのでどうか、どうか竜王国を御身の庇護下に……」
「ちよ、おま……!!？」

疲れた。

ビーストマンの蹂躪だが、疲れた。

いや、ビーストマンは普通に弱かったからさ？別に本来なら大して疲れるわけもなかったんだけど……次元断切ワールド・ブレイク二回も使うと普通に疲れる。これなら、スキル範囲を拡大させた灼熱のオーラでも使えばよかつたんじゃないかな？と自分でも思ってる。

あ、ちなみにだが、今俺は竜王国の王城の応接間にて外交的な話をしている。竜王国からは女王であるドラウディロン・オーリウクスと宰相、此方側からは私とデミウルゴス。

一応、この会談が始まる前に奴隷や家畜的な扱いだけはやめると釘を指しておいたわけだが……まあ、全部デミウルゴスに任せよう。頑張れデミえもん

さて、デミウルゴスに任せて俺はあの時に感じた何か妙な感覚について考えよう。と言うより、そう、何故かは知らないが私は呪術をあの時に使った。それが今現状で一番の謎。

この世界は、というよりもこの身体はネームレスだ。

フレージャーテキストが現実化しようがセレネのものじゃない、俺の、ネームレスのものだ。だから、呪術なんて使えるはずがないんだ……、何故だ、何故だ。

そもそも何が原因だ？ 使える理由なんてのは右に避けておいてどうしていきなり出来たんだ？……なんか、同じな気がするけども……まあ、気にせず。

いつもと違う状況、蹂躪？ なわけない……太陽……ああ、彼。

「陛下とて別に文句は無いはずですが？」

「い、いや、まあ、そうだが……さ、流石に」

「満更でもないでしょう」

「な、何を根拠に……お前は……!？」

戦場ではこの世界にて生まれた同性同名で同じような気質の者かもしれないと考えたが……あれはこの世界の生まれじゃない。

最後の一撃を出す少し前まで俺は探知の指輪を装備していた。一定範囲内のエネミーやプレイヤー、NPCの凡そのレベルや位置がわかるそれにより彼の力量を俺

は見たのだ。

ユグドラシル換算で言えばレベル九十前後……番外席次とは違う神人ではないそもそも彼はこの世界の住人ではないのだろう、彼は俺と同族だ。上位アンデッド特有の不死の祝福……アンデッドを感知するそれが中途半端に反応した。

生者には反応しないスキルが返した反応は死んでいるようで生きている、生きているようで死んでいる。そう、それは俺やエルフリーデの様な死を無くしてしまつた亡者に近いもの。

死を亡くした者、つまるところ不死人だ。

「ネームレス様」

なんだ、デミウルゴス

「この国に対してネームレス様が御望みになる事はなんでございましょうか。どうか、御身の御心を察せれぬ愚かな私に御教え下さい」

なるほど。

つまり、俺やモモンガさんの望まぬ事や望む事を教えて欲しい、と。これはアレだろうか会談が始まる前に釘を刺しておいたが故の考えなのだろうか。

原作の深読みを考えれば俺たち的にはとても良いことだ。

そうだな、ビーストマンは至極どうでもいいが、ある程度異形種に慣れさせねばなるまい。我々の庇護下になるならば……ふむ、我が騎士と我が軍の一部の駐屯……ああそれと教会を建たせて貰えば俺はそれでいい。

「教会……ですか……ああ、はい、分かりました。御身を崇める教会を造らせていただきます」

「では、その件に関しましては私の配下も派遣し、建築させていただきます。ネームレス様」

ああ

あ、像は造るなって言っとかないと。

絶対言っとかないとコイツらは作る、間違いない作る。等身大……人間の時のな

らともかく指輪を付けていない時のサイズだと結構な大きさになるからな……。

そんな風に考えながら、ふと俺は手元の懐中時計を覗く。

どうやら、いつの間にかに会談を始めてそこそこに時間が経っていたようだ。

外から問者に覗かれない為にか、この応接間には窓というものは無い。その為、外がどうなっているかは分からないが懐中時計を見る限りもうすぐ夕方になる頃合いだ。

蹂躪が終わり会談が始まったのが……：だいたい二時過ぎだと考えれば、もう三時間はやっているのか……：早過ぎないか時間経つの。

チラリと会談もとい竜王国側に意識を向ければ何やら難儀している様だ。

耳を傾ければ、どうやら竜王国が俺たちの、アインズ・ウール・ゴウンの庇護下に入るに当たってあちら側が差し出すモノと望むモノで揉めているようだ。

ああ、望むモノってのはまあ、単純で。こちらの庇護下に入るならある程度こちらもあちらを世話してやらなきゃならんわけで、例えば兵力とかモモンガさん考案のアンデッドによる労働力とか、まあ、そういった今回の大侵攻から復興する為に何か必要なモノを軽くでいいから出させて言ったのよ。

まあ、大侵攻が始まって一週間も経ってないし終わってから数時間しか経ってないのだからそんな必要なモノがすぐに言えるわけもない。そりゃあ揉めるし難儀になるわな。

仕方ない。

オーリウクルス殿。

「ひゃ、ひゃい!？」

(あ、可愛い) そちらはどうやら些か難儀してる様だ。今日は多くの事があり、疲れているだろう……それでは良い考えも浮かぶまい。ここは一度お開きにし、後日改めて会談するというのはどうだろうか。

「は、はい……お、御身よりの御慈愛、感謝致します……」

そう言って女王は頬を赤らめながら俺の意見に賛成してくれた。

見る限り疲れているのだろうな、さながら風邪でも引いたかのように頬が赤い。それも仕方ない事だろうから俺からは何も言わずにデミウルゴスへ視線をむける。

「では、ネームレス様が申されましたように一度、御開きと致しましょう。竜王国宰相殿、後日の会談までにどうぞ纏めておいていただけよう」

「はい……では、部屋を御用意させていただきましたので案内を」
分かった。案内してもらおうか。

そうして、俺は席を立ちデミウルゴスと共に用意されたという部屋へと宰相の案内で向かう事となった。

「ネームレス様」

用意してくれたんだ、部屋に関しては何も言うな。

案内された部屋は嘗て泊まった童王国の宿とは比較にならないほどの豪勢さではあるがナザリックの私室と比べれば遥かに見劣りしてしまう。無論、それは単純にナザリックが何十も頭が飛び抜けているだけなので普通に考えればこれは何も悪いところはないのだ。

それにナザリックの食事とかすぐく美味しいんだが……舌が庶民なせいで逆になんか首を捻るんだよなあ。

さて、俺はソファアに腰掛け一度、指に人化の指輪をはめてからリング・オブ・サステナンスを外し早着替えのアイテムを使い火継ぎシリーズから軽い部屋着に着替える。

ふう……あー、デミウルゴス。

「はっ、なんでしようかネームレス様」

とりあえず今回の会談、後日の会談の内容はきちんと保存する為に……うん、シャルティアでも分かるようにやや噛み砕いて書類に記載しておいてくれ。

「このデミウルゴスにお任せ下さい」

デミウルゴスやアルベドが分かっても俺とモモンガさんが分からなくちゃ意味無
いからな。……モモンガさんはパンドラが教えてくれるか……俺も知恵者ポジ用意
しとけばよかったかな……。

例えば……ダークソウルに知恵者ポジいたか？ローガン、アレは変態だから……。
オーベック辺りが妥当か。

それじゃ、少し仮眠する。誰か来たら起こしてくれ

「分かりましたネームレス様」

蹂躪とはいえ流石に疲れた。

それに彼の事もある。一度ここでの諸々が終わったら調べてみるか………夢は見ないよう願いつつ俺は眠りについた。

鬱蒼と茂る木々の中にやや開け、草ではなく土が露わになっている洞窟の前に拡

がる広場があった。そこには壊れた木材が乱雑に散らかっており、巨体が何度もそこを通っているのかしつかりと踏み固められた地面があり、所々には武器のようなものが突き刺さっている。

そんな何かに住んでいるのであろう場所に幾つもの悲鳴が響く。

「あがあ!? なん、で、俺が、負けるッ」

「未熟であるからだろう、脳無し」

黄緑色に近い体色という凡そ人間ではない肌の色をし、人間二人分はあろうかという巨軀で左肩に肩当をつけている人型の怪物。

妖巨人トロールと呼ばれる種族の中でも屈指の実力を誇る特殊な戦士として覚醒した存在である怪物やその配下である青や黄の妖巨人達は無惨にもその身体をズタボロにさせられていた。

それは正しく唐突な出来事であり、妖巨人たちには一切予期できぬ出来事であった。

「俺は、グ、グだ！お前の、ような、臆病者なんか、じゃあ、ないっ……！」
「くだらない。名前の長さ？そんな馬鹿げたもので優劣を決めるなど……愚か、実に愚か」

グ、と名乗った妖巨人らの長の目の前に立つのはなんとも不思議な見た目の存在だった。

それはグのような人型などではなく木のような姿形、更に言うなら燃え盛る木の様な異形の姿。

「……何故、私は此处に在るのだろうか」

グの頭を、異形が従えていた異形——象皮の肌にずんぐりとした身体で太めの牙が口から覗く単眼の河馬の頭を乗っけてみたような——が踏み碎き完全に息の根を止めた。

そうして、死んだグやグの配下であった妖巨人だったものを何体ものその異形たちが貪る中、燃え盛る木はソラを見上げながら自身がここに居る理由を考えていた。

「この世界の者達は偽りに甘んじている。それらを正す、真実あるべき姿へ導く……いや、それは私ではなく奴の仕事だ。ああ、つまるところ、そういう事か」

「さしずめこの世界は吹き溜まり、か。始まりがどのようなモノであったかは私には分からないが、この世界には幾つもの因果が巻き込まれている」

「私を、私たちをこの世界へと呼び寄せたのはつまるところその因果によるもの。その因果とは何か」

一度妖巨人らを貪る象皮の異形らを見回し、先程とは違う方向のソラを向いて燃え盛る木は嗤ってみせる。

「お前だ。お前という存在の縁が、縁という因果が我々をこの世界に巻き込んだ。巡礼の果て、亡者ではなく灰となった者よ、お前は光ではなく闇を選び、人間の真

実を取り戻した。では、この世界でお前は何をするというのだ？」

燃え盛る木はソラを見ながら、いや、ソラではなくその向こうで夢見ている誰かにそう囁った。

ダイスロールッ！

クリティカルだドン！もう一回回せるドン！

ダイスロールッ！！

ファンブルだドン！

結果、今回の戦犯。ダイスのデーモン

幾年越しの感謝

一日一万回感謝の筆振り

気がつけば太陽賛美の時間が増えていた……

あ、ダンまちの方でブラボ×ダンまち作品投稿しました。あちらは完全に気まぐれ投稿なのでその辺はよろしくね

何事も面倒な事だ。

俺は一人そんな風に思いつつ竜王国の王都、その外壁の上を歩く。

宰相より案内された部屋で軽く仮眠をとった俺は、起きた後に諸々がめんど……アレんなってひとまずデミウルゴスに押しつ……丸な……任せて護衛をつけずにこうして外壁をフラフラしていた。

まあ、護衛をつけずにと言ったがデミウルゴスの事だ、ある程度離れたところに何体か影の悪魔を配置してるんだろう。多分きつとそうなはず。

で、デミウルゴスに丸投げと言ってもちゃんとある程度の指示は出したからな？流石になんの指示も出さずに丸投げは上司としてどうかと思うし……丸投げって言った時点で上司としてどうかしてるが……いや、気にしない。とりあえず竜王国の願いは極力聞いてやるのがいいだろう。

つまるところ、恩を重ねる訳だが……まあ、重ねすぎはいけんがそこらはデミウルゴスが調整してくれるはず。

一家に一人デミウルゴス……いや、そんなにいたら混沌やわ。

それにしても呪術か……そりゃ確かにダークソウルじゃあ呪術も充分使えるようなビルド組んではいたが……

それはあくまでダークソウルの話。この身体は、ユグドラシルのネームレスのビルドは魔法何それわかんないじゃなかったか？ いや……決して魔法が使えないわけじゃない……それでも攻撃魔法やら補助魔法やらなんかではなくアンデッドの一部が取れるような本当にちよつとした産廃呪いなもので……………

それ繋がりか？ いやいや、まさか。

……モモンガさんにもしかしたら何か聞かれるかもしれないな。そんな時は、まあ、うん、嘘を混ぜつつそれっぽい事を話そう。うん、それがいい。

——と、《伝言》か

『私だ』

『デミウルゴスでございます、ネームレス様』

デミウルゴス？ 何か問題でもあったのだろうか？

『どうした』

『ハッ、つい先程竜王国の宰相より最低限の望みが記された仮文書が送られました』
『ふむ……？それでどうした』

仮文書が届いたというのは分かったがどうしたのだろう。まさか、とんでもないものでも書いてあったのか？

でもなあ、デミウルゴスだし……デミウルゴスが連絡寄越すなんて逆に不安なんだが……。

『……実は、その、竜王国の女王を御身に捧げたい、と』

『……………ん？』

『流石に至高の御方の伴侶にするかどうかなどこの私の一存では決して決められる事ではなく……』

そ、そう来たかあ。

ようするに政略結婚って事なんだろうが……どうなんだろうな。

リアルだと結婚は……してなかったな。いや、見合いとかそういう縁がなかったわけじゃなく、実家の方から見合いとかそういうのは来てたんだが元々こっちに來るつもりだったから適当にのらりくらりしててなあ……にしても結婚か。

モモンガさんはきつと多分アルベドとかシャルティアとかとくつきそうだが……ああ、いやモモンガさんへタレだから二人みたいな超肉食系じゃなくて大人しい淑女が合うだろうな、ユリか、ユリだな。

んん、話が脱線した。

伴侶か……アンリ……。

『ネームレス様。どういたしまししょうか』

『ああ……うん、まあ、構わん。流石に本妻には出来んだろうがな』

『ええ、あちらも正室までは望んではないようですので』

『そうか。なら、任せる。デミウルゴス』

『ハッ、このデミウルゴスにお任せ下さい。ネームレス様』

そうして、伝言は終わり俺はまたフラフラと壁上を歩き始める。

さて、なんだったか……ああ、そうだ。呪術の事だ。

モモンガさんへの説明はともかく重要なのは俺が呪術を扱ったこと……そして、その時にあった変化、つまりは太陽の戦士。

ひとまずはあの騎士に会うのが一番か

『

む……

ふと、嘶きが聴こえたと思えば俺の近くに大きな影が降り立った。

視線を向ければそこには灰色の体軀をした巨竜。

元々はあのエロゲ鳥とのガチャ勝負での産物であったレベル八十台のそこそこ……微妙な課金アイテムによって召喚できる竜種。

せっかくだからと課金アイテムで見た目と名前を変えたが……こうして見ると

やっぱりドラゴンはカッコイイな。

どうした

』

むう……

そのドラゴンがこうして犬猫のように顔を擦り付けてくるのは……なんとも言えんが……うん、まあいいか。

飛竜に応えるように鼻先を軽く叩いてやり——

「おお、貴公!!」

探そうとしていた人間があちらからやってきた。

赤い羽根が一枚刺されたバケツヘルムに鉄板鎧を覆う白布に太陽のマークを手描いた男。

つまりは太陽の戦士。そんな彼が手を振りながら俺が通ってきた方から走って来た。

俺はそんな彼を視界に入れてすぐに飛竜の鼻先を押す。

ほら、少し飛んでいろ

』

俺の意を理解してくれたのか、飛竜はそのまま翼を動かし壁上から飛び上がって竜王国の上空を飛びに行った。

それから二拍おいて、太陽の戦士は俺のもとへ辿り着いた。どうやら、飛竜がはばたいた際に生じた風圧に耐えていたのか若干疲れているように見えたが……。

「フハハハ!! 先の戦いでも見たが、貴公もしや竜騎士なのか!? うーむ、ロードランでもアストラでも竜騎士は一度として見たことはなかったが……うむうむ、アレが相棒というものなのか!」

流石太陽の戦士と言うべきか、こうズバズバと来るな。

遠慮というものが無い……だが、うむ、ナザリックのシモベらやらと比べてみるとこうして遠慮無いのが俺としてはとても心地いい。

そういえば、確かにロードランには竜騎士はいなかったな。

いや、私は……俺は竜騎士では無い。アレは単純に俺の配下……うむ、配下だな
「ほう……！では竜騎士としての関係ではなく、純粹に竜が従っているのか……
ううむ、それほどまでにネームレス殿が素晴らしいという事なのか」

……俺はそんな素晴らしい人間では無いのだが

「フハハハ!!そう卑下する事はないぞ!どんな悩みもあの偉大な太陽に比べれば
ちっぽけなものだ!」

………殆ど陽が沈んでるんだが?

それもそうだな。

と、また笑う彼に俺は軽く肩を竦めつつじっくりと彼を観察する。

太陽の戦士らしく細かい所はあまり気にしない、そしてロードランを知っている。この世界にロードランがあるのかどうかは分からないため、十中八九本人なのかもしれないが………ん？

……貴公、冒険者か？

「ん？ああ、リ・エステイーズ王国で冒険者をやっていてな、見ての通りミスリル級冒険者と言う奴だ」

ほう……

つまるところ、彼は王国を拠点にしているのか………いい事を聞いた。

冒険者業の際に上級騎士の装備で会いに行くのもありか……

なら、いったい何処を拠点に——

「……ネームレス様」

……なんだ、影の悪魔

シャドウ・デーモン

彼が何処の街を拠点にしているのかを聞こうとした矢先、唐突に近くの影が蠢き申し訳なさそうな声が響いた。俺はそちらへ視線を向ける、無論流石にこんなところで自害だのなんだのされても困るため不機嫌そうな態度は取らず冷静に対応するのを忘れずに。

「デミウルゴス様からの御連絡で、じきに城にて宴を行うそうなのでどうかお戻り頂きたい、と」

………そうか。ならば仕方がないか………そうだ貴公、宴には………？
「む、すまなんだ。俺はもうこの街から出て王国の方に戻る予定でな」

なるほど、だから俺を探していたのか。

俺は少し彼の言葉に納得しながら残念に思いつつ彼の横を通り過ぎる。

では、今日はこれでお別れとしよう。また、何時か会えたのならば酒の一本は馳走する

「おお、それはありがたい。では楽しみにさせてもらおうぞ」

そう言って俺はやや早歩きで王城の方へと向かう。

ナザリックと違って待たせる訳にも行かないしな。

この件が終われば、まあ、仕方がないが帝国に行かないといけないししばらく彼に会えないだろうが……うん、まあ、そこは諦めよう。

もしかしたらモモンガさんの方が先に会うかもしれんな………あ、そういえば彼の名を結局聞いてなかった、いやまた会った時の楽しみしておくか。

「名無ネームレス、か。定まったモノがない故に貴公はどのようなモノにでも成り得る」
「それは陰の太陽の使徒であろうとも、火を継ぐ者にでも、それこそ亡者達の王に
でも……」

「いや、そんな事はどうだっていい——なあ、貴公」

「俺を殺止めてしてくれて、ありがとう」

太陽Y万歳

ゴブリンスレイヤーは見てても楽しいし読んでても楽しい。

ただ、ゴブリンスレイヤー作品は書けない。書いたら面倒な事になりかねん……
ダクソよりブラボでやりたいし、だけどブラボ×ゴブスレの作品多いし……

あ、ところでモツ抜きって楽しいよね！

次回から王国編をやります

ボクっ娘勇者っていいよね。「直感で！」

始まり

古戦場だけでも投稿！

具体的には予選終わって空いた時間に書いた。

頑張ったお

今回から王国編です。なのでネームレスはあまり出ませんはい

さながらそれは神話に記されるべき事態であった。暗い夜、夜空を緋色に染める赤い赤い炎の壁。炎の壁、その内側に蠢く悪魔の群れ。

それに挑むは数多の冒険者。

リ・エステイーゼ王国に訪れた建国より例のない大事件。

そんなものでこんな絶叫など上がるはずもないのだ。ではそれは何故なのか、銀仮面の騎士その左手は赤い何かを纏っている。血のようでおぞましい赤い、赤い何かの手。

——やめろ、やめろ、やめろ、やめろ！！？？

「——！！！！」

マルムヴィストは言葉にならぬ悲鳴を上げながら自分の顔を掴む手をどけようと暴れるがその程度では銀仮面の騎士は一切動かさずその手の力は変わらない。

そうしている間にも銀仮面の騎士の左手は、その赤は、マルムヴィストの顔を……いやそれよりも深く深く内側にある何かを掴んでいく。

——やめろ、やめろやめてくれ……奪わないでくれッッ！！？？

外見的に掴んでいるのは顔だ。

だが、実際に掴んでいるのは肉体などではなくその内側にあるもの。

この世界の者達には、ユグドラシルの者達には、わからないモノ。

魂を、ソウルを掴み、ソウルの内にあるモノを奪わんと銀仮面の騎士はその左手に力を込める。

マルムヴィストはソレが何なのかはわからないし、知らない。だけれどもソレを奪われるという事が死よりも恐ろしいという事を本能で理解したのか奪われまいと暴れる。

だが、その程度で逃げる事など不可能で――

「あ……………」

銀仮面の騎士、ナザリックのレオナルが何時からか得ていたその力。彼の巡礼の地、神々の王よりそのソウルを分け与えられた四人の公王ら、彼らを唆した蛇が闇のソウルより編んで見せた吸精の業。

すなわちはダークハンド。

それが奪うのはつまるところ

「ああ……アあ……」

レオナールはその左手を離しマルムヴィストを床へ落とす。

強かに腰を床へ打ち付けながらもマルムヴィストはまるで渴いたように呻くばかり、いや、渴いているのだ。伊達男めいた整った顔はいつの間にかにまるでミイラか何かのように枯れ個人が特定できぬ顔立ちへと変わり果て、その鍛えた身体も細枝のように枯れ細くなった指と腕でまるで何かを求める様に虚空を掻いて……

レオナールは足を退かした。

水分を失い渴いた血だったモノを床で踏み躪るように靴から取り払い、レオナールはその左手にあるものを見る。

「おお……」

それは掌大の黒い結晶のようなモノ。

黒いけれども白い光をほのかに感じさせながらもやはり暗く暗くしかし温もりを感じさせる闇。

本来ならばユグドラシルの存在でしかないレオナールにはわからないモノであるがしかし、与えられたこの装備より感じさせる何かがその手にあるものが何なのかを理解させる。

「人間性」

アンデッドであるレオナールにとってそれはとても、とても暖かいものだった。それがあると自分がアンデッドである事を忘れそうで――

「ほう、貴公。随分と懐かしいモノを持っているな」

「ッ……!!」

部屋に響いた声にレオナールは振り返る。

窓から差し込む月明かり以外に明かりがない部屋、その闇の中より一人の男が姿を現す。

金、否真鍮で出来た鎧。まるで抱き締められているかのような意匠の鎧で身を包む全身鎧の男。

その両手に握られているのは二本のショーター。

「誰だ」

「名前を名乗る理由などない、が懐かしいモノを見せてくれた礼だ」

教えてやろう。

そう、クツクツと兜の下で嗤う男にレオナールは苛立ちつい先程のマルムヴィストのようにその人間性を奪ってやろうとそのこの世界の存在では理解出来ない上位的な身体能力で床を蹴りつけた。

平原に男二人。

黒衣の魔法詠唱者マジック・キャスターモモン、灰鎧の重戦士アクトである。

ポケットに手を入れ、やや棒立ちのモモンに対してアクトはいつも通りに片手ず

つで本来両手持ちするべき竜狩りの太斧と大盾を持ち構える。その兜から僅かに垣間見得る視線が見るのは平原の向こう。

土煙が上がっている方向である。

「来たぞ」

「はっ」

土煙が徐々に徐々に二人のもとへと近づいてくる。

それを見ていたモモンの言葉にアクトは柄を握る手に僅かに力を込めつつやや腰を落とす。

そうして、少し待ってれば迫ってくる土煙、それを起こしている存在が視認出来るほどの距離へとやってきた。明るい緑色をした蜥蜴とも蛇ともとれるおよそ十メートル程の体躯を持つ魔獣が何やら怒るように何かを追いかけている。

追いかけているのは所々に羽毛の名残がある白骨の鳥。つまるところ骨のハゲワシ、ポーン・ヴァルチャーモモンがスキルで片手間に作り出した低位のアンデッド。

「ギガントバジリスク……聞けば石化の魔眼を持っている様だが……まあ、関係ないか」

骨ポーン・ツァルチャーのハゲワシはそのままモモンらのもとへと飛んでいき、それを追うように魔獣ギガントバジリスクがモモンらのもとへと向かってくる。

まっすぐ、まっすぐ、骨ポーン・ツァルチャーのハゲワシが少し速くなればそれに応じてギガントバジリスクも速く走る。

そうして、ついには骨ポーン・ツァルチャーのハゲワシがモモンらのもとを通り過ぎて――

「フンッ」

「――！」

モモンらを邪魔だと言わんばかりにそのまま挽き潰そうとしたギガントバジリスクだが、残念かなアクトの軽く振るった竜狩りの大斧は当たり前のように、まるで

バターを切るようにギガントバジリスクの首を切り落とした。

ギガントバジリスクを一撃、この世界においてはかなりの偉業であるがモモンもアクトも淡々と処理していく。

「うーん」

「……どうしました？ 父上」

「いや、なんというか……現地の者なら偉業なんだろうが……」

我々からすると単なる弱いものいじめに感じる、そう言外に語るモモンにアクトはやや苦笑しつつ布で切り落としたギガントバジリスクの首を包んでいく。

「それはやはり仕方ないのでは？ ユグドラシルと違うのですから」

「いやまあ、そうなんだが……そうなんだがなあ……」

こう、もっと、互角のぶつかり合いとか、国を襲う悪魔との激突とかそれこそド

ラゴンとの戦いとかそういうのが冒険者に必要なものだと思っただよ。

そう語るモモンにアクトはやれやれと二人の正体を知る者が見れば些か不敬極まりない反応をしつつ包み終えたソレを無限の背負い袋に放り込んで地面に突き立て、立てかけていた大斧と大盾を背負う。

「慎重派な父上らしからぬ御言葉ですな」

「そりゃあ確かに石橋を叩いて渡る性格なのは分かってるが、やはり冒険ってのを考えるとそういうのを期待してしまうのは男のサガというものだと思わないか？」

「ネームレス様が聴けばほぼ間違いなく、『石橋を叩いてその後によりしっかりとした強固な橋を作り上げて結局魔法使って向こう側に渡るのがモモンガさん』と言いますが、まあ父上の言いたいことは分かりますよ。ええ、何事もロマンは大事です」

え、俺そんなふうに使われてんの？

そう呟いているモモンを無視してアクトは足であるアイアンホース・ゴーレムを

召喚するアイテムを使い二頭のアイアンホース・ゴーレムを召喚してモモンの方を向く。

「では、エ・ランテルへ戻りましょうか父上」

「お、おう……パンドラス・アクター、お前……」

「はい？なんですか父上」

「いや、うん、なんでもない」

こいつなんかだんだんとぞんざいになってないか？……いや、俺としてはナザリックの守護者たちやメイドたちの反応よりもこういう軽いノリの方がいいんだけども……なんかなあ？それはそれで寂しい。

ここにはいないがネームレスが聞けば、めんどくせえと言われるような事を呟きながらモモンはアイアンホース・ゴーレムへと跨り、二人は平原よりエ・ランテルへと帰るべくアイアンホース・ゴーレムへと指示を飛ばした。

『それで、セバス。王国の蛆虫達はなんと言ったかしら』
『八本指、と』

『そう、八本指ね……モモンガ様とネームレス様の為にもその蛆虫達は早々に始末するべきだわ』

『どうなさるおつもりで？』

『そうねえ……ふふ、至高の御方々はこの世界において文句など出せぬ大義名分を得られたわ……そして、その蛆虫達は非合法な事を行っている……分かるでしょう？セバス』

『なるほど、そういう事でしたか』

『ええ。木が腐り折れる前に私たちが切る……そっちの方が人間の為になるでしょう』

帝国に行ったネームレス

王国で冒険者業をやっているモモンガ

そして、古戦場を走るチーズ

あ、そういえばTwitterで○リキュアになりました

番外編・顔の無い月光

新年初UNDEADという事で今回限りの番外編です。

これはあくまでifです。本編には一切関係はありません。

リ・エステイーズ王国・王都リ・エステイーズには一種の不文律がある。

満月の深夜、王都に昏い鐘が静かに響けば決して家屋の外へと出てはならない、
というものだ。いったい、それがいつごろからあるのかはわからない。わかること
は少なくともそれがここ十年内の新しいものではないこと、そして決して眉唾物で
はないことだ。

だが、そんな不文律も往々にしてそれを破る者が現れることがある。

ああ、つまるところ、今夜の物語はそんな不文律とそれを破った者の嘶。

今夜は何時にもまして月は大きく見え妖しく嗤っているように見えた。

王都。その一面にある貴族の自邸や別邸が立ち並ぶ区画、その中にあるとある屋敷にて男は叫んでいた。

「ふざけるなッ!!」

やや恰幅がよい、若かりし頃はモテたのであろう整った顔立ちの面影がある老年の男はその手に握られた羊皮紙へ視線を向けながら怒りに顔を赤らめ、その羊皮紙を引きちぎらんと手に力を込めていた。

なにゆえにこの男はこうも激怒しているのか、それはこの状況を見れば誰にでも察せられることだろう。つまるところ、男が握っている羊皮紙に全てが記されている、ということだ。

さて、羊皮紙に記載されている内容を語る前に一つ、この男について大まかに話が話すとしよう。

ボルゴレフ・ワコムス・エイク・フォンドール。それがこの男の名、このリ・エステイーゼ王国の伯爵である。齡六十を超えてなお、色欲逞しいこの貴族は自らの領地にある自邸に妻・妾・奴隷合わせて十数人抱え込んでおり、それに見合うほどの財力があった。

無論、その財力の根源がまっとうなモノの訳はないのだが。

そんな事情があるボルゴレフ伯爵の別邸に自らの領地からとある手紙が羊皮紙に添えられて届いた。

曰く、「秘密をばらされたくなければ、貴様の女を全て寄越せ」

付属の羊皮紙に記載されていたのはボルゴレフ伯爵の莊園にて行っている麻葉の原材料となる植物の栽培及び麻葉の密売に関する資料、その一部であった。

あまりにも致命的。

昨今、この王国に巢食う裏組織と関係のない貴族派の貴族などごく稀なモノだ。故にこの資料が万が一にでも王の下へと送られれば、貴族派からトカゲの尻尾切り

同然に切り捨てられ貴族位の剥奪は免れない。腐敗し愚かではあるが、やはり腐つても貴族なのか自らの保身に關してはすぐさま頭が回りどうにかせねば、とボルゴレフ伯爵は考えるがしかし、色欲逞しいボルゴレフ伯爵はそれよりも交換条件に要求されている内容に冷静さを保てない。

愚かにも、愚かにも、この手紙の送り主は自分の女を奪おうとしているのだ。それ故に、その事実がボルゴレフ伯爵から冷静さを奪わせる。

「おのれ、おのれ、おのれえ!!……ふざけよって……!!」

だが同時にボルゴレフ伯爵は頭を回転させ、この不届き者を殺す為にはどうすればいいのか?と考え始めすぐに答えへと行き着いた。

さながらそれは天より啓示を齎されたが如く。

「ハハハ!!私が、私の女を渡すと思っっているのだろうか?ならば、ならば、殺しに行くぞ……我が屋敷の誰かだ……そうだ、あの男だ。あの若造に違いない……殺す、

殺す!!」

齎された答えに従う様にボルゴレフ伯爵は自邸にて働く執事の一人が犯人であると断定し、殺意を滾らせるままに屋敷の人間を呼びつけ始めた。

「今すぐに帰るぞ！領地に戻るぞ!!」

「お、お待ちください！伯爵様。今夜は、今夜は満月でございます!!」

「知ったことか！そんな迷信を信じて私を止めようとするのか———そうか、貴様も私の敵かァ!!」

「ひいッ———!？」

部屋の壁に飾り付けられている儀礼用の剣を使用人に突きつけながら、急かすように馬車の支度をさせるボルゴレフ伯爵。

使用人の言う通り、今夜は満月である。にも関わらずに外へ、領地へ向かおうとするボルゴレフ伯爵……彼からは不文律を信じる様子は一切感じられない。

そこに平時の彼らしきは存在しない、平時のボルゴレフ伯爵は自らの保身を優先する男であり如何に自分が色欲逞しいと言えども自らの保身と比べれば苦渋の決断ながらも女を手放すだろう。にも関わらず、この判断はいいじゃないんだ。

だがそんな事は誰も考えず、急遽用意された馬車へと乗り込むボルゴレフ伯爵。それを確認して馬車は発車する。

王都より自らの領地へと。

こうして不文律は破られた。

妖しい満月は嗤う。

かくして、王都へ静かに厳かに昏い鐘の音が鳴り響く。

涙が流れそうになる様な静謐な音色であり、鮮血が噴き出すかのような恐ろしい鐘の音が

「ふざけよって、ふざけよって……」

ボルゴレフは馬車の中でその額に青筋を浮かび上がらせながら、自らの爪を噛んでいた。

王都からそこそこ離れた領地、しかしこの時間から向かえば間違いなく昼頃には着くこととなるだろう。そして、ボルゴレフは自らの手元にあるこの手紙の送り主は間違いなく、仮に来るとしても次の日に出発するだろう、そう考えているだろうと考えそんな相手を不意打つべくこうしてこの満月の夜に出発したのだ。

無論、満月の夜の不文律などそもそも貴族である自分になんの影響も出さないと

ボルゴレフは信じている。

何せ、自分は貴族なのだから。

そう、あまりにも傲慢な考えを抱いて――

「……？」

ふと、ボルゴレフは違和感を覚えた。

揺れないのだ。

馬車がいつの間にかに止まっているのだ。

いったいどうしたというのか、そう考えて窓をあげ馬車の前方を覗き――

「なんだと……!?」

そこには何も無い。

何も無かった。

馬車を引率する馬もその馬を動かす使用人もいない。

ただ、ただ、馬車の車部分が道の真ん中でポツリとあるだけだった。

なんだこれは。なんだこれは。なんだこれは。

同じ言葉が、同じ疑問の言葉がボルゴレフの頭の中をぐるぐるとぐるぐると回っていく。

そうして、あまりにもありえない現状に恐れを抱いて、ボルゴレフはそのまま馬車の扉を開いて、外へ出る。

「いったい、なにが………は？」

外へと飛び出たボルゴレフはふと視線を馬車の前方へと向けた。

特に理由なんてありはしない。

ただ、何となく前方へ視線を向けただけなのだ。

そこには何も無いと分かっていたのに——女がいた。

「やあ、良い夜だな？」

「——ッッ!!」

何だこの女は。

帽子を被りシルバードブロンドの髪をたなびかせる不思議な意匠の服装に身を包む美しい女を見た瞬間、ボルゴレフの中の何か逃げろと強く強く叫び散らした。

そうして、ボルゴレフはその自らの内より響く叫びに正気を取り戻して反射的に馬車の中へと逃げ込んだ。

内側から鍵をかけて、女が中へと入らないように。

両手でドアノブを押さえつけながら、息を吐きながら、ボルゴレフは馬車の中で一人腰を抜かす。

あまりにも恐ろしいものを見てしまった、と。どうしてこんなことになってしまったのかを嘆きながらボルゴレフは息を吐いて……

ボルゴレフは発狂した。

目から、鼻から、耳から、穴という穴から血を噴き出して絶叫する。

馬車内部に血はぶちまけられたにも関わらずその何某には一切血は触れることは無く。

……………ふむ

何処と無く寂しそうな雰囲気や垣間見せながら何某は座席より立ち上がりボルゴレフを退かして扉から外へ出る。

その姿はとてつまらなそうで退屈そうなものだった。

そんな何某に声をかけるのは先程ボルゴレフが見た女。

「ああ、なんともつまらなそうだ」

つまらないとも。狩りこそ我が楽しみ、狩りこそが我が安らぎ

見ただけで狂われるなどつまらないだろう？

例え、先触れ一つで死に至るような懦弱な存在だとしても。

そんな風に愚痴りながら何某は満月の王都を歩き出す。満月の王都、その月夜は彼らの世界。すなわち狩りの夜である。

彼は何なのか、何某は何者なのか。

もしも彼の在り方の一片でも知る者がいるならば彼をこういうだろう。

『プレイヤー』と。

オーガスト・カインハースト

性別…どっちなれ別不明

区分…プレイヤー

種族…ナイアールラテップ無貌の神

レベル…100

職業…神狩り

所属…アインズ・ウール・ゴウン

声優…杉田智和

所有ワールド世界級アイテム…トラペゾヘドロン

通称…オーガスト、カインハースト卿、ナイアール・ヴァン・ヤーナム・カイン

ハースト、至高の四十一人が一人、無貌の御方、血の狩人、ナイアおじ様

属性…極悪(カルマ値|500)

住居…リ・エステイ…ゼ王国カインハースト領

特記事項…転生者（やはりチーズ）

本編の主人公であるネームレスがダクソではなくブラボプレイ時に転生した結果。

狩人プレイ（PK常習犯）で異形種人間種問わず狩っており、その際にナインズ・オウン・ゴールと出会ったつち・みーとPVPの末、敗北。

その後、アインズ・ウール・ゴウンとなった彼らの協力を得て、ニヴルヘイムにあるダンジョンをクリアし特殊クエストアイテムを入手してその後、一対一で『闇をさまようもの』を討伐しワールドアイテム『トラペゾヘドロ』を手に入れた事で異形種へと転生。これにより最後の条件を満たした為、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーに。

ギルド入りしてからはPK等で手に入れたアイテムを駆使してナザリックの第六階層の一面に自由なエリアを入手し、魔改造した。

本編主人公ネームレスよりも性格がアレな為、割りと問題児側でウルベルトと共に

にたち・みーとぶつかる事がしばしば会った。

自作NPCが四人いる。

実力はたち・みーよりは弱いが武人建御雷と同等ではある。

縛りプレイで絶対にPVPしたくないギルメン一位で、その理由は種族特性上、精神異常に対して完全耐性を持たない相手に二秒おきに精神異常デバフ付与が発動する為。完全でなければ唐突に精神異常デバフが発生するという事故が起きるためである。

見た目は神器級^{ゴッズ}装備で揃えたカインの兜に烏羽の外套、そして古狩人装備である。メインウェポンは月光の聖剣である。

時たま、ミコラ神拳と称して伸びない先触れを掴んで殴ることもある。

自らのマイエリアである森と館と共に転移してしまった。

ランポッサ三世の義理の兄という謎の立場を獲得しており、ラナーにおじ様と慕われ(ラナーに色々仕込んだ)、八本指に対して発言権があり、狩りと称して満月の日の夜に王都で適当に何人も狩った結果不文律を作り出し、いつの間にか法国の

深い所に繋がっていたり、種族通りに色々黒い事ばかりしてる。モモンガ曰く、
たいこいつが悪い。

作成したNPC

- .. マリア・カインハースト(時計塔のマリア)レベル100
 - .. ヨセフカ(偽フカ)
 - .. ユーリエ(最後の学徒ユーリエ)
 - .. ワラー(異常者ワラー)
- エンブレム
- .. カレル文字『月』

世界級アイテム..トラペズヘッドロン

...闇をさまようものを倒したプレイヤーに与えられる世界級アイテム。所有者

を無貌の神へと転生させられるアイテムで、無貌の神の種族を持つものにバフを与え、レベル八十代後半モンスターシヤンタク鳥を大量召喚出来る。元ネタと違い闇をさまようものは召喚出来ないだって、これの所有者が闇をさまようものを殺し成り代わったのだから。

オーガスト「そうだ。それも私だ、あれも私だ、これも私だ、あの事も私だ、そうあれやこれやも私だ——何？馬鹿な事を無論、それも私に決まってるだろう？」

モモンガ「全部お前じゃねえか!?!」

前触れ

遅くなると言ったな。

セバスの部分、削れば良くね？

成功だったようだよ、チミ。

とある方がダクソ及びブラボのBGMを日本語訳してるんだが、竜狩りの鎧のが辛い。おいこら、蝶共滅ぼすぞ

リ・エステイーゼ王国が王都リ・エステイーゼ。人口900万という国の王都にしては些か地味さしかなく、何か良い所を探そうとすれば辛うじて古き良き都市という事しか出来ないこの王都。

バハルス帝国やスレイン法国と違って、竜王国のように通りはしっかりと舗装されておらず、雨が降ればすぐにでも泥と化し泥濘むであろう道路が多い。帝国や法国の様にしっかりと整備されていない道路にはその両国を知る者からすればこの国には金が無いのだろうと考えるかもしれない。

無論、その考えは間違つてなどおらず実際問題金が無い、否わざわざそういう事に使える金が無いのだ。竜王国の様にそういった事に金を使うならば前線の兵士の為やピーストマンへの対策の為に金を使えというモノがあるわけではなく、ひとえに腐っているだけだ。

オツムの悪い、目先の欲ばかりに囚われる貴族が多くいるこの国において、こういった事に使える金が無いのだというよりも、草案が通らないので金が出てこない。と、さて、そのような王国の王都その一角にて一人の老人が歩を進めていた。仕立ての良い燕尾服に身を包み、髪も髭も白いがしかしそこに老人の老いを感じられず、よく整えられている。

そんな老執事——セバスはある事に思い悩んでいた。

それはつい先日的事、魔術師ギルドへと足を運びその帰りにて出くわした事態に

ついて。

そう、それは魔術師ギルドにて〈浮遊板〉のスクロールを購入し、気ままに自らの趣味である都市の散策と称して王都を目的地も無く無造作に歩いていったその先、治安も悪い路地裏へと入ったその辺りであるとある建物から放り捨てられた麻袋との出会い。

無論、何やら意思を持ったマジックアイテムかモンスターの麻袋というわけではない。単純にその麻袋の中身に足を掴まれたのだ。

別にセバスにはそれと関わる気など一切なかった。少なくとも主より賜った任務に関係の無い事であるから——だが、セバスは彼女に請われたのだ。

助けて——。と、小さく、蚊の羽音程度でしかない程に、決して耳に入るようなものでない程に、だが、それでも、セバスにはその声が聴こえたのだ。だから、だから、セバスは助ける事に決めた。

自らの創造主の様に、自らの心に従って。

そうしてセバスは彼女を連れ帰ることに決めた。無論、この王都での任務を与えられた相方であり部下であるソリュシャンに苦言を呈されているが。

さて、しかしセバスが悩んでいる事はそれが全てではない。正確に言えばそれはあくまで前提事項であって本来の悩みはその先にある。

今日、朝方に拠点へと訪れた二人の男。一人は役人——腐ったケモノであるが——、もう一人は自称店の代表者という男。明らかに自分が助けた彼女を餌にして狩りに来た者らであった。セバスは既にそれらがこの王国での調査で判明した王国に蠢く蛆虫『八本指』である事は理解していた。だがしかし。

セバスは決して策謀調略に長けてはいない。デミウルゴスやアルベド、パンドラズ・アクター程の知恵者ではない。そして、何よりも甘いのだ。

だから、セバスは彼らに好き放題言われ、怒りを抱きかといってどうすればいいのか分からずにこうして、外へと出た。

デミウルゴスやアルベドのような知恵者に〈伝言〉の一つでもすればこの先は違ったのかもしれない……。

少なくとも、ソリュシャンを納得させることは出来たのだろうか——

エ・ランテル、黄金の輝き亭。

エ・ランテル随一の高級宿屋。そんな宿屋のなかでも最上位の部屋を使っているのは三人の冒険者。現在とある依頼により王国から離れている『白晶』を除いて二人一組の冒険者。

「ふう、リング・オブ・サステナンスをつけていないとやはり疲れるな……」

「おや、父上。どうしました？ 指輪つけますか？」

「ん、いや大丈夫だ」

ソファアに腰掛け、用意された温かいおしぼりを臉の上に乗っけているモモンもといモモンガ。その見かけはナザリックの支配者らしい姿ではないだろう決して。だがしかし、そんなギルド・アインズ・ウール・ゴウンの至高の四十二人であるモモンガではなく鈴木悟というモモンガの姿に、彼の作り出したNPCであるパンドラズ・アクターは笑みを浮かべる。

やはり、ナザリックの為ではなくモモンガ自身の為に創られたパンドラズ・アクターは他のNPCとは考えも異なるのだろう。

さて、パンドラズ・アクターもとい『雷迅』アクトと『漆黒』モモンの二人はいくつかの冒険者組合からの依頼をこなして、このエ・ランテルでの拠点である宿屋にてしばしの休息をとっていた。

北上してきたゴブリン部族連合の殲滅に始まり、トブの大森林の最深部にて超希少薬草の採集の成功、ギガント・バジリスクの討伐。さらにはカツツエ平野から流

れ込んできたアンデッド師団を滅ぼすといった冒険者最高位のアダマンタイト冒険者の肩書に相応しい偉業を積み立てた二人は一部では竜退治を成し遂げた『白晶』のセレネと同等またはそれ以上の冒険者であるという声も出ていた。

「なあ、パンドラズ・アクター」

「はい？」

「いや、な？ この前も言ったがやっぱり冒険と言ったらドラゴンや巨人、大悪魔との戦いだと俺は思うんだよ」

「ええ、はい。父上のそういった冒険者稼業に対するロマンは存じております」

ネームレスより下賜された竜狩りの大斧の手入れをしながらアクトはモモンの話に耳を傾ける。傾けるといふより流している、という表現に近いが決してそこに突っ込んではいけない。

「なんやかんやでネームレスさんより冒険者を楽しんでて少し引け目を感じるんだ

よ。で、ナザリックの為にもそういったこの世界での強者なモンスターを調査したい、と思うわけだよ」

「なるほど、調査という名目でロマンを求めたい。そういうことですね父上」

「い、いや、そこまでは言っていない……うん、そのはず」

目を逸らして話すモモンにアクトは軽く肩を竦め——次の瞬間にはその視線をこの部屋の出入り口へと向けた。

アクトのその行動の意味を瞬時に察したモモンはすぐさまそのゆったりとした姿勢を正す。そして、数拍おいて扉よりノックが数度。

「どうぞ」

「冒険者組合から至急組合に来てもらいたい、と言伝がありました……」

扉向こうより告げられた言葉にモモンとアクトは顔を見合わせ、二人は首を傾げた。

冒険者組合より呼び出されたモモンとアクトの二人は組合へと足を運んだ。二人は組合へ入って早々に受付嬢に二階の応接室へと案内され、他の見知った冒険者らとの挨拶も中断し受付嬢の後を追った。

「『漆黒』のお二人が到着しました」

「おお、そうか。入れてくれ」

応接室にいるであろう人物から入室の許可があり、そして受付嬢に促されるままにモモンは応接室の扉に手をかけ扉を開き入室する。

「失礼する」

そう一言断って入室したモモンがまず目にしたのは、ここ最近それなりの頻度で顔を合わせている、このエ・ランテルの冒険者組合におけるトップである男、プルトン・アインザック。

そんなモモンと目が合ったアインザックは、なんとも気さくな表情で口を開く。

「やあ、モモン君。それにアクト君、待っていたよ」

その口調はまるでモモンとアクトの二人と親しみある関係を思わせるようなものでモモンは内心そんなアインザックに苦い笑みを浮かべながらもその手ですすめられるままにアクトとともに席に着き向かいに座る人物に視線を移す。

「ああ、彼らはリ・エステイーゼ王国大貴族であるエリアス・ブラント・デイル・レエブン侯の使者でね」

「レエブン侯とは、あの？」

アインザックからの説明を受けながらモモンはその使者という人物を見る。

黒っぽいローブに身を包む中年の男が二人、使者というよりは魔法詠唱者といった風体だ。そんな姿に一瞬モモンは首をひねりそうになったがすぐさま法国より手に入れていた情報を思い返し、レエブン候という人物が王国貴族の中でもやや異端的な考えを保持しているのを思い出して、この使者もその異端的な考えを持つが故なのだろうと納得した。

「どうも、『漆黒』のモモンです。それでこちらが相棒のアクト（それにしてもレエブン候か……確か六大貴族の一人らしいがそんな貴族から使者？）」

「はじめまして、モモン殿。貴方方の御活躍はかねがね」

互いに軽く挨拶を交わして、使者の一人が早々に口を開いた。

「さっそくですが、我々が貴方方にこうして会いにきた理由を話しましょう。」

実は現在レエブン候はとある悩みを抱えておりまして、その悩みを解決する為
実力者であり人格者でもある『漆黑』の御二人に依頼したい、と」

指名依頼。アダマンタイトだからこそそのそれにモモンは一瞬心が躍りかけたが、
すぐさま心を落ち着かせて使者の言葉を振り返る。六大貴族その一人からの指名依
頼、しかし使者はいまだ依頼の詳しい内容を口にしていない。

モモンはリアルで働いていた頃を思い出し、話の内容を詳しく聞いていないうち
は首を絶対に縦には振らない、そうモモンは決めた。と、そんなタイミングでアイ
ンザックが横から口を挟む。

「うん？ 実力者であり人格者であると考えるならば、他のアダマンタイトのそ
れこそ『蒼の薔薇』や『朱の雫』、『太陽』でよいのでは？」

アインザックの言う通りだった。

なぜ態々王都にいる、それこそ自分たちよりも前からアダマンタイト冒険者とし

て信頼のある冒険者ではなく、王都からもレエブン候の領地からも離れているこのエ・ランテルの自分たちなのか。

モモンもアクトもそれが気になった。そんな気配を感じ取ったのか使者らは顔を見合わせ、再びその口を開いた。

「実は『蒼の薔薇』は別口で依頼を受けており、『朱の雫』は現在依頼で王都におらず……『太陽』は現在竜王国のほうに出向いております……」

なんとも単純な理由だ。

やや、モモンは拍子抜けしつつアクトからの一方的な〈伝言〉を受け取り、この依頼を受けることを決めた。冒険者として一応貴族と繋がりを持つのもありだと考えたからだ。無論、威張りちらすような貴族は御免被るが。

この選択がナザリックとしても吉となったのは少し先のこと。

「そういえば、『太陽』というのは？　そのようなアダマンタイトがいると言うのは聞いたことがないのですが」

「ああ、『太陽』はアダマンタイトじゃあなくてミスリルの冒険者なんだが、その実力はアダマンタイトクラスと『蒼の薔薇』のお墨付きでね。じき、新たなアダマンタイトになると噂されている冒険者だよ。モモン君」

「なるほど」

一人の女がその身体内より一つのスクロールを抜き出す。
そして、それを開いて――

『――様でいらっしやいますか？』

『セバス様に裏切りの可能性があります』

ナザリックの不利益に成りかねないモノを見逃すはずがなかった。

バレンタインいいよね。

蘭陵王が良き。ちなみにまだ紫式部は当たってないぞ☆

それと、何時かモモンらの依頼である大森林の薬草採集の話も書いてみたい。え？そこに呪腹がおるじゃろ？あれをじゃなあ……

王国編はキャラが多いねやっぱり。六腕代替あっても二人死んだし

騎士感／既視感

もうバレンタインですね。

皆さんはどうですか？楽しいですか？ちなみに作者は家族以外に貰う予定はないです。後、チョコが最近キツイです。

一瞬、UNDEADでバレンタイン回を書こうかな？と思ったんですがぶっちゃけモモンガ一筋のフリーバーテキストにアルベドがなくてないので面白くないと思います。思いやめました。ネームレス？多分、かぼたんとお茶してる

既に王都の空は夕陽の色に染まり、明るかった路地には薄暗さが生まれ始めたころ合い、セバスは王都における拠点へと戻る道すがら今日の出来事を反芻していた。今朝方に拠点に訪れた腐った役人と娼館の管理者を自称する男。その二人の男た

ちにより、セバスはナザリックにとって不利益となる状況を作り出してしまった。優しいのではなく甘いセバスは原因となった少女を切り捨てるわけでもなく、かといって状況打開の案を自ら出すわけでもなく、そして知恵者であるデミウルゴスやアルベドらに相談するわけでもなく、ただセバスはこの王都を出歩いていった。

決してセバスは思考を放棄したわけではなかった。ただ、セバスは今回のような悪辣な搦手に対してどの様なことをすればいいのかわからないのだ。そして、ナザリックの者として至高の方々の手を煩わせるわけにはいかない、そんなナザリックのほとんどのシモベが抱いている基本的な考えがセバスの視野を狭めていた。

さて、そんなどうしようもない中、セバスは一人の少年を助けた。

道の真ん中で暴漢に暴行されていた少年を助けたのは彼の創造主より継いだ考え故なのか、それとも単に苛立っていたからなのかはわからない。そして、セバスはその場を後にして助けた少年とは違う少年と出会った。

それは出会ったというには少し不適切かも知れない。

何故かと言えば、その少年——クライムと名乗った彼はセバスの後を追っていたからだ。さては今朝方の者らからの刺客か何かかとセバスは一瞬考えたが、仮にも

刺客であるものが馬鹿正直に呼びかけられて出てくるのはいささかおかしいだろうと判断し、セバスはクライムと言葉を交わした。

クライム曰く、自らが仕える主の為にも強くなりたい。故に暴漢より少年を救ったその実力を見込んでセバスに一つ指南してもらいたい。

そんな頼みを受け、セバスはクライムのそのまっすぐなあり方に好感を抱いたのだらう。故にセバスはクライムに一度だけの指南を行った。

ただ本気で殺そうとした、それだけを。常人では決して耐えることでは出来ない殺気を向ける。普通ならばそのまま死にかねないそれを受けてなお、クライムは耐えて見せた。

その後はブレインという若者と出会い、刺客を打ち倒しそのままセバスは自身に刺客を向けたサキュロントと名乗った娼館の経営者のいる娼館へと襲撃をかけ、サキュロントと共に拠点に現れた役人を殺し、そしてサキュロントと『八本指』と呼ばれるこの王国における巨大な犯罪結社の幹部の一人を捕縛し、娼館で働かされていた何人もの女性を助けた。

ああ、なんとも創造主に似ている男だろうか。

少なくとも今朝方の一件を解決したセバスは反芻したそれらに心を落ち着かせて拠点へと帰還した。帰還して拠点である屋敷の扉を開けて、セバスはその眉を動かした。

「ん？」

「おかえりなさいませ、セバス様」

なぜならば、扉を開けた先。つまりは拠点の玄関に立つ者に何やら不穏なものを感じたからだ。

それはメイド服に身を包んだソリュシャン。その姿を改めて認識した瞬間、セバスの背に恐ろしく冷たい何かが生じた。これはなんだ。これは恐怖だ。

商人の令嬢という設定であり、この拠点には本来のことを何も知らない人間であるツアレがいるというにも関わらず、ソリュシャンがメイド服を着ている。それは演技の必要がなくなったからなのか、それともソリュシャンがメイド服を着なくてはならない理由があるのか。そこまで考えて、セバスは答えにたどり着いた気がし

て
—

「セバス様、モモンガ様が奥でお待ちになられています」

そのソリュシヤンの静かな声を受け止めて、セバスはその心臓が握られたかのよ
うに硬直した。

あの主が、いまナザリックに残ってくださる慈悲深き二人の至高の御方、その一
人がいまこの拠点に來ている。それを理解し、そして來ている理由がわからないほ
どセバスは愚かではない。故にセバスは歩を進める。

その歩き方は断頭台へと歩かされる死刑囚のような重く鈍いものだった。

ほぼ同刻。

バハルス帝国が帝都アーウィンタール。その一角である大闘技場にて彼はとある存在を見た。

その際の彼の動揺は彼の従者として傍らに侍^{はべ}っていたリロイが彼を心配するほどに。

——貴公。よもや、貴公もこちらへ……

その上級騎士の兜にあるスリットから見えるその存在に彼の兜の下の目は見開かれており、手は伸ばしかけやや震えている。その瞳が見つめるのは一人の女性。

典礼用のやや大きめの帽子を被り美しい金糸の髪を伸ばす騎士の旅装たるベストにその身を包んだ女性。正しく可憐であり凛々しき女騎士。

そんな彼女にネームレスはどうしようもなく、惹かれてやまない。

容姿自体はナザリックのメイドら四十二人やアルベド、さらに言えば火防女やエルフリーデに勝るとも劣らぬものであるがだからと言って容姿に惹かれるだろうか、実際のところ容姿に惹かれているわけではない。

では、何に惹かれているのか。

『…何か用か。誰かは知らんが、あまり私に関わらぬ方がいい…そのほうが身のためだ…』

『…お前は、不死というものを知っているか、その身に呪いを得た者だ。不死となった者は、人ではなくなる。次第に理性を、記憶を失っていく、そしてやがて…亡者となって他人を襲う』

『気が付くと、ぼんやりしていることが増えた。少しずつ、昔のことが薄れていくような…』

『ああ…お前か…何だか、頭がはっきりしないんだ…ハハハ……』

『私の名は、——。お前に、私の名を覚えておいてほしい。それすらも、いずれ私は…』

脳裏にソウルの内から記憶が過る。

彼女のソウルに彼は惹かれるのだ。

故にネームレスは彼女のもとへ向かおうとして——

『——ネームレスさん、ちょっといいですか？』

ッ……………

唐突な〈^{メッセージ}伝言〉に気を戻し、再び彼女がいた場所にネームレスが視線を向け

ば既に彼女はどこにもなく、ネームレスは軽くため息をつきながらモモンガからの〈^{メッセージ}伝言〉に応えた。

『はい、なんですモモンガさん？』

『えっと、実はですね——』

あれが果たして現実であったのか、はたまたセレネのソウルが見せた幻影なのかはわからない。

だが、少なくともネームレスはあの太陽の戦士と似通った感覚を感じてはいたが……ネームレスはモモンガとの〈伝言〉を終えるとそのままリロイを連れて路地へとその姿を消した。



重い、あまりに重い歩みの果てにセバスはそこへとたどり着いた。

この屋敷で今もつとも恐ろしき場所である応接室、その扉前。

「……」

息をのむ。ああ、どうか、この瞬間が永遠であれば良いのに。そんな世迷言がセバスの心中に漂い始め——しかし、そんなセバスの心中などソリュシャンにとつてまったくもってどうでもいい話であり、そもそも心が読めるわけではない以上どうしようもない話だ。

ソリュシャンの細い指が応接室の扉にかかり、そしていつさいの躊躇なくゆっくりと扉が開かれる。

しっかりと油が差されている扉は、本来なら滑らかに開いていくはずなのに、今はやけに重く室内と廊下に気圧差があるかのような遅さで動いている。それはセバ

スの心中を理解しているかのようにセバスは思った。

もしもそうであるならば開かないで欲しいが、実際この扉を開けているのはソリュシャンでありセバスの心中など考慮してくれない。そして、非常にもセバスの視界に応接室内部が映り込む。

普段と変わらない部屋には、その普段にこの部屋にいるはずのない異形らがそこに佇んでいた。

その数は六。

一人はライトブルーの武人。白銀のハルバードを多腕であるその手に持ち、不動の姿勢を維持している。

一人は悪魔。心底皮肉げにゆがんだ顔に、どのような心内をかくしているのか。そしてその悪魔に抱かれた、枯れた枝のような羽を生やした胎児にも似た天使。一人はセバスも知らぬ者。金と白の鎧に身を包む聖騎士然として、その手に大槌と大楯を持ち静かにそこにいる。

そして最後に――

「遅くなりまして申し訳ございません」

震えそうになる声を意志の力でねじ伏せ、セバスは礼拝のように深く深くお辞儀を応接室の最奥にて待つ二人の存在に向ける。誇り高きナザリックの家ハウス・スチユワート 令を兼任する執事というほぼ最高の地位に位置するセバスが、畏敬と畏怖によって頭を垂れる人物などそういない。

そう、ナザリックにおける絶対の存在である『至高の四十二人』が内、二人。

――モモンガ。

――ネームレス。

その手に黒いオーラを放つスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを握りながら椅子に腰かける死の支配者。

無手されども丸腰と判断など出来ぬ、火の粉を散らしながら壁に寄りかかる火の

篡奪者。

セバスはこの日、その命を散らす己を理解した。

ここ最近うつ伏せで作業することが何度があり背筋をやりました。

Twitterの方でも色々言ってるんですけども、時折盾の勇者の成り上がりとか転スラとかで書きたいなあと思うこの頃。

最悪、一話分をチーズ短編集に突っ込んでおくのもありかな？と思ってますね。ええ。

感想、意見、誤字脱字報告、お待ちしてます。それと、Twitterも興味があればどうぞ。

処分

ようやく書き終わった。

やっぱり大変ですな……ただ、少し変な部分もあるかと思いますがどうぞ。

オバロのアプリは星五一人も当たらずフェンと一緒に頑張ってます。

まさか、ホムンクルス枠とは思わなんだ

片や空虚な眼窩に、片や兜のスリットにぼんやりとした赤い光を灯している。上位者二人のその眼光がセバスの全身を舐めるように動いているのが頭を下げているままのセバスにも十分に理解できた。

緊張が空気に浸透する中、ネームレスが面倒そうに軽く手を振ったのをセバス

は感じ取る。

……いい。気にするなセバス。今回ののは何も言わずに来た我々の落ち度だ。

「それよりも、セバス。いつまでもそのような所で頭を下げていてもしょうがないだろう？早く部屋に入って来い」

「はっ」

そんな二人の声に、頭を下げたままのセバスは反応し、頭を上げる。それからゆっくりと一歩踏み出して——背筋を震わせた。

その鋭敏な感覚で、巧妙に隠された殺意と敵意を感じ取ったためだ。

視線をゆっくりと動かす。二人の守護者も騎士もセバスに注意を払っているようには見えない。だがそれはあくまで常人から見ればの話でしかない。それをセバスは十分に理解していた。

張りつめている空気に友好的なものは一切なく、むしろまったくの逆だ。

「そこで止まったほうが良いと思うがね」

デミウルゴスの涼しげな声がセバスの足を止める。

その場所はモモンガらよりやや離れていた。だが、それは会話するうえで不都合な遠さなどではなく、部屋の広さや上位者との謁見という事を鑑みればおおむね適切な距離といえよう。

しかし、この世界に来てからそこまで言葉も交わしていないネームレスならともかく、いままでのモモンガであればセバスに対してもう少し近づけといった旨の言葉を言うはずだ。だが今回はその言葉がない。

その事実がセバスには距離以上の隔たりを感じさせその背に重くのしかかった。そして、この位置がコキュートスにとって最適な攻撃距離であるということも重圧の要因であった。

「さて、セバス。何故、我々がこの場にいるのか、説明は必要か？」

「……いえ、必要はございません」

「ならば、お前の口から聞きたいものだな、セバス。報告は受けていないが、最近、何やら可愛いらしいお嬢さんを招き入れたそうじゃないか？」

やはり——モモンガの言葉にセバスはまるで氷の柱でも背中に入れられたような寒気を感じ、それと同時にふと違和感を感じていた。

だがその違和感を探るよりも先に自分が主人に返事を返していないことを思い出し、慌てて声を張り上げる。

「——はっ！」

返事が遅れたな。セバス

「もう一度問おう。可愛い人間を招き入れているらしいな」

「はっ！招き入れました！」

まただ。また、何か、違和感を感じる。

その違和感がなんなのか、セバスはわからない。故にもどかしさをその胸の片隅に抱きながらモモンガとネームレスを見る。

そして、セバスの返答にネームレスは熱を感じさせるような視線を向けてその続きを話し始める。

それで？何故、我々に報告しなかった

「はっ……………」

その言葉に対して、セバスは返事を返したがしかし返答は返さずに微かに肩を震わせながら、その視線を主人らから床へと移動させた。

それはいったいどのようなように返せば最悪の事態を免れるのかを思案するための半ば無意識的な行動であり、その行動はとある人物に苛立ちを与えるものであった。

この場において唯一こちら側で創られた騎士リロイ。彼の崇拜する亡者の王たるネームレスの質問に対してなかなか返答を返さぬセバスに、グラントを握る手が強くなる。その反応にモモンガは気づき、リロイがセバスに対してアクションを起こ

す前に口を開いた。

「さて、セバス。私はここにお前を派遣するにあたり、ありとあらゆることを記載してナザリックに送れと命じた。それはどの情報に価値があり、どの情報がゴミか判断するのは、一人では困難だからだ。実際、お前から送られた書類に書かれていることは、街の噂レベルから書かれているな？」

「はい。その通りでございます」

モモンガの言葉にはきちんと返答したセバスにリロイはやや不満なものを胸にしまい込みながらその手の力を収めた。そんなリロイを視界の端に収めているデミウルゴスはすこしほほえまし気に思いつつその視線は変わらずセバスへと向けている。

「では、ネームレスさん、デミウルゴス。二人に確認するがセバスより上がってきた書類を二人にも読ませたが、その中に可愛らしいお客人のことは記入されていた

か？」

いや？まったくもって覚えはない

「ネームレス様同様、数度繰り返し読み返しましたが、そのような記載は一切発見できませんでした」

「そうか。改めて、セバスよ。それを踏まえて聞かせてもらおう。何故に報告書に上げてこなかった？……私の、私たちの命令を無視した理由を聞きたいのだ。お前たちが至高の御方と崇める我々の言葉はお前を縛るには相応しくなかったか？」

その言葉が室内の空気を大きく揺らす。

それに対して、セバスは慌てて、必死に言葉を発した。

「滅相もございません。あの程度のことは至高の御方方にご報告するまでもないと、私が勝手に考えたためです」

セバスの全身に突き刺さる殺意が五つ。発生源はコキュートス、デミウルゴス、

デミウルゴスに抱かれた天使、リロイ、そしてソリュシャンのものである。主人の一声で、即座に五人がセバスに襲い掛かり殺すことは間違いないだろう。

死ぬこと自体に恐れはなく、ナザリックの為に死ぬるといふのはナザリックのシモベとして本望と言えるだろう。だがしかし、裏切り者として殺されるとなればセバスは身が震え上がる。

セバスがその額に大量の汗を垂らし、リロイが誰よりも先にセバスを碎き潰さんとその足を踏み込んで――

いらん。止まれリロイ

壁に寄りかかっていたネームレスがその手をリロイの肩にかけた。

その一言と行動に全ての殺気が霧散した。見れば、ネームレスがその身をリロイらより前へと、つまりはこの部屋の誰よりもセバスの近くへと寄っていた。

そんなネームレスにコキュートスとリロイが下がるように乞う前にその視線をセバスの視線に合わせて口を開く。

なるほど。セバス、お前の言いたいことは理解した。

だが、報告するまでもないことか、どうかを決めるのは我々だ。

空気に熱が満ちる。常に身体から冷気を発しているコキュートスはそのスキルを解除しており、熱を緩和するものはこの部屋にはない。

ネームレスを中心に確かに熱気が発生しており、その最も発生源に近いセバスはその額に珠の汗を滲ませている。扉付近のソリュシャン、コキュートス、デミウルゴス、デミウルゴスに抱かれた天使——ヴィクティムも、そしてセバス自身もいまここで至高の御方の一人にセバスは処刑されるのだと、悟って——

「ネームレスさん、それはいきすぎだろう」

もう一人の至高の御方により処刑は掻き消えた。

「たしかに今回の件、私たちに報告をしなかったセバスの非は明確だろう。だが、それだけだ。たかだか、元娼婦一人の報告をしなかっただけでそれはいきすぎだ」

……ああ、そうだな

ネームレスを下がらせ、モモンガは改めてセバスを見る。

その視線はネームレスのような緊張感漂うものではなく、慈悲深さを感じさせるようなものだった。

「セバス。別に私たちはあの客人をこの館に招き入れたことに対して問題にしているわけではない。私たちが問題に感じているのはお前が今回のことを報告しなかったことだ。別段、助けたという相談さえあれば私もネームレスさんもお前の成したことに対して協力しよう。それはお前の主人として当然のことだ」

「だが、今回の件を報告しなかったことでお前たちはこの国に巢食う面倒なものどもに目をつけられた。そうになると、この街での情報収集がすこしばかり面倒になる。いかに何時か掃除する相手だといえども……まあ、いい」

そこまで語られてセバスはようやく先ほどまでの違和感が何だったのかを理解した。

彼女の、ツアレの命の危機は遠くへと消えた。そう、今回自分がこの場に立たされているのはツアレを助けたことに対してではなく、その報告を行わなかったことについてなのだ と理解したのだ。

そんなセバスからモモンガはいったん視線を外し、再び壁際へと移動していた。ネームレスへと視線を移す。

「さて、今回の件におけるセバスへの処分だが……ふむ、ネームレスさん何かちょうどよいのはありますか？」

モモンガの言葉に一瞬この場の全員が固まったが既にネームレスから感じていた熱をもつ圧は失せている。

ああ……なら今回の王都における任務でのセバスの功績を白紙とするでよいと思うが、いかに

「なるほど。デミウルゴス、お前もそれでよいか？」

ネームレスの口から告げられた処分内容に再びこの場のモモンガを除く全員が固まった。

そんな中、問われたデミウルゴスは額に僅かばかりの汗を滲ませながらそれに答える。

「至高の御方に仕える身でお役に立てなかった。それは我々ナザリックのシモベにとって何よりも罰であるかと……」

「では、セバスに対する処分はそれとする」

その処罰は正しくデミウルゴスの語った通り、極々一部を除くナザリックの者らにとって恐ろしい罰であった。なぜなら、この処分によりセバスはこの王都で至高

の御方方に不利益を負わせなかったが同時に一切利益になるようなこともしなかった、つまりただの木偶の坊でしかなかったという事なのだ。

セバスとやや仲が良好ではないデミウルゴスですらこの処分に対して酷ではないかと感じたがすぐにこの処分は大きな警告であるのだと理解した。

ほんの些細な情報であろうとも下手をすれば大変な事になりかねない。それは極当たり前な話であるが今回の一件に対する処罰はそれを再認識させる為のものなのだろう。

そう、デミウルゴスは納得し幾度目かの至高の御方方への畏敬の念をより一層強める。

そんな、デミウルゴスの心中など知らないモモンガはふと、セバスが保護した少女の事を思い出した。

「それでだ、セバス。お前が連れてきたお客人の事だが……ふむ、どうするかはそ

の者に委ねるとする。ソリュシャン」

「はい、モモンガ様」

モモンガに礼をし応接室より出ていくソリュシャン。

既にこの部屋から緊張感は消え失せていた。

その後、ソリュシャンに連れられてきた彼女、ツアレニーニャ・ベイロンは記憶を消して人間社会で生きていくことではなくセバスと共に生きるというネームレスからして原作とほぼほぼ同じ生き方を選び、ギルド【アインズ・ウール・ゴウン】の保護下に置かれ、外部メイドとしての仕事を与えられることとなった。

刻一刻と運命の夜は近づいている。

「すいません。ネームレスさん……なんか、悪役演じてもらって……」

いやいや、気にしないでいいですよ。二人揃って優しくしちや示しがつきませんから……

「そうですか……あ、ところで帝国はどうですか？」

ブラボ書きたい。

ブラボ×何かでやりたい。

恐らく次の投稿は少し空くかと思えます、また。もしかしたら帝国側での出来事を挟むかもしれませんが……って言っても原作的に次の日か、イベント。

追記

現在オリジナル作品を構想中です。投稿が何時になるかは未定ですが楽しみにし

ていただけると幸いです

暗躍…改訂版

活動報告でも書かせていただきましたが、本作のゲヘナ編の続きを考えていた際に主人公の行動がダークソウルを踏まえた上で展開なども含めて強い違和感を覚え一度削除し今回から改訂版を投稿させていただきましたことにしました。

また、読者の皆様にはお待たせしたことを申し訳なく思っております。

これからは是非とも本作をよろしくお願いいたします。

『ゲヘナ』本来の歴史においてリ・エステイーゼ王国で行われたデミウルゴス主体

によって行われた計画。

元々はセバスに対する報復行為として王国一の犯罪組織『八本指』によってツアレが攫われたことに始まる。彼らナザリックのシモベにおいて絶対であるモモンガ——アインズ・ウール・ゴウンの名のもとに保護された彼女に手を出すという事はモモンガに敵対したことを意味し、そして同時に外部からの資材を手に入れる機会を得たことによりデミウルゴスは『八本指』を襲撃し、結果として『八本指』という王国の裏組織と王国民の拉致及び『八本指』だけでなく一部貴族の所有する資源物資の獲得、そしてモモンガが扮する冒険者モモンの名声という多くのモノを手に入れた。

それは後の魔導国成立のための布石となり、さらには聖王国における影響獲得の為の計画に関わる事となった。

そんな本来の歴史においてとても大きな出来事であるそれがこの世界でも起きるのか、どうか。その有無がネームレスにとっては現状最も気がかりなことであった。

俺というイレギュラーによって流れは変化している。早くの法国との関わり——
—それも神格としての関わり……魔皇ヤルダバオトはあまりに俺たちとの繋がりを
想起させる

『ゲヘナ』は起きない？

そんな馬鹿な。起きないはずがない。

心中でネームレスは過った『もしも』を吐き捨て、次の思考を回していく。

では魔皇はどうなる。無論、あちらと違い、冒険者モモンの名声はそこまで重要
視することじゃあない

ナザリツクにとって最初の大作戦ともなればただの悪魔による襲撃などあまりに
味気なさすぎる。そう考えながらネームレスは机の上に広げた駒を手中で弄ぶ。

どうせやるなら、派手に。ネームレスにとってユグドラシル時代の悪友であった
悪^{ウルベルト}の男、問題児^{るしやふあ}、設定魔^{タブラ}、忍者^{式式}らとの関りで培った遊び心と言うべき——そんな

思考が脳裏を過って、次の瞬間自身の脳裏に一つの光が過ったのを覚えた。

アンデッド、異形種としての思考に挟み込まれたのはネームレスの太陽。この世界で再会した一人の男、Yの字で佇む太陽戦士の姿。たったそれだけでネームレスはその兜の下で浮かべそうになっていた暗い笑みをかき消し、自嘲するような笑みを浮かべ寄りかかっていた少女、番外席次の頭をまるで玉遊びでもするかのように軽くぽむぼむと叩く。

ここはバハルス帝国の高級宿ではない。

竜王国の一面に建築されたネームレスという戦神亡者の王を崇める黒教会、その一室。

セバスの一件より帝国へと戻ったネームレスは従者として待っていたリロイを帝国で待機させ一人この教会に足を運んでいた。

「ねえねえ、どうしたの？いきなり笑って」

どうやら、声を出して笑っていたようで頭の上に置かれた手を捕まえた番外席次

が怪訝な声音でネームレスへと聞いてみれば、一度考えたような素振りを見せたと思えば再び、今度は明確にネームレスは笑った。

フツ、フフフツ……、いや、なに、存外旧知の存在が自分の中で大きくなってな

モモンガではこうも簡単に自分の中の異形種らしい側面を引っ込めさせられなかっただろう。そう考えながら、ネームレスは笑う。

きっと、モモンガだけではなんやかんやで何か理由付けしながら、この『ゲヘナ』に対して協力的ないし介入することは間違いなかっただろう。だが、わざわざ戦火を広げる必要もない、ましてやこの世界においてナザリックの指針からして原作より被害は小さくできるはずだ、そうネームレスは思考して

見学、だけに収めるか。何より、会いたい男がいる

そう、呟きながら、ネームレスはアイテムボックスから一振りの刀を取り出して

見る。

それはネームレスらプレイヤーやNPCが振るうには何枚も型落ちしているような一品で、しかしそれでもこの世界においては名刀と呼ばれる代物。ソファアーにそれを立てかけ、ふとため息をつきつつ自身の装いを火継ぎの鎧からファーマの鎧へと変えて、ソファアーから立ち上がる。

その手にはいつの間にかに二振りの直剣が握られていて、見上げている番外席次と視線がかち合った。

軽くやるか

「そうね、のんびりしてるより私はそっちのほうが良いわ」

少女、番外席次はまるで汚れを知らぬ子供のように無垢な笑顔でネームレスの誘いに応えた。

夜が明けて、セバスとソリュシャンの多忙な一日が始まった。

何も言わずにこの王都から立ち去ったところでその後、に会う可能性など限りなく低いがしかし、この王都で作り上げた商人としての偽りの顔を潰してしまふのは勿体ないと、帝国に帰還するという演技をすることになったためだ。

セバスは最初の一度しか顔を合せなかったソリュシャンを連れ、帰還する旨を付き合いのあった商人や組合の人間たちに報告していく。無論、挨拶だけといっても

話がそれだけで終わるわけもなく、雑談をして時間をかけてしまうのは人間関係を友好的に回すうえで仕方がないことであった。特にソリュシャンという美女と話すことに嫌といえるような男はそうそういない。

結果として、一軒に三十分以上拘束され、すべてに回ったところには既に太陽は沈みかけていた頃合いであった。

「時間は非常にかかりましたが、倉庫の一時使用と小麦の運搬作業はすべて終了。これで問題なくナザリックに帰還できますね」

ソリュシャンの言葉には珍しく喜悅の色があった。

ナザリックに帰還できるという事実と自分が主体の仕事が無事つつがなく終えられたことに満足感を感じているのだろう。

基本的にこの王都での情報収集という仕事はセバスの手により行われたものであり——結果としてその成果は無かったものとなったが——今回の挨拶回りは表向き主人であるソリュシャンの仕事であり、それで強い満足感を得たのだろう。ま

るで鼻歌でもうたいような面もちである。

実際、そのことに問題などどこにもなく、機嫌のよい美女との会話はセバスらにとって様々な面で有利に働いた。例えば倉庫の使用料など、小麦を大量に買ったからという事実を差し引いても破格の安さであった。

美人というのは得である。

そう心中で思いながらセバスは馬車を館の敷地内において、ソリュシャンを連れて玄関へと歩く。

懐から鍵を取り出し、鍵穴へ差そうとしたところでセバスは何らかの違和感を覚えた。違和感により動きの止まったセバスに不思議に思ったのか、ソリュシャンは怪訝そうな表情を見せ——その視線が鍵穴へと移ったところで口を開いた。

「鍵穴にいくつか、真新しい傷があります。何者かが鍵開けを行った可能性が——」

そこまで聞いて、セバスはソリュシャンの言葉を最後まで聞かずに屋敷の扉を開いた。罫の有無など何も考えていない。

あったとしても踏み碎けばよい、そうセバスは判断した故に。

既に撤収が済んでいる館はがらんとしており、人がいる気配は微塵もなく、セバスは館へと踏み入り自身の探知能力を全開にして館内の存在を探知し、帰ってきた答えは無。

「ツアレ！ツアレ、いないのですか！」

セバスらしくなく声を張り上げ、館の中を探索する。

そもそもツアレはその経歴はともかく常人でしかなく、セバスというこの世界において神話の存在としか言えぬ実力者から自らの気配を隠すことが出来るわけもない。故にセバスの中には最悪な考えがふつつつと湧き上がる。

そして、あちこち探し回る中、ツアレの姿もツアレだったものも見当たらず、何かあった痕跡すらどこにも見当たらない。まるで煙になって消えたかのように、そこまで来てようやくセバスは自身の中の最悪な考えを払拭できた。

「血の匂いは感じられない……であれば、殺されたのではなく、攫われたと考えるべき。だとすれば犯人の要求は……」

拳を握りしめながらセバスは自身の判断が失敗であった、とその失態に苛立つ。もともとツアレを一人で館に残すのは不安であった。『八本指』という裏組織とぶつかったために危険がない筈がなかったからだ。

にも関わらず彼女を館に残したのは偏に彼女はいまだ外に怯え、人に恐怖を感じる心的外傷が癒えていなかったからだ。故にたとえ馬車に乗せたままだとしても面倒なことになるかもしれないと判断したためにセバスは彼女を館に一人残すという選択を選んだのだ。

そして、その判断は間違っていた。

多少の面倒が起きる可能性を呑んでも守れる場所に置いておくべきだったのだ。その事を悔やみながらセバスは廊下をやや早歩きで進んでいく。

と、そんなセバスを呼び止める声。応接室よりの声に、まさかいたのか？というありえない幻想を抱きつつ、部屋に入れば応接室の中央にはソリュシャン一人。

しかし

「ソリユシャン、それは」

「何か書かれた羊皮紙です」

その言葉と共に差し出された羊皮紙、マジックアイテムを起動しそこに書かれた文字を読み解いていく。

読み進めていくうちにセバスはその羊皮紙を握りつぶす。

「攫われました。ですので、助けにいきます」

返答など期待しない、そんな言葉にソリユシャンは目を細め口を開く。

「それがよろしいと思います。ですが、いまはモモンガ様のご命令ではナザリックへと撤回となっております。まずはそちらを優先するべきではないでしょうか？」

ある意味、予想の出来た返答。故にそれに対しての返答を返そうとして

「それでもなお、あの人間を先んずるといふのならばまずはモモンガ様にご報告するべきではないでしょうか？ よもや、先日の一件にてモモンガ様、ネームレス様のおっしゃったことをお忘れですか？」

そこまで言われて、セバスは昨日の一件にて言われた事とそして一体ツアレが何の名のもとに保護されているのかを思い出した。

「モモンガ様、ネームレス様にご報告を。ツアレが攫われたが、どうしたらよいか、と」

男は感じた。

第六感のようなもので、いやその身に渦巻く人間性が、ソウルが囁くのだ。
男にとって無視することが出来ないものがこの日訪れることを。

女神の騎士はようやくその退屈より引き上げるものと出会う機会を目前とした。

オーバーロードのアプリゲーターであるオバマスですが、オバマスには独自のキャラが出てきますが極力出せるようならばオバマス要素も出していききたいと思っています

感想等お待ちしております。

迫る火の粉

本日二度目の投稿。

本話は改訂前と改訂後でほぼほぼ変更がないことを先に知らせていただきま
す。

ソリユシャンを通じて齎されたツアレ誘拐の一報はまず、手が空いていたネー
ムレスへと伝えられた。これはモモンガは冒険者モモンとして現在移動中であり、
近くに他者の目があるために〈伝言〉先であるパンドラズ・アクターによって先に
ネームレスへ連絡するよう伝えられていたためだ。

さて、ソリュシャンから報告を受けたネームレスは双剣を掌で一回ししてから腰に下げている鞆へと納め、兜の下でその瞳を細める。

モモンガさん、に伝えれば激怒するのは間違いないだろう。だが、彼は移動中でそして今人化の指輪を装備している。そのことを考えれば精神鎮静化は作用しないことは間違いない。となれば、しょうがない、事後承諾になるが……

「?どうしたの?」
ン、少しな。

先ほどまで斬り合っていた番外席次の頭を軽く撫でつつ、ネームレスは思考を回していく。もとよりセバスの一件があった時点でツアレが攫われるのは予期していた事態であり、これと違って焦る理由なんてものはどこにもなく、それ故ネームレスはモモンガへの連絡よりも先に他の者への指示を優先、

……いや

しようとしたが、しかし。

昨日のセバスへの処分の際に報告・連絡・相談、報連相の大事さを説いた自分がそれを疎かにするのはいかなものなのか、そう脳裏に過り連絡する手を止めた。ナザリックの者たちは一部を除いて問題ない、至高の御方は別です、などと宣い始めるだろうがしかし、ほぼほぼ間違はなくモモンガは怒るだろう。何せ、ネームレスもモモンガもまがりなりにも社会人で報連相の重要性は嫌というほど理解している。

そして、なんやかんやでネームレスは自由にさせてもらっている負い目がある、そう言ったことも含め報連相を疎かにすることは憚られ、数分間悩みに悩んだ末に〈伝言〉のスクロールを宙へと放った。

スクロールは燃え消え、〈伝言〉が発動し繋がる。その相手は

『——あー、モモンガさん？』

『あれ？ネームレスさん？どうかしましたか？』

報連相を優先することを決めた。

もしも、モモンガが切れた場合は近くににいるパンドラス・アクターが諫めてくれるのを期待して。

『そのだな、さっきソリュシャンもといセバスから報告というか相談がきてな』

『はあ……何かトラブルが？』

『ツアレが攫われた。犯人は例の八本指だ』

一瞬、沈黙が流れた。

その沈黙にネームレスは思わず天を仰ぎそうになるがしかし、視界の端でパリの練習をしている番外席次を微笑ましく眺めることでこの先のことから一時的に逃避する。

同時にネームレスはモモンガの近くにいるであろう人間を憐れむ。

レベル的に隔絶した存在が激怒すればそのまま潰れる可能性がないわけではない

からだ。

だが、いつまで経ってもモモンガの怒りは飛んでこない。

『モモンガさん？』

『……ああ、すみません。大丈夫です、ネームレスさん。報復行為はあり得た話ですし……ええ、ネームレスさん、ツアレを救出しましょう』

あまりに予想外の反応にネームレスは思わず瞬きする。

モモンガのことだから、クソがァァァ！とブチ切れると思っていたのだ。実際、原作においてモモンガはアインズ・ウール・ゴウンの名の下に保護したツアレを攫ったことについてアルベドと話しながらもその感情を露にしていた。彼にとって、アインズ・ウール・ゴウンとは今はいない仲間たちとの確かな絆であり思い出そのものであり、それに泥を塗るような行為に憤怒しない理由がなかった。

だが。

この世界では少なくともモモンガは一人ではない。

彼にはネームレスという仲間がいるのだから。

『それは別に構わないんですが、どうやって？』

『それはまあ……報復ですし、壊滅いや王国の後々を考えて吸収が一番ですかね。実行グループは許しません……詳しいことはデミウルゴスやアルベドに任せましょう』

『あ、はい』

ネームレスは理解した。モモンガは間違いなくキレているということ。

温厚な人間ほど怒った時はヤバいというが、モモンガは間違いなくそれにあたる人間だとネームレスは理解し、同時に自分がモモンガという人間を見誤っていたことを自覚する。

『それに八本指は王国に害を与えてるんですよね？確か、法国が王国を帝国に併合させようとしたのも八本指の麻薬やなんやらで人類の弱体化を懸念したからとか

なんとかかっという報告があった気がします』

『そう、ですね。そういう報告もありましたね……』

はたして、本当にこの〈伝言〉先はモモンガなのだろうか。実は間違えてパンドラズ・アクターに連絡してしまったのではないか、とネームレスは考え始めるがすぐにそれは不毛だと考え、話の続きを促す。

『それなら、私たちが八本指をどうかしても問題ないでしょう？』

『なるほど。わかりました、モモンガさん。それじゃ、デミウルゴスがセバスらの集めた物資等をナザリックに運ぶために王都のほうに行く予定だったんでそのままデミウルゴスに指示を出します』

そこまで言って、ネームレスは〈伝言〉を終わらせ、そのままその場に腰をおろす。

リング・オブ・サステナンスを装備しているにも関わらず疲れたかのような振舞

いのネームレスを番外席次が不思議そうに見ているがネームレスはそんな彼女の視線を気にせずとその手を兜の額に当てる。

少し、予想外だったな。まあ、もともと地頭は悪くなかったし、パンドラズ・アクターというナザリックの知恵者の一人が常日頃から付いてるんだ。

デミウルゴスやアルベドといった知恵者に頼りっぱなしにならないように、そういった考えなのだろうとネームレスは判断しつつ軽く身体を解しながら、アイテムボックスより二つ目のスクロールを取り出し、再びそれを宙へと投げた。

ツアレ誘拐の一報をネームレスより伝えられた瞬間、モモンガは驚くほど冷静だった。

同時にやっぱりな、という考えすら脳裏を過っていた。

少し前の自分ならアインズ・ウール・ゴウンというギルドメンバーとの思い出であり、仲間たちと名付けたその名を知らぬとはいえ侮り泥を塗ったとでも考えてその身を憤怒に染めていたかもしれない、そう考えながらもモモンガは今回の相手が王国の闇で蠢く犯罪組織であることを思い返す。

組織であり、さらには悪どいことを生業としているのであるならば、セバスによって潰された面子をそのままにしておくはずがないのだ。

となれば報復に動くのは当たり前前だ。

モモンガは自分だってそうするし、誰だってそうすると理解していた。

だから、モモンガは報復し返すことに決めた。パンドラズ・アクターとの軽い勉強会もどき——リアルで教師であったやまいこや助教授であるらしい死獣天朱雀の姿になれることが関係しているのかは不明であるがパンドラズ・アクターの教導能力は高かった——により、あるていど頭が回るようになってきたモモンガは中途半端な報復ではいけないと判断した。

中途半端ではもしかしたら、こちらのナザリックの不利益となるかもしれない。ならば徹底的に、実行犯らを殺し、反抗など不可能であると心を折り砕いたうえで組織を吸収する。

長年、王国の闇で活動してきた組織を滅ぼすのはさすがに惜しい、と考えたが故の決断だった。

「(それはそれとして、できる限り静かに終わればいいなあ)」

考え方は変わった。しかし、小市民らしさはどこにも行かなかったモモンガである。

「おい、あいつはどうした」

王国に巣くう犯罪組織八本指、そのうちの一部分である警備部門が所有する建物。その中にある広場にて大柄な男が警備部門に属する人間らに声をかけていた。禿げ上がった頭に隆々と盛り上がった腕や巖の如き肉体の動物を模したような刺青を入れた男、ゼロの問いかけに一番近くにいたレイピアを腰に下げた女、ルベリナが反応する。

「例のアイツなら、さっきどっか行ったよ……なんで、アイツを自由にさせてんのよゼロ」

不満気に答えるルベリナにゼロは面倒くさげな態度で目を逸らしながら、その理由を口にする。

「お前は見てねえから言えるんだよ。アイツは多少自由にしてもこっちの所に置いておいた方がいいんだ」

「あっそ……ああ、一応言っとくけどマルムヴィストが連れ戻しに行ったから」

「マルムヴィストがか……このタイミングで間に合うと思ってるのか?……たくっ」

愚痴るゼロは周囲を見回し、新しい六腕となった男を見るがそれらは特に説明するまでもないそれなりに強い程度の冒険者崩れでしかない輩。ダイバーノックやペシュリアン、エドストレームの誰の代わりにもならないような有象無象に苛立ちながら、建物へと向かって歩き出す。

既に仲間が三人も、いやもしかすればまた一人死ぬかもしれない。

そんならしくないことを考えるが直ぐに頭を振って、意識を改める。今考えるのは今回の一件の原因となった老人のみ。

蠢く思惑…改訂版

ツアレが攫われたという旨の報告より数時間も経たない内に王都の屋敷、その一室に彼は集っていた。

スーツに身を包み鉄板を張り巡らしたような尾を生やした悪魔であるデミウルゴス。

黒のボールガウンに銀色の髪を持った吸血鬼、シャルティア。

ダークエルフの双子、その片割れである弟マーレ。

戦闘メイド・プレアデスより二人、エントマとソリュシャン。

そして、デミウルゴスの配下である魔将ら。

およそ、この場にいるのが半数であったとしてもこの王都を滅ぼすには十分であるほどの過剰戦力、それらにセバスを加えた面々がこの一室にいる。もしもこの場にまっとうな人間、それもしつかりと自身が置かれている状況を理解できるような者がこの場にいれば素足で逃走してしまう、そんな異様なこの場で真っ先に口を開

いたのはデミウルゴスだった。

「セバス。今回の作戦における全権はこの私、デミウルゴスが、モモンガ様とネームレス様のお言葉によって握ることになったが、異論はあるかね」

普段の彼と変わらぬ冷静な声、しかしセバスに投げかけられたその言葉にはどこか棘があるように、いや実際にそういう風に言ったのだろうかとセバスは理解し、特に否定することもない為デミウルゴスの言葉に首肯する。

「もちろん、理解しております」

セバスの返答にデミウルゴスはひとまず、なにか口挟むことなく頷き今回の作戦についての説明を始めていく。

「今回、君たちを招集したのは我らが至高の御方方であらせられるモモンガ様と

ネームレス様の御尊名に唾吐いた八本指という愚か者たちを誅殺することが目的で、つい数時間前に攫われたツアレ、という人間の娘を救出のためではない。それはわかってるねセバス」

「ええ、あくまで副なる目的でツアレを助けるということですね」

「そういう事だね。もちろん、モモンガ様の仰った通りツアレを助ける以上、彼女が蘇生魔法に耐えられないだろうから、生きている内に救出したいと私も思っているよ」

そんな嫌味にもとれる言い方にセバスは顰めるものの、それはあくまで胸中に秘めつつデミウルゴスがこのままセバスにとってあまり気持ちの良くない話へと舵切る前に先に口を開く。

「それで、八本指を誅殺する為の情報はあるのですか？」

「問題ないともセバス。既に情報は入手済みだ」

セバスの質問に対して即答したデミウルゴスに周囲はセバスも含め驚嘆の声を上げた。それもそうだろうデミウルゴスがこの王都に滞在していた時間は非常に短い、そんな短時間で八本指についての情報を手に入れるなど並大抵のことではない。ましてや、あのデミウルゴスだ。表面的な情報だけではわざわざこんなことは言わない。その手に揃えている情報は間違いないかなり深い部分の情報だろう。なにより、至高の御方方より作戦の全権を任されている以上、情報の真偽に関しては疑うべくもないだろう。

「襲撃すべき拠点は複数あってね、後はそこを襲撃し情報を持っている者を数人捕虜として捕縛し、至高の御方方の御言葉に泥を塗ったことへの罰に相応しい損害を与えるために情報を引き出す必要がある。皆、異論はあるかね？」

そう言いながら懐より恐らく八本指の拠点についての情報が記されているのだから羊皮紙を取り出ししながらそうこの場にいる者たち全員に問いかけるデミウルゴス。それに対して、

「な、無いです！」

「至高の御方方に対する無礼、その身で贖わせんす」

「異論などあるはずがございません」

二人の守護者と執事がめいめいと返事をし、戦闘メイドと魔将らは沈黙しながらも臣下の礼を持ってそれに答える。

そんな彼らを見てデミウルゴスは一度頷いてからセバスが八本指から指定されたという場所について聞き始めた。

王国では基本的に日が沈むと同時に寝るのが一般的である。明かりを灯すための費用を節約するための貧しい集落らしいといえる習慣であるが、王都ともなれば集落とは異なる様相を呈する。歓楽街などはその差異が顕著であり、

店や住民はさながら夜行性の獣とでも言えはいいのか、活動的になる。

そんな王都にてひっそりと、光輝なる歓楽街とは正反対である暗雲とした静かな暗黒街をゆく人影が一つ。

鎧をまといヘルムすら被った人間が明かりも持たずに暗い路地を物音すら立たせずに進んでいく様はよそから見れば奇異以外何物ではないが、彼——クライムが被っているヘルムは闇ヘルム・オブ・ダークヴィジョン視の兜と同じ能力を有しているが為であり、彼のヘルムのスリットが見せる光景は15メートルという制限があるものの真昼の光景と

何も変わらない。

また、彼の鎧は鋼鉄製のものとは違い、騒がしい音を立てないミスリルなどを材料にしている為に彼は全身鎧を着込みながらこうもひっそりと行動ができた。無論、金属である以上、多少なりとも音は鳴るものだがさらに魔法を加算することで微かな金属音すら立たなくなった。

では、何故そんなにも用心に用心を重ねているのか。

その理由は彼が偵察だから、だろう。

クライムは路地を抜け、目的地を視界に入れた。周囲が背の高い塀で覆われた監獄か要塞か何かを思わせるような物々しい雰囲気建物は外側からでは中で何が行われているのかその詳細を知ることが出来ないが、自ずと察することができるだろう。

「あれですね。間違いないですね」

身を低くしながらクライムはそう呟けば、すぐ傍誰もいない空間から声が返ってきた。

「そうですね、班長。場所的にも雰囲気的にもあれがそうみたいです。それでは先行偵察に行ってまいります」

姿の見えぬ男である元オリハルコン級冒険者の一人であるという盗賊系の能力を持つ男の声に、彼らに同行していたもう一人の男、ブレイン・アングラウスが応えた。

「気を付けてな。不可視化しているとは言っても、看破できる戦士だっているということを忘れないでくれ」

「勿論さ。敵は八本指。俺ぐらの盗賊を抱え込んでいるか、魔法詠唱者がいると考えると慎重に行動するつもりさ。二人とも失敗しないように祈っておいてくれよ」

それだけ言って、近くにあった気配が薄れていく。

この場に残ったのはクライムとブレインの二人のみ。

さて、なぜゆえに彼らがここにいるのか。

それは偏にクライムの主である王女が発端として八本指の襲撃作戦が今夜決行されることとなったからであり、本来ならば王女やその友人や仲間たち、そしてその協力者が動くだけで、ブレインはその円の中にいるはずがない男であった。

だが、先日の娼館襲撃の一件で縁が結ばれた、とでもいえないのだろうか。

とにもかくにもブレインは一人の男としてこの国に巢食う腐敗の温床を取り除く為に立ち上がったのだ。

襲撃…改訂版

クライムとブレインが八本指の拠点の一つを調査しているよりも少し前、王都内にあるセバスらが使っていた屋敷ともクライムらが向かっていた八本指の拠点とも違う屋敷にて、女は妙な喉の渇きで目を覚ました。

キングサイズほどの大きさのベッドの上で蠢きながら、ベッドわきに置いておいた水差しに手を伸ばし、グラスに注いだ水で喉を潤していく。しかし、何度飲んでもその喉の渇きはなくなり、むしろ焼け石に水かの如くに喉が渇いていく。

水差しの水はなくなり、結局その渇きが無くなることはなく女はそのまま眠ろうとするも渇きが煩わしいのか、女は苛立ちながらベッドを降り近くにかけていたローブを羽織ってから空の水差しを持って部屋の外に出ていく。

そうして、廊下に出た際に女はふと違和感を感じた。

この屋敷は女、八本指に属する麻葉取引部門の長であるヒルマの王都での本拠地

であった。この屋敷には本拠地であるため、何十人も部下たちがせわしなく働いておりこのような時間であっても交代制で働いているはずのだが、何故ゆえか誰もいないかのような静寂さと妙な空気の渴きを感じた。

下火月であるのにこの妙な空気の渴きと静けさにヒルマは訝しく思いながらも廊下を歩いていく。

歩き続けるとヒルマはこの違和感に少しずつ少しずつ、疑問が強くなっていく。あまりにも静かすぎる、まるでこの屋敷にいるのが自分だけかのように。

いったい何が起きているのかわからないが、何かが起きていることをヒルマは理解していた。ヒルマは裏社会を牛耳る組織の一部門の長を任されているだけであり、その頭はそれなりに回った。故にこの異常事態において、自室に戻って籠るというのも、誰かいないか声を上げるといふ手段も選ばず真っ先に自身の保身を選んだ。

水差しを廊下の片隅において、その足を別の場所へと向けた。

そこは自分とごく一部の人間だけが知っている隠し部屋だ。いくつかのマジックアイテムや宝石、そして逃走経路が用意されており、本拠地のここを投げ出し、王

都内にある他の拠点へ移動するべきだ、とヒルマはかんがえたのだ。

足音を忍ばせながら歩いていくと、ヒルマはとある異変に気が付いた。

「なんだい……こりゃ」

思わず声を漏らしてしまったのは仕方がないことだろう。

彼女の視線の先にあるのは屋敷の窓だ。いや、正確に言えば窓の外の異状。窓を
蕩が這って何重にも覆っているのだ。外の光がほとんど入っておらず、彼女は思わ
ず窓を開けようとするものの、まるで始めから固定されているかのようにびくとも
しない。

他の窓に視線をやるがどの窓も一様に蕩で塞がれている。

ヒルマは自分の記憶をあさり、寝る前の光景を思い出す。

渴いていた喉がより一層渴いていくのを感じた。たった小一時間で、自然にこん
なことになるわけがない、そう胸中で吐き捨てながらヒルマはこの異常事態が魔法
によるものだと導き出して走り始めた。

この現状を罵声を吐き出そうにも張り付くような渴きにうまく舌が回らない。そのことに舌打ちながら、ヒルマは少しでも早く隠し部屋へ逃げ込むために走る。静かな屋敷を駆けて階段を鳶の間からわずかに差し込んでいる月明かりを頼りに注意深く降りていき――

「――ッ」

ヒルマは自分の口から息が漏れたのに気が付かなかった。

自身の視線の先、一階の廊下より一つ影がこちらを見ていることに気が付き、言い知れぬ恐怖が肌の表面を走ったために。ぞわり、と鳥肌が立つのを感じながらもヒルマは動くことは出来なかった。

暗闇に溶け込むよう立っていたそれは盗賊が影に潜んでいるのと違い、あくまでその外見故にそう見えていた。闇に溶け込んでるように見えたのは肌が黒く、闇妖精と呼ばれる類の少女でその手には黒い杖を持っており、どこかおどおどとした雰囲気を感じられもしもこの場のような異常事態でなければ微笑ましさを感じられ

ただろう。だが、いま感じられるのは恐怖、闇の中で爛々と輝く左右で色彩の異なる瞳がより恐怖を際立たせる。

逃げろ、そう本能が訴え始めているのを感じた。

この異常事態に闇妖精の少女。それでも少女一人、なんて考えるほどヒルマは馬鹿ではなかった。そして、同時にこの本能の判断に対して、ヒルマは長年培ってきた経験による予感が出した逃げてはいけないという判断を信じた。

故にヒルマは恐怖を呑み込みながらも震える声で闇妖精ダイクエルフの少女——いや、少年だ。娼婦としての経験がこの闇妖精の性別が少女ではなく少年であると見抜いた。

「ね、ねえ、ぼく、こんなところで何をしてるの？」

かつてトブの大森林に住んでいたが今ではその姿を見せることはなくなったという闇妖精の少年に少女の服を着せるという倒錯し退廃的な趣味を感じさせる少年に對して、ヒルマは恐怖を押し殺し極力敵対心の欠片も見せない様に声をかける。

そうすれば、少年から質問で言葉が返ってきた。

「お、おばさんが、この館で一番偉いひとですか？」

「そ、そうだよ。私がこの館で一番偉いんだ」

少年の言葉に一瞬否定しようとヒルマは考えたがすぐに肯定した。それは先ほどの予感同様に否定すれば最悪に繋がりがかねないと嫌な予感が過ったからだ。

故にヒルマは少年の言葉を肯定し、それに対して少年は純粹無垢と表現するような安堵の笑みを浮かべた。一瞬、ヒルマはその純粹さを汚してみたいという欲求が自分の中で鎌首をもたげ始めたのに気づきすぐさま、それを黙殺する。

今この場において、もっとも重要なのは生存。不用意な欲望は死に直結しかねない、とヒルマは判断していた。その判断は正しかった。

「あ、あのえっとこの人たちに聞いたのは間違いじゃなかったんですね」

少年の言葉に反応するように近くの扉が開く。そこからゆっくりと姿を見せた人

影にヒルマの予感が警鐘をより強く鳴らし始めた。

出てきたのは一人のメイド。ここらでは見ないような変わったメイド服に身を包んだ可愛らしいメイド、だがその身に漂わせている匂いはまったくもって可愛さの欠片もない。

血なまぐさい臭いを漂わせているばかりか、その手に男の腕と思わしきものをぶら下げていたのだ。

思わずヒルマは悲鳴を上げそうになるが、手で口を押え悲鳴を呑み込む。ヒルマの中で恐怖と疑問が渦巻き始め、少年はそんなヒルマの疑問を察したのか相変わらずおどおどとした口調で話していく。

「え、えっと、あの、この館を襲う人たちがいるみたいなんで、その人たちが来る前に色々とやらなくちゃいけないから、えっと、一緒に来てもらったんです」

「気にしないでください。久しぶりにい、お腹いっぱい食べられてえ、私も満足してますう」

口を動かしていない筈なのにメイドから声が聴こえた。

そんな不思議な事よりも、ヒルマはメイドの言ったお腹いっぱい食べられて、とはいったい何を食べたのかという恐怖ばかりがよりいっそう膨れ上がっていく。

だからだろう、ヒルマは気が付けば口を開いていた。

「ね、ねえ、わ、私も？わ、私も食べるの？」

「え？あ、あの違います。おぼさんにはついてきてほしくて」

一瞬の安堵、しかしより恐怖が生まれる。

いったい、どこへ行くのか、そこでは何が待っているのか、そんな疑問が加速していきヒルマは逃れるために何かないか、と思考を巡らしていく。

そうして思いついたのは彼女の身体にあるマジック・アイテム。

タトゥー・オブ・ツァイパー
毒蛇の刺青。

刺青の蛇が強力な神経毒を有する本物へと実体化する、そんなヒルマの切り札ともいえるマジック・アイテムで少年をこれで仕留めよう、そんな考えが浮かんで

——怖気が走った。

もしこれで少年を殺せたとしよう、それでこの状況は変わるか？ここにはメイドがいる。メイドの持つ腕をよく見てみればまるで引き千切ったような断面で、少年を殺した場合の自分の末路が脳裏に過り少しでも生き長らえる為にヒルマは抵抗する、という判断を思考の片隅へと追いやった。

「……ど、どこに行けばいいんだい？」

「えっと、じゃあついてきてください」

そう歩き始めた少年の後をヒルマは大人しくついていく。逃げようものなら間違はなく殺される、とヒルマは予感しているからだ。この先にいったい何が待っているかはヒルマには予想することなど出来やしなないが……

互いの仕事…改訂版

アズールレーンのイベント

アークナイツのイベント

ブルーアーカイブのイベント

そしてグラブルのイベント

被りすぎでは?????

所謂西洋中世的な文化であるこのリ・エステイーゼ王国、その文化とは違う東洋的、正確に言えば和風チックなメイド服のようなモノを身に纏っているメイド。戦

闘メイド・プレアデスの一員であるエントマ・ヴァシリッサ・ゼータはため息をつきながら館より出ていく。その際に自分の足に張り付いていた紙きれを剥がして丸めてから、館の奥の方に投げ込んでおく。

そうして、改めてため息をついて彼女は肩を落とす。

傍から見れば、何か落ち込んでいる様子にも見える。事実、そうなのだ。

彼女、エントマは今回の任務に対して取り分け張り切っていた。というのも、彼女の姉妹であるプレアデスの面々は基本的にナザリック内で仕事に従事しているがその中でもソリュシャン、ルプスレギナは片方はこの王都での諜報活動、片方はある村での活動を任務として与えられている。姉妹の中で特定の任務に従事しているのはその二人だけ、長女や三女は特段何もこのことについて何か言う事はないが末っ子的な性格がある彼女は不満というわけではないが、少なからず鬱屈したものをため込んでいた。

そんなところに今回の作戦への参加の命令。エントマが至高の御方の役に立つためのは当然であるがそれはそれとして元々王都での活動をしていたソリュシャン以上のやる気があるのは当然の帰結であった。

だが、蓋を開けてみればやらかしてしまったのだ、彼女は。

予定時間に対する超過。

別に彼女と一緒に来ていたデミウルゴスの配下である悪魔たちが何かやらかしてしまいそれが原因で時間が遅れたわけではない。では、何が原因なのか。

任務は滞りなく行われた。早々に館内の八本指の構成員たちは掃討し、しっかりと重要書類や金銭的価値あるものも回収することができた。特に問題もなく任務は行っていたのだが、撤収予定時間間際となって彼女らはとあるものを見つけてしまった。

それはこの館の地下室への入り口。さらにその地下室から山のような量の密輸品や違法薬物が発見されてしまったのだ。これだけならば、どれだけよかっただろうか。追加事項として、地下室はいくつもの部屋に細かく分けられており、また物品は大量の雑多な荷物の中に紛れ込ませるように置くという隠蔽工作が成されている。た。

いったいこんなこと誰が予測出来たろうか。恐らくデミウルゴスも隠蔽工作はしているだろうという予測はしてもこんな隠蔽工作を撤収間際に見つけるなどと

は考えもしなかったろう。思わず本来の顔が引き攣りそうになったエントマは悪魔たちと協力して地下室の物品の見分作業をしていきゴミであると判断したものは一つの部屋に押し込んでいき、なんとか価値あるものをすべて運び出すことに成功した。如何に人間をはるかに超える能力を持つエントマたちもこんな細々とした作業を急ぎながら行うのは多大な苦勞がかかった。

だが、結果として予定時間を大きくオーバーしてしまったエントマは今こうしてショックで落ち込んでいた。それでも仕事は仕事、エントマはもう一度ため息をついてから、自身の職業スキルで呼び出した巨^{ジャイアント・ビートル}大昆虫らへと指示を出す。それによつて彼らは大量の荷物を掴みやたら重低音な羽音を響かせてこの王都の夜闇を一直線に飛んでいく。

それを見送りながら、ふと自分が片手に持っていた物を思い出す。

掃討していた際に引き千切った人間の腕だ。つい数十分前の彼女ならそのままかぶりつくところであったが、陰鬱とした空気を漂わせる彼女はその腕を口にすることなく、館の扉を開けて先ほどの紙のように館内部へと投げ捨てる。

思考の片隅でマールが連れ去ったこの館の主人である女がここにいれば、掃討す

る際に食事をしなければ、こんなことにはならなかったのではないか、という考えが過ったがもはや後の祭りで何度目になるかわからないため息をつけて、この襲撃を行った後に向かうべき場所へと移動しようとポテポテと重い足取りで向かい始める。

もちろん、本来予定していた集合時間に間に合うはずはないが、だからといって急がなくていいわけではなくエントマはその重い足取りながらも急ぐように走り始め

「よお、良い夜じゃねえか」

エントマはその足を止めざるをえなかった。

どうしてこうも、うまくいかないのか。そんな鬱屈とした気分が渦巻きながらも彼女は声の主へとゆったりと振り返る。

ネームレスにとって、今回のゲヘナは極力干渉しないようにするという方針で固まっていた。

それ自体はツアレが攫われたという報告が来る前に決めたことで、ネームレス自身その方針を崩すつもりはなかった。今現在依頼の関係上他人と共に移動中であるというモモンガと違い、手隙であったネームレスはデミウルゴスから今回の作戦な

どを伝えられておりまたゲヘナについて考えていた時から存在していた疑問に対してもデミウルゴスとの話合いの中で解決したネームレスはこの王都を歩いていた。その姿は王国に所属しているアダマンタイト級冒険者・セレネとしての所謂上級騎士の鎧に身を包んだ姿ではなく、黒い布地に金糸が刺繍されたローブを身に纏っており傍から見ても彼が戦士とは思えない姿。これはゲヘナが始まった際に普段通り鎧姿であると戦力として悪魔たちと戦わざるをえない為、戦闘を避けるためのモノ。

耐火性は高いが防御力は同ランク帯の装備と比べれば何枚か落ちている代物、無論こちらの世界では並み以上の武器でも防ぎきることできるモノだが。

静か、だな

人気の少ない区画を歩いているネームレスはふとそんな事を呟くがそれに対する返答は返ってくることはない。ここにネームレスただ一人だから、というわけではない。ネームレスの数歩後ろをついて歩く護衛が一人いる。

モモンガによって創造され、ネームレスから数打ちではない装備を与えられ、ネームレスの私兵として運用されている不死の戦士の一体である銀面の騎士。その与えられた装備故にレオナルドという個体名を与えられたそれは装備の元ネタとなった騎士同様にやや寡黙的で、明確に問いかけられたわけでないのならばこうして返事をするとはなかった。

それに対して、ネームレスは別段不満があるわけではない。そもそも会話の為に用意したわけではないからだ。

だが、それでも会話の一つもないというのは退屈を感じさせる。

干渉しない、とは言ったがまあ、端で雑兵を狩る程度はいいか

故に自身の方針を守りつつもこの退屈を紛らわすために肩を竦めながら、自身の影に潜んでいる影の悪魔へと指示を出す。

デミウルゴスに伝えておけ、例の区画外で雑兵狩りをする、と

その言葉に御意、と返事をした影の悪魔は一体ネームレスの影より蠢き飛び出していく。それを見送りすぐにレオナルドを一瞥する。

お前にも働いてもらおうぞ

「……仰せのままに」

そう返答するレオナルドの姿を見て、ネームレスは中身が違うという事は分かっているのだが、やはりその外見のせいで妙な感覚を覚えつつも事前に知らされていた八本指の拠点、その一つへと足を向け歩き始める。

「あんまり良い夜じゃないかなあ、今のところお」

唐突にかけられた問いかけに対してエントマは普段の間延びした甘ったるい喋り方よりも先ほどまでの失敗とこうして遅れているのにも関わらずまた余計な時間がかかることにより一層鬱屈した気分を味わいながら、投槍気味に答える。

そうして、振り返った彼女の視界にのっそりと姿を現したのは男か女か判別するのがやや難しい人間であった。声はハスキーで女と言えば女ではあるが、その見た目は筋骨隆々の男と言うに相応しいもの。どちらで考えればいいのか、と考えているエントマを余所に男女はしゃべり始める。

「おめえはこんなところで何をしてんだ？」

「……散歩」

「……何をさっき館に放り捨てたんだ？」

「腕」

「……人間の？」

「そおう、人間の腕え」

冷やかな男女の言葉にエントマはこんな問答をさっさと終わらせて早く合流したいと考えていた。だが、同時に目の前の男女がデミウルゴスの言っていたナザリックとは別口の八本指と敵対している勢力の人間であるという事を理解し、少なくとも自分のような食人の異形種とはそりの合わない存在であると考えその上でこの場をどうするか思考を回していた。

このまま無視して合流する。だが、もしも尾行に長けた斥候があちら側にいた場合は？合流した皆で袋叩きすればいい、と考えるがそもそも無様に尾行されてい

る時点で問題であり、何らかの手段で情報をリアルタイムで別の仲間を送られた場合を考えればこの案はすぐにエントマの中で却下された。

戦闘し、死人に口なし。エントマは純粹な戦士ではない、故に目の前の男女の正確な実力は窺い知れないがそれでも漠然と自分より強いという事はない、と感じていた。ならば、適切に対処すれば殺すのはそう難しい話ではない、が

「（それはそれでまた時間もかかっちゃうしい……その間に他にも人間が集まってきたても嫌だし……んー）」

何よりもむやみやたらな殺生は避けよ、という至高の御方方の言葉がある以上、そもそも悪人であり至高の御方方に唾吐いた八本指のメンバーならばともかく、どう考えても真つ当な人間に見える目の前の冒険者を殺すことは憚られた。不慮の事故、という風にしてもいいのだが流石にそれは難しいと考える。

そんな風にエントマが思考を回している最中、男女はゆっくりとその手の刺突戦鎚を構え始める。

「なるほどな。バケモノの登場ってことかよ。八本指がモンスターまで飼ってるとは思わなかったぜ。飼育にはどうやら失敗したらしいが」

「……勘違いしないで欲しいんだけどお、私は別に人間に飼われてない。先に手を出してきたのはあっち……だから、お互いにさあ、見なかったことにしない？」

男女の言葉に対して訂正しながら、エントマは一つの提案を出す。

人間の腕を持っていたところを見られたのは不味かったが、別に食べていたわけではないし、返答に対しても肉ではなく腕と返していた。あくまで報復行為として殺した、というスタンスでエントマは穏便にこの場を離れることに決めた。

「私もお、お仕事で来てるんでえ、あんまりい八本指以外の人間を相手にしたくないの」

「ああ？そりゃ、どういうことだ」

食いついた。少なくともこちらの言葉を戯言だと切り捨てるような人間ではないと判断し、万が一の時にために自身のスキルを使い遠からず近からずの位置にある影、あちらから見にくい場所に飛行用の蟲を呼び寄せ待機させながらエントマはこの場を切り抜ける為に話し始める。

矜持

「つまり、なんだ？お前はあくまで八本指に盗られたもんを奪い返しに来て、おとなしく返さなかったから、八本指の人間を殺したわけで関係ない人間は殺す気が無い、と」

「そうそう、だから私たちがここで戦っても意味はないよお」

目の前の何か使用人というべきか給仕というべきか、ここらでは見ないような洋式の衣服に身を包んだ人型のモンスターという言葉にガガーランは口を閉じる。

ガガーランにとって、この八本指の拠点の一つである館の前から去ろうとしたこのモンスターは決して無視していい存在ではなかった。そもそも、彼女がモンスターかどうかを察する前段階で八本指の拠点前にいるという事実が彼女が決して八本指と無関係の存在ではないのは理解できていた。彼女が館の中に投げた何か腕の

ようなモノについての問答と彼女から感じられる血なまぐさい臭い、そして何故か全く動かない表情といった要素からガガーランはアダマタイト級冒険者としての経験と勘で彼女が人間ではないモンスターの類であると看破したことでよりその考えは顕著となった。

何かこのモンスターは八本指に対して何かした、と。もちろん、その血なまぐさい臭いで何をしたのかはすぐに察することが出来た。

人に害成す怪物。

ここは王都で自分はアダマタイト冒険者。

人間に害成す怪物など、見逃していいはずもない。だから、ガガーランは自身の得物である鉄フェルアイアン砕きを握りしめ構えた……だが、彼女が口にした「仕事、八本指以外の人間を相手にしたくない」という言葉に対して思わず言葉が出てしまった。

そんなガガーランの反応に対して、話を始めたモンスターにガガーランも時間稼ぎには感じられず上段に構えていた刺突戦鎚を下げる。無論、それでも下段の構えでいざとなればそのまま戦闘ができる様に。

そうしてモンスターの話を聞いていたガガーランはとりあえず、余計な部分を削

ぎながら自分なりに要約して彼女へと問いたです。

曰く、八本指が自分の主人の所有物を盗んだ。

曰く、自分は主人からその盗まれたものを取り戻す為にこの王都へとやってきた。

曰く、八本指に対して返す様に言ったが拒否、更には殺そうとしてきた為に仕方なく館の八本指の人間は皆殺しにした。

曰く、主人からは八本指以外の人間は殺してはいけないと厳命されているから、自分とは戦いたくはない。

そして、ここには無かったから別の八本指の拠点に向かいたい。

概ねそんな内容にガガーランは思考を回す。少なくとも、このモンスターの話に對してガガーランは嘘を言っている様には感じなかった。モンスターが仕事、というのは最初疑問を抱きはしたが話を聞く限り、誰か八本指と敵対している何者かに飼われているらしい。

彼女から匂う血なまぐささも、八本指を殺したのが理由であるし何より彼女の主人からなにか盗みそれを返さないどころか、殺そうとした結果逆に殺された。言っ
てしまえば自業自得の域を出ない。

もちろん、ガガーランからすれば捕まえるべき八本指の人間がモンスターによって自業自得の皆殺しにあった、というのは悔しさを感じられるし死んでよかったなどとは口が裂けても思えないし感じられない。

「……なるほど、なあ」

悪人とはいえ人間を殺した、だがそれはあくまで奪われたものを取り戻す為でありまた自衛の結果である。人間ではないモンスターが自衛のために相手を殺さないでおく、という選択をとれるとは思えなかった。

ガガーランはしばし逡巡する。冒険者としては悪人であれ自業自得であれ、人間を殺したモンスターを野放しにする事は出来ない。だが、あちらは明確に八本指の人間だけを狙いそれ以外には手を出さない、と言っている。嘘を付いていない、と察せられるために少なくともむやみやたらに人間を襲わないと理解できる、だが

「お前、何か隠し事してねえか」

「ッ……！」

ガガーランの言葉に彼女は僅かに肩が跳ねた。普通ならば察せられない程度の小さな反応だったがそれをガガーランは見逃すことはなかった。

「……反応したっつうことは何か隠してやがんな。ここまで話して隠すっつうことは、疚しいことがあるってことだよな」

彼女の話になにか、明確にはわからないが感じられた違和感。

嘘は言っていないのは分かる、だが何か致命的な部分で語っていないものがある。とガガーランは推測した上でかまをかけてみた。結果として何か話を引き出せたわけではないが、彼女のその僅かな反応が見れただけでも上々。

下段に構えていたガガーランは改めて刺突戦鎚を上段に構え、いつでも戦闘を行える体勢をとる。すぐに突っ込まないのは彼女がどういう戦闘スタイルなのか、い

まだわからない為。少なくともガガーランは相手が自分と同じような純粹な戦士タイプではないことは理解している。

だから、むやみやたらに仕掛けられない。罠を張るタイプの魔法戦士であった場合などを考えながら。

「はっ、だとしても長引かせるだけこっちが不利か。んなら………おらあッ!!」

先手をみすみす渡すわけにもいかねえ。

その判断の元、ガガーランはモンスター目掛けて突貫した。その速度はガガーランの巨漢と見間違う体軀から出るものではなく、素早くモンスターへと迫りその鉄砕きを叩きつけた。

『なるほど。それは恐らく蒼の薔薇という冒険者チームの一人だ。強さとしてはエントマ、君に劣るのは間違いないが……最初にも伝えたように殺すの無しだ。適度に相手をして隙を見て撤退してくれ』

『承知しましたあ』

男女、ガガーランの言葉にここを切り抜けることが出来ないと察したエントマはガガーランに見えないような位置で符を使用し、デミウルゴスへと《伝言》を行っていた。簡潔に現状の説明を行いデミウルゴスより返ってきた指示にエントマは了

承の意を伝え、即座に意識を切り替え目の前に迫ってきたガガーランを冷静に回避して見せるが、どういう原理か刺突戦鎚は突如としてその角度を急激に曲げてエントマへと迫る。

通常の遠心力を利用した一撃ではなく、ガガーランの圧倒的な筋力を利用して無理矢理に軌道を変える無茶苦茶な一撃。それに対してもエントマは焦ることなく再び回避する。

連続の回避、だがその場から大きく回避したわけではない。ガガーランの刺突戦鎚はさらに振り回され執拗にエントマを狙っていく。巻き上げられた風にエントマの偽髪が揺れる中、エントマは蟲使いとしての特殊技術を使用するが何も起きることはない。

そうして、反撃はせずに回避し続ければガガーランはいら立ちを隠さずに挑発の声を荒げ、

「あん!? 逃げるだけか!」

「んー、ほらあ、私はわざわざそっちと戦う理由がないしい」

エントマはそんなガガーランに対して、相手をする気はないとでも言う様に舞う様に回避しながら答えれば舌打ちが返ってくる。三度目の回避で地面を打ち砕く刺突戦鎚を見ながら再び特殊技術を使用しながら思わずガガーランを嘲笑する。

無論、エントマの表情はピクリとも動くことはないが……嘲笑されている本人はその空気を敏感に察知した。それにガガーランは怒りを抱き——嗤った。

「砕けや!!」

瞬間、刺突戦鎚の突き立てられた場所を中心に、大地が罅割れ粉碎されていく。まるで局所的な地震でも起きたかのような振動がエントマを襲う。

エントマはそれにより体勢を大きく崩す、それに対してガガーランは震源地にエントマとほとんど変わらない位置にいるのに一切体勢を崩しておらず、むしろ既に刺突戦鎚を地面から引き抜き振り上げていた。

それを見上げながらエントマは心中で自分がこの人間を侮っていたことを恥じ

た。

確かに自分よりかは強くないと判断していた、デミウルゴスもそう告げていた。そうどちらが上か戦う前から分かっていた事だった。余裕だったはずなのだが、足元が破壊されたことによってバランスを崩され、更には大地破壊による衝撃での二重の束縛。回避しようと思えば、回避することはできる。出来るがしかし、それをすればエントマは自分が身に纏っているメイド服を汚す事となる。

「(源次郎様……!)」

自身の創造者である至高の御方より与えられた、メイドとしての象徴であり創造主からの寵愛の象徴を、油断したが故に汚すなど許されるだろうか？

悔ったためにそんなことを引き起こしたことをエントマは恥じいり、その羞恥心を払うかのようにその右腕を振るう。

そうして響くのはガガーランの刺突戦鎚がエントマの肉を殴りつける音ではなく、金属同士がぶつかり合ったかのような甲高い音だった。

予期せぬ音に思わずガガーランも目を見開く。

「大丈夫、殺さないであげるう。……でも、綺麗なままじゃ許さないいいいい」

刺突戦鎚とぶつかり合う右腕、そこにしがみついたまるでブロードソードを思わせる巨大な昆虫のようなものを軋らせながら、エントマはその甘ったるい声で憤怒を吐き出しガガーランを睨め付けた。

蟲使い…改訂版

蟲使い。

エントマが有している職業クラスの一つで、蟲を使役することのできる特殊技術を会得することができ、そうして呼べる蟲の種類は両の指では足りることはない。具体的に例を挙げれば。戦闘が始まる前にエントマがあらかじめ召喚しておいた飛行用の蟲であったり、火吹き蟲、先ほどヒルマの館にあった物資を運んで行った蟲たち。そして、今エントマの両腕へとやってきた二匹の蟲。

右腕に張り付いたブロードソードにも似た長い体躯を持つ蟲・剣刀蟲。

左腕に張り付いた八本以上の脚を持ち、傍から見れば盾としか見えないような身体の蟲・硬甲蟲。

文字通り、攻撃力と防御力を手にしエントマは、突如としてその両腕に現れた蟲の武装に思わず目を見開いているガガーランへと踏み込みその右腕の剣刀蟲を一

閃。それに直前で驚愕より意識を引き戻しガガーランは勢いよく後方へと跳ね飛ぶ。

「ッ!? はえええ!」

距離にして数メートルを開けたガガーランだが、どうやら回避がやや間に合わなかったようで、その巨体を包んでいる深紅の鎧に横一文字の刀傷が刻まれその内側で守られているはずの胸部に僅かな血が滲んだのを察したガガーランは思わず舌打ち、それを見ながらエントマは自分の中でのガガーランの評価を上げる。

殺す気はない。だから本気での一撃ではなかった、がそれでも血が吹き上がる程度には切り裂くつもりで振るっただが、結果として鎧に刀傷を刻んだだけで血が吹き出るといふ事はなかった。

なるほど、アダマンタイト。この王国の最高位冒険者をやっているだけはあるだろう。

「だけどお、私の方が強い」

だが、あくまでそれは王国の冒険者としてでしかない。彼女の姉であるユリ・アルファの様な純粹な戦闘系ではない、だとしてもエントマは戦闘メイド・プレアデスの一員で人間程度では相手にならない。

地面を蹴り、二撃目を振るう。

今度は元々距離があつたために先と違い、ガガーランは走る直感のままに刺突戦鎚を振るい再度金属のぶつかる甲高い音を響かせる。ギチギチとぶつかり合う最中にガガーランは怒鳴り声を上げる。

「動きが変わつたな!!本氣ってわけかよ!」

「別に本氣じゃないよお」

怒鳴り声にそう返すエントマは競り合う中、少しずつ力を加えていき体格としては優勢のはずのガガーランを徐々に押し込んでいき、ガガーランはその膝を僅かに

曲げていってしまおう。

このまま膝を屈し、エントマの剣刀蟲に切り裂かれるという最悪の未来が脳裏を過る中、ガガーランはあえて自分から膝を折った。

それにより、エントマは力を入れていた為そのまま勢いよく剣刀蟲を振り下ろしてしまふ。押し切られるよりも先に自ら引いたためにガガーランは先に折っていた膝を勢いよく伸ばしつい先ほどのように後方へと跳ね飛び僅かに体勢を崩したエントマへと間髪入れずに上段からの一撃を叩きつける。

上段からの大振り、回避するのは決して難しくない。しかし、回避するという選択をエントマがとることはなく硬甲蟲で弾く。その際に予想以上の衝撃がエントマの左腕より走るがしかし、ここで体勢を崩せばあちらが付け上がり攻め始めるだろう、と考えエントマは

脚に力を入れてその場より動かない。

一撃が弾かれた。その事実に対してガガーランは一切反応することはなく、むしろ元よりそうなることは予想していたとも言いたげに胸中で笑い、武技を使用する。それも一つではなく、複数の武技を。

弾かれた勢いを殺すことなく、流れる様な動きで疾風怒濤という表現が相応しい勢いでの連撃。基本的にナザリックにいたアントマにとって、この世界特有の武技というものは未知でしかない。だが、決して対処できないものではない。

アントマは剣刀蟲と硬甲蟲を巧みに扱いながら、ガガーランの連撃を捌いていく。

「(いいつ……!?俺の切り札を……!)」

その事実にはガガーランは驚愕するばかり。それも仕方のないことだろう、アントマは知る由もないがこのガガーランの放つ連撃、これは複数の武技を同時発動させて放つ超級連続攻撃。リ・エステイーズ王国アダマナイト級冒険者チーム・蒼の薔薇の戦士たるガガーランの持ちうる切り札。

一撃一撃がガガーランの全力の攻撃であり、並大抵の武技では防ぐことは出来ない……にも関わらず、それをアントマはレベルの差、そして種族の差をもって捌いていく。戦士としての自信の象徴とも言える己の切り札を無傷で捌いていくアントマにガガーランはその瞳に絶望の色が浮かび始め、武技が終わり敵の目前でガガー

ランは無呼吸での連撃その代償として大きく呼吸をしてしまう。

戦闘が始まってから最大の間隙。

それを前にしてエントマは剣刀蟲を弓のように引き絞り、突きを放つ。この目の前の邪魔者を殺すための一撃をガガーランの胸へと放ち——放った瞬間にエントマの脳裏にデミウルゴスの言葉が通りエントマはその切っ先をずらし、ガガーランの肩口を狙う。

咄嗟に狙いを変えたために僅かに肩口より胸側に近い位置へと突き刺さるようになるが、エントマはそれでも死ぬまではいかないだろうと判断し、一撃がガガーランを貫く

「え？」

事はなかった。

切っ先が鎧を捉えることはなく、空を穿つばかりかエントマの目の前からガガーランの巨体は影も形もありはしなかった。まったく予期せぬ事態に思わずエントマ

は呆けたような声を出したがすぐに種族として冴えている感覚がやや離れた場所に生じた気配を捉え、振り向く。

エントマより数メートル離れた場所。そこに二つの人影、片方は息を乱したがガーランの姿が、そしてもう一つは黒い衣装を身に着けた女。

どうやら気心の知れた仲間らしく戦闘中だというのにも関わらず何やら明るい掛け合いが聞こえてきて思わずエントマは剣刀蟲の腕を降ろし、増援が来てしまったことに今夜何度目になるかわからないため息をつく。

何より明らかに増援の女は斥候の類らしい格好をしている。この場から逃げようにも追いかけられる可能性がある以上、エントマは今回の選択が失敗であったことを後悔する。ガガーランを痛めつけるなどという選択をせずに早々にこの場を離脱すればこうはならなかったはずだが……やはり、それも後の祭り。

「(……あのオレンジ色のもしかして忍者？ たしかあ、六十レベルは必要だったはず)」

増援に來たオレンジに近い金髪の女を遠目にエントマはその斥候よりも忍者という職業を思わせる衣装に疑問を抱く。忍者はエントマにはあまり関係のない職業なのだが、エントマの姉の一人であるナーベラル・ガンマ、彼女の創造主は【ザ・ニンジャ】の異名を持つ式式炎雷。その関係でナーベラルからエントマは忍者という職業をそこそこではあるが知っていた。

故にユグドラシルにおいては忍者になるのにレベルが最低六十は必要であることを知っているエントマは増援の女への警戒を強くする。エントマのレベルは五十少くであり、身に着けている装備などで底上げしたとしても容易な勝利は難しい。

無論

「(わざわざ、勝つつもりはないけどお)」

増援が來た以上、長引かせるわけにはいかない。

早々に離脱する為の隙を作る為にも——いま、この瞬間の離脱を考えたが忍者の女のスタミナは恐らくほぼほ最大、充分に尾行される可能性が充分にある

—— エントマは三度目の特殊技術を使用し蟲を呼び出す。

そして、エントマは視界を動かしながら、新たな増援がいるかどうかを確認し始めて……

『エントマ、いまどういう状況か教えてもらえるかな？』

飛んできた《伝言》^{メッセージ}にエントマはその変わらぬ顔の下で嗤った。

二つの魔…改訂版

連日投稿をするつもりでしたが、間に合いませんでしたね……

少なくとも連日投稿は終わりで週一ないし週二投稿していきます。

オバマス、ナザリック祭……ソリュシャンしか当たらなかった……番外席次どこ？

「わりいな、ティア。流石にいまのはヤバかった」

「ガガーランもアレは危ないんだ」

「んだよ、おめえ。見てたんならあれがヤバいってわかるだろうが」

「そろそろ青い血でも流れて、パワーアップしてるころかなと思っていた」

「パワーアップっていうよりも、種族変わってんぞ！」

「じゃあ、クラスチェンジ」

エントマを余所にガガーランと先ほどの一撃から彼女を助けた仲間である忍者のティアがまるで戦っているとは思えないような掛け合いをしつつ、その意識はしつかりと動かないエントマを観察する。ガガーランは先ほどの自分の切り札である武技の複数発動による超級連続攻撃を無傷で捌かれてしまったという事実から警戒度は天井知らず、来たばかりのティアからすればまだエントマの実力はいまだ測りかねているがどう見ても純粋な戦士とは思えないエントマがもしも自分がここに来なければガガーランが致命傷を負いかねなかった、その事実だけで決して油断して良い相手ではないことは強く認識していた。

そうして、軽い掛け合いを終えた二人は素早く簡潔に情報を共有していく。

「あっちはこっちを殺す気はないらしい」

「……？あっちはモンスター。どういう理由？」

「八本指に大切なもんを盗まれてその奪還が目的らしい。で、それを命じた飼い主から八本指以外の人間は殺すなって言われてるんだ、と」

「嘘を言ってる可能性は？」

「嘘は言ってるねえ、だろうがそんな代わりに何か隠し事をしてるのは間違いねえ……それも疚しいことだろうよ」

ティアの疑問に自分が感じたモノを率直に伝え、それに対してティアは僅かに逡巡してから、その手に自身の得物である短剣を握りながらやや前傾姿勢をとりながら、ティア側からの最も重要な情報を口にする。

「もうすぐイビルアイも来る」

たった一言。だが、ガガーランにとってそのもう一人の仲間の名前だけで充分で

あった。

一人での勝利は不可能に近い、だが二人なら、そしてもう一人、仲間と共にならば決して不可能ではないと直感的にガガーランは理解し、そう信じている。

なによりもガガーランは理解している。いまここへ向かっている仲間が戦士ではないがそれでも自分よりも経験と実力が高い奴である、と。

故にガガーランはその増援が来るまでの時間を稼ぐ必要がある。それは状況的にはさきほどとあまり変わらないかもしれない、だがここには既に一人仲間がいる。決して難しいことではない。

「行くぞ!!」

「了解」

そうして駆けだす二人。

一方から固まって突貫する、などという馬鹿はしない。正面から走っていくガガーランに対して、ティアはやや遠回りにガガーランと纏めて攻撃されない様に

向かってくる。

それを前にしてエントマはその左腕についていた硬甲蟲を外し、新たにどこからともなくやってきた無数の蟲が空いた左腕を覆っていく。一体一体が三センチほどのサイズであるがその形状は先端部分が尖っており、知識のある者が見たならばライフルに使われている弾丸のソレに酷似しているのが理解できるだろう。それが数百体も集まりエントマの腕の太さが元の腕の倍はあろうほどの様を見せる。

それを見た二人、ガガーランは新たな蟲に舌打ちしながら今度はどのような武器として使うのかを思考し、ティアは駆けだす前にガガーランから伝えられた情報と今集まってきた蟲の数からして手数が多い攻撃をしてくると予想して――

「(まずはあっちの忍者)」

遠回りしつつもその俊敏さからガガーランよりも近くに迫りつつあったティアへとエントマは鋼弾蟲に覆われた左腕を向ける。

瞬間、腕を覆っていた蟲たちが次々とエントマの手首へと移動していき、ついに

はその指先から我先にと飛び立っていく。その際に生じた羽音はまるでガトリングガンのようにも聴こえ、ティア目掛けて殺到していく。射出された鋼弾蟲の数は百を優に超える。そんな数の鋼にめり込んでしまうほどの強度を持つ蟲が一個人を襲えばどうなってしまうのか、誰でもミンチ同然の末路を思い描き、それはティアもまた例外ではない。

「不動金剛盾の術！」

だが、ティアにはそれを防ぐ手立てがあった。

発動する忍術、それによりティアの前に七色に輝く眩い盾が生じる。射線上に現れた六角形の盾に鋼弾蟲たちが次々に激突していく。いったいどれほどもつというのか、激しい音を響かせながら蟲たちが撃ち込まれた盾は数秒ほどでガラスが割れるような音と共に碎け散るがそれでも充分に役目は果たしたようでその頃には鋼弾蟲は打ち切られ、無傷のティアは幾つものクナイを放つ、鋼弾蟲の反動により僅かに動きが遅れるが対処するのは難しくない。なにより先の蟲に対する反応からして

相手が自身の知識上の忍者のそれとやや違く、実力はガガーランと大して変わらな
いと判断して剣刀蟲で弾く——いや、それよりも先にエントマの感覚が別のモ
ノを感知し、寸前でエントマはその場から素早く飛び退く。

その判断が正しかった。

クナイが地面に突き刺さり、その次の瞬間には先ほどまでエントマがいた場所へ
とガガーランがその刺突戦鎚と共に勢いよく落下し、石畳を破壊してその瓦礫が回
避したエントマへと殺到していく。それらをエントマは舌はないが舌打ちしつつ、
剣刀蟲を振るいその勢いで瓦礫を吹き飛ばしながら距離をとる。

普通ならばティアアの使用した盾の輝きで眼が眩み、さらにはクナイに視線が誘導
されたうえで上空よりガガーランが襲撃する。普通ならばこれで確実に獲れるはず
だった。だが、エントマにはティアアの技程度でどうこうできる視覚ではない。

「クソッ、避けられたか！」

「んー、じゃあ、次はこっちなあ」

決まらないしは痛手にならずともそれなりの結果が見込めたはずのコンビネーションを完全に回避されたことで思わず悪態をつくガガーランに対してエントマはまた特殊技術を使用して新たな蟲を呼び寄せながら、思考を回していく。

しかし、考える暇を与えれば不利になるのを理解しているティアとガガーランはそんな隙など与えないと、攻めていく。

ガガーランが石畳を砕き、浮かび上がった瓦礫を刺突戦鎚で殴りつけて散弾のようにエントマへと打ち出していく、その瞬間にティアはその姿をその場から消失させる。

それを見て、エントマは素早く襲い掛かる瓦礫目掛けて懐から取り出した符を放つ。放たれた符は空中で青白い稲妻を纏う鳥の姿へと変化して瓦礫へと向かっていきその稲妻で瓦礫を破壊していく。

そんなさなかにエントマの意識は姿を消したティアへと向けられる。現状、ガガーランとティアではどちらの方が警戒すべきか、完全に後者である。いまだ後者の手札はほとんど見ていない、警戒するのは当然だろう。

「ッ、そこお！」

瓦礫が砕け散っていくのが視界の端に映った刹那、エントマは僅かな気配を察知し誰もいないはずの空間、正確に言えば地面に剣刀蟲による刺突を放つ。

だが、地面を抉るだけで何も無い。それと同時にエントマは勢いよくその場を跳び退けば、突如として爆発と炎が生じた。触れるどころか装備に煤すらつくことはなかったがエントマはその種族上、火に弱い。思わず、本来の顔が顰め面をしてしまうが不意打ちは成功しなかったとほくそ笑み、まるで蛆を小盾ほどのサイズにしたような蟲がのったりとエントマの足元に現れたのを見て空いた左腕を差し伸べ這い上がらせる。

今までの蟲と違い、見た目からではあまり役割がわからないそれに二人は怪訝な表情を一瞬見せるがティアは新たな術を使い、ガガーランは接近する。影が蠢きもう一人のティアが現れ、三対一の構図が出来上がるがエントマは気にする事はない。

刺突戦鎧と剣刀蟲がぶつかり合いながらもエントマの左腕はティアへと向けら

れ、時折剣刀蟲を影分身へと振りながら優勢を保ち続ける。

三対一でありながら拮抗する事すらできぬまま、それでも幾ばくかこの状況が続いていくが、それもティアの影分身が剣刀蟲に殴りつけられただの影に戻ったことで崩れていく。

そうして空いた連携の隙、そこへ向けて左腕の蛆のような蟲、睡煙蟲を向ける。

「じゃああ、おやすみい」

そんな言葉と共に噴き出されるガス。

反応しその場から離れる、そうするよりも先にガスが周囲に満ち満ちていく。それに対して二人は思わず片膝を突く。共に高位の冒険者として睡眠に対してある程度の耐性を有している。それ故にすぐに倒れ伏すという事はない、だが片膝つかせただけでエントマには充分。

待機していた蟲がエントマからの合図によってその背中に張り付き、翅を広げてその場から飛び立つ

「おい、私の仲間をよくも虐めてくれたな」

筈だった。

瞬間、エントマはその身体を大きく捻る。その選択が正しかったようで何か飛来した騎士槍ランスのような何かエントマの背に捕まっていた飛行用の蟲の翅を突き破り、エントマはそのまま地面に落下する。

メイドであるエントマは無様な落下などはしない、人外としての身体能力を使い軽々と着地したエントマは新しい闖入者に苛立ちながら視線を向ける。片膝をつく二人の前に降り立つ一人の小柄な影。背格好は小さく、仮面で顔を隠したローブを身に纏った何某。

「やれやれ、彼我の実力差を考えるんだな……こいつはお前たちよりも強いぞ……だが、私よりも弱いかな」

「う、っせえ……」

気を保たねばすぐにでも意識を落とすし眠ってしまう中、ガガーランは呆れたような上から目線な口調の彼女、イビルアイの言葉に悪態をつく。

そんな様を見ながらふとエントマはこの闖入者がなぜ、この睡眠ガスがある中で平然としているのか疑問に感じていた。如何に屋外とはいえ、とくにこれと言って風が吹いているわけでもない。現にガスはおおよそが足元に滞留している。他の二人よりもガスに近いはずなのに効いている様子が無い、もちろんこういった状態異常への耐性が他の二人よりも優れている可能性があるが………そこまで考えて、エントマはイビルアイに告げる。

「張り切ってるところでえ、悪いんだけどお。私はここら辺で帰らせてもらうからあ」

「は？逃がすと思ってるのか？」

「それじゃあ、後はよろしくお願いしますう」

イビルアイの出鼻を挫くようなことを言い、その喋り方ともども軽く苛立ちが込められたイビルアイの言葉を無視してそんなどの誰にいつているのかもわからな
いことをエントマが言ったと思えば、エントマの背後に黒い空間の歪みが生じた。
イビルアイにはわかるべくもないが、それは《転移門》の魔法。

それに対して、イビルアイが仮面の下で眼を見開きながら、そこより姿を現した
存在を見る。

それは山羊の頭蓋を模した頭部に四本の黒角を戴き、漆黒の大翼を携えた灰色の
肉体でその胴体にはなんらかの魔導的刺青が施されている。ガガーランより巨軀で
ありながらも身長ほどはある長斧を手にした異形。

その名前をイビルアイたちは知らない、だがその種族はその身に纏う雰囲気から
察することができた。

「^{デーモン}悪魔……………!!」

白い息を吐きながら、
深淵アビス・デーモンの悪魔は眼下の冒険者たちを見た。

降下

お久しぶりです、みなさん。

なかなか、筆が進まず更新が少し空いてしまいました。

ところで、ダークソウル3が5周年ですね。私としては感動的です。

記念SSでも書こうか、と思ったのですがそれよりもこちらを進めるべきと思います
ました……

モンハンライズ、ウマ娘、アークナイツ、やることが多く大変ですが楽しみつ
執筆していききたいな、と思っております。

『———そうか、それは良かった』

そう言ってこめかみから指を離し《伝言》メッセージを終えた黒づくめの魔法詠唱者、モモンは自分たちを運んでいる魔法詠唱者たちに聴こえない程度に息を吐きつつ隣のパンドラス・アクターもといアクトへと視線を向ける。相も変わらず溶鉄で重厚さを感じさせる鎧に身を包んでいるアクト、その背にはいつも通りに竜狩りの大斧と大盾が背負われている。

鎧だけでも並みの人間では重荷であるのに、更に斧と盾が加わればその重量は如何ほどのものとなるだろうか。そうして、モモンは視線をアクトからその下、いま自分たちが座っているモノへと向ける。

半透明の一枚板。

《浮遊板》フロートインク・ボードという呼んで字の如しの魔法によるものだ。その広さは大の大人

二人、片方が重厚な鎧を纏っているのも相まって普通サイズの荷車の荷台よりもやや広いモノで、更には重量を遮断しているようなのでアクトの重量を無視して浮かび上がっている。

だが、だがしかし、いまモモンらが乗っているこの半透明の板は王都上空、四百メートル付近を飛んでいる。モモンはこの世界独自の魔法で二人の魔法詠唱者によって引張られているこの板に一抹の不安を覚えていた。

高所であることに恐れはない。魔法詠唱者で《飛行》の魔法も自由自在である彼にとって高所などいまさらであった。

板を引っ張っている魔法詠唱者二人への不安？ そんなものはない、この移動方法に関して彼らが提案したとはいえ彼らが態々こちらを害する理由もなく、更には提案をした以上はしっかりと慣れているはずなのだ。ならば、不安を抱くのは失礼というモノ。

では、何が不安なのか。

「(……重量は遮断していて、魔法も安定していて途切れるなんてことはないだろうけど……この板、《浮遊板》だったっけ？ 何かの拍子で落ちそうで怖ええ)」

魔法の性能やらなんやら、ではない。

今、モモンガはモモンなのだ。つまりは彼がいま指輪の力で死の支配者から人間になつていふという事で、視覚的に不安を覚えてしまつていた。それは彼の身体がこの世界の人間以上のレベルや耐久性を有していたとしても数か月前までただの一般人でしかなかつたモモンが不安を覚えるのは仕方ない話なのだ。

そんなモモンの内心を察しているのかどうかは不明であるが、板を見るモモンへとアクトはしばし視線を向けて、魔法詠唱者の彼らに聴こえない程度の声量でモモンへと囁く。

「……デミウルゴス殿からですか？」

「そうだ」

内容としては先ほどの《伝言》の相手を伺うものだが、その口調からして冒険者アクトではなく、パンドラズ・アクター本来のそれでモモンガは彼の質問を首肯してから視線をこの板から引く張っている魔法詠唱者らへと向け聞こえていないことを確認してから、また口を開く。

「どうやら、エントマが蒼の一員と鉢合わせたらしい」

「それはそれは、離脱は出来たのですかな？」

「《転移門》で離脱した、と。その代わりに深淵の悪魔が戦闘をしているようだ」

そう言ったモモンガにパンドラズ・アクターは僅かに首を傾げた。というのも、エントマがその場から離脱するのに自身の脚や彼女の特異技術で召喚した蟲を利用しての逃走ならば、確かに足止め要因としてモンスターを代わりに置いていくのは理解できる。だが、離脱に《転移門》を使用したのならばこの世界の冒険者程度では探知すること至難である。

では、なぜわざわざ深淵の悪魔をぶつけたのか。

兜越しに見える父上の表情を見るに、どうやら同じ疑問を抱いているのがパンドラズ・アクターにはわかった。ナザリックの面々、その内頭脳役と言える領域守護者統括であるアルベドと領域守護者の一人であるデミウルゴスはモモンガの事を自分たちでは到底及ばぬ叡智の持ち主であると考えているが、パンドラズ・アクター

は知っている。自分の父上であるモモンガは決して地頭が悪いわけではないが、別に自分たちより頭脳面が優れているわけではない、と。

もちろん、わざわざそんなことを彼女に伝えるつもりはパンドラズ・アクターには毛頭ない。そんなことをすれば、父上が自分に頼ってくれる機会が少なくなってしまうそう、という創造主を独占したいという欲求が理由の一つであるが、それは置いといてパンドラズ・アクターは自分の主の中にあるほんの少しばかりの虚栄心を尊重しているのだ。

「(……と、少し思考がズレてしまいましたね。今重要なのは、何故わざわざ戦闘を続行させているのか……ふむ、確か今回の作戦既に法国には根回しが終わっているようですし)」

そこまで、思考を回してパンドラズ・アクターはとある可能性に行き着いた。

「なるほど、そういうことでしたか」

「パンドラズ・アクター？」

「恐らく、デミウルゴス殿の思惑としては今回の騒動で我々の名声を大きくするというモノがあると思われます」

「……………ああ、なるほど。王都のアダマタイトが苦戦する相手を私たちが倒して、ってことか」

パンドラズ・アクターの言葉にやや逡巡してモモンガは納得する。

モモンガは今回の作戦に関しては八本指への報復行為及び、その財産の徴収だけであると認識していたがパンドラズ・アクターの言葉で冒険者としての自分たちの名声を高め、王国内での活動をしやすくする目的があるのを理解した。勿論、あくまでデミウルゴスの考えの一部でしかないが。

「（この世界の實力、王国のそれを考えれば深淵の悪魔は結構ちようどいいところか。流石にデミウルゴス本人が出るわけにもいかないし、下手に魔將を出すとそれはそれで被害が大きくなりやすい。かと言って、弱かったら弱かったでええと、蒼

の薔薇だっけ？そのチームや戦士長に倒される可能性があるしな……その点、深淵の悪魔なら魔将クラスには届かないけれども死の騎士よりは強いし……うーん、普通のアダマンタイトの実力がどれぐらいなのか分からないから、安心とは言えないけど……」

そうして、パンドラズ・アクターにもわからない様に内心でため息の一つでもついで、モモンガはその視線を半透明の板より見える夜闇に包まれた王都へと向けて

微かに光のようなものが瞬いた。

いったいなんだ？とモモンガの中に疑問が湧き、軽く視線を動かせばパンドラズ・アクターの視線とかち合い、パンドラズ・アクターはその鎧の下はモモンガと違い変わらず異形種であるためにその光がなんなのか、この夜闇と距離ながら看破した為に僅かに頷く。

その頷きがどういふモノなのかをすぐに理解したモモンガは声を上げる。

「アレは、魔法か？……また、光ったぞ」

「……確かに、魔法……ですね」

モモンガの声に反応し、彼が指さす方を見た魔法詠唱者がそんな風に自信なさげな声で答えるのはやはり距離と夜闇が理由だろう。

モモンガもそんなことは分かっている。

今回、モモンガらが冒険者としてこの王都にやってきたのは六大貴族と呼ばれる貴族の大家の一つ、レエブン候の邸宅の警護であるのだが、その邸宅警護はあくまで建前で本当の目的は第二王子や王女の派閥が八本指を打ち倒すための戦力。

今こうして王都上空を移動しているのは依頼主であるレエブン候と合流する為であるが——いま、この場で最も優先すべきは自分らも八本指襲撃に参加する事。

眼下の魔法が使われているであろう場所が八本指の拠点なのかどうかは分からな
いが、もしもそうならば救援という名目で向かうべきだ。

「(なにより、例の蒼の薔薇が深淵の悪魔と戦っているのなら、加勢をすればとりあえず蒼の薔薇と繋がりを持てるだろうしな)」

打算ありきであるが。

そんなモモンガの胸中など魔法詠唱者が知るわけもなく、しばし光が瞬く場所を見ていたと思えば不意に口を開きモモンガに例の場所がどういった場所なのか伝える。それはモモンガの考え通りに襲撃予定の八本指の拠点であるらしかった。

それに満足したモモンガは一度頷き

「そうか、どうやら我々の仕事はまだ残っていたようだ……アクト、行けるか？」

「問題ない。モモン、あそこまで運べるか？」

「骨が折れるが、まあ大丈夫だろう。何より、飛行よりも降下だ。そう難しくない」

そう言って板の上で立ち上がる二人に魔法詠唱者らは心配そうな視線を向けるが、モモンガはむしろ危険なのは君たちであることを伝えつつもある程度の距離で

待機してもらおう事を伝えて、

「さあ、夜の王都へ、失墜する天空フォーリン・ダウンと行こうか」

「……アクト、それはあまり面白くないぞ」

これから戦いであるというのに軽口をたたき合いながら、二人は王都上空四百メートルから飛び降りていった。

ダクソ3、5周年で前書きでは記念SSはかかないと言いましたが、できるならば他のダクソ3クロスオーバー作品の更新もしようかと思案中です。

それでは。

感想を戴けるとモチベがあがります

漆黒／蒼

どうもお久しぶりです。

調子も戻り時間も取れてきましたので少しずつ更新していきます。

ガガーランらの救援の為にやってきた魔法詠唱者マジック・キャスターとエントマが退却する為に現れた悪魔デーモン。

ヒルマの屋敷の前で新たに現れた一人と一体は即座に動き始めていた。

残念ながらもその事情を知らないイビルアイは、まず現れたアビス・デーモンを見て距離をとる。魔法詠唱者である彼女にとって有利な距離であり、イビルア

イがその知識と経験そして僅かな観察から目の前の悪魔が戦士系統の類であると予測建てした事で不用意に近づくのは危険であると判断したのだ。

そんな彼女に対して、まず前提になるがアビス・デーモンは本来パワータイプ寄りなモンスターでありその類に漏れずやや粗暴な悪魔である。

だがこの場にいるアビス・デーモンはデミウルゴスによって召喚された為か、本来のそれに比べ理知的である。そんな差異が働いているのか、アビス・デーモンは目の前の仮面をつけた少女に対して侮りを抱くことはなかった。

そして、自分の仕事をしっかりと理解していたアビス・デーモンはイビルアイが距離をとると言う選択をした瞬間に自身^スが有する特殊^キ技能^ルを発動する事で自身の強化を行っていた。

互いに相手の実力を大雑把ではあるがしっかりと認識し、その上で初動を終えた。イビルアイは目の前の悪魔が少なくとも先の蟲使い、エントマと同等以上の実力がある訳では無いと察しはしている、がだからと言って勝てるかどうかは分からない、という結果に辿り着いていた。というのも、まだ先の蟲使いはどちらかと言えばテクニシャン、技巧派であり少なくとも人型の範疇であり消耗しているとはいえ

ガガーランら仲間と連携すれば充分に倒せると判断出来た。

だが、それに対して今日の前にいるアビス・デーモンは違う。

「(体軀も実力もガガーランよりあっちのが上か……力任せの一撃で下手すれば競り負けて、そのまま連携が瓦解しかねない)」

異形らしい身体能力を活かしたゴリ押しによる全滅の危機。

ここに他の仲間、二人がいるならばともかく消耗した仲間二人とでは厳しく、それならば距離をとりつつ魔法で削る選択肢をイビルアイは選んだ。

「(———デミウルゴス様より伝えられた情報からして、この仮面が蒼の薔薇のイビルアイ……魔法詠唱者か)」

そんな選択をしたイビルアイへと視線をやりながら、アビス・デーモンは冷静に思考を回す。

エントマの代わりに蒼の薔薇と対峙するにあたって、アビス・デーモンはデミウルゴスよりある程度の情報を得ていた。それは事前に影の悪魔を王都に放つ事で得た冒険者らからの決して詳細ではなく真偽に問題のある情報から、過去蒼の薔薇と任務の最中に交戦した事のある陽光聖典及び法国から得たより深く踏み込んだ情報。

それらからこの目の前の小柄で外套と仮面で正体を隠した魔法詠唱者が漆黒聖典、覚醒した神人である第一席次と番外席次を除いた彼らよりも強いというのを知っている。それはつまり、

「(格上……どれだけ、こちらの魔法耐性が効果を発揮するかが肝だな。勝たなくても良い、あくまで時間稼ぎであるのは理解している。だが、逃げ避けるばかりではナザリックの下僕として名折れというもの、至高の御方々、デミウルゴス様の顔に泥を塗りかねんな)」

そう思考を定めたアビス・デーモンはその手に持つ身の丈ほどのハルバードを横

向けに持ち軽く腰を落としてその視線をイビルアイの一挙一動に向け、自身の特殊技能を使用していく。

それに対して、イビルアイもまた僅かに前傾姿勢を取り、外套から伸びたその華奢な腕に微かに稲妻が走り出す。

「———
マキシマイズマジック ドラゴン・ライトニング
 《魔法最強化・龍 雷》！」

先に動いたのはイビルアイだった。

予め距離をとっていたというのに、アビス・デーモンへと突貫するように動いた彼女の腕からは雷で出来たドラゴンが放たれ、アビス・デーモンを食いちぎらんと迫るがしかし、その手のハルバードを素早く振るうことで二連の斬撃を放ち《龍雷》を切り裂くがやはり格上であり魔法最強化されたそれは半ば引き裂かれつつも消えることなくアビス・デーモンへと向かっていく。

元より予想はしていた事、故にアビス・デーモンは即座に対処する。

「やはり、最強化した魔法にはこうなるか」

既に用意を終えていたハルバードを持たぬ方の手を突き出し、人の頭ほどの炎の塊が放たれ《龍雷》とぶつかり辺りに炎を撒き散らしながら《龍雷》を相殺する。その光景を見るよりも先に両者は次の手を打つ。

「いったい、何が目的、だ！ 《水晶の短剣》！」

「問うてどうする。真っ当なら手を引くとも言うつもりか！」

距離を詰めつつ水晶で出来た短剣を幾本も放てば、即座にハルバードが振るわれ碎き弾かれていく。

勿論、なんの強化も施していない魔法であり所詮は牽制のそれ。目の前の悪魔ならば容易く弾いていくだろうと言うのは目に見えていた。

距離にして五メートル。アビス・デーモンの腕長とハルバードの長さが合わさつ

でも届かぬ距離だが、踏み込めば容易く詰まるような至近距離にまで迫ったイビルアイは脚でブレーキをかけつつ手を突き出す。

「(わざわざ距離を詰めて魔法？それはつまり、射程距離が短い、そしてそのリスクに見合う威力！) オオオッ!!」

アビス・デーモンはイビルアイの魔法を放たれる前に迎撃すべきと判断し、踏み込みながらそのハルバードで薙ぎ払うように振るい――

「な、に……?」

「悪いが、こちらは一人じゃない」

ハルバードの刃がイビルアイを捉える事はなく空中で停止した。

先程までの勢いなど全て無視したあまりに不可解な急停止にアビス・デーモンは驚愕の声を漏らす。いや、それはハルバードが止まったことだけでは無い、停止し

たのはハルバードだけではなく自分自身の身体もまたそうだった事を。

そんな悪魔に対してイビルアイはまるで論ず様な声音で眩き、アビス・デーモンは唯一動く視線を蠢かし視界の端に立つ人影を捉えた。

赤のバンダナとオレンジに近い金色の髪を持った女冒険者、ティナがその片指で印を組んでいる姿が

「不動金縛りの術」

「行動阻害……！」

ここにるのがエントマであるのならば、話は変わった。彼女はNPCとして耐性のステータスにも手を加えられて行動阻害に対する完全耐性を有していた、だがアビス・デーモンには多少なりとも耐性はあるが完全ではなく、確実にその動きを止められた。

それは彼女らにとってあまりに致命的な隙を晒す瞬間で

「《魔法抵抗突破化・結晶散弾》！」

「ズグウツ!?」

至近距離で放たれたのは拳よりもやや小さな結晶による散弾。結晶のサイズ自体は先程の短剣やエントマの逃走を阻んだ騎士槍のそれらとは圧倒的に小ぶりであるが、イビルアイの実力と魔法抵抗突破に加え至近距離故の被弾率、この三要素がアビス・デーモンの肉体を削っていく。

肉の表面を抉り、貫通せずとも結晶が内部に食いこんでいき、血を流しながらアビス・デーモンは呻き声を上げるがティアによる行動障害が解けた事ですぐさま反撃のハルバードを振るいイビルアイを襲うが魔法を唱え終えた彼女は既にその場から飛び退いておりハルバードは空を切る。

「そらあ！隙だらけだ！」

そんなアビス・デーモンへ次に襲いかかるのはいつの間にかに距離を詰めていた

ガガーラン。超級連続攻撃ではないが、武技を使用しての連撃を放っていく。

肩を、腕を、胴を、頭を、殴りつけていく事で先の《結晶散弾》によって付けられた傷口からの出血量が増えていく。そうして、何度も殴りつけられていたアビス・デーモンはガガーランの連撃に生じた僅かな隙を見て、その場から後方数十メートルへと転移した。

「《次元デイメンションの移動ムーヴ》か……面倒だな」

「おう、それに見ろよ、アレ」

アビス・デーモンの魔法にイビルアイは舌打ちつつ、ここからどうするかを思考する中で彼女の近くにまで下がったガガーランが顎でアビス・デーモンを示せばティアは眉を顰め、イビルアイはその仮面の下で再び舌を打つ。

アビス・デーモンの傷口が次々と塞がっていくのが見えたからだ。

流れていた血は止まり、肉に食いこんでいた結晶は内側から膨らんできた肉によってそのまま体外へと押し出されていき、僅かな打撃痕も綺麗に消えていく。

「無駄だ。私是不滅」

「頑強タフネスに優れている……というわけか。それに加えて先の《次元の移動》ますます

厄介極まりないぞ」

「さっきの俺の攻撃もほとんど効いてねえ。先におめえの魔法である程度傷が出来てたから効果が出たようなもんだ」

「なら、再生が追い付かない程に攻撃すればいい………は、無茶」

どこまで再生出来るかは分からないが、それでも決して無視出来ぬそれにイビルアイらは口々に自分の考えを挙げ連ねていく。

有効打を与えられるのはイビルアイの魔法、その有効打の為の隙を作るにはティアの忍術、ダメージを拡大させていくのにガガーランの追い討ち。だが、それらをゼロにするのがアビス・デーモンの転移と再生。

ティアが言ったように再生では追い付けぬほどの連続攻撃をするにも彼女ら人間とアビス・デーモンではスタミナが違い過ぎる。では、どうすれば良いのかそう話

そうとしてアビス・デーモンが動いたのをイビルアイが真っ先に反応した。

「来るぞ！」

前傾姿勢による突撃、その背に生える黒翼を翔かせながらそのハルバードの刃で石畳を擦り上げ前方へと碎き吹き飛ばしながらイビルアイらへと迫っていく。

ただの突進ではない。

黒翼による突風、そしてハルバードで碎かれ吹き飛ばされた石畳だった瓦礫が突風により巻き上げられることでイビルアイ達に襲いかかる。前者による行動の障害、後者による範囲攻撃。

瓦礫に対して防御を選べばこの後のアビス・デーモンの突撃を防ぐのは難しく、突撃に対して防御を選べば今度はアビス・デーモンが来るまでに瓦礫で消耗していく。

どちらの選択も間違いなくタダでは済まない。

「ティア！」

だから、この選択をとる。

突風の中、無理矢理に身体を動かしてティアとイビルアイの前へ出ていくガガーラ
ン。

その声一つで意図を察したティアは苦渋の表情を見せつつも印を結び、忍術の用意をする。そうして、最も後ろになり突風の影響が大きく下がったイビルアイがすぐさま防御魔法を準備していく。

全員がボロボロになるか、一人が倒れるか。アダマタイト級冒険者らしくすぐに天秤を判断した三人にアビス・デーモンが迫る。

「マキシマイズマジック
《魔法最強化・水晶》
クリスタル

「ツインマジック
《魔法二重化・龍・雷》
ドラゴン・ライトニング

イビルアイによる防御魔法が発動するよりも早く、二閃の白くのたうつ雷撃が中

空を駆け抜け夜闇を裂いていきアビス・デーモンへと殺到していく。

夜闇を裂いて迸る白雷。それはのたうつ龍の様な雷撃で私はすぐさまそれが《龍雷》であると理解出来た。

私もソレを使うことが出来るからすぐに分かったが、だからこそ驚愕以外の感想

が浮かばなかった。確かに同じ魔法を使う者がいるのは当たり前の話だ。

例えば、《魔法の矢》をはじめとして魔法詠唱者ならば殆どの者が習得するそれであったり、所謂被りというのがあるのは当然だ。

だが――

「《龍雷》の魔法二重化、だと……!?」

そんなもの、ほとんどが第一か第二位階の魔法の話だ。いったい第五位階――帝国のフルード・パラダインを除いて最高位の魔法であるそれを使える人間が今の瞬間、この場にもう一人いるなどといったはどうして信じられるのか。

ましてや、その魔法二重化など。

そう、私が、いや私だけではないガガーランとティアも目の前で二つの雷撃が悪魔の身体を焼いていくのを見て驚愕している中、後方から足音と共に男の声が響いてきた。

「失礼、勝手ながら手を出させてもらいました」

その声に私は素早く振り返ってみれば、黒を基調とした服にローブを纏った青年がそこにいた。

凡そ、平均的と言うべきか、だがある程度整っていると云っても良い顔立ちで戦士長と同じ南方系の血を感じさせる黒髪に黒い瞳の青年はその手に身の丈ほどの杖を持っている。

言葉では謝辞を示しているが、先の状況からしてこちらがピンチに陥っていたのは事実だ。

「いや、すまない。助かった」

「それは良かった。私はチーム『漆黒』のモモンと言います、貴女方は『蒼の薔薇』の方々でよろしいですか？」

「あ、ああ………いや、それよりも悪魔が！」

こんな呑気に自己紹介をしてる暇などないだろう!?

そう、私は視線を『漆黒』のモモンとやらから外して悪魔へと戻せば、そこには幾つもの火花が散っているのが見えた。

ガガーランとそう変わらない体軀で全身を灰色のさながら熔鉄の様な鎧で包み、更には悪魔が持つハルバードとはまた異なる身の丈ほどの片刃の大斧を携えた戦士が悪魔と打ち合っていた。

二度目になる衝撃で再び、私は啞然としてしまう。

確かにあの悪魔は総合的に見れば私よりも弱いのは間違いない、だが悪魔としての身体能力や頑強さに寄った強さを考えれば近接戦闘を行えばあちらの方が圧倒的に強い。そんな悪魔相手に真っ向から打ち合っている？ なんだそれは、決して尋常ではない。

そんな私の心中を他所に熔鉄の戦士と悪魔の戦いは激しさを増していく。

「……………あちらはアクトが抑えていますので今のうちに回復を」

「おい、アンタ良いのか。悪魔を仲間一人に任せて」

「問題無いですよ。彼奴は強いので」

モモンの言葉にガガーランが問いかければ、返って来たのは信頼その一言に尽きる言葉。

さも当然の様に語ったモモンに私たちは言葉が出なかった。だが、それも彼がポジションを取り出したのを見てすぐに気を取り戻し私はガガーランとティアによつて守られた為回復の必要は無いことを伝え、三人から少し離れモモンとアクトという戦士を注視する。

先程の言葉通りならば、彼らが新しいアダマント級冒険者の内の一つ『漆黒』なのだろう——そもそもあの悪魔と打ち合っている時点でその実力はおそらく私を除く蒼の薔薇以上、このモモンは先の《龍雷》を放ったことから間違いなく魔法詠唱者だ。

第五位階を習得している魔法詠唱者、タレントか才能かどうかは知らないが私や帝国のフールダ・パラダインを除けば間違いなく最上位の魔法詠唱者だ。

「わりいな、自前のが戦闘中に何本か割れちゃったらしい」

「いえ、お気になさらず……ところで、あの悪魔はいつたい何ですか。レエブン公の依頼では八本指の襲撃を行うというものでしたが」

「……………実はよ、元々アレがここにいたわけじゃねえんだわ。最初はなんだ、メイド見てえなモンスターがいてそいつのご主人様だかのモノを八本指が盗んだのを取り返しに来たらしい」

「おい、待て。そんな話聞いてないぞ」

メイドみたいなモンスターは分かる。私があつた時に撃ち落とされた蟲と一緒にいた奴の事だ。

そいつとあの悪魔が入れ替わったのは分かっている。だが、そもそもメイドモンスターとの戦闘の経緯を何一つとして私は聞いていないんだが？

そんな私の文句にガガーランは視線を逸らしながらも全く悪びれもしないような声で説明を始めていく。

「要はあの悪魔は時間稼ぎなんだよ。メイドが八本指から盗品を奪い返すまでの、でなんでこうやり合ってたかつつとだな、メイドが嘘を言ってるわけじゃねえのは間違いねえ。だけでもまあ、なんて言うか俺の感覚になっちまうんだが、何か隠してたんだわなあ」

「……………いや、確かにその隠し事が原因で何か起きたら目も当てられなかったが……………まあ、冒険者としてモンスターと戦うのは当然だが……………それを先に言え」

「言えつつてもよ、イビルアイ。お前が来たタイミングであの悪魔が来たんだどうしようもねえだろ」

「話す余裕はなかった」

こ、こいつら……………。

確かにそういう余裕がなかったのは認めるが……………見ろ！モモンなんて戸惑っているだろう！

なんとも言えぬ空気が漂い始める中、ポーションで回復を終えたらしいガガーランがその戦鎧を担ぎ直したのを見て、私はひとまず軽く息を吐き視線を悪魔の方へ

と戻す。

見れば、アクトという戦士は的確に悪魔の攻撃を捌いている。戦士二人に斥候が一、魔法詠唱者が二人の半ば即席じみたチームであるが先程までと比べれば格段に勝ちの目は増えた筈だ。

炎の壁

やや、難産ではありましたが更新させていただきます。

ハルバードと大斧が激突する。

アビス・デーモンは両の手で握ったハルバードをまるで手足そのものの様に自由自在に操り激しく乱舞が如き連撃を起こしていくが、それに対してアクトは冷静に片手で持った大斧によって尽くを捌いていく。

一合、一合。ぶつかり合う刹那に火花が飛び散り、決して周囲に近付けぬほどの

威圧が撒き散らされていくが、アクト自身の雰囲気は驚く程に熱を持たない。

勿論、そこには決して覆ることの無いレベル差というものが両者の間に横たわっているからであり、そもそもこの話アクトはこのアビス・デーモンを打ち倒す気はさらさないのだ。

なるほど、確かにアビス・デーモンは蒼の薔薇相手に足止め役として起用され、こうして蒼の薔薇に自分たちの実力を印象付けるといふ役目を達成している。

「(デミウルゴス殿の作戦にしてはアビス・デーモンを倒したとしてもやや、インパクトにかけますね……………つまり、この後に何かあると考えるのが妥当でしょう)」

後退すると同時に放たれる幾つもの炎の塊をアクトはその大盾で受け止めていく。

竜狩りの鎧——熔鉄のソレは竜を狩る者の鎧ながらも火の耐性に関して他
の耐性と比べ一枚落ちているといふ欠点を有している。だが、その欠点もアビス・
デーモンとのレベル差によってほとんど封殺している。

大盾に着弾しては弾け炎を撒き散らす《炎球》ファイア・ボールによって兜により狭まっている視界をより遮っていくが、アクトはその隙間より見えるアビス・デーモンを見る。曲がりなりにも相手は同じナザリックの者、普通では分からぬだろう焦りをアクトは感じ取っていた。

よくよく見れば、アビス・デーモンの意識は自分よりも後方のモモンへと向けられているのがよく分かる。

「(ええ、分かりますよ。至高の御方を気にしてしまう、自分がこの仕事を全うできるか不安なのでしょうな——ですが)」

「——ガッ!？」
「こっちを見ろ」

距離をとった筈のアビス・デーモンの目前へと駆けてきたアクトが勢いよく大斧を叩きつけていく。咄嗟に受け止めたハルバードがそれによって軋み、殺せなかった衝撃でアビス・デーモンは思わず苦悶の声を零す。だが、そこでは終わらない。

アクトは素早く大斧を引き、空いた空間へと間髪入れずに今度は大盾でまるで叩き潰すかのように押し込んでいく。

先程の大斧と違い純粹にその威力を持ってその場に押し潰すような一撃はアビス・デーモンの身体を沈め、石畳をそのまま砕いてしまうほど、間髪入れぬそれにアビス・デーモンは声にならぬ悲鳴を漏らしそうになるが至高の御方の前で醜態を晒すまいと口を紡ぎ耐え——

「グギイツッ!!??」

ることは出来なかった。

押し潰されたと思えば、そのまま大盾によって振り払われアビス・デーモンの両手からハルバードが宙を舞う。

致命的な隙。しかし、アビス・デーモンとて悪魔の端くれであり、その身体能力と反応速度により咄嗟に手を突き出し至近距離での《炎球》をアクトへと放っている。振り払った大盾を戻しそれを防ぐが弾けた炎が盾を外れ、鎧の端々に着弾する。

そうして何とか僅かに作り出した隙を利用して、アビス・デーモンは宙を舞うハルバードへと手を伸ばしそのまま大段から兜割りを放つ。

アビス・デーモンはその黒翼を広げ空中からの襲撃を行ったわけだが、アビス・デーモン自身兜割りが決まるなどとは思っていない。目の前の相手がナザリック地下大墳墓が宝物殿の領域守護者、ただの召喚されたシモベトでは格の差が違ふ。つまりとどころどれだけ相手が手加減をした所でアビス・デーモンに勝ち目は無い。

「(——私の役目は勝つことでは無い、だが)」

紙一重で回避された兜割り。

それを前にして、アビス・デーモンは先程のアクトの言葉から意識を明確に目の前の男へと向け、表情には出さずとも胸中で不敵な笑みを浮かべる。

口には出さない。

圧倒的格上であったとしても、自分の上司であるデミウルゴスの同僚という存在であったとしても、アビス・デーモンの種族としての性が目の前の戦士に対して本

気でぶつかりたいという欲を剥き出しにしていく。

「シィッ！」

兜割りの勢いで身体を回し、アビス・デーモンはアクトの大盾を蹴りつけ後退する。

予想以上の衝撃であるがそれでもアクトからすれば、大してモノではない。むしろ、自身の踏み込みにその衝撃を組み込んでいく。

大きく前へと跳び出しながら、大斧を振り払うように右側へと大振りの一撃を放つ。

「———」
《《深淵閃断》》

黒い魔力をそのハルバードへと纏わせ、複数の連撃を放ちながらアクトの大振りの一撃を迎え撃ち、僅かに隙を作り上げる。

相手が決して本気ではなく、アビス・デーモンよりやや強い程度の力で戦っているが故に、ゴリ押しし気味で何とか作り出すことが出来た一抹の隙。

その隙へと向けて、アビス・デーモンは渾身の一撃を放った。

それはなるほど、確かに深淵という名を冠するに相応しい恐ろしく邪悪な悪魔的とも言える魔力を内包した一撃だ。アビス・デーモンが有する攻撃系特殊技能^{スキル}の中でも威力の高いソレ。それを受けるのがアクトでなく蒼の薔薇のガガーランやティアであれば即死、イビルアイであっても間違いない致命傷に近いモノを与える事だろう。

だが――

「《加速^{ヘイスト}》」

ここにいるのはアクト一人では無いのだ。

迫り来る一撃を前にアクトは冷静に自身へ付与された魔法を理解し、自分の身体を後ろへと蹴り出した。

大斧による一撃を無理矢理に弾かれたが故に出来た突発的な行動。常人ならば間違ひなく身体に無理が来るのだろうがアクトの身体能力であればそんなものは何の問題にもなりはしない。

ハルバードは空を切り裂き、アビス・デーモンは目を見開いた。

広がった視界で捉えたのは遠ざかる戦士の姿、そして突如として自身を取り巻いていく炎と爆発。

「炎だと？無駄だ！」

ティアの使用した忍術によって生じた爆炎だが、アビス・デーモンは簡単に炎を振り払う。大した痛手にはならず、僅かに視界を奪った程度の効果でしかなかった。

「いいや、充分だ」

炎が消え、移り変わった視界。今度は自分を頂点とするように扇状に広がる形で

魔法の用意を完了させた二人の魔法詠唱者の姿。

それらを前にアビス・デーモンは素早く手を突き出し詠唱を行う。既に完了している二人に対してあまりに遅い。

「マキシマイズマジック魔法最強化・クリスタルランス水晶騎士槍」！

「ツインマジック魔法二重化・ドラゴン・ライトニング龍雷」

イビルアイより放たれるのはエントマの蟲を撃ち落としたモノと同じ水晶で構築された騎士槍。それが水晶の粒子を尾に引いて夜闇を裂きながらアビス・デーモンへと迫り来る。

モモンが放つのは先のモノと同様絡み合いながら雷鳴を響かせ宙をのたうつ様に蠢き進む白き雷撃。離れては近づき、近づいては離れるという挙動を起こしながらアビス・デーモンの喉笛を狙い殺到する。

「シールド・ウォール盾壁」

———が ああ ああ あっ!？」

突き出した手を中心に生じる魔力で構成された盾。

だがそれも壁というには些か小さく守備範囲も狭く、完全に展開されるよりも早くに飛来した二種の魔法によってまるで紙を突き破るかの様に容易く突破され水晶の槍が肩を貫き、白雷が肌を焼いていく。

あまりの痛みにアビス・デーモンが絶叫をあげる。

少しずつ再生は行われていき、傷が修復され始めるがわざわざその再生を律儀に待つ理由などどこにもありはしない。

「すうーっ、ラァァアアアッ!!」

「おぉ!!」

動きを止め、絶叫をあげるアビス・デーモンへと叩き込まれるのは二人の戦士による連撃。

複数の武技を使用しての流れる様な動きと激しい攻撃の嵐、正しく疾風怒濤と言

うべき一撃一撃全てがガガーランの有する全力全開の攻撃。エントマには防がれはしたが、今この時においてアビス・デーモンへの有効打の一つとなり得ると判断した超級連続攻撃によってガガーランはアビス・デーモンをその場に釘付けにし続ける。

それに対して、アクトが放つのは大斧による打撃。殴りつけ、振り払い、殴り潰す、一見単純な攻撃だが大盾のサイズと形状そしてアクトの臂力を鑑みればそれは間違いなくガガーランの全力の一撃に比肩する攻撃だ。

「(——これは……!!)」

一息つく隙もなければ、《次元の移動》を使用して逃げる隙すらどこにもない。唯一の隙が生まれるとすればそれはガガーランの連撃が無呼吸で放つもので彼女が人間であり呼吸の為のマジックアイテムを有していない為に呼吸する際に彼女の手が止まる時だろう。

だが、それをアビス・デーモンは知らない。

あまりにも長く感じる双方向からの連撃にアビス・デーモンは遂に膝をつき、大きな隙を晒すがそれとほぼ同時にガガーランはヒュッと喉が鳴り、連撃の手が止まる。

それをカバーするようにアクトが大斧でアビス・デーモンの膝を殴りつけて――

「――なんだ、アレは」

誰かの声がこの場に響いた。

視界の端、夜闇が広がっているはずの彼方。

王都の一角があるであろう方角の夜空、そこは猛る炎が如き朱色へ染まっていた。否、それだけでは無い。この位置からでもよく見える、王都の一角に天を焦がさんばかりに真紅の炎が吹き上がっているのだ。高さにすれば数十メートル、その横がどれほど長く広がっているのかはここからではの全容を見ることは出来ず分から

ないが、少なくとも数百メートルでは収まらないのは間違いない。

揺らめくベールの様に立ち昇っている炎の壁は帯のように伸びており、完全に王都の一角を包み込んでいる様に思える。

あまりの光景にこの場の全員の手が止まった。

そう、全員が

攻撃の手が止まった事で、反射的に《次元の移動》を使用しやや離れた場所へと逃げ延びたアビス・デーモンもまた再生を行いつつもその顔は彼方の炎の壁へと向けられていた。

「……………いったいどのどいつだ……………クソッ」

疑問と苛立たしげが混じった様な声音で呟く、アビス・デーモンにイビルアイをはじめとする蒼の薔薇はあの炎の壁がこの悪魔とは関係が無いモノであると直感的に理解し、同時にアレを起こしたのはいったい何者なのか？という疑問が浮かび

上がっていく。

そんな彼女らの視線を受け、アビス・デーモンは再生しつつ炎の壁から彼女らへと視線を移り変える。

「……まあいい、既に此方の目的は終えている。アレがいったいどここの輩の仕業なのかは知らんが、我々が手を出すつもりは毛頭無い勝手にやっている」

もはや興味は無いと言わんばかりにそう吐き捨てながら語るアビス・デーモンは転移の際に拾い上げていたのだろうハルバードを握り直し、何歩かその場より後ずされば先程アビス・デーモンがこの場に現れ、エントマがこの場から消えた際に使用した黒い渦のようなモノが虚空より現れる。

それは先程の様に誰かがそこから出てくるのではなく、アビス・デーモンがこの場より離脱する為のモノだと理解しイビルアイは逃すまいと魔法を詠唱し始め――

「イビルアイさん」

モモンの呼び声でその手が止まった。

反射的に邪魔をするな、と文句を言おうとしたがすぐにイビルアイは今現在の優先事項はアビス・デーモンではなくあちらの炎の壁であると判断し突き出そうとしていた手を下げ、闇に消えていくアビス・デーモンを最後まで睨むが、その姿が完全に消え《転移門》も消えた事でその視線を炎の壁へと向き直す。

轟々と燃え盛る炎。

およそ、イビルアイの実力であってもあれほどの炎を魔法で生み出すことは出来ない、それは帝国のフルーラーダー・パラダインであっても同じ事だろう。では、いったい何者がアレを行ったのか……………。

「モモン」

「ああ、分かっている。ひとまずは他のメンバー……………我々の依頼主のもとへ行って情報を擦り合わせる必要がある（……………それに、デミウルゴスからこの後の事とか色々

聞かなきゃいけないよなあ……アビス・デーモンまでは聞いてたけどこの後のこと俺何も知らないんだよなあ………ゲヘナの炎の事もあるし」

アクトの言葉にすぐさまモモンは判断する、胸中でここから先の事について不安を零しながらではあるが。

UNDEAD——不死人

著者 カチカチチーズ

発行日 2022年10月19日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/159755/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
